お江戸の姫君

右京之介助太刀始末

高橋三千綱

双葉文庫

1948年大阪府生まれ。サンフランシスコ州立大学、早稲田大学をいずれも中退の後、新聞記者となって活躍。1974年『退屈しのぎ』で第17回群像新人賞を受賞、翌年から執筆活動に専念し、1978年『九月の空』で第79回芥川賞を受賞。ゴルフなどの漫画原作や時代小説も手がける。近著に『猫はときどき旅に出る』（集英社）等がある。

高橋三千綱
たかはしみちつな

カバーデザイン……倉橋三郎ブックデザイン室
カバーイラストレーション……倉橋三郎

¥657
た
24-10

高橋三千綱

右京之介助太刀始末
お江戸の姫君

双葉文庫

9784575667554

1920193006575

ISBN978-4-575-66755-4
C0193 ¥657E

定価：本体657円＋税

とびきり強くて滅法色っぽい奥山右京之介が帰ってきた！　ある夜、土手で大立ち回りをする黒づくめの美貌の女を捕えた右京之介は、訳ありと見て吉原の遊郭に閉じ込める。実はこの女、婚礼を間近に控え、屋敷から逃げ出してきた竜子姫。武芸が達者で気位の高い姫は精一杯の抵抗を試みるも、右京之介はどこ吹く風。豊富な金子と意外な人脈を駆使し、姫の背後に蠢く幕閣の闇を暴いていく。芥川賞作家、渾身の書き下ろし。

右京之介助太刀始末
お江戸の姫君
高橋三千綱

右京之介助太刀始末

好評既刊

- お江戸は爽快
- お江戸の若様
- お江戸の用心棒（上）
- お江戸の用心棒（下）
- お江戸の姫君

大江戸剣聖　一心斎

- 黄金の鯉
- 秘術、埋蔵金鳴咽（オエツ）
- 魂を風に泳がせ

シール
た
24-10

右京之介助太刀始末

お江戸の姫君

高橋三千綱

双葉文庫

右京之介助太刀始末 お江戸の姫君 高橋三千綱 双葉文庫

双葉文庫

右京之介助太刀始末

お江戸の姫君

高橋三千綱

目次

第一章　姫君の反乱　7
第二章　吉原（よしわら）、居続け侍　87
第三章　女心と秋の空　143
第四章　遠山観音七変化（とおやまかんのんしちへんげ）　208
第五章　破滅、破廉恥（はれんち）、波瀾万丈（はらんばんじょう）　298

主な登場人物

奥山右京之介……通称「若様」。颯爽とした男ぶりと人を食った態度、とびきりの笑顔で周囲を翻弄する謎の浪人。その正体は丹波柏原藩織田家の若殿、長朝。剣は中西派一刀流。なぜか微かに平成の記憶を持つ。

若林左太郎……越前大原藩勘定吟味役。右京之介とは同じ剣術道場に通っていた頃からの親友。現在は江戸勤め。豪放磊落な酒豪。

弥太……鯰顔の元掏摸。浅草奥山で右京之介の懐を狙い、逆にやりこめられて手下に。足を洗い、今は夜鳴き蕎麦の屋台を引く。

修治……船宿「小川屋」の主人で女将のくめの兄。元鋳掛屋。潜入を得意とし、昭和の記憶を持つ。右京之介の陰の右腕。

竜子姫……大和高取藩藩主である若年寄植村家長の弟、政直の三女。播磨仙崎藩本多家への輿入れが決まっている。

お秋……文具問屋「槌屋」のひとり娘。浪人にからまれているところを右京之介に助けられる。

此秋は何で年よる雲に鳥　芭蕉

第一章　姫君の反乱

一

日が暮れてから、釣りに出た。釣り竿を下げて船宿「小川屋」の暖簾を開くと、首筋を冷気を含んだ風がすくい上げた。短い秋はぼんやりしている内に、思いがけなく深くなっていたようである。

暗い空には雲がほの白く広がっていて、ところどころに月明かりを含んだ薄雲が心細げに漂っている。すでに月は出ていて、流れる薄雲の間から半月が顔を覗かせている。それを待って、地上が霜を下ろしたように冷ややかな照り返しを夜気に放ち出した。八月十五日の月見はとうに過ぎ、九月十五日の神田明神の祭礼も数日後に近づいてきている。

じき冬になるな。

右京之介はそう呟いて魚籠を船頭の源蔵に手渡した。桟橋で蹲っていた源蔵は、魚籠を手にしてから、右京之介の呟きを聞き咎めたようで、なんでやんすか、と嗄れた

声を出した。

「大川端まで出てみよう」

源蔵の問いには答えず、そういって猪牙舟に乗った。へえ、とくぐもった声で返事をして、源蔵はもやいを解き、船尾に腰を曲げて立って棹をついた。

ゆったりした流れにのると、棹を引いて櫓を漕ぎ出した。その源蔵の後方には鎧の渡しがあるが、もう最後の舟は出たようで、昼間は荷運びや仲買人の喧噪が響く南茅場町の河岸も、今はひっそりと息を潜めている。

「若様、寒くはねえですか」

妙なことをいわれた気がして、右京之介は覚えず振り返って源蔵を見た。舳先には舟行灯がともされているが、暗くなってきた上に日焼けした顔が笠で隠されているので源蔵の表情は窺えない。

「すずしくて気持ちがいい」

おまえにしては随分気のきいたことをいう、という言葉を呑み込んでそう返事をした。五十を過ぎた源蔵は一年ほど前から「小川屋」に雇われている船頭だが、空いているときは、勝手に客をとってもいいことになっている。商家の主や芸者などからもよく声がかかるようで、こまめに小遣い稼ぎをしている。

「鈍そうだが、なかなか抜け目のない爺イですぜ」

とは弥太の源蔵評だが、確かにそう思わせるところが源蔵の言動から窺えることがある。掏摸から堅気になったものの、いまだに自前の店を持てず、夜鳴き蕎麦の屋台を引いている弥太にしてみれば、芸者や旦那衆からこまめに心付けをもらっている源蔵のほうが余程懐具合がよいように見えるのだろう。

「先程、小川屋の旦那が、もし若様が寒がるようだったら着せてくれといって、褞袍のようなものをそこにおいていかれやした。なんだか、随分重かったようですぜ」

そうか、といって右京之介は傍らに置かれた丹前を手にとった。それは湯上がりに浴衣に重ねて着る通常の丹前とは違って、袖を取り払った上に、腰から下の部分を切り落としてある。それに腕に響くほど重量感がある。厚綿の中にさらに鉄片が詰められているようだ。修治が気をきかせて妹のくめにでもつくらせたのだろう。それはただの寒さしのぎのためではなく、修治が右京之介の周囲に何か違和感を感じ取った証ともいえるものだった。鉄片は高価でそこいらの鍛冶屋などが気安く手に入れられるものではない。

舟が北新堀町と南新堀一丁目を跨ぐ湊橋をくぐると、川は新堀川になる。さらに豊海橋を過ぎると船番所が出てくる。そこはもう永代橋の橋袂である。

「ここらでいい」

稲荷前の葦の生い茂ったあたりに舟をとめさせて釣り針に小エビをつけた。川の流れ

は葦に勢いを止められて、ゆるやかな渦をつくっている。釣り竿を振ろうとした右京之介は、ふとその手を止めて艫に蹲った源蔵を振り向いた。蓑をまとった源蔵は冬枯れの畑に取り残された藁人形のように見える。

「源蔵、おまえに身寄りはあるか」

源蔵は顔を上げたが、その表情までは夕方の灯りが笠に遮られて読みとれない。ただうさんくさげな顔つきをしたようだと右京之介は勝手に想像した。

「あっしは、ずっとひとりでおりやすもんで、身寄りなんかねえんで」

「肩につけている蓑は小石くらいなら弾き返しそうだな」

「小石？　弾くといいますと……」

「まあいい。こっちと場所を代わってくれ」

右京之介は丹前を着て腰を上げた。仕方なく体を起こした源蔵は、すれ違うとき不満げな唸り声を洩らした。その息が酒臭いのに右京之介は気付いた。どうやら徳利を懐に隠しているらしい。

艫に座った右京之介は釣り糸を川面に投げた。そのまま軽く目を閉じて釣り竿を指先で握った。風の音が葦の上を走っている。しばらくすると指先にあたりがきた。それが痺れるように指の腹を刺激する。竿を上げると鱗が淡い月の光に照らされて銀色に輝いた。フッコがかかった。魚籠に放り込むと、小気味いい乾いた音が艫を揺らした。

二匹目のフッコを釣り上げたところで、右京之介は釣り竿を引き上げた。

「もう今夜はこれでいい。酒の肴には二匹で充分だ」

へい、と返事をして源蔵は腰を浮かせた。そのとき、その口から「げっ」という重い呻き声が洩れて、源蔵の体が大きく揺らいだ。すかさず右京之介はその腰を押さえた。徳利が落ちて船底に転がった。

「どうした」

「何か背中に刺さりやしたようで」

源蔵は酒臭い息を吐いて腰を落とした。その背中を探ると、右脇腹に深くはないが確かに傷口があった。

「矢を射られたようだな」

「矢？　矢って何の矢でござんすか」

「弓矢の矢だ。だが、大丈夫だ、矢は掠っただけで抜けている」

「だ、大丈夫って、な、なんであっしが矢で狙われなくちゃならねえんで」

灰色の雲の下で、源蔵の乱杭歯が醜く震えている。右京之介は、なるほどこういうことかといってにこりとした。

「おれの代わりにやられたのだ。こういうこともあろうかと思って、場所を代わったのだ」

「げっ」

若様の言葉に源蔵の目玉が饅頭を呑み込んだように大きくふくれ上がった。目玉が出っ張ったのが自分でもわかった。下手をすると今頃あっしはおっ死んでしまっているのではないの、と源蔵は恐怖と驚きを一時に叩きつけられた思いで呟いた。しかし、若様はすずしげな顔をしている。それどころか頬には微笑みさえ浮かべている。その顔から馬鹿に明るい声が流れ出てきた。

「たとえ深手を負ったとしてもおまえには悲しむ身寄りもいないのだから、どうということはない。いやあ実にうまくいったものだ」

なんだか本気で嬉しそうに目を細めている。船宿にとっては特別な客だと聞かされていたが、さすがに源蔵も怒りが沸騰した。

「そ、そんな無茶な。おりますよ、あっしにも悲しむヤツのひとりやふたりはおりますぜ」

そういった瞬間、源蔵は「ぎゃっ」と女のような悲鳴をあげていた。未通女のような可憐な声とはいかず、大年増が尻餅をついたような無様な叫びになった。

「な、何をするんで」

「ふぐりを触ったのだ」

そんなことは分かっていると思ったが口がぱくぱくするだけで文句の啖呵が出てこない。男にキンタマを握られたのは五十二歳まで生きてきて初めてのことだった。

「泡喰ってないで、早くここを離れたほうがいい。いつなんどきまた矢が飛んでくるかわからんぞ」

「それはご勘弁を」

いつの間にか許しを乞う心境になっていた。そんな源蔵には構わず、若様は源蔵の尻を思い切りひっぱたいてきた。

「大川を渡って佐賀町あたりにいってくれ」

右京之介に尻を叩かれた源蔵は、四つん這いになって艫にいき、夢中で櫓を漕ぎ出した。川の流れは速くなったが、源蔵は巧みに櫓をあやつって、下ってくる屋形舟をかわして向こう岸まで漕いだ。百二十八間（約二百三十メートル）ある永代橋の下を渡りきるまで四半時（三十分）とかからない。

「源蔵、おまえは船宿に戻ってこの魚をさばいてもらっておいてくれ。なに、乗っているのが船頭ひとりだと分かれば、相手も矢を射かけてくることはないだろう。それにおまえもたいした度胸をしている。命が危ないというのにちゃんとふぐりが下がっていたからな」

船番所脇の石段に足をかけて右京之介はそういった。源蔵は急いで褌をまさぐった。確かにまだついている。

「い、いってえ誰が若様を狙っているんで」
源蔵は荒い息を吐いて片方の足を舟板に投げ出した。
「さあ、分からないな。なんせ、これまで散々人を斬ってきたからな。おれの命を狙っているヤツはゴマンといる」
「ゴマン……。若様はそんなに人を殺してきたんで」
「そうだ。それが商売だからな。源蔵さんよ、あんたも今度またおれを売るような真似をしたら、たたっ斬るぞ」
「そ、そんな、売るだなんて、そんな……」
源蔵はみるも無惨に震えているらしく、波音に混じって、踵が舟板を叩く音がカタカタと鳴っている。
「おれが今夜釣りをすることをだれにいくらで売った。一両か、二両か」
「なんの、たったの五十文で……あ……」
「まあいい、これは治療代だ」
そういって右京之介は右手を軽く横に振った。風の中をひらひらと飛んだ小判は源蔵の乱杭歯に当たって船底に落ちた。うあううあうとわけのわからない悲鳴をあげて小判を探る源蔵を置いて、右京之介は岸に上がった。
赤提灯の出た居酒屋では御船手組の小者たちがすでに気勢をあげているようで、賑

やかな声が聞こえてくる。さて、どうしたものか、と右京之介は公孫樹の葉の散乱した路上で思案している。

二

舟に残された源蔵は深い溜息をついた。得体のしれない人だとあらためて思った。源蔵だってこれまで人にいえない悪さもしている。それは上州あたりの水呑み百姓の何番目かの子として産み落とされ、その後どうやら一家は逃散したらしく、二歳の源蔵は別の百姓に拾われ、そいつが馬喰に売り飛ばしたときから源蔵はまっとうな生き方ができない定めになったのだ。
馬糞にまみれて育ち、十歳を過ぎると馬の世話から水汲み、薪割り、さらには肥を買いに来る百姓の手伝いのために肥桶まで担がされた。ちょっとでもさぼると親方から殴られた。こんなにこき使われるのなら死んだ方がましだと決意して馬喰の元を逃げ出し、半分川に埋まっている朽ちかけた小屋で数日間隠れている内に熱が出て気を失った。救ってくれたのが荒川を往来していた船頭でそれからは舟を漕ぐことを覚えて拾ってくれた義理の親の手伝いをした。
その義理の親が仲間とのいざこざで腹を刺されて死んだのは、源蔵が十五歳のときだった。義理の親を刺したのは親方の甥にあたるやつで、被害者の子でありながら仕事を

ほされた源蔵は、あちこちを渡り歩いて日銭を稼ぐ船頭稼業で生きつないだ。手慰みの悶着でやくざに追われるようなこともあったし、四年前には石川島の人足寄場に入れられた。しかし、どん底まで落ちることがなかったのは、いつか女房を持てるような地道な生活をしてみてえという生真面目な性格が腹の底にあったおかげだった。

それでも命のやりとりをするような修羅場にも何度か直面した。生きながらえたのは臆病で用心深い性格のおかげだった。そいつがいつも体を回り巡っていたからだった。

「だが今日はやばかった。それにしてもあいつは何者なんだ」

思い返していたのは、若様を乗せる前のことだった。短くなった黄昏が空を覆うのをぼんやり眺めていると、船着き場の船板を足音を殺して渡ってくる者がいて、そいつは源蔵の肩をそっと叩くと五十文を目の前に突き出した。なんだと思って顔を上げると、赤ら顔の三十がらみの男が充血した眼を向けていた。

「この船宿に若様と呼ばれているお侍がいるね」

そいつはやけに臭い息を吹きかけてきて、さっさと銭をしまえというように五十文を乗せている掌を軽く上下させた。源蔵が銭を懐にしまうとあばたの広がった頬肉をぶるぶると震わせて、「そのお侍は今日は釣りに出なさるんで」と聞いてきた。

「小川屋」の旦那から若様の釣りの供をするようといわれていた源蔵は、ああ、とだけ答えて頷いた。

そうですかい、と呟いた小太りの男は、ちょっと思案顔になってから、それで、と源蔵の肩に顎を寄せてきた。

「そのお侍はいってえどこの若様なんで」

そう聞かれて源蔵は首を横に振った。

「知らねえ」

「小川屋」の旦那の修治さんにそれとなく尋ねたこともあったが、旦那はなにも答えなかった。若様とよく呑んでいる大原藩藩士だという若林左太郎さんにも聞いたことがあるが、いつも酔っぱらってくだらないお喋りばかりする若林さんも、そのときだけは眠ったようになって何も答えてくれなかった。

小太りの男にも知らないから知らないと答えたのだが、そいつはどうやら源蔵の返事を信用していないようだった。ただうさんくさげな目つきで立ち上がると、ありがとよ、と捨て台詞めいた口調を残して消えていったのだ。

それから暫くして「小川屋」の旦那が褞袍を持ってやってきたのだが、もしかしたらあの男といるところを見ていたのかもしれないと源蔵は思った。若様同様、修治旦那にもどこかひと癖あるように以前より感じていたのだ。

「だが、若様はもっとこわい。こわくてやばい。それにしても人を斬るのが商売というのは本当のことだろうか」

すっかり暗くなった空の下で、鳥肌の立つのを感じて源蔵は腕をさすった。そうしながら、五十文は安すぎた、せめて二分はもらっとくんだった。なんせ若様の身代わりで死ぬところだったんだからな、と若様からもらった一両を懐で温めながら未練たらしく思い返していた。

三

秋はもう往ってしまったのだろうか、竜子は半分ほど開けられた座敷の障子から庭を眺めて、そう胸の内で呟いた。

夏の猛暑を生き抜いた雑草は、秋になるとさらに凄味を増して、竜子付きの女中だったお芳が丹精込めて植えた桔梗や萩の茎にからみつき、やがては大鷲が小鳥を襲うように覆い尽くした。秋が深まると、花を枯らせてしまったばかりか、領地まで占有して我が物顔で濃い緑の葉を茂らせている。そのふてぶてしさを竜子は憎んだが、初冬のひややかさを感じる風が庭を横切る今の季節になっても、いささかも衰えを見せない雑草を目にとめると、自分たちではどうすることもできない無名の草の強靱さを感じてすっかりあきらめの気分になってしまう。

「来年の三月には、この屋敷を出ていく身なのだから、嘆いていてもせんないこと」

竜子はそういいきかせてなぐさめもする。しかし、心が晴れることがないのは、嫁入

りする先が播磨国（現兵庫県）の仙崎藩本多家で一万三千石という小藩であることだった。竜子はそんな藩名などこれまで耳にしたこともなかったし、なぜ生まれ育った江戸を離れて、そのような西国の小藩にいかなければならないのか、思い悩むたびに憂鬱になった。しかも、相手は国家老の息子であるという。

分家とはいえ竜子の父は若年寄の弟に当たる人だ。それほどの家柄にある娘がなぜ国家老の息子ごときのところに嫁がなくてはならないのか、竜子には全く合点がいかなかった。それに嫁ぐことが女の幸せにつながるとも思えない。

勝手気儘に生きてきたわけではなかったが、江戸に暮らしている限り、ある程度自由なときがもてた。ときには、稽古事の合間を縫って、お芳と芝居見物にも出かけていったし、町人がいく茶屋も覗いたことがあったのである。

輿入れを終えてしまうと、それらの愉しかったひとときから全く隔絶された堅苦しいだけの生活を送らなければならない。それに、向こうにいる女中衆にもどんないじわるをされるか分からない。西国と東国ではあらゆる習慣が違うし、それはその土地に暮らしている人々の感情の違いとなって現れてくるに違いなかった。

「つまらないなあ」

竜子は思わず町娘のような言葉を洩らして溜息をついた。それを聞きつけたように、ふた月前からお芳に代わって竜子付きになったばかりか、屋敷内で采配を振るうように

なった梅野が廊下を小走りにやってきて、障子に手をかけた。
「姫様、外の空気はお寒うございます。障子はお閉めになって下さいませ」
「でも、お昼はおだやかな陽気です。こうしている方が気持ちがいいのです」
「なりませぬ。さ、じきに西斎先生が参ります。そっとお休みになっていて下さりませ」
そういうと梅野はついてきた女中に目配せをした。女中が障子を閉めると、竜子は再び薄暗い部屋にひとり置き去りにされた。病気でもないのに医師の診察を毎日受けさせられることに、竜子はもううんざりしている。輿入れが決まった三月前からそれは日課となっている。皺だらけの山羊のような西斎医師に脈を取られるたびに、竜子は体の奥の方で薄汚いげじげじの虫が這いずり回っているような気味の悪さを感じる。
（いっそのこと、逃げ出してしまおうかな）
竜子の付き女中だったお芳の家は、今年の初めに父が隠居して兄が跡を継いだという。四十俵三人扶持の無役の御家人だったと聞いている。芝居見物の後でお芳の家に連れて行ってほしいと頼んだのだが、お芳は恥ずかしがって案内してくれなかった。ところが梅雨が明けると、その兄が急な流行り病で亡くなった。そのため、急遽お芳が婿養子を迎えることになったのだという。どうやら兄嫁には兄が死ぬ前から再婚する相手がいたらしい。養子をとってまでして四十俵の家禄など守る気はなかったのです、とお

芳は恨めしげにいっていた。それでも屋敷奉公などでいたずらに歳を重ねるより、自由に暮らすお芳が羨ましくさえ思える。
（お芳なら、私をかくまってくれるかもしれない）
その気持ちの底には、十日ほども姿を隠していれば、いずれ噂が相手方の耳にも入ってこの婚姻が破談になるかもしれない、という姫流の甘えた気分も働いているようだった。
十八歳になっていても、竜子はまだ世間知らずなのだという正直な思いは宿っている。小太刀の稽古をつけてくれる中元伴四郎師範は律儀でいい人だが、男らしさは少しも感じない。いつでも慇懃に稽古をつけてくれるし、稽古のあとでは必ず「上達しましたですな」と誉めてくれるが、それだってどれくらい本心が混ざっているか分からない。本気で武道家と立ち会ったことがないので、果たして自分の技量がどれほどのものか、男に通用するものなのかどうかも定かではない。武術を習うのはお稽古事より数段楽しいが、それも外の空気を存分に吸えるからいい、といった程度のものにすぎなかった。
（父は政の都合で、娘の気持ちなど無視して嫁ぎ先を決めたのだ）
屋敷に閉じこもることを余儀なくされている竜子も、武家の格式というものや、武士の間にうごめく政治上の策略というものを少しは感じている。父は娘をまだ幼女のよう

にうぶだと信じているが、竜子にも頭もあれば人の感情を写し取る感性が育ち出している。

一番上の姉は信州津藩二万石の高島家に嫁いだ。二番目の姉は五千石取りの奏者番松平弥右衛門に嫁入りした。二人の姉は正妻の姫なので若年寄の伯父とのつながりを求めて婚姻が整ったことは容易に想像できる。

（妾腹の子である自分がせめて男子として生まれていれば、その生きようも変わっていたことだろうに、娘と生まれてきただけにある程度贅沢はできるけど……）

町娘が享受している自由というものからは絶縁されている、と竜子はそこだけは冷静に判断できる。だからといって私だけがまるで商人の取引品と同等に扱われているようで気に入らない。

（西国の小藩の家老の息子のところになぞ嫁がされるのは、父が私を何かの取引の材料にしようとしている証ではないのかしら）

ああ、と竜子は障子に映る柱の影に向かって溜息をついた。何気なく目を向けていると、障子が一瞬、真っ赤に燃え上がった。雲が流れたあとの夕日は、恐ろしいほど大きくふくれ上がって庭先に鋭い光を投げかけてきたようだった。

（ためらうことはない、すぐに逃げ出してしまえ）

そのとき竜子の胸に悪魔の囁きがすべり込んできた。なぜだか、竜子はうっとりとして、その甘美な声を聞いていた。

四

「槌屋」は十軒店新道にある封書、帳面、筆などを一手に扱う文具問屋である。日本橋から富士山を左手後方に眺め、人々でごった返す日本橋通りを神田川に向かっていくと通りの片側を塞ぐようにして自身番があり、人生が上がった感じの爺がふたり、成仏した顔で座って通りをゆく買い物客を眺めている。

その先に十軒店新道といわれる一角があり、「槌屋」は人通りの多い日本橋通りから一本入った新道に面して店を構えている。日本橋通りには十軒店の店がまだ続いており、どんどんいくと神田堀に突き当たり、ここには今川橋がかかっている。

「槌屋」の主人は惣兵衛といい、近所では人情家として通っている。噂だけでなく、実際にお人好しで、人の毒気にあてられて行き倒れになった田舎者がいれば、近所の人は惣兵衛のところに担ぎ込むことにしている。小汚い身なりの水呑み百姓をイヤな顔ひとつ見せずに面倒をみてやるからである。

ただ跡継ぎの嫡男はおらず、ひとり娘のお秋に婿をとることになっているのだが、年が替われば十九になる娘は持ち込まれる縁談話を片っ端から断るので、店は惣兵衛の代でおしまいになるのではないか、と近所のものは陰で余計な心配やら野心やらを抱い

てコソコソと話している。

娘の我儘を許してしまうのも惣兵衛のいいところで他の商店の主人のように、店の存続のために娘に無理強いをすることは決してない。真面目な男で、寄り合いには必ず顔を出し、寺の普請のための寄進なども進んで出すが、五十一歳になるというのに、六年前に胸の病で亡くなった妻の菊に男操をたてて、以降ずっとひとり者で通している。妾も持たず、廓通いもすることはない。仕事を終えて一合の寝酒をするのが惣兵衛の唯一の楽しみなのである。

その「槌屋」惣兵衛がひとり娘のお秋を前にして、額に浮いた小粒の汗をしきりに懐紙で拭っている。

「しかしなあ、お秋、そのお武家様に会うまでは婿をとる気はないといっても、どこのどなた様だか分からないのでは、探しようがないではないか」

惣兵衛は娘のお秋の反応を盗み見るようなしぐさで小首を傾げた。娘は固く口を閉ざしている。どうやらこちらの胸の内を見透かされたようだと、後悔と反省の気持ちをこめて、あのな、と遠慮がちに口を開いた。

「それに相手がご浪人様では、苦労するぞ」

つい無防備に発してしまった言葉がよくなかった。惣兵衛はここひと月ほどの間、腹の底に沈澱していた猜疑心を頑なに心を閉ざしている娘にぶつけてしまったようだった。

「苦労するとはどういう意味でございますか」

娘は切れ長の目尻を斜めに吊り上げて父親を鋭く見返した。北東の方角に目尻が上がった時は要注意だったと、惣兵衛はあわてながら、くだらない娘の癖を思い起こしていた。

「いや、他意はないんじゃ。ただ、もしかしたら、いや、これは取り越し苦労というものであるのは、重々承知なのだが、お前を無頼の輩どもから助けてくれたというご浪人様をもしかしたら好いてしまったのではないかと思ってな、それでつい口がすべってし……」

「好いております」

「ゲッ」

呻き声が便秘のときと同じ踏ん張り音になったとたん、畳に置かれた茶碗を蹴飛ばしていた。

「好いておるのか」

「はい」

娘は澄ました顔でいった。自分の娘ながらそのすずしげで美しい風貌に見惚れる思いで、それは、と呻いたきり惣兵衛は言葉を失った。たとえ町人の娘といえども、男を好

いているとは生半可な気持ちでは口にすることはできないはずだと思っていたからである。

惣兵衛は養子ではあるが、実家はそれなりに由緒のある書物問屋であり、三男坊の惣兵衛は先代から乞われて「槌屋」に婿入りしたのである。それ以降、店を二倍に拡張したという自負もある。ここでわけのわからないものに店をまかせるわけにはいかなった。

惣兵衛は女中を呼ぶことも忘れて、畳に浮いた茶を懐紙で拭った。次に思いつく言葉がすぐには出なかった。だがな、とようやく口を開いたものの、舌がもつれた。それでどさくさ紛れで額の汗をもう一度拭った。

「あのお方ともう一度お会いするまでは、婿養子のお話はきっぱりとお断りいたします。一年前からそう申し続けているのに、お父様は分かってくださらない」

お秋はすずしげな表情でそういうと、あらもう日が暮れたわ、と呟いて湯呑み茶碗を手にしている父親をおいて立ち上がり、そのまま廊下に出ていってしまった。

とりつくしまもないとはこのことだ、と惣兵衛は溜息をついたあとぼんやりと庭に落ちてきたとばりに虚ろな眼を向けていた。それから番頭の嘉吉を呼び、小僧の佐助に手が空き次第、部屋に来るように伝えた。番頭を最初に呼んだのは先代から仕えている嘉吉の顔を立ててやるためである。

嘉吉は惣兵衛より六歳年上で年が明ければ五十八歳になる。いまだひとり者で、暖簾分けをするから店を持てといっても、店も嫁もいりませんと決まって応える変わり者でもある。ただし、店の商い事は万事おこたりなくやるので、主人の惣兵衛はただ好々爺然としていればよかった。

唯一の悩みがお秋の婿取りの一件だった。惣兵衛の頭の中にはこれで五回目の婿候補となる旅籠町に店を構える紙問屋の次男坊の存在がうろついている。昨年の夏以来、惣兵衛はほとんどお秋の婿取りのことしか頭になかった。

最初の候補者は同じ文具問屋を営む三男坊で、働き者で通っていた文六というその男は、どうした拍子かお秋との見合いの席で突然血を吐いて倒れ、そのまま今になっても床についてゼーゼーとやっている始末なのである。文六に罪はないが、長男に負けまいとして寝る間も惜しんで精を出して働いたのが肺を患わせる原因になったと聞いている。

二人目の候補は呉服町で筆だけを商う店を堅くやっていた筆屋の長男だった。たとえ長男でも筆屋より文具問屋の方がいいという本人の強い希望もあって惣兵衛は半ば申し訳ないという気持ちで相手方の両親に会って許しを得ようとしたのだが、向こうでは惣兵衛が裏で何事か画策したのだろうと疑心暗鬼でろくに口を利いてもらえない。人の家の跡取りだと承知の上で調子のいいことを息子に吹き込んで、婿になることを承知さ

せたのだろうと疑っていたのである。仲介に入った町役人の甚左衛門も困っていたが、いい具合にふた月もする内に相手の男の不始末でその話は立ち消えになった。筆先を舐めては客に売っていた女売り子といつのまにか長男はデキていたのである。この女は妾として「槌屋」に連れていくのだと強情を張る男を婿に迎える気は惣兵衛にもさらさらなく、それはそれでいい結末になったと得心している。

今年の四月には実家の書物問屋を切り盛りしている大番頭の親戚筋に直次郎というい男がいるといわれて惣兵衛は番頭の嘉吉と一緒に会ってみた。上方で算盤を始め商売に必要な仕入れ業務、簿記、損益勘定帳簿つけ、さらに商売の心得、しきたり、他家との付き合いなどを穀物問屋で働きながら学んでいたという触れ込みであったが、実際に顔を会わせてみると、野鼠のような貧相な男で、会っている間も始終目をあちこちに漂わせていてどうにもうさんくさい。

いったんまたいずれといって直次郎と別れてきたが帰りの道で嘉吉が、旦那様、あのお方はよろしくありません、とめったに人の悪口や噂話を口にしない嘉吉がこむずかしい顔でぼそりといった。やはりいかんか、と惣兵衛も反応した。いけません、あの男は嘘つきです、と嘉吉はそれだけをいって口を閉ざした。

嘘つき、それはどういう意味か、と惣兵衛は頭を振ってあれこれと思いあぐんだ。その様子を見かねたのか、嘉吉はあの男の指には算盤胼胝がありませんと呟いてから、わ

たしは亀吉屋さんに寄ってから戻りますのでとさっさと道を西に折れて歩き去ってしまった。

その後、惣兵衛の兄の面子を立てるために二度その男に会って色々と話を聞いたが、やはり嘉吉の口にした嘘つきだという言葉が気になって婿入りの話は本筋に入る前に立ち消えになった。しかし、それはそれでよかったと惣兵衛は思っている。

おしかったのは三月ほど前に店に突然現れた四番目の候補で、元々はさる藩の勘定方の四男だという木内左馬之助と名乗る侍は、やっとうを振り回すより算盤の方が三度の飯より好きで、どうにかして武士を捨てて商人になりたいと悶々としていたという。父は八十五石の給米をもらっているという代々江戸定府の藩士で、息子も国許には一度もいったことはないという。

その息子とお秋との出会いは全くの偶然で、芝居見物の帰りに二丁町界隈の店を下女を連れて冷やかしていたお秋とどうした拍子かぶつかってしまい、そのときお秋にひと目惚れしたといって、顔を赤くして店に挨拶にきた。それ以来、なにかにつけて惣兵衛のところにくるので、なんかヘンだなーと思っていると左馬之助は恥ずかしながらといってくだんの話をしだしたのである。

勘定方の父親という人のところへ今度は惣兵衛が挨拶に出向くと、この人が随分さばけた人で、実は四男の行く末については頭を悩ませていたのだという。算盤にかけては

一流のものもあるし、年も二十二歳と若い。いっそのこと商家にでももぐり込んでくれないかと思っていたところなのだと腹の内をあっさりと明かしてくれた。喜び勇んで家に帰り、お秋におまえにひと目惚れしたお武家様が入り婿を承知してくれた、と伝えると、とたんにお秋の顔から笑みが消えたのである。

婿様になる方がお武家様ならひとことお父様に申しておくことがありますと、おとっつぁんからお父様などと急に他人行儀な言葉遣いになって、実は、と言い出したのである。この「実は」が惣兵衛にとっては致命傷になった。

娘がどこぞの浪人にからまれているところを、別の粋な出で立ちの若い浪人が救ってくれたという話は、そのとき一緒にいた手代の幸八と小僧の佐助、下女のお竹から繰り返し聞かされていたが相手がどこのだれだか皆目見当がつかず、まあ、そのうちどこかでそのお方の噂でも耳にしたらご挨拶しようくらいに軽く考えていたのである。

だが、江戸定府の四男が入り婿を承知しているという話を持ち出して以来、婿取りの件に関しては娘が主導権を握って家の主である父親が娘にあしらわれている有様なのである。

木内左馬之助に関してもまだ正式に仲介を頼んでもいなかった町役人の甚左衛門さんのところへ娘は勝手に出かけていって、この話はなかったことにしてくださいと、おとっつぁんが勝手に進めたことなんですと断ってきてしまったのである。まだ仔細を知らされていなかった甚左衛門さんは一体何事が起きたのだと泡喰って飛んできたが、惣兵衛はただひたすらあやまるばかりであった。

それでいよいよ五番目の候補者を惣兵衛はそれほど声を大きくせずにむしろ内々にこっそりといえるほど神経質になってようやく夏の終わりになって探し出したのである。旅籠町に店を構える紙問屋「白美堂」の次男坊、卯ノ吉は真面目な男で、男前とは言い難い面相だがそれだけ信頼が置ける思いがして惣兵衛は富くじでいえば中当たりくらいではないかと推察している。だが卯ノ吉のこともまだお秋には言い出しかねたまま、今年の秋も深まる時節になってしまったのである。

女中が行灯に灯をいれると、入れ違いに佐助がやってきた。

「旦那様、佐助でございます。番頭さんからこちらにくるようにいいつかりましたで」

暗くなった廊下に膝をついて頭を下げた。律儀な男だが頭の回転が少し鈍い。それにいつまで経っても商人言葉を覚えようとしない。それでもお秋が外出するときは決まって下女のお竹と佐助を連れていくというので惣兵衛は好きなようにさせていた。だが今夕はどうしても、その鈍い頭を叩きのめしてでも聞き出さなくてはならないことがあった。

「こっちにお入り。それから障子をお閉め」

声をかけると佐助は背を丸めて部屋に入り障子を閉めるとおどおどとしたように主人

の様子を下から仰いだ。これでは叩きのめすわけにはいかないな、と胸の内で嘆息を洩らしてから、どうかね、と惣兵衛は声をかけた。

「その折り、助けてくれたというご浪人様のことで何か思い出したことはあるかね」

この一年間、幾度となく尋ねていることで、同じことを質問する惣兵衛の方がもううんざりしていた。案の定、佐助は小首を傾げ、それがどうも、とくぐもった声で答えた。それも一年前と全く変わり映えのしない表情でもったりと口を開くものだから、のんびり屋の惣兵衛も煙管で佐助の額にカチンと硬い殴りを打ちたくなる。

「あっしも片腕の浪人ともうひとりの痩せこけた浪人の剣幕にただ怖れおののいておったんで、おらどもを救ってくれたご浪人様がいつどこから飛び出してきただか、まるで見当がつかんのです。それに片腕の浪人のもう一本残っていた腕をあっという間に斬り落としてしまったもんで」

その答弁も何度も聞いたことだった。そのとき一緒にいた手代の幸八は浪人から腕を斬られ、江戸にいるのが怖くなったといって、その二日後には暇をとって下総の実家に戻ってしまったのだ。それで仕方なく惣兵衛は小僧の佐助からことの顛末を聞き出したのである。しかし、娘のお秋が難癖をつけてきた浪人から救われたのは、どこからか出てきた着流しの浪人のおかげだということまでは分かったが、一体そのお方はどこのどなた様だということになると佐助はしどろもどろになるのである。いつでも同じことしか答えられない佐助の頭の回転の鈍さに惣兵衛は心なしか哀切感を感じだしている。店に奉公に上がったのが十二歳のときでそれからきっかり十年がたった。本来ならいい男ぶりになっていてもよさそうなものだが、佐助はいまだにうらなり瓢箪のような自信なさげな田舎者面をぶら下げている。

「救ってくれたご浪人様は相手に対してご自分の姓名を名乗らなかったのかい」

「いえ、名乗りませんでしただ」

ちょっとだけ思案する様子を示したが、これも以前からの返答と変わりがなかった。武士が自分の本当の姓名を他者に名乗ることはないのは商人である惣兵衛でも知っているが、歌右衛門とか金太郎とか仮の名くらいは口に出してもよさそうなものである。

しかし、どうもこれまでと違って何か新しい質問をしなくては佐助の小石で詰まった頭の中味をすっきりさせることができないようだと惣兵衛は思案していた。先程足先で蹴飛ばしてしまった湯呑みには茶が一口残っていた。それを前屈みで啜って惣兵衛は、だがね、と切り出した。

「それでも何かしら覚えていることがあるだろう、背丈とか顔立ち、それに着ていた着物とかね」

それは、と呟いた佐助の顔に赤みが射した。

「とても背丈のあるおさむらい様でしただ。六尺（約百八十センチ）近くはあったでは

ねえかな。身なりも浪人というか、きれいな着物を着ておったです。袴はつけておられず、着流し姿だっただ。んでも、そんじょそこらにいるご浪人と違って、なにかこう、後光が射すというかそのように感じただ」

実際に夏の夕陽が神田堀近辺に射し込んできていたので、陽光を背にすると、だれでも後光が射しているように見えたのである。しかし惣兵衛はそのことには触れなかった。

「よく覚えているじゃないか。それでどんな顔立ちをしていたのかね」

「凛々しいお方でしただ。それにちょっと怖いような感じもしたです」

「それはお秋に狼藉を働いた浪人の腕を切り落としてしまうようなお方だから、やさしい顔をしていたとしたら気持ちが悪い。ただ、どういうわけかお秋はお竹と違ってそのお方をひと目で好いてしまったようなんだ」

「えっ？　そ、そうなんだすか」

娘から聞いたばかりの秘密の話を佐助に伝えたのは、佐助の脳細胞にすさまじい刺激が起こることを期待してのことだった。なんといっても一年間以上眠っている頭なのだ。

「よくあることだ、危険にさらされているときに助けてくれた人に対して恩義以上のものを感じてしまうというのはな。だがね佐助、いま、いったことは番頭さんにも内緒だよ」

「へえ」

と呆けた眼を畳に置いて、佐助はくぐもった声でいって額だけちょこんと下げた。呆けた面になったのは、身分違いと知りながらも佐助はお秋に惚れているからだと惣兵衛は見ていた。

「そのご浪人様はひとりでいたのかい、誰か連れはいなかったのかい」

「へえ、もうひとり髭面の大きな人がいました。んでもお竹がみっともねえ格好でひっくり返って叫んでいた間におらどもを救ってくれたご浪人様は姿を消してしまわれたわけだす。お嬢様はもう震えているばかりだったで、おらもいっときも早くそこを去らにゃいかんとおもっただに」

恐縮したようにいうが、要するに、お秋を狼藉浪人から助けてくれたという背丈のあるご浪人様を探し出す目星はほとんどないということなのだ。惣兵衛は溜息をついてどうしたものかと思案した。お秋のその浪人への若い娘ゆえの一途の情を醒ますには、なんとしてもその人本人を捜し出して、お秋に因果を含めてもらうしかないのだ。

「それでは聞くが、もう一度どこかですれ違ったりしたら、おまえはそのご浪人様をあのとき救ってくれた人だと分かるかい？」

「へい、そのときはすぐに旦那様にお知らせしますだ」

「私に知らせなくてもいいんだよ。あのときのお礼がしたいと丁寧にいってご姓名とお住まいを聞きだしてくればいいんだよ」

「へい、かしこまりましただ」

そこへ番頭の嘉吉が外からおとないを入れて障子を開けた。背後にはお竹が控えている。外はすっかり暗くなっている。お竹は惣兵衛に新しい茶を取り替えるとすぐに出ていった。

「嘉吉、しばらくの間、佐助を借りますよ。なに、昼の間、一時（二時間）ほど借りるだけですから」

「さようでございますか。お店の方はご心配ご無用でございます。明朝にでも今日までの帳簿を見て頂きたいのですが」

「うん、そうしよう。ご苦労さん」

それでは私はこれで、と堅太りの上体を窮屈そうに折り曲げて嘉吉は出ていった。これから夜半まで帳簿合わせをするのが嘉吉の日課になっている。ときおり町役人との付き合いで酒の出る座敷に出ることもあるが、惣兵衛と同じで嘉吉も人前に出るのが好きでない。

いったい、何の楽しみがあるんだか、と思った惣兵衛だったが、いや、今はそれどころではない、年を越す前にお秋の一件を片づけなくては、婿取りもままならないと焦っている。

五

永代橋の東詰めを北にとれば佐賀町の町屋にでる。

佐賀町はいわゆる江戸湊と呼ばれる一帯で江戸湾から上がってくる潮が適当に大川の流れに混ざり合って豊富な魚介類を庶民の口に与えてくれる。佐賀町の裏手にあたる四千坪近い敷地には御船手組の長屋があって、数百人の家族がひしめきあって住んでいる。

その組連中を相手にする呑み屋やひとり者用の一膳飯屋などが佐賀町に軒を並べていて、中ノ橋近辺の堀辺には深川芸者と呼ぶにはちょっとしょっぱすぎる女たちがあざとい紅を唇にひいて首まで白粉を塗って通りかかる男たちにシナをつくっている。お上からみれば違法に違いないが、安女郎を置いて稼がせる銭などたかが知れているので見逃しているのである。無論、同心はそれなりの心付けを元締めから受けている。まめに商店に顔を出す見廻組の同心の中には年間二百両の賄金を懐に入れるという剛の者もいる。長屋住まいの四人家族なら年間十家族は養っていける金額だ。

今は松平定信公の時代と違って、ご定法はそれとして残されているが、庶民も役人も元の田沼意次時代のぬめったぬるま湯の世界に浸り込んでいるのである。

それは柳沢吉保からつづく賄賂政治への名残りを羨む貧乏旗本の声も反映している。なんといっても収入は増えるどころか藩からも借り上げられて減収気味のところへきて、どういうわけか、物価ばかりが几帳面に毎年上がっていくのである。

文化も六年（一八〇九）になるととりたてて景気のよい話はない。正月に大火事があり、お花見の頃には材木問屋が気前よく銭をばらまいたが、それも高級料理茶屋か吉原内の廓の見世くらいで庶民のところまでは廻ってこない。小判色めいた風もぱたりとまっているのに、誰も不景気の元凶を口にしない。なんとなく庶民も役人も一緒になってタガを緩め始めている。

もっとも右京之介はそのどこか軽佻浮薄な江戸の町そのものをふらふらと歩くことが性にあっている。主家が取り潰しになったり改易になったりして不本意ながら浪人暮らしをしている者は、食い扶持を求めて地方からどんどん江戸に入ってくるが、法の裏をかいくぐってまとまった小判を懐にしたいという伝法なやつでない限り、口入れ屋も仕事を世話してくれるし、それが駄目でも、日傭取りの荷揚げや器用な侍なら壁塗り瓦葺きなどで取りあえず日銭は稼げる。武士の沽券にかかわる、などとほざいて肩肘を張っている浪人はさぞかし生きていくことが窮屈なことだろう。

武士の体面を保ちたければ、世間を睥睨しつつ、餓死するのがよろしかろう、と右京之介は思っている。

今夜上がった月は三分ほど欠けている。あと数日もすれば欠けたところが光に埋まり神田明神祭りの夜は満月となる。そうなれば、夕暮れは早くなっても、帰り路を急ぐ町人は提灯に灯をささず、無宿人に狼藉を働かれる心配もないので平和そうに歩いていける。

今夜の月は町を徘徊する者を惑わすなんとも悩ましい中途半端なぼやけた明かりを送ってくることになるだろう。黒い雲が西から湧き出ては消え、提灯に灯をいれて歩こうか蠟燭を節約しようかと商人は頭を痛めるわけである。彼らはそれほど細かい裁量で小銭とつきあっている。

右京之介は料理茶屋の帰りに提灯を手渡されてもめったに持つことはない。左手に提灯を提げて歩くのが面倒なのである。

それに最前のようにどこからともなく矢を仕掛けられた夜などは、提灯の灯りが夜襲をかける側の格好の的にもなりえる。

江戸は気配を殺して他人の後をつける者が、さり気なく呼吸をしているぶっそうな町なのである。右京之介が提灯を手に取ることがあるとすれば、自分の足下を照らすことより、むしろ闇夜にぬっと上背のある浪人が角から現れれば、町の者たちが驚くだろうとおもんぱかるからである。

左手に大川の流れが響く佐賀町の町屋にさしかかると暗い中から、「それはねーでし

ょ、お侍」と半ば怒りを含んだ声が伸びてきた。

そこは酒も呑めるようになっている米蔵だが、表には居酒屋を示す掛け行灯は出ていない。蔵には本来なら大坂商人の手を経て運び込まれた米や大麦、小麦、大豆などが貯蔵されているはずである。他の蔵はいっぱいのようだから船子や荷揚げ人足などが自分たちの遊興の場として適当にこさえた空間のようだった。そこに酒と肴をそれぞれが持ち寄ってサイコロ博打をするのである。

右京之介が声の出てきた方を覗くと、戸の隙間から瓦灯に照らされた酒樽が目に入った。米や大豆はなくとも酒だけは豊富に積まれている。ただ、女の姿も匂いもしなかった。

右京之介は素知らぬ顔で騒ぎのあたりを素通りしようとした。月に何度か右京之介はふらふらと酒を呑ませる船宿だとか垢抜けしない女が酌をする居酒屋にいって妙に甘ったるい酒を呑むことがある。騒々しい店の雰囲気に溶け込むのも楽しみのひとつだった。

だが、酒蔵の中に入って船子相手の賭博をする気にはさすがになれなかった。右京之介は自分でも不思議だと思うのだが、博打に負けたことがないのである。

それで、というわけでもないのだが、どこか見知らぬ居酒屋にでも入ってみるかという気になって右京之介は騒いでいる連中を横目で見て歩き過ぎた。すると、「おう、お

ぬしは奥山殿じゃなかか」と息もたえだえといった感じの者から声をかけられた。方言から察するとどうやら薩摩の者らしい。

横を向くと、二、三間離れたところの米蔵の前で若い御船手組の職人連中から囲まれている頬かむりをした浪人が、こちらを向いて片手を上げている様子である。

「はあ、さようですが」

右京之介はそういって男たちの輪の外に佇んでいた。彼らは背丈は低いがどの男も筋肉がみなぎっている。大坂から穀物船をあやつってきた者たちが持つ足腰の強さは相当なものだった。同じ肩が張っていても満足に飯も食えずにいる浪人者とは骨のつくりが違う。薄暗い中で浪人者のほっとした目つきが浮き上がってきているのが窺われた。

「恥ずかしか話なんやが、ちと手元不如意で困っておったとこいほいならね。ちっと融通してもらえんかの」

右京之介は浪人を取り巻いている男どもの表情に殺気じみたすさまじいものが浮き上がっているのをとっさに見て取った。それで故意ににやにやすることにした。だが浪人者はそんな右京之介を明かりに透かし見て、与しやすいと見て取ったようだ。えらそうに髭の生えた顎を上に向けて右京之介を見上げるとうむと呻いた。

「さごと困っておう。そこで一分ほどこん者たちに払ってもらうと助かうのだが」

浪人者はあくまでも自分勝手である。

「実は私も手元不如意でしてな、今晩の飯の肴にしようと永代橋の西詰めに釣りをしに出てきたのですが、この通り釣りは不首尾に終わった次第。それでは失礼をいたす」

船蔵の働き手の男たちが浪人者の背後を取り巻いている。これはスタコラと立ち去った方が無難だなと判断して、右京之介はそれだけをいって踵を返した。

その袖を引っ張る者がいる。見返すと、意外なことを聞いたというように浪人者がめくじらを立てている。瓦灯に浮き上がった顔が食いつくように下から伸び上がってくる。

その角張った髭面を以前にどこかで見かけたことがあった。それもそれほど前のことではなかった。髭面と一緒に安酒と土と藁の臭いも一緒に立ち上がってくる。

「一分ほど用立ててもらえんと拙者は恥を忍んで申しとう。それでん置き去いにしてしまわのか」

面倒な男だと思った右京之介は浪人に対する一切の情けを絶ちきることにした。

「さよう、してしまわれるのですなあ。そもそも私はおぬしのことなど全然存じ上げない。ここで今初めて会っただけだ。その前に何故私の名前をご存じなのか教えていただきたい」

「そや……」

と呟いた浪人は、首を傾げて額に縦皺を寄せた。

「そやなんだ、おぬしは浪人の間では名が知られておうからな、どこぞかでおぬしを見かけた者があれがかの高名な奥山殿だと教えてくれたこっがあったのだ、それで存じておうのほいなら。旗本ではなし、といって勤番勤めをしじぁ風でん。ん、そうだ、柳橋あたいでは芸者をはべらせておうとも聞いたこっがあう。それに、なんといっても儂らのよな着た切い雀の古着ではなく、いつでん身ぎれいな恰好をしておうからな。懐具合もよさそうだし、みんな不思議がっておったのだ」

縦皺を刻んでいる割には、薩摩弁でとうとうと喋った浪人は、そこで下卑た笑いを口元に浮かべた。その唇の脇に大きなかさぶたができている。なるほど、と右京之介はいったんは頷いた。目の前に突き出てきた埃まみれの髭面をどこで見たか思い出したからである。

「そういえば先日闇討ちをしようとぶっそうな相談をしていた浪人どもの話を私は酒場で偶然聞いてしまいましてな。いや、なに、最前も私を弓で射た者がいたんだが、あんたの御親戚ですかな」

「め、滅相もん。御仁を闇討ちにすうなど、そげん企みは毛頭ない。あってたまうか。それに親戚とはなんたう言い草ほいなら。ま、そやともかく、ここはなにとぞ一分、頼む」

「お断り申す」

再び背中を向けると今度は強く袖を引かれた。自分を取り巻いている船子どもの表情が尋常なものでないのを知ってあわてたものらしい。

「待ってくれ、では一分の半分でよか。なんとか都合をつけてくれんか、武士は相身互いと申すじゃなかか。それにここで出会ったのも何かの縁ほいなら」

「縁でも、ほいならでもない。私はただ通りがかっただけだ」

あわてふためいた様子で鼻孔をふくらませている浪人は、一分の半分などと妙なことをいって煙に巻こうとしている。それは二朱にあたる金額で船子や船大工にしてみれば銭七百五十貫は五日分の日当に相当する。そのあたりの女ならひと晩どうにかできる金額だ。

「お侍さん、この御浪人は一分とおっしゃいますが、わっしらの貸し分は一両二分なんで」

そういったのは浪人を取り巻いている船子の中でも年嵩の男で、日焼けした肌から大きな目が覗いている。

「ほう、そんなに負けたのか。それは武士の風上にもおけない人だ。では私が代わって成敗してあげましょう」

いうなり右京之介は脇差しを抜き放った。それをすぐに鞘に納めたのだが、薄暗い上にあまりの早業だったので、船子たちには何が起こったのか分からずただ茫然としていた。浪人の上衣が真横に斬られたと知ったのは、懐からすべり落ちた財布からいくつかの粒銀が転がり出てきたからである。

あっ！　と年嵩の船頭と浪人が同時に大声を出した。このやろう、と罵る声や汚ねえ奴だと叫ぶ声が背後で飛び交った。

右京之介はすでに北に向かって歩き出している。

「待ってくれ、こんカネは故郷におる妻子に送らなくてはならんのだ、許してくれ」

そう哀願する浪人の哀切極まるだみ声も男たちの怒声に交じって聞こえてくる。

「今夜、日当が一両入っからそれまで待ってくれ」ともいっている。たったひと晩で一両もの金を稼げる商売など浪人風情にあるわけがない。盗賊の用心棒くらいだ。闇討ちの密談をしていた浪人ども、といったのは口から出任せだったが、案外、盗賊の用心棒でもする相談をしていたのかもしれない。それに船子相手に博打をやって、おまけに負け金を出し渋るやつはもうおしまいだ。

右京之介は懐手をしながら浪人を棄てて歩き出した。

堀にかかっている橋を渡りだすと、大川のごうごうという流れが群れをなした獣の遠吠えのように左の耳に響いてくる。

渡り終えると左右の長屋からは竈で煮炊きをするいい匂いが漂ってくる。

もうひとつ橋を渡って東に向きを変えると、それを待っていたかのように右京之介の頬に雨を含んだ風が当たった。ほんの少しの間佇んでいただけで雨は思いがけなく強くなってきた。驟雨か、と呟いた右京之介は、たまたまそこに灯りの出ている居酒屋があったので、雨宿りするつもりで障子を開けた。

とたんに正面の板間に座っていた日雇い職人風の男がすでに酔いの回った赤い面を向けてきた。顔を覗かせたのが武士だからといって特に驚いた様子でもないが、すっと目をそらしたのは侍とはかかわりになりたくない気持ちが表情に出たからのようだった。職人の集まる安居酒屋では侍は敬遠される。

右京之介はかまわずに、よいかな、と声をかけて土間に足を踏み入れた。だがその声はすぐにざわめきに溶かされた。店の中では二畳ほどの板間に直接チロリを置いて、紺の仕事着を着た職人たちが賑やかな笑い声をたてて酒を呑んでいる。今しがた仕事から戻ったばかりの者もいて肩にかけた小物入れをそこいらに放り投げると、被っていた法被を脱いでさっそく仲間からぐい呑みに冷酒をついでもらっている。家に帰るより先に一杯ひっかけたい性質なのだ。その気持ちは呑兵衛の右京之介にはよくわかる。

出てきた小女がどんぞというので右京之介は小上がりに上がって板の間に腰を下ろした。初めて入る店で、居酒屋というより煮売り酒屋といったごった返し方である。侍は右京之介だけのようだが、破れ屏風で床几を仕切ってあるので奥までは見渡せない。

酒か、と小女が聞くので熱いのを二、三本頼むというと、すぐにチロリを二本と田楽が運ばれてきた。口に含んだ燗酒は舌を刺してくるほどのいたずらぶりだったが、杯を重ねる内に、こんにゃくと一緒になって舌にとろけ始めた。

そのうちどこからか渡り女郎のようなあだっぽく崩れ始めた女がふたり風に押されるように入ってきて、雨に濡れた頬かむりを取って膝で払うと、時をおしむように職人たちの間に座り込んで酒をたかりだした。

男たちは歓迎しているような、そうでないようなそぶりで塗り盃に酒をついでやっている。その内ひとりの女は手酌で酒を呑みだした。

右京之介は店の中を見渡しながら、何となく楽しんでいたのだが、ふと気が付くと、いましがたまで職人の中にいながら手酌で呑んでいた女が、目の前に横向きに座っていて右京之介を睨み付けていた。

「呑むか」

そう尋ねると女はあまり面白くないような風情でいただきます、と意外に澄んだ声でこたえた。右京之介が追加の酒と盃洗いの井を頼むと女は薄い唇の端を曲げて笑った。あらゆる経験を積んだ凄惨な笑い顔が一瞬だが垣間見えた。面白いな、と右京之介は思って煤けた天井に目を向けた。

江戸を離れていた五年の間、結城から伊達領に入り、山形、最上を抜け越後、越前と歩き、そのたびにその土地独特の風習や村の伝承などを見聞きしたが、宿場で生きている女郎たちの生き様はどこにいっても哀れで、みな荒んだ表情を隠そうとはしなかった。宿屋で働く飯盛り女は客を取る代わりに、客が食べ残した飯を食ってようやく命をつないでいた。客を取れない女はその日は空腹のまま過ごさなくてはならないのである。だから、酒の味を知っている女などほとんど見かけたことがなかった。

四年前に訪れた加賀ではしばらくの間、船商の用心棒まがいの仕事をしていたことがある。そこである晩船商の接待で料理屋に招かれ豪勢な料理を馳走になったことがあった。その席についた芸子がとくとくと気持ちよさそうに酒を呑んだ。それが女と酒の取り合わせを見た初めてのことだった。

その席には経世家の海保青陵という学者もいて、しきりに富国安民を豪商の取り巻きたちにも説いていた。初めの内は無粋な奴だな、と思っていた右京之介だったが、江戸幕府が各藩にきつく布告している「津留（鎖国）」政策を堂々と批判し、加賀には様々な産物があり、それらを他藩だけでなく日本近海に出没する外国船にもどんどん売りつけなさいと自由交易を説き出すのを耳にして、とんでもないことを言うやつだとあきれながら、その実、腹の中では我が意を得たりと頷いていた。海保のいうことはまさしく右京之介の考えていたことでもあったからだ。

それでその夜は右京之介が逗留していた船商の家の離れに海保を連れて行き、ふたりでひと晩中語りつくした。右京之介がオロシアから手に入れた船の設計図を基に越後の小さな港で大砲を備えた交易船を建造する準備にとりかかっていると語ると、海保は感動のあまり右京之介の手を両手で包んで涙を流した。諸藩を放浪すること三年、初めて同志を得たというのである。

あれから四年が経った。思いがけなく大垣藩から二万両を超える金を手にいれることができ、あの当時はまだ夢物語に近かった高速洋船の建造に取りかかることができた。造船場所こそ明かしていないが、一方では、巨大亀のような、鉄の甲羅で覆った軍艦の造船も実際に始まっているということは海保青陵にはもう伝えてある。右京之介は海保とはいまも文通を欠かさないでいるのである。

その海保は飯盛り女の牛馬にも劣る境遇に同情し、どのような世の中にしたらあのような女たちを救うことができるのかと懊悩していた。右京之介は江戸では女が少ない、まずは女でも好きなところに行ける制度をつくらなくては駄目だ、といっただけである。多分、そういう日が来るとしたら、外国がこの国を乗っ取るときだろうと思っていたが、それは口に出さずにいた。古河城中で幽閉中に亡くなったといわれている熊沢蕃山を心の師として陽明学を学んでいるという改進派の海保でも、幕府が消滅した後の日

本を見るのが待ち遠しい、と聞けば腰を抜かすだろうと考えたからである。

そういえば、春にきた封書には近々江戸にくるようなことが書いてあったが、幕府から交易学とでもいうべき講義でも頼まれたのかなと右京之介は思っていた。そうであるとすれば幕閣にも開けた思想を持つ開明派がいることになる。

「お武家様はあまり見かけないお方ですねえ」

横向きに座った女はそういうと切れ長な目尻を斜め上に振った。そこに強い恨みを秘めた女の執念ともいうべき炎が一瞬浮かび上がった。おや、と思ったときには女はもうただの酒呑みに戻っていた。

「ここに入ったのは初めてでな。馴染みがない」

そういってみたが、その日の稼ぎをこんな煤けた居酒屋で浪費してしまう職人たちだけの店だからこそきてみたのだ、と腹の中では呟いていた。職人たちに混じってそっと呑んでいると普段では聞けない話が耳に入ってくることもある。だからどうだということはないが、ときおり、なんだか愉快になることがあって、そういう雰囲気を味わえる場所が右京之介は嫌いではなかった。

呑み続けている女の横顔から目をそらして右京之介は腰を上げた。そろそろ潮時だなと思ったからである。自分では目立たぬようにしていても、それなりに注目を浴びてしまっていることは、職人たちの背中の緊張が語っている。旅先から江戸に戻ってきたばかりの旅装もまだ解いていない荷を背負った商人が、菅笠をとって店の土間に足を踏み入れるや、おや、という表情で右京之介に目を向けるのにも気づいていた。

二朱銀をチロリの置かれた平たい盆に残して右京之介は煤けた油紙の張ってある戸を開いて外に出た。するとすぐに小女が追いかけてきて、これは多すぎますだといって固く閉じていた掌を開いた。それは幕府鋳造方の福田務廉の建議によって今年から増鋳になった南鐐二朱銀で、上方方面ではあまり好かれていなかったが、どういうわけか北国に住むものからは評判がよかった。なるほどと右京之介は思った。不安げに口を尖らせた小女の顔に上州生まれの素顔が覗いた。残りの銭はとっておけ、店のおやじには内緒だぞと小声でいうと小女は泣き出しそうな表情になった。

「そうだ、おれの脇に座っていた女に一本つけてやってくれ」

そういって帯の前から引っ張り出した丁百文を渡すと右京之介は小女を店の前に置いて歩き出した。

驟雨は去って月を雲間に隠した暗い夜空が覆っている。仙台堀にかかった海辺橋を渡り出すと、水嵩の増した流れが冷風を運んできて右京之介の着流しの裾を翻した。

そろそろ弥太の屋台は商売を始めているはずで、いつでも閑な二八蕎麦屋を冷やかすには丁度いい頃合いだろうと思っていた。弥太は人間に化けた鯰のような風貌をしていて、右京之介にとっては何だか玩具のような存在で見ているだけで愉快になるのであ

る。それに久し振りに弥太に仕事を与えようと思いついたことがあった。

六

湯を沸かしながら弥太は大きなくしゃみをした。襟首からまるで雹混じりのような寒風が吹き込んできたのだが、もうひとつくしゃみをしたところで、きっと若様がおいらを酒の肴にして若林左太郎様と大笑いをしているに違いないと思った。それから自分のみじめな境遇を見つめなおして「情けねえ」と口に出して呟いた。

「修治さんに船宿をやらせたのは許せる。妹のくめさんもすっかり女将の貫禄が出てきたし、客あしらいもうまくなった。なにより大雑把なようでいて、若様にまるで下女のように誠心誠意仕えている姿がけなげだ。面相はいまイチだがあれで結構若様に惚れぬいているところがいじらしいじゃねーか」

弥太は布切れで洟をかみ、桶に汲んであった水を鍋にいれた。桶に笠を被せたのは雨の降る兆しを感じてすぐのことである。秋の夜に笠は欠かせなかった。荷台の下の窯からは薪が勢いよく炎を吐き出している。

「それになんたって修治さんは身軽だ。前世は名のある盗賊だったのではないかと思わせるほどどんな警備の強固な屋敷にでも忍び込める。若様にとっちゃあ陰の右腕だ。船宿『小川屋』の主になるのも何の不思議はねえ。おれっちだって、もう少し身軽にできていれば客い親方の下で掏摸修業などしないですんだんだ。いまさらながらおらっちを捨てたおやじとおっかあが憎たらしいぜ」

捨て子であった弥太を門前で拾って育ててくれたのが掏摸の親方だった、というのが弥太の不運の始まりだった。どうせなら貧乏旗本の用人でもいいから侍に拾われたかったとないものねだりをする癖がまだ抜けない。そこまで僻んでくると、どうしても田島助左衛門と名乗った醜く太った調子のよい田舎侍のことが頭から離れなくなる。

「仇に狙われているから助っ人をしてくれと若様に懇願しながら、その実、助太刀料まで踏み倒して敵から逃げおおせた男だ。おかげで若様は三人を相手に死闘をする羽目になっちまったじゃねーか。その上、若様の奮闘のおかげで首尾よく返り討ちを成し遂げた後には、若様に買ってもらった茶店高島屋の主人に収まって昼から下卑た笑いを浮かべて妹のケツにくっついて酒を呑んでいる。ふざけるなってんだ。なんであんな詐欺師まがいのやつが茶店の主に収まって、いつも誠実一路、若様に命じられるまま命を投げ出してドブ鼠のように動き回っているおれ様が夜鷹蕎麦の屋台を担がなくてはならねえんだよ。若様も若様だ、一体おれをどこまでもコケにしていれば気が済むんでえ。おれだって人間なんだ。男盛りの三十六歳、そろそろ所帯をもちてえと人知れず八幡様に願をかけているんでぇ。くそっ、屋台も借り物なら丼も借り物、蕎麦も現金で一束九文払って仕込んでいる始末なんだ、これじゃあいつまでたっても自分の店なんか持てっこね

え、まして嫁さんなんか……」

そこで弥太は洟を拭った布切れで目を拭いた。弥太のぼやきはいつでも最後には田島助左衛門を呪い、若様に愚痴をこぼしたところで涙になる。その夜も客を迎える前にいつも通り悲劇の主人公になってヨヨと泣き崩れかけたのだが、夜気をついて走ってくる女物の草履の足音とそれに続いて「待てー」と吠えるどら声を耳にして、思わず首を伸ばした。その瞬間を待っていたかのように、夜を覆っていた厚い雲間の一端から月が覗いた。

「こやつ、捕らえたぞ」

夜目にも図体のでかい侍が頭巾を被ったお女中の襟首を後ろから引っ摑んだ。お女中が武家屋敷勤めらしいことは夜に紛れていてもその物腰で分かる。

振り回されたお女中は、「ヒッ」と短い悲鳴をあげ引きずられるまま尻餅をついた。白いふくらはぎがほの白く夜に染まるのを口をあんぐりとあけたまま弥太は見ていた。山百合のようだと思ったのである。

「ちょ、ちょっと待ちやがれ」

そう言いざま弥太がふたりの前に飛び出していったのは、お女中が露出したふくらはぎを見て鼻息を荒くしてしまったたりのようなものであったかもしれない。掛け声は威勢がよかったのだが、飛び出したあとは地べたに手をついて侍に向かって頭を下げていた。貧乏町人の悲しい性なのである。

だが、返ってきたのは白刃の刀だった。

「下郎、殺されたいか」

そう怒鳴りざま侍は片手で刀を振りかぶった。もう片方の手はお女中の襟首をがっしと摑んでいたようなのだが、弥太には無論それを確認している余裕などなかった。ただ月が再び雲間に隠れる寸前に、目玉を血走らせた髭面の侍が鬼の形相で食らいついてきたことだけはしっかりと目に焼き付けた。

「殺られてしまうのネ」

しおらしく念仏を唱えながらも弥太はしぶとく横転していた。さらに一回転では危ないという危機感が働き、腹の突き出た身体は二回転半ほど堤の傾斜を横転して堀沿いに植わっていた枯れ木にぶつかって止まった。その間に、刀が交合する固い音が鳴るのを聞いた。一体もうひとつの刀はどこから出てきたのかと泡食いながらも弥太は頭の中で「?」を浮かべた。

「ぐ……」

南森下町の甚兵衛長屋に住む占い婆さんが経をあげながらときおり泡を吹いて倒れることがある。そんな婆さんそっくりの恨みがましい呻き声がしたが、それは闇をかいくぐって響いてきた野太い男の声だった。どさりと倒れる音がしてあたりに血の臭いが

漂ってきた。

なんだ、と喚いて頭を上げたとき、また月が顔を出した。今度はすさまじく尖った顎が鰌のようにだらしなく伸びている弥太の上に突き出てきた。その顎には最前目にしたはずの髭がない。びっくりしていたので仔細に観察している閑はなかったが、その尖った顎と夜空の黒い雲間から顔を覗かせた月とが重なって見えていた。

さっきの侍とは別人らしいとわかったが、それで弥太の命が救われたわけではない。むしろ新手の武士の方が殺気に満ちていた。そいつが本気で斬りかかってきやがったとわかったのは、耳から肩にかけて刃が掠めて振り下ろされたからである。剣先が石を打ったらしく火花が飛び散り固い音が響き渡った。

「ギャーッ！　ギャ、ギャーッ！　人殺しー！」

弥太はあらん限りの声を張りあげながら必死で地面を掻いた。その弥太のこめかみに礫が当たった。コンという小気味いい音が耳元で鳴った。それきり意識が遠のいた。

身体が震えているのは水を浴びせられたからだった。それも頭から足先まで随分とたっぷりと水を浴びせられた。くしゃみが続けて四度出たのでさすがに目が覚めた。瓦灯が顔の前にあてられて、その火の温もりで夜の中に横たわっているようだと分かった。それも流れのある幅広の堀のそばらしくごうごうと水音が右の耳を打ってくる。

瓦灯の向こうには二、三人の人の頭が黒々と映っている。黄ばんで見えるものはどうやら番傘らしい。川の流れに交じって番傘を叩く雨音もする。ほう、気が付いたかといった声は明らかに若様だった。

「兄さんたちよ、悪いがこいつをそこいらの居酒屋に運んで酒でも呑ましてやってくれ。ついでにおめえらも一杯やってくれ。これは駄賃だ」

へえ、こいつはどうも、と泥まみれの人足らしい男がふたり、掌に落とされた銭をありがたくおしいただいている。そのふたりが弥太を抱え起こすと、脇の下に肩を入れてよっこらしょ、と掛け声をかけて持ち上げた。それから無慈悲に雨に打たれるまま弥太を引きずっていく。

ちょっと待ってくれ、若様じゃないんですか、と弥太は首を後ろに捩ってそう喚いた。だが咽喉が凍りついたようになっていて声が出てこない。うーうーと呻いている内にふたりは馴染みの赤提灯をくぐったらしく、「おう、行き倒れだべ、酒をつけてやってくれろ」と戸を開けて弥太を引きずりながら奥に向かって野太い声でいった。

「おうよ」と若い男が返事をして、弥太は板間に寝かされた。すぐに丼に入った酒がやってきた。水をさんざんぶっかけられたにもかかわらず、妙に咽喉が乾いていた弥太は海蛇のようにごくごくと音をたてて酒を呑んだ。

傍らでは弥太を運び込んでくれた川さらいらしいふたりのむさい人足が五合徳利を横

に置いて茶碗に酒をついでご機嫌に呑んでいる。一体おれはどうなっちまったんだ、若様はどこにいったんだ、なんて冷てえ人なんだ、と腹の中で喚いている内に頭がくらくらしてきてまた意識が遠のいた。

次に目が覚めたのは下腹のあたりがやたらざわめいて感じられたからだ。何だ？と思って首を起こすと誰かが金玉を転がしている。それもふたつの頭が交互に出し入れする感じで陰茎をいじっている。

何だ、てめえら、と怒鳴ってみたが、その声がひどく弱々しく掠れていたらしく、顔をこちらに向けた土饅頭みたいな顔をした男が茶色い乱杭歯を見せてにたにたと笑った。

「生きているかどうか見てやっているんだべさ」

「こいつの皺をのばすとまるでこぶとり爺いみたいになるだ」

もうひとりの痩せ細った骸骨のような男が弥太の金袋を左右から引っ張ってゲタゲタと笑っている。

「てめえら何しやがるんだ」

弥太は両足を気味の悪いふたりに向かって突き上げた。するといきなり土饅頭が弥太の身体をひっくり返して後ろから羽交い絞めにしてきた。固くなった肉棒が弥太の内股

にぴったり張り付いているのはすでに臨戦態勢ができている証だった。やめろ、と叫ぶと隣の板場で寝転がっていた小太りの男がむくりと起き上がって、弥太の後頭部に尻を置いて屁をこいた。その臭いがすさまじい。土饅頭もさすがに閉口したらしく、やめるだと喚いた。

「こいつはおらたちの獲物だ。おめえはすっこんでればいいだ」

土饅頭は弥太の頭に尻を置いている男をどうやら突き飛ばしたらしい。身体を縛っていた腕が緩んだ隙に弥太は上体をそりかえして起きるなり、土饅頭を後ろにはね飛ばした。おい、何するだ、と骸骨男が目を縦に伸ばして驚いている。

「てめえらに犯られてたまるか」

弥太は裸足のまま居酒屋の戸を打ち破るようにして飛び出した。背後でおい、待てなんぞと夜鷹も買えない貧乏人が叫んでいたが、そういわれたからといっておとなしく待つバカがいるはずがない。

雨は小降りになっていたが、あわてていたので道端に転がっていた古材木の角を足の裏で踏み抜いた。その勢いで前にすっ転び、水たまりに頭から突っ込んだ。それでもよろうようにして南森下町にある甚兵衛長屋までたどりつき、まず井戸端で足を洗い、腰高障子を開けて部屋に入った。

くしゃみが続けて二度出たが構わずに素っ裸になって暗い中、手探りで手拭いを探し

あてるとごしごしと頭から拭いた。菜種油が切れていたので灯りをつけることもできず、やけになって敷きっぱなしの煎餅布団に泥がしみ込んだような古い掻巻を被ってぶるぶると震えていた。

四半時（三十分）ほどしてそうして震えていてから、屋台を置きっぱなしにして逃げてきたことを思い出し、強くなった雨の中を仙台堀からひとつ横に入った路地まで頬かむりで走った。幸い屋台はいつもと同じところにさながら廃屋のように斜めに置かれていたが、材料の蕎麦から丼まで蕎麦屋の商売道具の一式がきれいに盗まれていた。

弥太は暗い雨の中を泣きながら長屋にまで屋台を引いて戻った。お女中を不貞の侍から救おうとしたのが仇となって、自分の命まで落としそうになり、仕上げに女ひでりの日雇いから犯されそうになるなんて、おらっちはどこまで不幸に出来上がっているんだろうと洟を啜った。

――これも全て若様のせいなのだ。いくら掏摸上がりだといっても、誠心誠意つくしているおらっちをありがたがるどころか、まるで牛馬のように扱うばかりだから、近づいてくる幸運の神様も貧乏神に変身してしまうんでぇ。

くすんと洟をもう一度啜り上げたとき、暗がりの中で一粒不思議な光沢を放つものが目に入った。粒銀かな、と思って防火用水の隅に目を凝らすと、それは子犬の双眸だった。雨の滴を受けてまるで海中に沈んだ貝のように輝いている。

子犬に手を差し伸べたのは弥太の餓鬼時代の境遇をその子犬に映し見たからだった。親に間引きされそうになった赤ん坊だった弥太は、親爺さまに必死に命乞いをする母に命を救われたようなのだが、それからはいつも雨にさらされ空腹をかかえてさまよっていた。震えている子犬は自分そのものだった。

子犬は弥太の濡れた着物に頭をあずけて小さな鳴き声をたてた。屋台の隅に子犬を置こうと思った弥太はふと思いとどまってそのまま懐の中に入れて屋台を片腕で引き出した。子犬の震えが胸に間断なく伝わってくる。自分の口すら満足に食えないのに子犬に与える餌などあるはずはなかった。そんときは修治さんの「小川屋」で出た残飯でももらってやろう、きっと助けてくれるはずだ、と願いを込めながら弥太は俯いて泥水のはねる路地を屋台を引いていった。

七

「はは、それはおまえの助平衛心が招いたことだ」

カラリと晴れ渡った空を見上げながら秋風を受けて若様はからからと笑った。あまり愉快そうに笑うので思わず弥太も、はは、と声を出した。その自分の姿があまりに滑稽なので涙混じりの鼻水が出た。

「その上、川さらいの人足どもに犯られそうになったとは、弥太の毎日は余程他人を楽

しませるためにできているな」

「それのどこが面白えんで、いい加減あっしをからかうのはよしにしておくんなせえ」

かしこまって正座しながら弥太は洟を啜り上げた。昨夜白刃を突きつけられた当人としては笑い事ではなかった。

燗酒を運んできた女将のくめが形のいい銚子を手にして若様の塗り盃に注いでいる。そんな鶴の立ち姿を映したような陶器で焼かれた銚子を見るのは初めてのことだった。どこの料理茶屋だって銚子は鉄製だった。その鉄銚子すら弥太はめったにお目にかかれない。弥太が手にするのはいつだって貧乏徳利かチロリだった。だがチロリから直接湯呑みに酒をいれるのは、若様の流儀に反している。いつだって若様は風流を重んじている。

「それで武家屋敷にお勤めのお女中さんはどうなったんだい？」

女将のくめが口元に薄笑いを浮かべてそう訊いてきた。

今ではすっかり女将然としているが、もともとは甚兵衛長屋の住民で鋳掛屋修治の妹なのだ。いまだに若様から払い下げられた同じ甚兵衛長屋でくすぶっている弥太からすればえらい出世なのだが、一体その違いはいつから生じたものだろうと改めて考えてみた。

「それがどうなっちまったのかさっぱりわからねえんで。あっしが蕎麦の仕込みをしだした間際に暗い中から叫び声がしたんで、なんだと思って見ると髭面の侍がお女中を後ろから引っ摑まえてやにわに引き倒したんで」

「そのときお女中の着物の裾が開いて小股が覗き、弥太はむらむらときたというわけだ」

若様の言葉に弥太はつい相槌を打っていた。

「へえ、むらむらと……いや、違えやすよ、その前には小雨も降っていたんですからあたりは真っ暗で、たまたま雨がやんで雲間から月が覗いたのと屋台に吊るしておいた瓦灯の灯りにお女中の姿がちらと見えただけでして。しかも、こいつは拐かしに違えねえとあわてたもんですから」

「それでどうしたのさ、襲われたお女中を助けようとでもしたのかい」

くめが笑いを含んだ目で弥太を見つめている。目の下にたるみが出てきて、年増の凄味のようなものすら感じられる。

「若様じゃあるめいし、やっとうができるわけじゃないですから、助けるつもりはなかったんですが、その、気づいたら飛び出していて、お女中を引っ摑まえているお侍さんの前に土下座してあやまっていたんで」

ふん、と女将は鼻先で嗤った。あんたも人がいいね、といっているときに小女がお盆を持って上がってきた。二合徳利とぐい呑みも載せてある。はい、これは弥太さんにだ

よ、ご苦労だったからね、といってくめが盆を差し出してきた。干物が小皿においてある。小女が徳利から酒を注いでくれるのを咽喉がひりひりする思いで待っていた。

「ちょっとお待ちよ、呑むのは話のつづきをしてからだよ」

ぐい呑みを口元まで運びかけたとき、女将から「待った」がかかった。救われた思いでいた弥太の気持ちがそのひと言でずっこけた。

「話っていってもまだ何が起こったのかよく思い出せねえ次第で。髭面のお侍がお女中を引きずり倒すと、どっかから新手の浪人が出てきやがって、そいつは髭のお侍を斬ったあとあっしを殺ろうとしたようなんで。尖った茶碗のかけらのような顎が出てきてあっしを睨み付けていたんでさ」

「それで弥太さんが助かったのはどういうわけだい？」

「それがあっしにもよくわからねえんで」

「あたしにはそのお女中がどうなったのか、とても気になるんだがねえ」

確かに新手の顎侍があのあとお女中をどうしたのか心配だった。

「そういえばあっしの頭に礫が当たったんで。そうだ、それであっしは気を失っちまって、気が付いたら若様から水をぶっかけられていたんですよ。雨が降っているのに水をぶっかけるなんて若様というお方はなんと冷てぇ人なんですかねー」

そこで弥太はわざとらしく洟を啜り上げた。もう片方の手には酒の入ったぐい呑みが

ある。まるでおあずけを食わされている捨て犬のようだと思った。

「ばかだねー、その礫のおかげであんたは命を救われたんだよ」

くめはにやりとしていってから若様に視線を流した。妙に色っぽい目つきだった。

「えっ？　それはいってえどういうことで」

「いいからお酒をお呑みなさいよ」

そう許しが出ると弥太は一気に酒を呑んだ。空になると下女のハナがくめの顔色を覗き込んでからもう一杯いれてくれた。それもごくごくと音をたてて呑んだ。ふーっと息をつく。生きていてよかったと思った。

「ところでくめさん、いや女将はあっしの命が礫で救われたといいましたか」

「いいましたよ」

「それはどういうことで？」

「まったくバカだねー、まだわからないのかい。礫を投げたのは若様だってことよ」

えっ？　と頭の上から裏返った声が出た。若様はあぶった松茸を食っている。弥太を見つめる目がデレリと垂れ下がっている。こういうときの若様は悪巧みをしているか、何かしでかした後だと相場は決まっている。

「あのー、若様があっしに礫を投げたんで」

「そうだ」

「あっしを助けるためで？」
「そうだ」
「でも、どうせ礫を投げるんならあっしを殺そうとしていた、尖った顎の浪人に当ててくれればよかったんじゃありませんか」
「そうしたさ。だが、手元が狂っておまえに当たった。暗かったのでな。許せ」
酒を呑むことも忘れて弥太は気分よさそうに秋風を受けている若様のすずしげな頬を見つめた。いい男っぷりだと今更ながら思った。それから何やら濁流に襲われている感じの頭を振った。
「するってえと、若様はあっしが茶碗のかけら顎に殺られそうになるのを見ていたんで？」
「そういうことになるな」
「その前の髭面のお侍に脅かされたときも、見ていたんで？」
「ああ、そうだ」
女将がしなをつくって塗り盃に燗酒を注いだ。若様はそれをうまそうに呑んだ。いつも感心するのだが、同じ酒を呑みながら若様が口にする酒は特別なのではないかと思ってしまうほどうまそうに呑む。弥太はぐい呑みに入れた酒をひと口呑んで気持ちを整理しようと努めた。

「いってえ若様はいつからあっしを見ていたんで」
「蕎麦の仕込みの前にお前が土手から小便をしているときからだ」
ションベン？　と弥太は呟いて首を傾げた。
「じゃあハナから見ていたんじゃないですか」
「そうだ」
「じゃあ、どうして助けてくれなかったんですか」
「おまえの芋を見たあとでは蕎麦を食う気になれずに橋の袂でぼんやり佇んでおったのだ。それにおまえは殺されても死なない」
女将が声に出して笑い、いつの間にか女将の後ろで座っていた小女も口に手を当てて笑いをこらえている。弥太は伸び上がって吠えた。
「死にますよ、あっしだって斬られたら死にますよ、滅茶苦茶いわないでくだせーよ」
若様はいつだっておらっちを鯰扱いにする。たとえ殺されても鯰鍋にすればよいくらいにしか思っていないのだと弥太はすねた。
「なにをいじけているんですか。弥太さんをからかうのは若様の悪い癖なんですよ。気絶した弥太さんをその尖った顎の侍から救ってくれたのは若様なんですから、お礼くらいいったらどうなの」
そういって女将は立ち上がった。頬が妙に色づいている。そういえば、兄の修治の陰

に隠れていたため目立つことはなかったが、くめさんはいつだって若様に献身的だった。

「ハナ、修治は戻っているか」

急に若様が下女に顔を向けてそう訊いた。呼ばれた下女のハナはまだこの船宿にいついて三月ほどしかたっていない。それまでは柳橋の料理茶屋で下働きをしていたと弥太は聞いている。どうやら若様馴染みの芸者清吉の口利きらしい。下女が客のいる部屋で酌をするのもこの船宿ならではの気安さのせいだろう。

「はい、先程日本橋の市場から戻ってきました」

「じゃあ、ここへ呼んでくれ」

はいと返事をしてハナが廊下に出ていくと、入れ違いに修治が入ってきた。まるで呼ばれるのを予測していたような素早さだった。この人も只者ではないなと弥太はずっと怪しんでいる。とにかく身のこなしがこの世の人とは思えないほど機敏なのだ。

「どうだ」

若様は部屋に入ったところでかしこまっている修治にそう訊いた。へい、と顔を上げた修治はいったん弥太を見てから若様に視線を送った。

「弥太のことなら気にするな。どうせ屁のような男だ。それに自分を殺しそこなったやつがどこの何者なのか知りたいだろうからな」

修治は頷いた。屁のような男という言葉に対して肯定したのか、浪人の身元を知りたがっていることに対して頷いたのかよくわからない。どうやら、弥太が船宿「小川屋」に顔を出す前に若様は修治に何事か探索させていたらしい。

「どうも、いささかややこしい話になっているようでして、まだ浪人がなぜお女中を追いかけていたのかはっきり分かりません」

修治の言葉を聞いて、あの髭面の浪人はお女中の見張り役ではなかったのか、と弥太はぼんやりと思っていた。お女中はどこぞの旗本の妾で、奉公先から逃げ出したところを見張りで雇われていた浪人に見つかったのではないんだろうか。

「その浪人を斬った侍はお女中を助けるつもりのようだったんですが、若様に脛を斬られて途中ですっ転びやしたので、吉村と佐々木に引っ摑まえさせて昨夜の内に例の物置小屋まで運び込ませておきました。今日中にはあの侍の正体も分かると思います。佐々木様が張り切っておいでやしたから」

「吉村弥次郎と佐々木勘助か。修治と一緒にいたのか」

「いえ、一緒にいたわけではありませんが、昨日、若様の釣りのお供をした船頭の源蔵から誰かに矢を射かけられたと聞きましたのですぐさま吉村に見張らせたわけでして。ただ、やつも若様を見つけ出すのに大分手間取ったらしく、そんときにはもうお女中を追いかけていたという浪人は斬られていやしたから」

右京之介は口元にもっていった盃を空中に預けて、すずしげに流れる煙のような雲に視線を向けた。女中を追いかけていた浪人が後ろからきた顎の尖った侍に斬られたのは小橋の袂に寄りかかって見ていたが、その死顔までは観察していない。暗かった上に、他に右京之介には気にかかる者の気配を感じていたのである。

「ではその髭の浪人は死んだのか」

「へえ、すぐに近くの医者のところに運び込んだのですが、なんせ傷口を縫うこともできない漢方医でして、腹からの出血がひどくて明け方になって息を引き取りやした」

修治は沈痛な思いで口にした。髭面のむさい男だったが、これを妻にといってようやっと懐から差し出した粒銀に目を落とした修治は思わず嗚咽を洩らしそうになった。江戸住まいの浪人の貧しさがつくづく哀れだった。

「あのお侍はとうとう仕えていた藩の名を口にしませんでした。ただ、最後に御本人は重岡といい、妻の名は楓だといわれました」

そういって修治は懐から手拭いに包んでおいた数個の粒銀を畳に置いた。全て合わせても一両にもならなかった。

「そのどこぞに奉公しているお女中を追いかけ、捕まえそこなって斬られたというわけか。哀れなやつだな」

若様は少し怒った様子でそういった。

「まったくで。どういうわけで浪々の身になったのか分かりやせんが、江戸にはあんな浪人者が溢れかえっていますんで。あの髭面のむさくるしいなりをしたお侍でも国で待っている楓という奥方がいらっしゃると思うと何ともお気の毒で」

修治の口調は知らずにしんみりとしたものになっている。修治にも違う世界で待っている女がいるのかもしれない。右京之介は黙って頷いてから「残した銭はこれだけか」と呟いた。そのようで、と修治はかしこまった様子でいった。

「これだけの銭を稼ぐために殺されたのか……。その斬られた侍は髭面だといったが、言葉に訛りはなかったか」

「へえ、薩摩訛りがありました。それが何か」

「うん、暗くなった頃に佐賀町の船蔵で船頭に交じって博打をしている男がいた。明らかに薩摩訛りがあった。その男は頬かむりをしていたが、顔は覚えている。以前にその顔を見たことがあったのだ」

「えっ？　それはいつのことで」

「半月ほど前のことだ。両国の料理屋で連中は密談めいたことをやっていてな、その内のひとりとおれは手水場ですれ違った。いやな目つきをしていたなあ。密談の内容は聞かなかったが、どうせよからぬ相談だろう。薩摩訛りのあの浪人もその中にいた筈だ」

「で、その浪人が昨夜船頭らと博打をしていたということですか」
「そういうことになるな。髭面の五尺五寸（約百六十五センチ）の肩の張った体格のよい男だった。大分負けが込んで船頭からやっつけられていたようだったが、もしかしたらお女中を追いかけていたのはあの浪人者かもしれないな」
「と、いわれますと」
「いい逃れかどうか分からないが、今夜銭が入るようなことを申しておった。それが本当ならどこぞの屋敷で夜番の見張りの職を得たのだろう。ほんの屑銭でも入り用なのだ。なんせ、昨今薩摩は大変なことになっている。将軍の岳父となった重豪が再び実権を握って重臣をことごとく改易した。借財百二十六万両をつくった張本人だ。下役の者も罷免されて浪々の身になった者が二千人いる」
「その逃げたお女中というのは、何か藩の秘密を知ったということですかい。薩摩と関係があるような」
「薩摩は無関係だろう。だが単に武家勤めがイヤになって逃げ出したわけでもなさそうだ」
若様は手酌で酒をぐいと呑んだ。弥太もぐい呑みに残っていた酒を呑んで額に滲み始めていた汗を拭った。
ここ一年ほど平穏に暮らしていた若様にとっては事件のない生活が死ぬほど退屈だったに違いない。もっともぶっそうなことはちょろちょろと起きていたが若様の意には反していないようだった。屋根船を雇って大川の花火見物に繰り出した時、混雑した船の一艘から手裏剣らしきものが放たれたことがあって、同乗していた若林左太郎や芸者どもはあわてふためいていたが、若様だけは夜空を見上げて「ハナ屋ぁ！」と大声ではやしたてていた。
「お女中は屋敷の誰かを逃がすために手引きをしたとも考えられるな。ま、いずれにしろ、髭の浪人を斬り殺した侍を白状させれば何かわかる」
そういって若様はうまそうに酒を呑んだ。修治の眉間に当惑げな縦皺が立った。
「若様。お女中が屋敷の誰かを手引きしたってのはどういう意味ですか。あっしにはどうもよく呑み込めないのですが」
「わっしにもよく分からないのですが」
「弥太は分からなくともよい」
若様は弥太の方を睨んで冷たくいい放った。
「あのときあの場所にいたのはまず逃げてきたお女中、その女を追っていた薩摩浪人とそいつを斬った顎の尖った侍、そうだな」
「へえ。そいでついでに弥太が浪人に斬られそうになったんで」
「修治さん、ついでって言い方はないでしょう」

そこで弥太はまたすねた。

ところがな、と呟いて若様は深くなっていく秋の空を見上げて目を細めた。すずしげな横顔に人懐かしげな面影が浮いた。いい男っぷりだった。弥太はすねているのが恥ずかしくなった。

「ところがな、その三人の他にもうひとり黒装束の者がいたのだ」

「いましたんで？　ちっとも気づきませんでしたが、一体どこに？」

「気づかなかったのは、修治が斬られた薩摩浪人を介抱していたからだ。吉村と佐々木が、おれが脛を斬った浪人を縛り上げていたときだ。その隙にお女中は逃げ、そのお女中のあとを追うように暗闇から出てきた黒装束の者がいたのだ」

「そいつはどうなったので？」

「おれが捕まえた」

「えっ？」

修治はさすがに驚いた顔をした。

「それでその黒装束の者はいまどこに？」

「それは内緒だ」

「な、内緒なんですか！」

若様はにやりと笑った。

「ああ、まだ内緒だ。なんせどこに隠密がいるか分からんからな。きゃつらは小判の匂いを嗅ぎつけると暗闇から漂い出てくるのだ。おい、ハナ、そうであろう」

若様はいつのまにか後ろにひっそりとひかえていた下女のハナに目を向けてにやりとした。え、隠密って何のことですかとハナはきょとんとしている。

「ハナは清吉の口利きでここにきた女だ。そしてな、清吉は若年寄配下の隠密だ」

若様は酒を口に含んで咽を鳴らした。柳橋一の人気芸者、清吉の名が若様の口から出たせいか、修治は懐手をして困った様子で畳に視線を置いた。くめはのけぞったまま口も利けずにいる。

「隠密？　柳橋のおねえさんが隠密？　いってえどなたの隠密なんで？」

弥太が目を剝き出して訊いた。今にも口から泡を吹き出しそうだった。

「ま、おまえごときが知ったところで仕方あるまい」

そんなあといって弥太は口をとんがらかせた。見ていた修治は思わずほくそ笑んだ。若様の顔には、水野出羽守忠成とちゃんと書いてある。正直な人なのだ。

「わかりやしたよ。どうせあっしはいつだってのけ者なんですよ」

弥太はふてくされてぐい呑みに残った酒を呑みほして片膝を立てた。それからどうにかしてこの店の残飯を持ち帰って子犬に食わせてやらなくちゃならねえ、やつもひもじい思いをしているだろうにと呟いて俯いた。捨て子同然だった弥太にとっては雨に打た

れて暗い隅で蹲ってそっと息をしていた子犬は自分の分身のように思えていたのである。

八

佐々木勘助は袖で汗を拭った。小屋の隙間から冷たい潮風が吹き込んでくるのに、汗がどんどん湧いてくる。吉村弥次郎も小屋の隅に積んである藁に腰を下ろして首筋に流れた汗を手拭いで拭った。

「しぶとい奴だな」

弥次郎は肩で息をしながらやっとそう口にした。縄でぐるぐる巻きにした武家崩れの浪人は脛から血を流しながら歯を食いしばっている。

うむ、と頷いた勘助は、しかし、と呟いて手にした棍棒を握りなおした。

「日が暮れるまでに口を割らせなくては、こっちが右京之介殿にどんな目に遭わされるか分からんからな」

勘助はどんぐり眼を開いて棍棒を振り上げると、腰を割って浪人の背中に打ち付けた。

「ウゲー！」

喚いた浪人はねばっこい唾を吐いて横に倒れた。その浪人の裸にした上半身を起こして勘助は再び棍棒で肩を打ち付けた。浪人はがっくりと首を垂れた。もう何十回同じことを繰り返したか分からない。

「吐け。この人殺し野郎。お前はいったい何者なのだ！　お前が斬った浪人は誰なのだ。何故あの浪人をつけていたのだ」

「知るか。おぬしらの様な糞餓鬼に言うことなど何もない」

三白眼を開いて勘助を睨み不敵に嗤った。勘助の怒髪が天を衝いた。

「この野郎！」

勘助は刀の柄に手をかけた。浪人の形相がさすがに変わった。吉村弥次郎があわてて押し留めた。

「あわてるな、勘助。抜いてはいかん」

そういうと、勘助は肩で荒い息をしながら大きく頷いた。

「おい、お前が追っていたお女中はどこのお方なのだ。言え！　言わぬまで何度でもこうしてやるぞ」

勘助は浪人の薄汚れた襟首を摑んで力の限り締めた。節くれだった勘助の指が鷹の爪のように咽喉に刺さった。浪人の三白眼が鶏卵のように飛び出した。必死で攻め立てる勘助の顔面には鮮血が飛び散ったような斑点が浮き上がっている。

「おい、それ以上締めたら死んでしまうぞ」

襷をかけた勘助の広い背中を引いて吉村弥次郎は声を抑えた。深川から東に下った六万坪の湿地に建てられた小屋だといっても、外はもう日が落ち始めており、木場から聞こえていた音も途絶えている。

浪人の呻き声は思いの他外に響く。弥次郎も小藩とはいえ重役を務めていた親父殿から幼い頃は折檻を何度か受けたが、いま勘助からされているような拷問を受けたならばたちどころに白状してしまうに違いなかった。

「これが最後だ。おまえがつけていた浪人は誰だ。あやつが摑まえたお女中はどこのどなたなのだ、何故おまえはふたりを追いかけていたのだ」

勘助は浪人の首にからめた力を緩めていった。浪人は顎を横に振った。こいつめと勘助が再び棍棒を手にしたとき、小屋の戸がガタピシと音をたてた。顔を出したのは修治である。

「どうですかい、何か吐きましたか」

「それがどうにもしぶといやつで、丸一日こうして責めているのだが、どうしても吐かん」

勘助はげっそりした顔を修治に向けた。なるほど若侍の頬は、さんざん痛めつけられている浪人より余程悲惨な様子になっている。勘助は後ろを振り返り、どうしますか弥太さん、と暗がりに向かって呼びかけた。するとそれまで外に潜んでいた鯰のような男

が幅の広い顎を突き出して飛び込んできた。どうもこの人にはまだ馴染めないと勘助は思った。威勢はいいがなんだかぬるぬるしていて、その正体が知れないのである。

「こいつが何を吐こうが吐くまいがあっしにとってはどうでもいいことなんで、面倒だから殺っちまって下せえ」

「殺る？」

勘助は弥太を見返した。平気で「殺る」と口にする町人どもの荒んだ気持ちは侍を上回っている。

「へえ。お侍をひとりぶった斬った上にあっしまで殺ろうとしたやつなんですから、かまわねーで殺っちまって下せーな」

しかし、と呟いて勘助は弥次郎を振り向いた。彼も腰が引けている。

「そうだ、どんどん殺ってしまえ」

そういってぬっと入ってきたのは奥山右京之介である。夜目にも鮮やかな青地の着物に銀色の鮫模様の紋を染め抜いている。この御仁はいつでも光をまとっていると勘助は思った。その思いの底には畏れに似た憧憬が混じっている。なんといってもこの人こそ平気で人を斬る傑人なのだ。

右京之介を見上げた浪人の目にそれまで見せたことのない恐怖の色が浮いた。口が強張り縛りつけられながらも土間から必死で立ち上がろうとしている。

「なるほど、昨夜は暗くて分からなかったがこうして見ると相当とんがった顎をしているなあ」

そういうと右京之介は脇差しの鞘に手をやって小柄を抜いた。その切っ先で浪人の顎をちょんとつくと、どうした拍子か浪人はがっくりと肩を落とし、だらしなく涎を垂らし出した。

「何をされたのですか。死んだのですか」

吉村弥次郎は上体を立てようとしたが膝が笑ってまただらしなく腰を落とした。

「いや、死んではいない。瞑想中だ」

そういってから右京之介は弥次郎を見下ろした。

「吉村、おぬしの鉄砲の訓練はどうだ。上達したか」

「は、ま、いささかは」

弥次郎はかしこまって答えた。右京之介を知って一年以上になるが、この人の前に出るとどうも尋常な自分ではいられなくなる。明るい若様風の出で立ちでいながら、いま見ているようなどこか無頼で得体のしれない立ち居振る舞いが現れるとどのように接したらいいのか分からなくなるのである。

「五十間（約九十メートル）先の的に当てられるか」

「いえ、とてもそこまでは……」

名人といわれる人でもせいぜい二十間（約三十六メートル）先の米俵を撃つのが精いっぱいだ。兵原草蘆（平山行蔵の道場）の「ひとり武者」といわれている師匠の下斗米秀之進（相馬大作）でさえ三十間（約五十四メートル）先の的に当てるのは三度に一度だ。それに戦国の時代ならまだしも、文化の時代ではそれだけ精巧な鉄砲をつくれる鍛冶職人などめったにいない。幕閣の大名に対する警戒心が弱まったとはいえ、なくなったわけではない。ことに鉄砲など武器の備えを充実させる大名家に対しては容赦がない。大猷院（三代家光）の時代には難癖をつけられた末に、改易にされてしまった領主が数十家に達した。その時代の恐怖政策が、各藩の重役どもの頭にしみ込んでいるからである。鉄砲づくりはご法度といえた。

「ところで吉村、こやつに代わって御家人になる気はないか」

「は」

右京之介が何を言い出したのか分からなかった。佐々木勘助や修治、弥太といった取り巻きもきょとんとした顔をしている。

「ど、どういうことでございますか」

「この男は浪人のような身なりをしているが、れっきとした御家人だ。身なりが汚いのはただ金がないだけだ」

「こ、こいつが御家人でございますか」

「そうだ。だから殺されても身元は白状しない。御家人の名をなくしてしまえばそれこそただの浪人だからな。いばっていられなくなるし、たとえ四十俵三人扶持とはいえ、禄がなくなっては生きる糧をなくしてしまうからな」

そういってから右京之介は弥太に男の口の中に藁を入れて口をきつく縛るように命じた。復讐心に燃える弥太は浪人の肩に足を置き、歯を食いしばって侍の口を縛った。猿ぐつわをかまされた男の眼に恐怖の色が浮き上がった。目玉に血が滲み出している。

「喋ることはない。ただし、おぬしのふぐりにチト尋ねたいことがある」

右京之介の眼もとがやんわりと紅くなり、ひどくやさしげな表情になった。これはやばいとさすがの弥太も震え上がった。右京之介の手元が軽く動くと瞬時に抜かれた脇差しが浪人の下帯を斬った。

「縮まっておるな」

脇差しの切っ先が浪人のふぐりを突いた。墓石の下から洩れたような凄惨な悲鳴が浪人の口の端から洩れた。血の滲み出た目玉が本物の血で溢れかえった。そう見るやいなや、トタッと情けない音をたてて浪人は卒倒した。

「吉村と佐々木はこやつを杭に縛り付けてそこいらの野っ原に放り出しておけ」

「し、しかし、このあたりはときどき高潮が来て海水に埋まってしまいますが」

弥次郎はかしこまってようやくそれだけいった。御家人になる気はないかと若様から

聞かれたことがまだ胸に引っかかっている。そんなことが実際に可能なのだろうか。腹を切った元亀山藩江戸家老の次男坊が幕府に仕えることができるとは思えなかった。

「高潮か、そうか、まだ埋め立てがすんでいないか。まあいい。溺れる前に女が助けに来るだろう」

「女ですか」

修治はまだ若様がなにをしようとしているのか皆目見当がつかなかった。本職は助太刀業のはずだが、こんな浪人を相手にして商売が成立するとは思えなかった。

「どこの女ですか」

「こいつが助けたというどこぞで屋敷奉公をしているお女中だよ。今度はその女が夫を助けに現れる」

「夫？　夫だってどうしてご存じなんで」

「知らんさ。だが、そうすると辻褄が合う。おい、色男、起きろ」

そういって若様は抜いたままの脇差しで浪人の脇の下を掻き回した。ぎょっとして飛び起きた浪人はあたりを見回し、笑っている若様がいるのを間近で見てまた気絶しそうになった。

「まて、寝込むな。どうだ、気絶はしていても聞こえていたはずだ。それとも先祖の墓に入ってみるか」

浪人は尖った顎を下に向けると恨めしげな目つきで右京之介を見上げた。そうか、まだ死にたくはないかと右京之介は呟いた。

「いずれお前の女房が助けに来る。そこでおまえは三行半をいい渡すのだ。それともお前は女の婿に入ったのか」

浪人は眼を剝き出して若様に向かって頷いた。馬鹿に素直な様子が修治には気になった。

「おい、吉村、おぬしはこいつの代わりに女の婿になってみろ」

「婿？　祝言をあげるということですか」

「なに、イヤなら養子でもよい。要するにこいつから御家人株を買って入れ替わればいいだけだ。そうすれば浪人ともおサラバできる。そうさな、この顔なら六十両もあれば御家人株は買えるだろう」

浪人は必死で首を横に振っている。

「それでは不満足か。では高潮に溺れ死にさせてやろう」

そういい棄てて若様が小屋を出ていこうとすると浪人は脛毛に泥のついた汚い足を精一杯伸ばして踵を土間に叩きつけた。もう片方の足の脛から流れ出ていた血はいつのまにか固まっている。

「なんだ、もう少しほしいのか。では八十両やろう。それで放免してやる。どうだ」

縄で口を縛られた浪人は泥にまみれた顔に涙を流した。喜んでいるのである。

「ところで若様」

と弥太が芋虫のような顔を斜めに曲げて右京之介を見上げた。

「いってえ何が原因でこんなおかしなことが起こったんで。そもそもこいつがなんでてめえの嫁さんを追いかけていたんですかい？」

「おれに分かるわけないだろう。昨夜初めて見かけた連中なんだからな」

「ですが、こいつはあの髭のお侍を斬り殺してしまったんですぜ」

「悪いやつだな」

右京之介はただ感心したように頷いている。

それと若様、と口を開いたのは修治である。

「こいつらの他にもうひとり最後に襲ってきた奴がいるといっておりましたが、それはいったい誰なんですかい？」

「銭になるんですかい？」

とついでに聞いたのは弥太である。右京之介はただ薄ら笑いを浮かべただけである。

「そいつはこれから調べる」

「そんなことしなくったって、今こいつをここで拷問にかけて吐かせてしまえばいいんじゃないすか」

あたり前だが弥太はまだ浪人に怨念を抱いている。

「こいつの拷問は勝手にやれ。おれにはもっと面白いことが待っている」

右京之介の顔にはまだ奇妙な笑いが残っている。最後に姿を現した黒装束の者を捕らえて監禁した右京之介だけが、どこかの旗本屋敷で変事が起こりつつあることを嗅ぎつけていた。危険な兆候に対して、何か面白いことに遭遇したようだとほくそ笑んでいたのである。

第二章　吉原、居続け侍

一

吉原の大門口は鐘が四ツ（午後十時）をついたら閉じることになっている。その後は傍らのくぐり戸から入れるが面番所の役人に怪しまれるのも面倒なので右京之介は五ツ半（午後九時）に中に入った。もっとも吉原は外の習慣と違って実際には四ツになっても番太郎は拍子木を打たない。打つのは九ツ（午前零時）になってからである。それを「木の四ツ」といい、奥の水道尻までいって戻ってくるとき打つ拍子木を「引け四ツ」といった。見世の方では時間を延ばして客をなるべく長く押し留めたいのである。吉原では大見世、中見世、そして小見世の順に妓楼が格付けされている。

この時刻でも仲之町にはまだ灯がともっていて、両側に並んだ引手茶屋では青竹を割らずに編んだ簾を入り口にかけているが、中からは酒に酔った男どもの笑い声や三味線の音が通りまで響いてくる。見世の前にともっている行灯は誰彼行灯と呼ばれていて通りすぎる客の顔を赤銅色に照らし出している。

いつもは暮れ六ツ（午後六時）を合図に上客をあてにする花魁たちが出張ってきて、馴染みの引手茶屋で待ちかまえていて客を迎えるのだが、この時刻になると人気の花魁の姿はもう見えない。揚屋があった宝暦（一七五一～六四）の頃までは、花魁道中などとしゃれこんで一族を連れて馴染みを迎えにいったものだったが、そんな見栄を張る客も紀伊国屋文左衛門が死ぬとぱったり途絶えてしまい、今では散茶と呼ばれる遊女が最高級の花魁扱いにされている。

散茶も、呼出、昼三、付回の三階級に分かれているが、右京之介は花魁遊びでももっぱら大見世より一段格下の中見世で三味線弾きを呼び新造相手に酒を呑んでいる。その方が性に合っているのである。それに引手茶屋でも井筒、近江屋、駿河屋などの俗に「七軒」と呼ばれる表通りの茶屋で呼出を待つとなると、花魁の他に振袖新造やら禿やらやたらお喋りな幇間（たいこもち）やら果てには書家から歌人と称する取り巻きまでついてくるのでややこしくて仕方ない。

一年ほど前、香具師を陰で束ねている堀留屋甚五郎という俳句好きの老人に、丸屋という大見世に連れて行かれたことがあるが、茶屋にまでのこのことついてきた俳諧師が「ほそぼそと灯はつれなくも秋の里」と詠み、その芭蕉を真似たまがい物の句を幇間や花魁付き添いの新造どもが褒めそやす様子にあきれて早々に退散してきた。

今も「ます屋」の二階では、呼び出した花魁一行に酒肴をねだられて悦に入っている

成仏前の客が宴を催している様子が窺える。

仲之町の北側の一角は江戸町一丁目といわれていて、通りの向かい側が江戸町二丁目となっている。ここらには中見世の中でも高級な妓楼がずらりと並んでいる。吉原には二百軒ほどの妓楼があるが丸屋、松美屋、花屋など大見世と呼ばれるのは八軒ほどで江戸町一、二丁目にかたまっている。これらは惣まがきの造りで見世先が格子造りになっていて、土間から見世の内側との仕切も細格子のまがきが入れられている。

これが中見世となると土間で仕切られたまがきが半分ほど開けられていて、中にいる遊女の様子が覗けるようになっている。格式は大見世より落ちるが、それでも半纏着と呼ばれる半纏を着た日当稼ぎの職人は見世に上がることはできない。おまえらごときが上がれるところではない、親方になったら帰っておいでというわけである。だから職人は外から格子を通して遊女を覗き見するのがせめてもの慰みで、うっかり土間に足を踏み入れようものなら妓夫からたたき出される。

まだ酔客で賑わっている江戸町を抜けて揚屋町と角町の辻を急ぎ足で通りすぎると右京之介の顔を見知っている妓夫が「旦那、紫さんがずっと旦那を待ってますぜ」と声をかけてきた。右京之介は頭巾などという無粋なものは被らない上に頭ひとつ飛び出ているので大勢の中でも目立つのである。吉原に頭巾を被って入るのは大名や旗本ばかりではない。ここには盲人もくれば僧侶もくる。小刀を差して頭巾をしているのが僧侶

で、明暦の頃とは違って、どんな大身の大名でも本来は廓には槍や長刀は持ち込めないから「僧はさし武士は無腰のおもしろさ」などという川柳が生まれる。

右京之介から心付けをもらえるとあってさっそく妓夫は両手を擦って腰を下げてきた。右京之介は手の中に入れて置いた小粒を二個、妓夫の懐に放り投げると、またな、とだけいって京町に入った。右京之介にとっても妓楼の妓夫は大切な情報源なのである。

ここの四ツ辻には昼間は市場が出て吉原に住む一万人の住民の腹を満たしているのだが、この時刻になると開けている店も少ない。せいぜいが売れ残りを整理している八百屋と魚屋くらいである。小腹が減った客が利用するうどん屋も大門が開いている間は店を開けているが、妓楼から出られない遊女が客に蕎麦をねだることもあるので屋台蕎麦も辻の隅でまだ控えている。この時刻を見計らって買いに来る河岸暮らしの貧乏人は通常の半値以下で魚が手に入るので重宝しているのである。

右京之介は辻を南側に曲がって京町二丁目の木戸をくぐった。ここまでくるのにすでに四半時（三十分）は要している。

吉原は四方に堀を巡らせた曲輪造りであるが、その広さは二万余坪もあって大門から仲之町を突き当たりの天神河岸まで歩くだけで結構疲れるのである。なかは駕籠に乗っては入れないから、好き者の爺さんなどは杖をつきお付きに支えられながらよたよた歩

いてやってくる。死ぬ前にあの花魁をもう一度ねぶってやりたいと根性を入れているちりめん問屋のご隠居もいる。

右京之介が左折した京町二丁目は新町ともいわれていて、吉原の南端に開かれた町だ。めざす「松葉屋」は一番奥まったところにつくられている。

同じ名の大見世が江戸町一丁目にあるが、右京之介が入った京町の松葉屋は一段格下の中見世で、江戸町の妓楼とは楼主が違う。元々は角町にあったそうでその当時は半蔵松葉といわれていた。今の楼主は勘蔵と呼ばれている。小太りの蹴鞠にしたら丁度よい顔形をしている。

妓夫が「旦那、お帰りなさいまし」と大声で張りあげるのを聞きつけて、どこからともなく幇間が手揉みして現れた。いい歳をして頬にえくぼをつくっているのがいかにも怪しげである。

「二階にいる客をしばらく預けておく。余計な詮索はしないようにな」

ここでは、得体の知れない浪人として通っているので、右京之介も幇間に負けず、怪しげな態度でいる。

右京之介は三両入れてある財布を幇間に預けて土間に入った。まだ客がつかずに長煙管を手にお茶をひいている張見世の女を横目で見て、暇をつぶしている新造や禿がくつろいでいる広間を通って妓主の内所に入った。炭をおこした火鉢を置いて、情婦を横

にはべらせ、燗酒を呑みながら帳簿に目を落としていた勘蔵は右京之介が気楽そうに入ってくるのを見てさすがにギョッとした。部屋は八畳ほどの広さで神棚の横の刀掛けには二本の刀がかけられている。褞袍を着て片膝を立てていた勘蔵は「だ、旦那あ、ここに来ちゃ困りますぜ」といって丸顔の中央に皺を寄せた。

「この刀は、勘定が払えない浅葱裏が会所に置いていったものだな。脅し取ったのか」

「旦那、人聞きの悪いことをいわないで下せえよ」

右京之介はうろたえる勘蔵の後ろに置かれた刀掛けから薄っぺらい刀を取って抜き払った。勘蔵の前に置いてあった燭台に乗った蠟燭の頭が飛んだ。わっと勘蔵は壁に背中をぶつけた。壁にかけてあった遊女の名を書いた名札が勘蔵の頭にぱらぱらと落ちた。

勘蔵は色を失った。抜き身を下げてぬっと佇んでいる侍は、男前の上、身だしなみもいいし物腰も遊女屋の楼主に対して恐ろしく丁寧なのだが、むしろそこが不気味であった。たとえ浪人であろうと、二本差しを下げているからには、町人に対して横柄な態度をとる方が勘蔵としては落ちつくのである。

目の前でのっそりと突っ立っている長身の侍にはどこか大身の旗本の三男坊ではないかと思わせる優雅さもあり、懐も豊かそうなのであるが、この侍にはどこか市井無頼の徒のような荒んだところがあるようでそれが勘蔵には不気味なのである。すでに一年余

り接しているというのに、まだその正体が摑めずにいる。

「女将さん、驚かせて悪かった。ちょっと刀の切れ味を試してみたかったのだ」

若侍はほっそりとした頬に軽く笑みを浮かべてお豊に声をかけた。「はい」と返事をしたものの、さっきは叫び声をあげて体を引いた情婦は、まだ尻を天井に突き出して顔を畳に伏せて震えている。

「ご主人、私の客を番所に突き出したりしなかっただろうな」

若侍はいきなり勘蔵の息の届くところまで顔を寄せてきた。

「め、滅相もない」

「女将さん、あんたも余計なことを喋ったらいけませんよ。その猫に向かって念仏をあげたくはないだろう」

これだ、これが不気味さの原因なのだ、と勘蔵は思った。猫は我関せずといった様子で足を舐めているが、お豊はますます恐ろしくなったようで唇を震わせてようやく頷いた。

若侍は懐紙に二分判を四枚を包んで、背中を向けて震えているお豊の袖口に差し入れた。帰間に預けた財布の他に吉原ではもうふたつ予備の財布を持っている。袖に差し込まれた銭が合わせて二両あると知ってお豊は急に顔を緩めて口元を歪ませた。こいつもたいしたアマだと勘蔵はあらためて情婦の欲深さに感心した。大工の一日の賃金が銀三

匁。二十日仕事にありつければ銀六十匁。すなわち一両だ。二分判金四枚となると、雨降りで休むこともある大工にとってはふた月分の給金になる。お豊はその価値を知っているからお歯黒を剝き出してお化けのような薄気味の悪いお愛想笑いを浮かべたのだ。

「番所には絶対に届けたりしません。し、しかし旦那、大門が閉まったあとに黒装束の人を運び込まれたこっちは往生しましたぜ。いわれた通り、今日は喜助にずっと見張らせていやしたが、いつ役人に見つかるかとひやひやもんでしたぜ。なんせ、ここには隠密廻だけでなくて火盗改めも目を光らせていやすからね」

「気にしないでくれ」

全く気にもとめていない様子で若侍はあっさりといった。

「気にしますよ。いったいあの男は何をやらかしたんで、まさか人を殺したんじゃないでしょうね」

勘蔵の丸顔が鍼で突かれたようにしぼんだ。

「斬りかかってきたのはあいつの方だ。それにあいつは女だ」

「ええっ、女ぁ」

それは全身黒装束の曲者に当て身を加えたときに分かったことだった。抱き起こしたとき、ぐにゃりと肩に巻き付いてきた身体は帯のように頼りなかった。乳房は小ぶりだったが布の上からでも無垢な柔らかさが感じられた。右京之介はあらためて楼主をたしなめた。

「騒がないように。まず部屋に遣り手を寄越してくれ。喜助では駄目だ。湯文字と長襦袢、それに無地の小袖を三枚持ってこさせてくれ」

そういって右京之介は財布ごと勘蔵に預けた。昨夜も四日分の部屋代として二両渡しておいたが、今夜勘蔵に預けた財布には五両入れてある。中見世の遊女はひと晩二分と相場が決まっているが、勘蔵の方では女を働かせることなく合わせて十四日分の揚げ代が入ることになる。銭はかかるが他のところに預けておくとなると、色々と面倒なことが起きるだろう、と右京之介は最初に思った。それに吉原では女がいったん入ると出ることがなかなかむずかしい。廓に置いておけばそれだけで女に逃げ場がなく、役人を始め、見張りがどこにでもいることになる。

二階に上がると喜助が廊下にこぼれた汁や膳から落ちた残り物を拭いていた。酒や小鉢を載せた膳を広間にいる客に運ぶ下女がせわしそうに立ち働いている。

男の声がするのは衝立に仕切られた部屋で遊女と睦言をいっているまだ馴染みになっていない客だ。一分払って部屋持ちの遊女を買えば、人目を気にすることなく湯文字を解かせることができる。右京之介は妓楼で酒を呑むときはその上の座敷持ちの花魁を選ぶのだが、それは花魁が目当てだからではない。

右京之介を見て喜助が雑巾を投げ出して頭を下げた。
「いわれた通り飯だけ運んであとは放ったらかしにしておりやす」
喜助は右京之介の斜め後ろを歩きながら座敷まで案内した。
「何か変わったことがあったか」
「へえ、今朝になって気がついてからは部屋のあちこちを探っておりやしたようですが、窓がひとつあるだけで、表にはあっしが見張っておりやしたからどうやら観念した模様で、静かなもんです。あっしが飯を運んだときは黒装束のまま暗い中で背中を向けておりやした。あいつは一体何者なんですか、盗賊ですか」
「私にも分からん。これから調べる。世話をかけたな」
懐紙に包んだ三十匁分の銀の小粒を渡すと二十歳を過ぎた肩の細い喜助は米搗きバッタのように背中を丸めて礼をいった。
「喜助」といっても男の名前ではなく遊郭で二階の掃除から布団敷き、遊女と客の仲立ちまでなんでも廻す若い衆のことで、廓ではどこの妓楼でも喜助と呼んでいる。そういう者に二分もの大金を心付けとして渡す客など年にひとりかふたりなので、喜助としても一生懸命世話を焼こうとするのである。
「行灯に灯をいれてくれ」
右京之介がそういうと、喜助は控えの間と座敷の中央までするすると這うように進んで蠟燭に灯をともした。

次に暗い座敷の隅の行灯に油を差そうとしたとき、大きなコウモリのような影が舞い降りてきて喜助の首筋を手刀で打った。ケ、と小さく呻いて喜助は前屈みになった。
黒装束が喜助の背後に蹲っている。振り仰いだ頭巾から銀色の目が光った。その影が揺れたときにはもう右京之介の身体は斜めに空を飛んでいて、黒装束の腹を軽く打った。女は無言で倒れた。昨夜は、女の正体がすぐに露見してはまずいと思って黒装束を脱がさずに、そのままにして引け過ぎに遊郭を出てきたのだが、その気遣いを賊は仇で返してきたようだ。
昨夜起こったことには、まだ疑問なことがらがいくつかあった。いや、起こったことの全てが疑問だった。
弥太に斬りかかろうとした三角顎の侍の脛を切っ先で斬り払ったのだが、そのとき右京之介に隙が生じたらしい。降り出した雨が川面を叩く音も耳に入ってきた。腹を斬られた髭面の浪人を検分しようと暗がりで上体を折ったとき、背後から殺気が襲ってきた。
闇の中で小魚の腹が反転したような閃きが走った。右京之介は後ろを振り返らずに、上体を斜めに傾がせ鞘を飛ばした。振り返るだけの刹那をおしんだのである。
鞘は黒装束に身を包んだ賊の肩口を叩き、賊は土手を転げ落ちた。右京之介はゆっく

りと雨でしめりだした土手を下り、肩に手を置いて呻いている賊のみぞおちを拳で突いた。その身体が意外に華奢なことに気づいた。

「やはり女だったか」

そう確信したのは賊を抱きかかえたときである。修治とふたりの居候が斬り合った浪人どもを介抱している隙に、右京之介は辻駕籠を拾ってまず大川まで出た。そこから猪牙舟に賊を乗せて舟に置いてあった布団を被せ、大川橋に向かって川をさかのぼった。

そのときまで右京之介は賊の女を山谷堀口の待乳山の麓にある船宿「神子屋」に連れて行き事情が分かるまで監禁するつもりでいた。「神子屋」は中宿でここへは吉原へ乗り込む前に粋筋の大店の主人が一杯やったり、預けて置いた着物に着替えたりする宿になっている。だが、「神子屋」が右京之介の援助で出した船宿だとはいえ、女将のおふさは右京之介の稼業をはっきりと知らない。姉のお仙が世話になっていた浪人だとしか思っていない。いきなり黒装束を連れ込んだらたとえ賊が女であろうが扱いに困るだろう。それに女は忍びではないにしても相当小太刀を鍛錬していたふしがある。油断がならない者であることに変わりはない。

そこでいっそのこと吉原に放り込んでしまえばいいと右京之介は思いついた。

かなり乱暴な考えだったが、あそこなら女の出入りには厳しい。会所には名主や地主の代理の者が四人ひと組で昼夜三交代制で詰めている。仲之町を挟んで会所の向かいにある番所は町奉行の直属で隠密廻の与力がふたりの同心を従えて見張っている。一度廓に入った女が女切手を持たずに出ることなどまず不可能だった。それに火付け盗賊改めの連中もときおりうろついている。吉原は犯罪人が逃げ込みやすい場所でもある。

それで大川が浅草川と名前を変える駒形堂を過ぎたところで、船頭に大川橋を渡った千住街道が始まるあたりで岸につけるようにいった。山谷堀から入るとなると人目につきやすい。

千住街道は浅草川河岸から北に向かって伸びている。ここで四ツ駕籠に乗り換えてまだ小雨が降っている暗い日本堤を吉原まで向かった。大門が見えると「くの字」に曲がった衣紋坂を下り大門に立った。ここで覆面をしている女を駕籠から下ろすと、その頭にさらに黒い頭巾を被せた。それから駕籠屋に手伝わせて女を左右から抱きかかえて大門をくぐった。たっぷりと払った心付けが利いて駕籠かきはうまく演技して番所を通り抜けて松葉屋まで運んでくれたのである。

蠟燭で明るくなった座敷に黒装束をまとった女が気絶している。まるで畳に溶け込んだようにぐったりとしている。女に背後から首を打たれた喜助もまだ気絶したままのびている。

さて、と右京之介は呟いた。柔術を使う技といい素早い動きといい相当熟達した女のようだった。

まず覆面を剝ぎ取った。細面の白い顔が現れた。鼻筋の通った美しい娘だった。老獪な女が現れると想像していた右京之介は女の形よく整った口元を見て一瞬息を呑んだ。それまでにほとんど感じたことのない気品が女には漂っていた。この女はくノ一などではないと思った。そのとき表から嗄れた女の声が聞こえた。

二

「長襦袢と小袖をお持ちしました」

おとないを入れたのは見世の遣り手である。入れ、と右京之介はいいながら、女を抱き起こして括を入れた。受け口気味の小さな唇から微かな呻き声が洩れた。目を開くまで少し間があった。自分が見知らぬ男の腕の中にいると知ったとき、女は片手で胸をかきあわせてから、もう片方の腕で男の顎を鋭く打ってきた。

肘が頬を掠めた。その肘打ちをはずして右京之介は女の手首を捩った。それだけで女の身体は固まって身動きができなくなった。

「何者じゃ」

「ご挨拶だな。おぬしに昨夜斬り掛けられた者だ」

「貴様！　無礼な！」

女の目に蠟燭の火が映り、狐目のように鋭く光った。

「少しの間おとなしくしていなさい。それに小用がしたいであろう、いまさせてやる」

そう女の耳元で囁いて、首の付け根を親指の爪で弾いた。女の身体の芯に「響き」を入れたのである。「響き」とは合気武術の技のひとつである。かけられた者は神経が弛緩し、少しの間気持ちが空中に飛んで溶け込んでしまう。いってみれば何事も指図された通り素直に従うようになる。どういうわけか、右京之介には生まれつきそういう不思議な術を使える霊力めいたものが身に備わっていた。それだけで固まっていた女の身体の肉が柔らかくなった。

暗い中で行われたことが遣り手にはよく見えなかったのだろう。若侍とその腕の中でぐったりしている黒装束の女を目を丸くして見つめている。

「長襦袢と小袖を一枚くれ」

はい、と応えた遣り手が膝をすすめてくる間に、右京之介は女の身体から黒装束をするりと剝ぎ取って裸にした。白い肌が蠟燭の炎に浮かび上がってたおやかに揺らいだ。お椀の蓋を伏せたような乳房には、まだ男に触れられたことのない桜の蕾のような愛らしい乳首がポツンと咲いていた。薄い下腹部には意外に艶のある恥毛が瑞々しく恥丘に生え揃っている。

女はじっとして右京之介にされるがままになっている。目を開いてはいるが意識はどこかにいってしまっている。右京之介は長襦袢の上に小袖を一枚、女に着せた。

「まずこの女を手水場に連れて行ってくれ。昨日から小用をしていないはずだ。それが済んだら風呂に入れて洗ってやれ。多分、内風呂しか知らないだろうから他の者と一緒に入るとなると驚くだろうが、そのヘンはよしなに頼む」

そういって銀の小粒を遣り手に渡した。わかりました、と遣り手はおそれいって手を差し出した。遣り手婆ぁなどとみなからいわれているが女はまだ三十歳を出たばかりで数年前まで見世に出ていた遊女だろう。気だてと働きのよさを見込まれて客をとれなくなってからもここに居させてもらっているのだろうが、小見世ではまだ充分に客をとれる女だった。松葉屋の隣はそういう小見世が入った長屋が続いているが、そこではひと晩男の相手をしても二朱しかもらえない。客のつかないときは一朱で受けることもある。それをよしとしない年増は遣り手となって中見世で働くのである。そういう仕事にありつける女はむしろ幸運だった。

遣り手は、女を廊下に連れ出した。手水場に隣接した風呂は一階にある。右京之介はまだだらしなく伸びている喜助を叩いて起こした。首を亀のように直角に持ち上げた喜助はまだ何が起きたのか分からずにいるようで、小さい目玉をせわしく左右に動かした。

「酒を頼む。肴も見繕ってくれ」

そう注文するとまだ正気に戻っていない喜助はふらふらしながら廊下に出ていった。

右京之介は格子窓から夜空を透かし見た。雨は上がっているが空には一面厚い雲が垂れ込めているようで、畑の向こうの明かりも暗い夜の下に蹲っている。

これが江戸といわれる所でのオレの生活なのか、と思っていた。

「平成」といわれた時代の記憶はほとんど残っていないはずなのに、ひとりでいるときおり遥か彼方の碧空から、何か猥雑でせわしげな歓声が聞こえてくることがある。それにつれて空中に聳える巨大な墓石のようなものが光のほとばしった城壁と隣り合わせに浮かび上がってくる。よく見るとその広大な町の陰にも路地裏があり、それは江戸に雨が降ったときに出現する狭い泥道によく似た通りなのであるが、妙なことにそこに腹掛けではない着物を着た子供たちが、追いかけっこをする情景も微かに滲んで見えてくるのである。

あのような町でオレはいつ、何をして暮らしていたのだろう。

そう思うと景色や他の子供たちが遊ぶ姿が瞼に陽炎に包まれて浮かび上がってくる。だが自分らしい者が幻影の中に現れることは決してないのである。

「お武家様、あのお客様はあたしの手に負えません」

襖を開けて遣り手がひとりで入ってきて畳に膝をついた。

「ションベンはしたのか」

「ション……しました。なんとかやらせました。最初はびっくりして目をひきつらせてあたしに襲いかかってきましたが、なんとかやらせました」

「びっくりするのは無理もないな。遊女屋の便所は屋敷とは違うからな」

覗きたくて覗いたのではなかったが、半年前のまだ桜が咲く前の頃、中見世の楼主の居室を冷やかしたあとで、座敷を持てない遊女たちの居間に顔を出したときのことだった。廊下を挟んだ向かい側にあった便所の戸が開き、さらに襖代わりの戸板の向こうで、下駄を履いた遊女が長襦袢の尻をまくって放尿している場面が目に飛び込んできた。後ろ向きの白い尻から勢いよく小便がほとばしり出ていた。

床板には傾斜がつけられていて、左右の床の谷間には二寸（約六センチ）ほどの溝が走っていた。遊女はその溝を跨いでしゃがみ込んでいて、放尿された小用は溝を流れていった。恐らく汚水と一緒に外に流されるのだろう。女の頭の向こうには火の用心の壁提灯がともされ、櫛やら手拭いやらが横に渡された竹に掛けられていた。傍らには湯が湯気をたてていて、足下には水の入った桶が置かれていた。どうやら水をぬるま湯にして、小用の後、遊女たちはそのぬるま湯を陰部にかけて洗うものらしい。陰部を拭いた紙は屑籠に棄てられる。大便所も続いているようだが、入り口は別にしつらえられていた。水の入った樽が用意されていたから、そこでも女たちは柄杓に水を汲んで用便後の清掃をするらしい。旗本でも千石以上の武家の姫様にはお付きの下女がいて、着物を脱がすことから用便後の始末まで全て下女が行う。姫様は自分で自分の尻を拭いたことがないのである。

お香をたいているので町屋の便所のようなひどい臭いはしないが、それでも尻は下女が紙で拭くし、便壺に大便を片付けもするので糞尿の臭いが屋敷の裏にいつも漂うことになる。ことに梅雨の季節は便壺から汚水が溢れ出したりするので余計にひどい状態になる。それらは近在の百姓たちがやってきて処理するのである。水で何もかも流してしまう遊女屋の便所の方がずっと清潔だった。

中見世の湯殿は便所と板壁を隔てた隣にあったが戸口は別につけられていた。湯殿は廊下からでも覗くことが出来た。床に尻をつけて臍の廻りを洗っているものもいれば、佇んで首筋を拭っている女もいる。湯に浸かった女たちは客の噂話と稼ぎの少ないことをこぼしていた。町屋の銭湯では馴染みの女風呂の風景だったが、少し違っていたのは女たちが随分念入りに秘部を手拭いで洗っていたことと、湯殿には銭湯にあるような石榴口がなかったことだ。銭湯には外気に触れて湯がさめないように、石榴口が設けてあるのだが、遊女屋の風呂場にはそんなものはなく、ひと目で中の様子が見渡せるようになっていた。十数名の女たちが恥毛も露に素っ裸で湯と戯れる姿は壮観だった。居続

けた右京之介は翌日の昼になって、朝寝から起き出した遊女たちと一緒に湯舟につかったこともある。

「それで湯には入れたのか」

「小袖を脱ごうとしないんですよ。なんですか、急に目が覚めたみたいになってあたしに殴りかかるんですよ。まだ湯にはお茶を引いた女が三人ばかしいただけなんですが、それでもあの女は他の女たちを見て暴れ出しましてね、わたしを無礼者呼ばわりして。ほれ、ここんとこ、ここをぶったんですよ」

遣り手は首筋を伸ばしてみせた。

「それであの女はどうしている」

「置いてきました。でも大丈夫ですよ。裸のまま外に出られるアマじゃなさそうですから、男衆に驚いてじきここに戻ってきますよ。この部屋の場所が分かればの話ですがね。ねえ旦那、あの女は一体何者なんですか」

「聞けばお前の首が飛ぶぞ」

ヒエーッと掠れ声を出して遣り手はその場に腰を落とした。両膝を割って股を開いているので遣り手の女陰が目に入った。

「おまえのまたぐらは随分やり込んでいるな。焦げておるぞ。『朔日丸（ついたちがん）』で松茸の毒を消し』と申すからな。男を絞り尽くして相当溜め込んだようだな」

遣り手はあわてて両膝を閉じた。

「そんな、ご冗談を。これでも遣り手になってからは男絶ちをしているんですから」

妓楼で働く下男下女が用度部屋で情事に励んでいることを右京之介は知っている。

「まあよい。あ、それからな、楼主にも申し伝えて置いたことだが、もしあの女のことを外で洩らしたりしたら命がなくなるよ。覚えておいた方がいいぞ」

「は、はい、覚えておきます」

遣り手の声が震えた。本心から怖がっているようだった。先程粒銀を遣り手にあげておいたが改めて右京之介は二朱金を二枚遣り手に渡した。

「迷子になったら面倒だ。騒ぎになる前にあいつを湯殿から連れ戻してきてくれ」

頷（うなず）いた遣り手は掌にある二枚の二朱金をしっかりと握りしめて頷き、あたふたと立ち上がって部屋を出ていった。喜助が酒を運んできた。右京之介は燗酒をひとりで呑みながら、さあて、と呟いた。次に喜助が肴を膳に運んできたとき、ちょっと頼みがあると呼び止めた。へえ、と返事をした喜助はもう畳に膝を揃えて座って両手を股の間に挟んでいる。尻を貸せといわれたら喜んでお貸し申します、といった降参の体（てい）でいる。

「小網町（こあみちょう）の『鎧の渡し』の船着き場の前に『小川屋』という船宿がある。そこの主人の修治にこういう侍が客に来ていると伝えてくれ」

「こういう侍でございますか。こう……どういう?」
「見たとおりいえば分かる。それでな、二日ほどしたら顔を出すようにいってくれ。直接修治に会って伝えるんだぞ」
「修治さんですね。分かりやした」
「これからすぐに行ってくれ。オレはしばらくここに逗留する。さて、風呂にでも入ってくるか」
右京之介が伸びをすると、喜助は米搗きバッタのようにピョコンと起き上がって勢いよく部屋を飛び出していった。まだ一分金の心付けが利いているのである。

三

丸二日間、女は小袖を三枚、長襦袢の上に着たまま窓の障子を閉めきり、行灯に火もいれずに奥の八畳の部屋にこもっていた。右京之介は何も訊かずに隣の部屋の出格子に腰を下ろし、格子窓の外を眺め朝日の出る頃から湯豆腐をすくい、ほど良く温まった燗酒を呑んで過ごした。大門が開くと、廓の近くから来た掃除人が手際よく塵を掃き集めて帰っていく。入れ替わりに大門から荷駄を引いた者たちが入ってくる。両脇に樽を積んだ荷駄が何頭もどかどかと仲之町を走っていく。樽が糞尿で一杯になるとまたどしどしと大門から出ていく。糞尿の臭いがまだ通りを漂う中を頭巾を被った客がひっそりと外に出ていく。そこではもう客待ちの駕籠が待っている。

酒に飽きるとひと寝入りする。昼前に起き廓内の銭湯にいって、同じようにようやく目覚めた遊女たちと一緒に風呂に入る。入り口も脱衣場も男女に分かれているが中に入れば混浴になる。ここの銭湯には町の石榴口と同じように、浴槽と洗い場の間に板が下げられていて、湯に入る者はみな腰を屈めて入る。男は右京之介ひとりだけなので女護ガ島に行った気分になる。皆、妓楼に内風呂のない小見世の女たちだが、気だてがよい女は湯女に代わって背中を流してくれる。そういう遊女の小見世に行くのは面倒なので湯屋を出るときにそっと小銭を女に与える。二朱でも女にとっては一日分の稼ぎなので初めて見る着流しの侍に向かって手を合わせた。
銭湯を出ると大門を出て風呂上がりの晩秋の風を受けて、刈り入れの終えた畑を眺めながら日本堤を歩いた。一度だけ山谷堀近くの船宿「神子屋」に女将のおふさのご機嫌伺いで顔を出したが、向こうではご主人様の登場とあって下へも置かないもてなしだったので、右京之介の方で恐縮してすぐに戻ってきた。おふさは心から落胆した様子だった。しかしおふさは右京之介にとっては情婦ではなくやはり船宿の女主人にしか過ぎないのである。
日本堤を大川には向かわずに、反対側の下谷坂本まで三の輪から下谷金杉を通っていったこともある。上野の東叡山寛永寺の甍が見えるところで踵を返したのは、その由緒

ある寺に大金を預けてあるからである。そこでは右京之介は大口の金主として扱われる。しかし精進料理でもてなしを受けるのはそれほど歓迎すべきことではなかった。東叡山からは毎年、年末になるとお礼として五百両が右京之介に届けられる。東叡山から諸藩の大名に貸し付けられる金子の内、一万両は右京之介が金主なのである。金利は五分から一割七分だと聞いている。東叡山の僧侶は幕府公認でその仲立ちをして仲介料を得ているのである。

吉原に戻ると引手茶屋に上がり、まだ明るい内から二階で鮓を喰いながら新造の酌で酒を呑む。姉女郎になる呼出や昼三などの花魁には取り巻きがついてくるのが常だし、花魁は六ツ（午後六時）の鐘を合図に引手茶屋に仰々しく出張ってくるので、むしろ廓では最下級に置かれている客馴れしていない十七、八歳の新造相手に呑む方が気楽で右京之介の性に合っている。新造には花魁に与えられている座敷がないのである。そのせいか酌をするだけの相手に茶屋に呼び出された新造はどこかさみしそうだった。

明るい内に廓で見かける武士はほとんどが非番の田舎侍だ。昼見世は料金が安いからだが、遊女にしてみれば粋でない客はありがた迷惑で、一応妓楼から命じられて茶屋に顔を出すが、まるでやる気が見られない。横着な遊女はお国訛り丸出しの国侍に声をかけられてもそっぽを向いていたり、あからさまに「大きいのが二本いるよ」といって断ったりもする。田舎侍が「一本」を銭四文のことだと勘違いして波銭を二枚出したりすると、ケラケラと笑う。廓では「ひとつ」が銭四文のことで、一本などという言い方はしない。遊女が勝手に一本を一両だと決めて銭をもたない浅葱裏をおちょくっているのである。

三日目も右京之介は茶屋で四合ほど呑むと応分の心付けを渡して「松葉屋」に戻った。妓夫がまず飛んできて挨拶をするのもいつものことだ。右京之介は楼主の居室に顔を出し、「どうだ」と訊いた。勘蔵は揉み手をして愛想笑いを返してきた。

「旦那、二千両なんてとても無理ですよ。二百両なら喜んで出すお方はおりますよ」

「二千両だ」

「じゃあ、一度見世に出して見せてくだせーよ。顔も見せねーでいきなり二千両はないですよ」

「では、今夜拝ませてやる」

右京之介は勘蔵にも黒装束の女の素顔を見せていない。

二階の部屋に戻ると喜助がさっそく酒を運んできた。呑みながら耳を澄ますが隣の部屋からは衣擦れの音すら聞こえてこない。遣り手が何度も女に食事を勧めるが女はずっと膳に載った料理には手をつけずにいる。もっとも小さな蓋のついた汁と佃煮だけの飯では食べる気がおこらない。右京之介は女に声をかけようともしなかった。

修治がきたのはその夜の五ツ半（午後九時）を過ぎた頃だった。喜助を通さずに二階の部屋に上がってきて廊下から声をかけてきた。返事をすると職人風の出で立ちの修治が影のように入ってきた。出格子を背にして右京之介は蝶足の膳の上に置かれた焼き鮃を食っていた。畑を渡って秋にはすずし過ぎる風が吹き込んでくる。酒はぐい呑みでやっていた。どうだ、といってぐい呑みを差し出したが修治は軽く頭を振った。何か分かったかと右京之介は訊いた。

「どうも、お旗本のことは外から窺っているだけではまるで様子が分かりません。殺された浪人のことも定町廻では何も摑めなかったようです」

浪人が死体で見つかった場合は目付の仕事ではなく町奉行の配下が始末をつけることになる。九月は北町奉行所の番だがわずか六人の定町廻同心では手札を渡している岡っ引きを使っても何も探り出せるはずがない。一銭にもならない仕事には岡っ引きは本気にならないのである。

「例の三角顎の御家人から何か分かったか」

「へえ、六万坪の埋め立て地に杭にくくりつけて縛っておきましたら若様の見込み通り、やつの女房がこっそりと助けにきまして、こいつもふん縛って吉村様と佐々木様が責め立てたら見るに見かねた男の方がついに観念して吐きました。もっともその前に海水に浸かって溺れ死ぬ寸前ですっかり降参していたんですが。実は、その女房というのが例の逃げたお女中だったんです。そいつはお旗本の……」

「ちょっと待て」

右京之介は腕を伸ばして修治を制した。

「よう女隠密さん、あんたもこっちにきて聞いたらどうだ。あんたがどこの間者か今明かされるところだ。聞き耳を立てているのは分かっている」

右京之介は奥の部屋に向かって声をかけた。何のことかと修治は目を上げた。女隠密とは誰のことだと訝しんだのである。

静寂があった。二人の目が境になっている襖にあてられた。すると間をもたせるように襖が一寸（約三センチ）ほど開いた。次の刹那、襖は一気に開かれた。小袖を着た女が立っていた。修治は思わず、小さく驚きの声を洩らした。女は足の指先を使って、立ったまま襖を開いたのである。

「やあ、しばらく見ない内に随分さっぱりとした髪型になりましたね」

右京之介は女を見上げて白い歯を覗かせた。ここに運び込んだ女の黒頭巾を取ったとき、武家の娘が好んで結った高島田の髷はほどいてあり、身軽に身体を動かすことのできるかもめ髪に結い直してあったが、今行灯に照らされた女の髪はそれも梳いてしまって、結わずに流した髪を後頭部でまとめて、毛先を下げただけの野生味の溢れる髪型になっている。

「馬の尻尾髪にしましたか。そこで立っていないで、こちらにきて座りなさい」

女は右京之介をすさまじい目つきで睨みつけた。それから黙って襖を背にして片膝を立てて座った。白い脛が眩く輝いている。行灯の陰影がさらに奥に向かって揺れながら伸びていく。

「こいつは修治といってな、船宿の親爺だがその実体はわたしの密偵だ」

あっさりと身元を明かされてさすがに修治は落ち着きを失った。女はまっすぐに修治を見つめている。その壮絶な美しさに胃の縁に冷たい痛みが突き刺さってきた。若様がいっていた黒装束の曲者というのは、この女のことだったのかと修治は畏れ入った思いで女を見つめた。若様が秘密にしておくはずだと感じ入っていた。

「それで、逃げた女房はどこのどいつだったのだ」と若様が話の続きを促してきた。なぜだか修治はほっとした。

「へ、そのお女中というのは、四十俵三人扶持の御家人館野忠五郎の娘で芳という女だったんですが、家を継いだ兄の忠太が跡継ぎをもたないままついこの間急死したそうで、それで兄に代わって入り婿を迎えて相続したそうなんです。その入り婿が髭の浪人を斬り殺した例の三角顎の侍です。こいつは久兵衛というそうです。今の名は館野久兵衛。ただ、婿養子に入る前は何をしていたのか分かりません」

なるほど、と若様は呟いて女を眺めた。悠々と酒をぐびりと呑むと、それで、といった。

「その女中の死んだ兄の後家は、なぜ養子を迎えて相続させなかったのか、訊いてみたか」

「そこまでは頭が回りませんでした。なんせ、そっちの方はうといもので」

「まあ、後家にも色々なやつがいるからな。夫が死んだのをこれ幸いと別の男に乗り換えるという手もある。それで、その芳という女中はなぜ腰元の着物を着て夜の中を走っていたのだ」

「そのヘンがおかしいんですが、お芳は入り婿を迎える前は高取藩の藩主の弟で植村政直様の三女、竜子様の付き女中をしていたそうなんで。先日の夜はどうもお芳は元仕えていた竜子様を屋敷から逃げ出すための手引きをしていたらしいんです」

「やめた女中が元の主人を逃亡させたということか」

「お芳はそういっていやした」

「その竜子という我儘姫は、どうして黒装束に身を包んで屋敷から逃げ出したのかな」

「その理由がお芳にも分からないらしいんです。ただ、竜子様から屋敷に来るようにということづてが寄せられて、お伺いにいってみたら、突然、屋敷から出たいので協力してくれと命じられたそうなんです」

「しかし、なぜそこにお芳の夫が出てくるのだ」

「逃亡の際の用心棒代わりだといっていました。危惧した通り屋敷には日雇いの浪人が交代で見張っていまして、腰元姿になって逃げ出したお芳を姫だと見誤って追いかけたようなんです」

「姫が腰元に化けて逃げたと思ったのか」

「へえ、そこを反対にあの貧乏御家人に捕まってやられたということです」

「ゼンゼン面白くない話だな」

そういうと若様は両腕を上げて欠伸をした。それから目を拭って女を見た。女はまっすぐに壁を見つめている。

「あなたが竜子姫でしたか。いいでしょう、わたしがあなたをかくまってあげましょう。何を隠そう、わたしの商売は人助けなのです。ただし、礼金は弾んでもらわなくてはなりませんね。まず二千両を頂きます」

「若様、に、二千両ですか」

思わず修治は声を出した。いくらなんでもそれは法外な礼金ですぜという思いは胸の内に収めて、首を竦めた。「若様」と声に出していってしまったことを悔やんでいたのである。

竜子はジロリと若様を見つめた。その視線をかわして若様はぐい呑みを口に運んだ。蝶足の膳の上には仕出し屋から特別に注文した小アジの南蛮漬けも載せられている。ごく最近、堺から来た交易商が八百膳の料理人に造らせたことから人伝てに評判になったもので、修治もまだ口にしたことがない。「小川屋」の板前に試しに料理させたら、苦いばかりでとても飲み込めるシロモノではなかった。それを若様は箸でとってふむふむと小気味よい音をたてて食べている。こころなしか竜子の表情が硬くなった。

「私の父は二千両という大金など出しませぬ」

竜子が口を開いた。鈴の音のようなよく通る冷ややかなよい声だった。いい女は声にも品がこもっていると修治は思った。多分、これほどの女を目の前にするのは、十年振りくらいではないかと一瞬だが感慨にふけった。

「出せるでしょう。高取藩二万五千石の藩主の弟君となれば三千石の大身です。分家とはいえ多分実質となれば三千五百石はあるでしょう。そこら辺の貧乏大名より余程内情は豊かだ。本来小藩主の弟君では屋敷の他に別邸などもてないはずですが、植村要之助君、そうか今は政直殿になったのかな、あの方は愛宕下の本宅の他に深川材木町に別邸を構えておられる。中には手の込んだ造りの庭園もあれば数寄屋造りの離れもある。あなたはそこに住んでいるのでしょう。それに政直殿の兄は若年寄の駿河守家長だ。こちらもごっそり金を貯め込んでいるはずです」

えっといったのは修治である。幕臣でもない若様が植村家のことをそれだけ知っていることが意外だったのである。

「駿河守もいずれは老中の座につこうと狙っているはずだ。老中になればそれこそ幕閣では一手に権力を集中させることができる。出戻り老中の伊豆守はいつ逝っても不思議ではないですしね。いやはや長生きはするものです」

若様はそういってから器に入った小アジの南蛮漬けを竜子姫に差し出した。伊豆守といえば三年前に再任された松平信明のことで、幼少の頃よりその英邁ぶりは幕閣にも聞こえており、八歳の時には三河吉田七万石の領主になっていた。老中についたのは二十六歳の時で松平定信の提唱した寛政の改革を粛々と実践していた実直な幕臣である。その融通の利かない謹厳な性格は十一代将軍徳川家斉を嫌悪させた。老中に再任されたのは、そぞろ賄賂政治が復活しはじめた幕府を締め直すに必要な人材だからである。当然、田沼政治を懐かしむ幕閣からは、寛政の遺老などと煙たがれているが、本人は倫理を守り、贅沢を慎み、倹約を励行することこそ武士道でござるとまだまだ意気軒昂である。老人が右京之介を知れば、まさに言語同断と憤激するだろうが、右京之介はこの老人を案外好ましく思っている。

「食べてみなさい。あなたは二度と口にすることはないでしょう。これが堺の味です、腹が減っているでしょう、さあ、食べなさい」

「いらぬ」

と竜子が毅然といった。だが次第に黒目が隅に寄っていき、じっと器を見つめ出した。

「それはそうと、風呂に入ったらどうかなあ。あなたの身体は少し臭う」

器を引っ込めてぞんざいに言い放った。竜子の頬がみるみる紅潮した。愛らしいと修治は感動した。

大門を出ると、修治は暗い道を日本堤に向かって歩いた。懐には御家人株を買い取る代金として若様から預かった八十両が入っている。株といっても証文があるわけではないという。ただ、お芳の父は無役の小普請組であったから婿養子に入った久兵衛も月に二度ほど組頭のところへ挨拶に出向くだけの無駄飯食いで、今度の場合は久兵衛が身体を悪くしたためお勤めに支障があり退職すると組頭に届け、養子番代として吉村弥次郎を願い出ればよいだけの話なのだという。あまりのばかばかしさに聞いていた修治はいったい武士とは何なのだと疑問に思ったほどだった。

そんなことより、若様は特別なことはいわなかったが、修治は明日にでも愛宕下の植村政直の本宅に忍び込もうと考えていた。何が出てくるか分からないが、どうやら若様はまだ数日は吉原に腰を据えて成り行きを見るつもりでいるらしいので、外にいる修治が率先して動く必要があった。そういうことをするのもおよそ一年ぶりである。

それにしても……と修治はひとりごちた。

――二千両とは随分ふっかけたものだ、姫を誘拐犯からかくまったことにして、植村家から金を強請る計略だろうが、どうも若様らしくない伝法なやり方だ。

川から風が吹いてきて修治の首筋を舐めて通り過ぎた。鳥肌が立ち、覚えずくしゃみが出た。今夜は店に戻る前に弥太の屋台にでも顔を出して蕎麦を食っていこうと思っていた。修治は元掏摸だという弥太がなぜか憎めないのである。

――だが、若様の本心は強請りなどという程度の低いものだとは思えない。いったい何を考えているのだろう。今度ばかりは見当がつかない。

吉原に居続ける若様を見るのも初めてなら、あの凄い美人の姫とふたりきりで部屋にこもる姿を見るのも初めてのことだった。修治は若様は生まれつき女嫌いなのではないかとずっと思っていたので、今度の若様のとる行動全てが謎めいて思えていたのである。

四

風呂から上がった竜子はまるで生まれ変わった思いで廊下に出た。何もかもが刺激的だった。まず見知らぬ女たちと一緒に裸になるなど初めてのことで、しかも女たちがみんな素裸なのには仰天した。浴衣を着て湯をかける竜子をむしろ女たちは訝しげに見ていた。それでも自ら手にした糠袋で身体の隅々まで洗うという経験が新鮮で、なんだか自分が本当に植村家の姫ではなく、自由に生きるただの女になったような気がした。ただ、女たちが湯から上がると、恥毛を線香でほとんど根元から焼いて身だしなみを整えるのにはまた驚いた。竜子の恥毛は下女が適当に間引いて形を整えてくれていたが、その生え方や色艶が女によってそれぞれ違うことも初めて知った。

風呂を出て目立たぬように顔を伏せて歩いた。だが廊下に沿って続いている部屋の様子が物珍しいのでついそちらに視線がいく。立ったまま茶碗をもって食事をしている者もいれば、数名の女たちが髪飾りをつけたまま寝そべっていたりする。料理場の前の床を拭き掃除をしている女もいる。その出で立ちはこれまでに見たことがないもので、男のように着物の裾を後ろにからげている。布団を担いで音頭をとっている男や何足もの女草履を抱えてせわしげに走っている小僧もいて、まるで芝居小屋の裏を覗いているみたいだった。

そんな男衆でも竜子に出会うとみな目を丸くして見つめてくる。ひょっとこのように口を尖らす男もいてその顔はおかしかったが、竜子はつとめて表情に出さぬように二階に上がった。下にいる男衆が頭を下げて竜子の足下を覗き込んでくるのがわずらわしかった。それに建物の中にこもる臭いが食物が腐っているような、鬢付け油がそこら中にぶちまかれたような、なんとも異様でまともに呼吸ができずにいた。

二階の廊下には客らしい老人が女に手を引かれて歩いている。大きな膳に料理を運ん

でいる男衆もいれば、ふんぞり返って部屋を出てくる武士もいる。侍の姿は見慣れているので、その武士がどの程度の者かということは見当がついた。話す言葉で参勤で江戸にやってきたばかりの田舎侍であることも分かる。竜子が驚いたのは廊下で猫を洗っている遊女がいたことだ。むこうでも竜子を訝しげに見上げていた。盥から湯気をたてているのでそれが湯だと分かったのだが、猫を洗うのは武家に勤める下女のすることだとばかりに思っていた竜子は、こんなところで働く女でも猫を飼っているのかと驚いたのである。

どこかの部屋から出てきた女が、あんたひとりでよく洗えたねと竜子を見て大声で叫ぶようにいったので周囲の者の動きが一瞬静止した。凍ったようになった浅葱裏侍が、竜子が逃げ出すととたんに熔けて、「どこの女だ、のして、見世サ出さねのだ」と怒鳴り出した。竜子はあわてて座敷に駆け込んだ。ここの女と間違えられるとは許し難いと憤っていた。

出格子に座って暗い外を見ていた侍が、竜子に顔を向けて「ほう」と呟いた。行灯が侍のほっそりとした横顔を照らしている。だがそれきり何もいわず酒を呑んでいる。よく呑む男だった。

竜子は若様と呼ばれていた侍を無視して立ったまま足で奥の座敷の襖を開けた。武家の娘はいつも用心して頭を下げずに襖を開けるようにと行儀見習いの師匠から教わったやり方である。頭を低くして障子を開けるのは商家の女房の挨拶の仕方であるそうだ。

「おい、竜子」

いきなりそう呼ばれた。

「なんじゃ」

無礼者め、という憤りが顔に浮いたのだろう。侍はにやりとして、まあ、そうこわい顔をするなといった。妙に人懐こそうな声だった。そんな口を竜子に利く者はこれまでにいなかった。

「廓の中を案内してやる。小袖をもう一枚着ろ」

侍の口調が先程とは違って無遠慮なもの言いになっていた。その豹変ぶりにいささか戸惑った。イヤな感じなのではなく、身体の内部が痒くなったような草木が芽吹く微妙な思いなのである。

「さととはどこのことじゃ」

「廓のことをここでは『さと』というのさ」

侍はそういって立ち上がると、さり気なく竜子の背中に手を当てた。背の高い男だった。それに腕が妙に長い。その腕をはずそうとしたが、侍の掌が背中に張り付いて身動きができなくなっていた。不埒者という言葉も胸の中で反響するだけで、声になって出

てこない。なんだか妙な術をかけられているようだった。

一緒に行く気などなかったのだが、思いとは逆に侍の懐に収まる感じで階下までいっていた。侍はどこかの部屋を覗くと、おい、勘蔵、長羽織を一丁出してくれ、といった。すると角張った顔にイボをいくつも吹き出した醜い男が顔を出した。その男は手にした羽織を差し出したまま竜子を瀕んだ目で見つめている。侍がイボ男の耳元で何かを呟くと、男は分厚い唇を開いてぼんやりと頷いた。

竜子は黒い羽織を小袖の上にはおって侍のあとについて歩いた。もうすでに亥の時（午後十時）になろうかというのに通りには人が溢れていて見世の前にともる提灯が眩しいほどだった。女たちの着物も派手な模様で二階から落ちてくる提灯の明かりに反射する色がまるで夜に出現した虹の架け橋のようだった。頭巾を被っているので竜子を見る者はほとんどいない。四半時（三十分）ほど歩いたところで一軒の店の前で足をとめた。灯籠のある間口の広い店だった。掛け行灯には「温飩屋三田」と書いてある。

「うどんだ」

と侍はいった。見知った店らしく女中のあとに番頭が出てきてうやうやしく侍を座敷に案内した。

「腹がすいただろう。ここのうどんはなかなかうまい」

うどんが食べ物であることは知っていたが、それは端女が小腹がすいたときに台所の隅でこっそりと食べるいやしい食べ物のことだ。お芳と茶屋に上がったときも「うどん」などは商家の者が口にいれるものだといわれた覚えがある。そんなものを食べようというのかと思っている内に鉄銚子が運ばれてきた。侍はさっそく木盃に酒を注いで呑んでいる。

「おぬしも一杯やるか」

そう訊いてきたが竜子はいらぬといって侍を睨んだ。だが竜子の睨みはこの無礼な侍にはまるで通じないようで、うん、これは伏見の上物だとご機嫌な様子でいる。酒は二度口にしたことがあるが、朱塗りの盃に唇をそえただけで噎せて呑めなくなった。舌の先がびりびりと痺れてしまったこともある。だが、目の前にいる侍はなんともうまそうに呑んでいる。どんな味がするのだろう、と竜子が思ったとき、不意をつかれて唇に盃が突きつけられていた。侍が嬉しそうに顎を上に振り上げた。ゴクリと音がした。自分では呑むつもりなどなかったのだが、侍の魔術にでもかかったように勝手に指が盃を手にしていて、自ら酒を呑んでいた。熱いものが咽をくすぐって身体の中を降りていった。なんだか自分が厚い殻を脱ぎ捨てて誕生したような心持ちになった。

女中が八寸（約二十四センチ）四方ほどの箱をふたつ運んできた。蓋には青漆と黒漆塗りの草花が描かれている。女中が蓋を取ると湯気が上がって白いものがのたくっていた。その中央に半熟卵があり刻み葱がかかっている。女中はその上に熱い汁をかけ

た。「冷めない内にどうぞ」と女中が言い終わらない内に侍はもう食べ出している。さっきは鮒やら南蛮漬けというシロモノやらその他大根の浅漬けや牛蒡などの肴、果てには柿や栗を注文していたのによく食べるやつである。

真似をして竜子も箸をとって「うどん」を口に運んだ。濃い醤油味がうどんに染み込んでいて、何ともふんわかしたものだと思っている内にみんな食べてしまった。身体の底から温まり、なんだか汗が出てきた。顔を上げると侍はもう酒を呑んでいる。よく食べ、呑むやつだと竜子はまた思った。その思いには親しみに似た気持ちが混じり出していたが竜子はその感じ方を無視することにした。

侍は何もいわない。何も尋ねない。ただうまそうに酒を呑んでいる。

――若様と呼ばれたこの者は一体何者だろう。とても旗本とは思えないし、学問を研鑽してきた者にも見えないし、何より品性があるとは思えない。なんといってもこのような廓の馴染み客なのだ。不埒なことこの上ない。しかしこの者は中元伴四郎師範に仕込まれた私の打ち込みを簡単にはずしたばかりか、またたく間に刀を奪い取って当て身を喰らわしてきた。尋常な腕前ではないはずなのに、目の前にいる侍からは剣客めいた鋭さはまるで感じられない。一体、私をどうするつもりなのか。

「竜子、おぬしは美しいな」

だしぬけに侍は言い放った。切れ長の目が竜子を捕らえて離さない。覚えず、うろた

えた。

「おぬしが見世に出ればたいした評判になるぞ」

その後で侍はそういったが、その意味が竜子にはよく分からなかった。このあたり一帯にある家が男どもを饗応するための場所で、女は男に奉仕するのだということは見当がついていたが、実際にどういうことをするのか竜子にはよく分からずにいた。

それを目の当たりにしたのはうどん屋を出て、松葉屋を過ぎたどん詰まりにある妓楼に行ったときだった。侍は松葉屋の隣にある格子が正面に入っている見世を覗きながら、「吉原の妓楼には大見世、中見世、小見世と三つの段階があるんだが、ここがその小見世だ」といった。

「よく分からないだろうがまあ、後学のために聞いておけ。吉原といわれるこのさとは幕府公認の遊女街だ。女を抱きたい男と金が必要な女が出会い、睦み合う場所だ。おぬしがいる松葉屋は中見世の格式で、大工なら棟梁と呼ばれるほどの者でなくちゃ上がれない。格下のここでは日銭稼ぎの職人でも大歓迎だ。おれがこの小見世に初めて上がったのは……」

そこまでいって侍は言葉を閉ざした。視線は見世の中ではなく暗い夜空に注がれている。侍の思考そのものが過去に向かって遡ったようだった。

右京之介が小見世に初めて上がったのは、幕府のいわゆる御庭番といわれる者たちを闇の中で斬り棄てたため、いったん江戸を離れることになる以前のことだった。丹波柏原のわずか二万石の小藩を出て、ひとり江戸に上がったのは享和元年（一八〇一）のことですでに八年が経つ。その頃、江戸見物のつもりで吉原にある小見世を覗いた二十二歳の右京之介は、いつのまにか二階の引付座敷に連れ込まれていて、そこで遣り手に指図されるままにやってきた鈴虫という名の遊女と盃を交わしていたのだった。これは三三九度の真似事で遊女は仮初めの一夜妻になった証なのである。

なるほど江戸は丹波とは随分違うなと感心して酒を呑んでいると、いったん下がった相方の遊女が身繕いをしてきて自分の部屋に案内してくれた。そのとき遣り手が今夜は初会だよと文句をいった。あとになって馴染みの客でない限り部屋持ちの遊女でも本部屋には通すことはないと知らされた。大抵は広間を屏風で仕切った一角に客を通すのだという。二十二歳だった右京之介は十九歳の遊女に特別に気に入られたことになる。細身の立ち姿のいい女で、細い骨が今にも折れてしまう気がして若かった右京之介は随分気を遣ったものだった。二合銚子を何本空にしたか分からなくなった頃夜が明けた。ひと晩二朱の遊女は右京之介の裸の胸に頬を寄せて肩を震わせていた。女が何故泣いているのか右京之介には分からなかった。五年後に江戸に戻ってきて同じ小見世に顔を出して鈴虫はどうしていると尋ねたのだが妓夫は答えてくれなかった。どうやら落籍されてどこぞの大店の主人の囲い者になったようだった。それはそれで幸せなことだと右京之介は喜んだ。花魁ともてはやされたところで、二十七歳までの命なのである。そこで無一文で放り出されたら、池の中で餌を撒かれるのを待っていることしか知らない鯉が川に放流されて餓死するのと同じように、生きる術も分からない元遊女は、やはり途方にくれたまま通りすがりの男に身をまかせるしかない。

「たとえ小見世でも一応廓の女なので内所（楼主）に守られて遊女として生きていられるが、その先となると切見世と呼ばれる無法地帯で男をとることになる」

そういって侍は小見世とよばれる格子が下半分だけはめ込まれていた妓楼を離れた。隣に稲荷があるのが、雲間から出たり入ったりする月の明かりの中で見分けられた。この祠の前で手を合わせている女がいた。

「九郎助稲荷だ。さとの中でも一番隅にあるこの稲荷が一番繁盛している。早くここから出られるように、病気が治るようにと願掛けしているのさ」

侍の声が耳に入ったのだろう、祠に向かって手を合わせていた女は侍に一礼して稲荷から逃げるように出ていった。稲荷の先には溝があるらしくひどい臭いが竜子の鼻を刺してきた。

「この先は俗にいう羅生門河岸といわれているところでな。女は棟割長屋に棲み地獄

のように底辺を這いずりながら男を引き込んで息をしている。だから、ここには鬼が棲むといわれている。切見世の女たちは羅生門に出没した鬼にたとえられているのさ」

竜子は裏長屋と呼ばれている場所があることはお芳に連れられて歌舞伎を観劇にいった帰りに聞かされていた。ただ、「九尺二間の裏長屋に三人の親子が住む」と聞かされてもそれがどれほどの部屋なのか見当もつかなかった。

侍は青竹の矢来に囲まれた一角に入った。そこが侍のいう棟割長屋なのだろう。そこには火の用心の掛け行灯が戸の横に掲げられていて、その掛け行灯が二間置きにずっと向こうまで並んでいる。そのひとつひとつの戸口をいったい今までどこに潜んでいたのかと思われるほどのたくさんの男たちが覗き込んでいる。戸の向こうには古びた小袖を着た女がいて覗き込む男たちに声をかけている。

「おい、そこの若いの」

そういって侍はひとりの手拭いをかむった小太りの男に声をかけた。なんでぇといって振り返った男は侍を見上げて度肝を抜かれた様子で、へえ、と一変して腰を屈めた。侍はその男の耳元で何か囁いた。小太りの男はあわてて侍の前から逃げようとしたようだが、侍に襟首を摑まれて腰から地面に落ちた。侍はその男を無造作に引っ張って戸の向こうで下卑た笑いを浮かべている女のところに連れて行った。そこでも侍は女に何事かを囁いている。女は剣呑な目つきになって侍を見上げた。すると侍は懐からいくばくかの銭を取り出して女に与えた。女は急に身体を柔らかくして侍の手を取った。侍は女の手を振りほどくと小太りの町人を前に突き出した。頭から手拭いが落ちると真っ赤に焼けた薬缶顔が現れた。町人は狭い土間で中腰になって女と侍を交互に怯えたように見つめている。

「入れ」

そう侍は竜子に向かっていった。竜子がためらっていると強い力で引っ張られた。仕方なく土間に入ると侍は開いていた戸を閉めて、「ま、ねんごろにやってくれ」といった。女は手を差し招いたが小太りの町人はまだうだうだといっている。侍がその町人にも小銭を与えると急に元気になって褌をほどきだした。竜子はびっくりした。戦でも始まるのかと思ったのである。

女は行灯に襦袢をかけた。それで竜子たちのいる狭い土間には明かりが届かなくなった。小太りの男は褌をとると汚い尻をさらして女の股の間にいきなり飛び込んでいった。そんなに乱暴にしちゃ痛いよ、と女がいった。男は呻き、女を強く抱くとゼーゼーと荒い吐息をついた。

女は、ああ、と呻き声を出しながら傍らにある線香に火をつけた。一本でいいのかい、と女が訊くと、二本たのむよ、いいからもうちったあ気を入れろよ、と呻きながら呟いた。たまらずに竜子は戸を開けて外に出た。そのまま青竹の塀の外に出た。近くに

溝があるらしくひどい臭いが鼻をついた。竜子はふらふらと暗い中に入っていった。雲間から顔を出した満月間近の月が塀を照らしている。

「おい、そこから先にいくとここの男衆に捕まって簀巻きにされるぞ」

背後から声がした。

「吉原の回りは堀になっていて、ここを逃げる女はみなそこに嵌って泥水を呑む。男衆に見つかると遣り手のところに連れて行かれ死ぬまで吊るされる。遣り手の攻めはきついぞ」

「わらわはここの女ではない」

「ところが廓に入った以上、女は『女切手』を持っていないと外には出られないのだ。あんたはもう籠の鳥というわけさ」

「あんなことを、あんなものをわらわに見せるとはおぬしはどういう了見なのじゃ」

「なに、いずれあんたもああなると分からせたかったのさ」

「屋敷から人を呼ぶ。わらわは拉致されたのじゃ。役人が調べればすぐ分かること」

「だれが屋敷に知らせるのだ。それに拉致されたといっても、そもそも最初に襲ったのは姫様、あんただ。黒装束の賊が襲った相手に拉致されたと喚いたところで誰も信じないぞ。あんたのしたことが露見すれば植村家は取り潰しになる」

竜子は黙った。気付いたら涙がこぼれていた。こんな場所で一生を終えるのかと思うといっそのこと咽を懐剣で突いて死んだ方がましだと思った。だが、懐剣がない。ならば台所から包丁を盗むまでだ。

「臭いだろう。そこはお歯黒溝と言われていてな、病気で死んだ女の体液が溜まっているのだ。そういう女は丸めて穴に埋められて無縁仏になる」

そういうと侍は踵を返した。稲荷の前を通り、小見世のざわめきを左手に見ながら竜子は悄然と侍のあとをついていった。

「今おぬしが見たのが河岸の女の実態だ。『あったまる間もなく消える百の炭』と詠んだやつがいたが、一本の線香が消えるまでのちょんの間で男を受け入れるのだ。女は線香一本につき百文もらえるという寸法だ。おぬし百文がどれほどの金か分かるか」

竜子は黙っていた。金子の価値など考えたことがなかった。そもそも銭など持ったことがない。必要なものはお芳にいえば持ってきてくれたし、欲しくもない着物や簪などもどこからか贈られてきた。間着を着て掛下帯を締め、その上に打掛を着用するのは重いだけで少しも嬉しくはなかった。なにより、ここにいる女たちのように、どん欲に生きる姿がどれだけすさまじく、浅ましいことか想像したことすらなかった。竜子はただ、武家の家に生まれ、何もかも家訓に縛られ、お家のためにと嫁ぎ先まで決められることがうとましくなったのだ。自分の生き方は自分で決めたいと思っただけだった。それにはまず屋敷からを逃げ出さなければならなかった。

――でも、わたしの生き方とは何なのだろう。自分で決めたいと思い詰めていた生き方とは、どういうものを思い描いていたのだろう。

この世ではない場所に迷い込んだ気がした。この時刻になってもどこの妓楼からも華やいだ声が洩れ聞こえてくる。太鼓の音も混じっていれば三味線の音も格子窓から聞こえてくる。じめついた暗い部屋の奥では女どもの溜息と阿鼻叫喚が飛び交っていることだろう。

――一体、わたしはこれからどこへ行くのだろう。一体何をしようというのだろう。

侍のあとについて松葉屋に戻り、着ていた羽織を脱いだ。遣り手といわれる女が出てきて狭い廊下を通り、竜子を二階の部屋に連れて行った。若様といわれた侍は竜子が着ていた羽織を持って、楼主がいる部屋に入っていった。二階の奥の座敷にひとりでぽつねんと座っている内に竜子はたまらないほどの人恋しさを感じ出した。廊では今夜に限って女は念入りに化粧をし、男衆は酒を呑んで踊るようにせわしげに動き回っていた。それまで開けたことのない格子窓を開けて通りを見下ろしたのも、花魁の姿や男衆のはやしたてる声が聞きたくなったからだ。満月まであとふた夜。その夜が「十三夜」と吉原では呼ばれる大紋日であったことも竜子は知らなかった。

五

竜子の話を聞き終わった侍は「そうか」とあっさりと言って横になった。布団は敷かれていないので、侍は畳に肩肘をついている。それでいて空いた方の手で鉄銚子から木盃に酒を注いで器用に呑んでいる。この男の身体の中から酒が絶える時はないのだろうかと竜子は思っていた。

「簡単にいえば、親爺殿が決めた相手が嫌で屋敷を逃げ出すことにしたというわけだな」

「そうじゃ」

全てを今夜話す気になったのは、廓に住むさまざまな女たちの生態を直接見たせいだった。みな事情は違っていても、ここに入ったのは身を売って銭に替える必要があったからだろう。だが、竜子はただ親にそむきたかったから逃げ出したのではないか。娘を嫁入りさせることで父親にはなんらかの利益が手に入るはずだ。いくら側女の娘だといっても実の娘であることには変わりがない。そんな非情な父のやり口に反抗したかったのだと話しながら竜子は思っていた。

「我儘といえばそうだが、町娘だったらよくある話だ」

「さようか」

「さようだ。だが、武家、それも千石を超える大身の家ではそうそう起こることではない。どこの姫君も心では泣いても、親のいいなりになって黙って嫁いでいくものだ。あんたはきれいな顔に似合わず相当勇敢な人のようだ」

竜子はドキッとした。心の臓が音をたてたようだった。何気なく侍が発した「きれい」という言葉に心が縛り付けられた思いがしたのだ。そういう感情が体内を駆けめぐったのは初めてのことで、竜子はなんだか酒を呑んだ心持ちになった。

「嫁ぎ先は播磨国、本多家か。仙崎領二万六千石ということになるな。いや、先年守旧派と改革派の対立があって、幕府に知られるところとなり拝領高は一万三千石に半減されたはずだ。いまの藩主は忠居殿か。国家老は誰だったかな」

家老の名前までは竜子も聞いていない。聞かされたかもしれないが忘れている。いや、ハナから覚える気がなかったのかもしれない。

「それにしても国家老の息子に嫁ぐというのはどうも解せんな。一体、どうしてそういうことになったのだ」

目の前にいる侍には国家老の子息と婚姻が整ったとだけ伝えたが、今になってどういういきさつがあってそうなったのか、竜子も知らないことに気付いた。ただ、父が娘をなんらかの取引に使ったのだとずっと恨んでいた。

「分からぬ。何も聞かされておらぬ」

「とにかく元の女中のお芳に屋敷を逃げ出したいといったら、万事あの女が取り計らったということだな」

「さようじゃ」

「じゃ、はよくないな。姫様をやめたいのなら、せめて、『です』といいなさい」

竜子は黙った。そのようないい回しは口にしたことがない。

「そうです、といいなさい」

「……」

「いえ」

「そうです」

「それでいい。よい音色だ。男が惚れるぞ」

惚れるとはどういう意味だろうと思った。どうせ下世話な者どもが好んで口にする言葉なのだろう。でも、『そうです』と口にしたとき胸が締め付けられる思いがしたのはなぜだろう。

「お芳の住まいはどこだ」

竜子は首を傾げた。歌舞伎見物に出た折りに聞いたことがあったが、はっきりと覚えているわけではなかった。なんとなくお芳がいいにくそうにしていたので、あえて場所までは尋ねなかった。

「お芳はだれの口利きでやってきたのだ。口入れ屋か」
「知らん。あ、そういえば家は本所と申しておった」
「それだけでは分からん。相生町とか尾上町とか、町の名をいっておらなかったか」
竜子は考えた。橋の名が浮かんだ。
「まあ、よい。修治がお芳を捕まえて色々と吐かしたようだから、長屋くらいは分かるだろう」
「お芳はどうなったのじゃ。お芳を責め立てたあと、どうしたのじゃ。お芳の夫を殺したのか」
「お芳は家に戻したはずだ。死なれては困るからな。なんせ新たに養子になるものが待っている」
弥太から改めて話を聞かされる吉村弥次郎は、自分が本当に幕府直属の御家人になれると知れば啞然とすることだろう。
「それはどういうことじゃ。お芳の夫を殺したのか」
「死んだかどうかは分からない。ただ拷問にはかけた。なんせあいつは浪人をひとり斬り殺している。あんたも黒装束を身にまとって見ていたはずだ」
雨模様の上、雨がやんだあとも黒い雲が月を覆っていたので暗闇に近かった。それでも館野久兵衛が刀を抜いて誰かと斬り合った末に打ち据えたのは透かし見えた。真剣を

抜いての斬り合いを目の当たりにしたのは初めてのことで一瞬だが竜子は気が遠くなった。だが、屋敷に雇われていた見張りの浪人が斬られたらしいと知って、竜子は大変なことに巻き込まれたと思った。
そのあと館野久兵衛が何者かに打たれて堤から転げ落ちるのを見て、竜子は夜目にも鮮やかな着流し姿の浪人に打ちかかったのだった。そうしなければ自分だけではなく、家に疵がつくと思ったのだった。だが、当て身を打たれて息が詰まった。頭が痺れて足下が揺らいだ。それからのことはこの部屋で目が覚めるまで記憶が途絶えている。
「お芳は本所二ツ目之橋といっておった。あとは聞きそびれた」
「では林町か。あのあたりは小身の旗本屋敷がみっしりと建て込んでいるところだな」
「まだお芳を責めるつもりか」
「尋ねたいことがある。修治と違っておれの追及は厳しいぞ。なんでも吐く」
「何故またそのようなことをする」
「『するのですか』、だ。偉そうな口を叩いているとこの妓楼に売り飛ばすぞ」
竜子は先程目にしたばかりの遊女の肢体を思い浮かべた。着物の裾をまくり、股を大きく開いて裸の男の尻を抱え込んだ姿は醜いものだった。女のすることとは思えなかった。胃の縁が蠕動し、苦い液体が溢れ出た。
「あのようなこと……あのようなことはできぬ」

「できるのさ。女の身体とはそう仕上がっている」
「おぬしにわらわを売ることはできぬ」
そういうと目の前で横になって酒を呑んでいたはずの侍がふと視界から消えた。気配を感じたときには竜子の胸に男の手が差し込まれていた。裸の乳房をひややかな指が触れた。
「無礼者！」
腕を振り上げたとき侍は元いた場所で木盃に酒を注いでいた。まるで夜風のような男だ。
「どうかしたか」
普通の表情で侍はそういった。
「あ……」
おまえはたったいまわたしの後ろに廻って胸に手を入れてきたではないか、と竜子は胸の内で叫んだ。
あれは錯覚だったのか。でも……。たしかに乳首が……。
「ひとつ面白いことを聞かせてやろう。おれはきれいな女を見ると、知らぬ間に女の胸に触れてしまう癖がある。だが、醜女の身体には触れぬし、たとえ触れても感じないことになっている。きれいな女などめったに出会わぬから女の肌に触れるのは五年に一度

だ」
「その話のどこが面白いのじゃ。わらわはお芳のことを聞いているのじゃ」
ああ、そうだったな、と言って侍は上体を起こして鉄銚子を手にした。
「お芳は何かを隠している。あんたを逃がす算段を秘密にしたというが、久兵衛などという入り婿に護衛をさせたということは、もうすでに秘密でなくなっている。それともあんたがお芳に用心棒を連れてこいと頼んだのか」
「それは……護衛のことなど知らぬ。わらわはお芳に屋敷から出たいのでなんとかならぬかといってみただけだ。お芳には何の企みもない」
「まあ、そういう見方もあるが、どうも腑に落ちぬのだ。いずれにしろあんたには当分ここにいてもらうしかないな」
「わらわは帰る。もう逃げなくともよい。屋敷に帰るのじゃ」
竜子は虚勢を張った。侍はちょっと遠くを見る目つきになって天井に顔を向けた。それから鉄銚子を振ると、おい、と廊下に向かって声をあげた。するとまるで外で控えていたように若い男が襖を開けてへいと顔を出した。侍が鉄銚子を持ち上げるとまたへいといって男は姿を消した。
「わらわはおぬしに無理矢理ここに連れてこられたのじゃ。いわば拉致されたも同じ事じゃ。目付が知ればおぬしは牢に入れられるはずじゃ」

「ひとつ覚えておくことだ。たとえ拉致されようが廓に連れてこられたからには女は売り物なのだ。どこに売られても文句はいえない。逃げ出せば死ぬほどの折檻を受ける」

侍は両腕を上げて伸びをした。

「それからおれは『おぬし』ではない。右京之介という。奥山右京之介」

竜子は歯ぎしりをする思いで右京之介と名乗った男を見つめたが言い返す言葉が思い浮かばなかった。それほど憎たらしかった。だが竜子の気持ちが沸騰したのを見透かしたかのように口にした侍の言葉で、身体全体がほてってしまった。侍はこういった。

「竜子の乳首はな、咲きかけの梅の花のように可憐であったぞ。来年の春が楽しみだな」

第三章　女心と秋の空

一

若林左太郎が小網町の「小川屋」に寄ったのは、久しぶりに勤務が定時の八ツ（午後二時）に終わり、奥山右京之介のお相伴に与って一杯やろうと思ったからのことだった。芝の屋敷から猪牙舟を奮発したのも、うまい酒を夜っぴいて呑んでやろうというさもしい根性が芽生えたからだった。だが、生憎右京之介は留守をしていた。では待つといったのだが、通い女中の返事がどうも曖昧で、さらに問い質していくと、どうやらここ数日、「小川屋」には戻っていないことが分かった。左太郎はあきらめて船宿を出ようとした。そこへどこからか戻ってきた女将のくめに出会い、呑んでいってくださいなと袖を引かれた。

「いや、儂ひとりではまずい、それに懐がちとさみしいのだ」といったのだが、まあ、そうおっしゃらずに、という女将の引き留めにあって右京之介の居室になっている二階の奥の間に上がった。

燗酒を運んできた女将は珍しく向かいに座って銅壺で温めた酒をぐい呑みに自ら注いでくれた。いつもは右京之介と左太郎を残してさっさと姿を消してしまうのだが、これはどういう風の吹き回しかと髭を揉んでいると、遠回しに右京之介のことを尋ねてくる。

どうやら右京之介がここ数日姿を見せないので心配しているようだと分かったのは、「左太郎さんなら若様の居所を知っていると思って」と呟いたときだった。左太郎も右京之介とはかれこれ半月ほど会っていない。左太郎の勤める越前大原藩の藩主山科直好公の次男坊辰之介君の相手に忙しかったからである。今日はそのやんちゃ坊主が風邪で寝込んでいるのでようやく屋敷を抜け出すことができたのだ。

「そういうわけで儂も右京之介の顔を見ておらんのだよ」

といっていると修治が入ってきて妹である女将を追い払った。それからここ数日の間に起こった妙ないきさつをざっと修治は話してくれた。

「そうであったか。弥太も修治さんも大変な災難にあったな。面白がっているのは眺めていた右京之介だけか」

そう相槌を打って言ったものの、なぜ夜の中をどこかの腰元だかお女中だかが、髭の浪人に追われていたのかさっぱり要領が摑めなかった。ただ、右京之介がここ数日姿を消しているのは、黒装束の曲者を捕らえて吉原に軟禁しているためということだけは分

かった。

それで吉原の妓楼に居続けになっている右京之介を見舞いがてら、たまには吉原の遊女をひやかしてみようという気になって「小川屋」を出ると、夕風の吹く町を浅草寺めざして歩いていた。

すると、神田川にかかる和泉橋の手前までくると、「御武家様、御武家様ではございませんか」と声をかけてきた者がいる。

首を回して振り返るとすぐ後ろに、焦げた茄子のような色黒で背の低い小僧が、目尻の下がった目で左太郎を仰いでいた。

御武家様ではございませんか、などという声のかけ方があるのだろうか、と思いながら卑屈に腰を屈めている小僧を見下ろした。どう返事をしたらよいのか、さすがの左太郎もわからずにいたのである。

「なんじゃ、おぬしは。儂に何か用か」

「へえ、あっしは十軒店新道にあります文具問屋『槌屋』の者で佐助といいますだ。一年くれえ前から御武家様を探していただ」

「儂を探していたとな、ふむ」

左太郎は小僧をもう一度じろじろと見直した。十軒店新道に店を構える文具問屋の者なら、もう少しましな言葉遣いをするだろうに、さてはこいつはアホじゃなと思ってい

た。だが、探していたという言葉に何やら金銭が転がり込んでくる予兆めいたものを感じた左太郎は、立ち去らずに小僧のいうことを聞いてみようという気になったのである。なんせ、国許にいる隠居した親父殿と妻三津に仕送りをするだけで八十石の扶持米など吹っ飛んでしまうのである。とにかく親戚付き合いにカネがかかる。これまでそれなりにやってこられたのは、右京之介が与えてくれた助太刀料に救われていたからなのだが、それもかれこれ一年ほど途絶えており、たまの非番でも空きっ腹をかかえて六畳一間の組屋敷でひっくり返っていることになる。無論、元気なときは芝から小網町まで歩いて「小川屋」まで行くが、それさえ億劫なほど腹が減って動けないこともあるのである。三十二歳にもなると何をするにも怠慢になる。

「なんのために、その、文具問屋が儂のことを探しておったのだ」

「へえ、旦那様のいいつけで、お嬢様を救ってくれた方を探しておっただ」

「ほう、儂が商家の娘を救ったと申すのか」

「へえ」

「いつのことだ」

「暑いときのことですだ」

「ではふた月ほど前のことだな。さて、娘を救ったというと……あ、増上寺前の茶屋で娘がどこぞの侍から言いがかりをつけられておったことか」

「いえ、そうじゃねえだ」

「ふーん、では二丁町の芝居小屋で尻を触られたと泣いていた娘を慰めたときのことか」

「ゼンゼン違いますだ」

「では、何じゃ」

「ふた月前のことじゃなくて、去年のことですだ」

「暑いときといったではないか」

「去年の暑いときのことですだ」

左太郎はどんぐり眼の小僧を睨みつけた。

「おい、小僧、上方名物の掛け合い漫才をしておるわけじゃないぞ。ふざけるのもいい加減にせい」

左太郎は腹をたてて歩き出した。小僧は袖を摑んでくる。うるさい、と怒鳴って振り払ったとき、羽織のほころびを縫ってあった糸が切れて袖が垂れた。貧しく、さらに女のいない悲惨さが周囲の者にも知られてしまったらしく、ひそみ笑いをする者もいる。左太郎はまだ垂れた袖を摑んでいる小僧を、面倒だとばかり腰に持ち上げて投げ飛ばした。

小僧は叫び声もあげずに、ドンと地面に落ちるとそのまま気絶した。放っておくわけ

にもいかず、左太郎は小僧を背中に背負って日本橋方面に向かって歩き出した。過ぎてきた町を少し戻ることになる。

二

「そろそろ姿を現すころだと思っていたのだ。いやあ、左太郎殿の顔を見ると心がなごむなあ」

右京之介はすずしげな笑顔で左太郎を迎えた。「槌屋」の小僧を背負って店まで行ったり、そこで主人の惣兵衛と会って話を聞き、最後に左太郎が救ったという娘のお秋と対面したりしている内に日が西に傾きだし、お夕食の用意ができておりますという惣兵衛の誘いも断って、左太郎は憤慨して店を出てきた。その鬱憤を右京之介に晴らしがてら、酒と肴を花魁のもてなしで受けるつもりで空きっ腹をかかえて吉原の「松葉屋」を探し当ててやってきた。修治は何もいわなかったが、十数軒ある中見世の中でもかなり上等なところらしく、右京之介が注文するとすぐに酒や肴、湯豆腐が運ばれてきて、遊女もいつのまにか四人やってきて、競うように酌をしてくれた。

右京之介には訊きたいこと、文句を言いたいことなどたくさんあったが、遊女といっても若くてなかなかの美形な女たちであったので、左太郎はあっという間に二合入りの鉄銚子を三本空にしていた。

「夕暮れの風が気持ちいいなあ。あ、トンビが風の中をゆったりと飛んでいる。まるで水の中を泳いでいるようだ。雄大だなあ」

右京之介は暮れていく空と黒い山並みを目に映して南西の空を仰いでいる。遊女たちもその言葉に誘われて窓の外を見上げた。すでに棄ててしまったものを見つめる女たちの瞳に哀惜の色が浮いた。この男は人の気持ちを泡立てもするが、心に拭いきれない痛みを呼び起こしもする。不思議な男だと左太郎は思いながら右京之介の横顔を見ていた。

「どうやら修治から拙者のことを聞いたようだな」

ふと右京之介は左太郎の方を振り返った。汚れのない眼差しに差し込まれて左太郎は覚えず声が詰まった。なぜだか、右京之介に惹かれるおなごの気持ちが理解できるようだった。

「ああ、それでここにくる途中でヘンな小僧に会って、店のお嬢様を助けてくれたお方か、と訊かれてな、あげくの果てにその小僧を投げ飛ばして、気絶したその小僧を店までおぶっていく羽目になった」

「さっぱり分からん」

「分からんか」

「分かるわけがない」

「だろうな。儂も結局何だったのか要領が摑めんのだ。ことの発端はだな、ほれ昨年、神香蘭とかいう怪しげな占い婆アを退治にいったときに、途中でどこぞの娘にからんでいたふたりの浪人がおったであろう」

「そうだったかな」

「そうなのだ。ひとりは片腕の浪人であった」

そこで右京之介は思い出したらしく、うんと頷いた。

「ああ。旗本渡部求馬の屋敷に巣くっていた拐かし隊の浪人のひとりだったな」

「さよう。片腕の浪人の、残った方の片腕をおぬしが非道にも斬り落として、浪人を痩せた竹筒のようにしてしまったときだ」

そういうと遊女たちの間で笑いとも悲鳴ともつかない声が出た。

「そのとき助けられたというのが日本橋の十軒店新道にある文具問屋『槌屋』のひとり娘で、儂が投げ飛ばした小僧はその店の『小僧』であったわけだ」

「小僧は分かったがなぜその小僧を左太郎殿は投げ飛ばしたのだ」

右京之介は盃を口に運んで愉快そうにしている。そこで左太郎は起こったことを、縷々説明した。

店の奥座敷で惣兵衛から挨拶を受けたが、お礼に出てきた娘が左太郎を見るなり顔色を変え、「わたしが探しているのはこのお方ではありません」ときつい口調でいうなりそそくさと部屋を出ていってしまった。残された左太郎は何の事だか分からず、憮然としていた。その内どうやら、左太郎は娘を救った侍の内の片割れで、娘が探していたのは右京之介の方だと分かってきた。左太郎は確かにそのとき右京之介と一緒にいて、娘を襲ったもうひとりの浪人の相手をしていたのだが、娘の目には颯爽と立ち回る右京之介の姿しか映っておらず、いつか直接会ってお礼を申しあげたいとずっと胸に秘めていたのだと察しがついた。

「そういうわけでな、儂はとんだ道化役となったわけじゃ。恥ずかしかったぞ。あの娘はふとどきにもほどがある」

右京之介はにやにやしている。どうも腹を見透かされているらしいと怪しんだ左太郎は遊女から酌を受けて咳払いをした。

「儂は礼金が欲しくて小僧についていったのではないぞ。だいたいそのときには小僧が何のために儂を探しておったのか存ぜなかったのだからな」

「分かっておる」

「あの娘はおぬしにひと目惚れしたのじゃ。店の主人の惣兵衛の話だと、お秋というその娘はおぬしに会うまでは誰とも一緒にはならないと言い張っておるらしい。ひとり娘だそうじゃ。どうじゃ、このヘンでおぬしも身を固めては。婿に入ってのうのうと暮らすのもいいものだぞ」

「うん、それはいいかもしれないな」

右京之介は長い睫をしばたいた。西空に広がっていた青味が消えると右京之介の片方の頬を黒い風が啜り泣くように吹き付けた。それきり右京之介は黙って酒を呑んでいる。何かを考えているらしいが、何を考えているのか分からない。左太郎が来るのを待っていたような口振りだが、それらしい用件もいわない。仕方なく左太郎は酌を受けるままに膳に載った料理を食っていた。

左太郎の食いっぷりを目にとめた右京之介が、おまえたちも遠慮なく食べろと遊女たちにいったので、朝飯を食っただけで腹を減らしていた遊女たちは手摑みで焼き魚や蒲鉾、かんぴょうなどを舌の根をはねらせて食べ出した。

その姿を見ている内にさすがに左太郎も里心がついた。妻の三津は親爺殿に遠慮して今も台所で下働きの者と一緒に冷や飯を食べているのだろうかと思ったのである。

「おまえたちはみなまだ若いのに、何故このような遊郭で働いておるのじゃ」

三津の面影を頭に浮かべていた左太郎は、ついそんな無粋な質問を口にしていた。女たちは手をとめて互いに顔を見合わせた。

「国はどこじゃ。おい、おぬし、どこから来た。百姓の親から売られたのか」

片膝を立てて隣に座っていた女は指先を懐紙で拭って顔を伏せた。座が急に鎮まった。

どうやら女たちの傷口に触れてしまったようだと気付いたときには隣の女は涙を流していた。座が急に凍りついた。右京之介の横にいた女がまなじりを吊り上げて左太郎を睨みつけた。

「なんだよ、芋侍、右京之介様のお客様だと思うから楽しくやっていたのにさ、ここにいる女はみんな口に出せない事情があっているんだよ。出たくても出られないんだよ。親から売られたのが何だっていうんだい。あたしの親はこの江戸にいるんだよ。田舎者じゃないんだ。それでもここにいるのは親を恨むことより、救ってあげたことを誇りにしているからなんだ。なんだ浅葱侍がいい気になりやがって、説教がましいことをいうんじゃないよ。あんた、ここの勘定が払えるのかよ」

返す言葉もなかった。左太郎は全身に冷や水を浴びせられた思いで凝固した。

「おい、夕霧、それくらいにしておけ」

右京之介が瞼を薄く開いて隣の遊女を見てそういった。すみません、と夕霧と呼ばれた女は首を揺らせた。まだ、二十歳をふたつみっつ出たばかりの女のようだった。白粉の下の肌に細かい縦皺が走っていた。

「申し訳ないことをいった。あやまる、この通りだ」

潔く頭を下げる左太郎を見て、他の女たちはざわついた。田舎侍ほど廓の中では威張りたがるものだった。左太郎の態度は遊女たちの気持ちに引け目を与えたようだっ

た。

「お侍様、わたしが泣いたりしたから、夕霧さんを怒らせてしまったんです。あやまるのはあたしの方なんです」

「いえ、あたいこそ、メソメソして」

女たちは懐紙を取り出すと、唇で一枚だけ引き出し、素早く顔を拭った。

「おい、化粧が落ちるぞ。化け物屋敷になるぞ」

右京之介がそういって座をなごませた。それからみなが膳の上の料理を食べ尽くすのを待って部屋から下がらせた。右京之介は夕霧の胸にそっと心付けを忍ばせた。女は上体をやわらげて礼を口にした。たいしたものだ、と左太郎は呻いた。この男はどこにいっても女に好かれると感心していたのである。ことに、毎晩男どもと枕を交わす遊女の心を摑むのは男冥利につきると妬ける思いで感服していた。

ふたりきりになると、部屋には夜を伴った秋風が流れ込んできた。南西の空に満月が出ていた。梳った雲が月の下を流れていく。まるで雲が月に媚びを売っているようなたなまめいた風情だった。

ふと右京之介が立ち上がった。奥座敷の間にある襖を開いた。そこに若武者が片膝を立てて控えていた。左太郎は人が控えていることに全く気付かなかった。驚くと同時に己の身体に巣くった怠慢さを恥じた。

「左太郎殿、これは竜子という」

若武者は顔を伏せている。肩は細いが居ずまいに隙がなく武道をたしなんでいる様子が窺えた。

「竜子？」

女形か、と怪しんだ。

「竜子、こちらの御仁はわたしのごく親しい友でな、若林左太郎殿と申すお方だ。越前大原藩勘定吟味下役で、今は江戸在住だ」

「竜子でございます」

顔を伏せたままそう答えた。左太郎は、あ、いや、と呟いて佇んでいる右京之介を見上げた。女形かと思った相手は凛と響く女の声を出したのである。

「言い忘れておったが、この度、『下』が取れたのだ。勘定吟味役になった」

女と知って左太郎は見栄を張った。

「では増米になったな」

「いや、そっちの方は変わらぬままだ」

何故だか汗が噴き出た。

「竜子は若年寄植村家長の姪にあたる。家長の弟、政直の三女だ」

左太郎は驚いた。

「すると大和国高取藩二万五千石、なんやかやひっくるめて六万石を管理しておるという、あの藩主の姪御様ということか」

「そういうことになる」

左太郎は頭が混乱した。吉原にきて、いきなり大名の姪にあたる姫君に出会うとは想像すらしなかったことだ。

つまり想定外ということだ、と左太郎は腹の中で呻いた。

「左太郎、このおきゃんな姫君に剣術の稽古をつけてやってくれ。拙者の剣は受けたくないというのだ」

そういってから右京之介は若武者の風体で控えている女を見下ろした。

「この若林殿は中西派一刀流の達人だ。近頃の江戸は形ばかりのやっとうを振り回す侍ばかりだが、若林殿は本物でな。何人もの悪党を実際に斬っている」

「おい」

無茶苦茶な紹介の仕方をしやがると思わず目玉を剝いた。だが、女の方ではあわてた様子はなかった。

「稽古をつけてくだされ。手加減は無用じゃ」

女はそういうと顔を上げた。行灯に照らし出された女の目の奥に、秘められた真剣の切っ先を垣間見た思いがして、覚えず左太郎の背中が泡立った。

――美形だ！

この世のものとは思えない美しさだった。不意にかぐや姫というお伽話に出てくる異界の姫の姿が眼前に迫ってきた。

「さっそくだが、よろしく頼む。この裏の新丁河岸の空き地で存分にやってくれ。本物の剣豪がどういうものか見せてやれ。竜子はまだわたしに討たれたことが信じられないでいるのだ」

あっさりと右京之介はいったが、左太郎の方ではまだ動転している。そもそも何故遊郭に姫君が若武者の出で立ちをして潜んでいるのか皆目見当がつかない。

「稽古はつける。しかし、その前にこうなったいきさつを説明してもらえんか」

「今は面倒だ。それに本筋のところはわたしにもまだ分からないのだ。竜子が何も打ち明けてくれないのでな。ただ、この部屋でくすぶっているくらいなら外で木刀を振りたいと申しているのだ。わたしが相手では憎しみが先に立ってしまうらしい」

憎しみ？　すると姫と右京之介は男女の仲になっておるのか、と左太郎は疑った。それこそ憎しみと嫉妬心が一度に吹き上がった。しかし、よく観察すると、ふたりの間には馴染みになったようなとろけ合いがない。むしろ、姫はずっと気を許すまいとしているように窺える。

「稽古をつけている間、わたしは少し眠る。起きたら十五夜の酒をたしなむのでその折

り付き合え。そのとき話す。そうだ、今夜はここに泊まっていけ。花魁なら都合をつける」

「ば、馬鹿なことをいうな。おぬしと違って儂には勤めがある。屋敷の門が閉じられる前に戻らねばならぬ」

「さようか。では明日にでもまた出直してきてくれ。じゃあ、な」

そういうなり右京之介はゴロリと横になった。なんという気楽なやつだと左太郎は唸った。実はもう屋敷の正面の門は閉ざされている。脇の戸口から入るにしても門番に与える小銭すらない。今夜は錆び付いた裏門を開けて、鬱蒼と茂った裏庭を抜けて長屋にたどりつくしかない。

横を向くと姫君の鋭い視線が向けられている。いやあ、と左太郎は腹の中で呟き、ひととおり赤面してから、「では、参るぞ」と胸をそらせて立ち上がった。気負ったせいかちょっと屁が出た。

三

稽古から戻った竜子は黙って奥の座敷に入った。左太郎が「儂は一体何のために来たのだ」とぶつぶつ言いながら帰っていくと、右京之介は起き上がって出格子の桟に腰を下ろした。鉄銚子の中の酒はもう冷えている。しかし、ひと寝入りしたあとの冷めた酒は咽を潤してくれた。月光に送られて涼風がすべるように部屋に入ってくる。外からはまだ酔客の声が聞こえてくる。それに混じって微かに衣擦れの乾いた音が隣から聞こえてくる。

竜子が袴を脱いで肌着をつけているのだろう。ここには花魁の着るものしか置いていない。直接肌につけるのは緋縮緬の二布と呼ばれる湯文字だ。汗を掻いた腰回りには縮緬の着心地が好い。その上から腰巻きを巻く。これにも紐はついていない。右京之介が育った丹波柏原藩の奥女中でも、夏は小袖を着た上に打掛をつけるのだが、それでは暑くてたまらないので腰巻きを腰に巻いてくくり、打掛を諸肌ごと脱いで腰巻きにかけて暑さをしのいでいる。団扇をつかって夕風にあたっている姿はなかなかあでやかで、十代の初め頃の右京之介は、庭づたいに奥に忍び込んでは、女たちの解放されたその姿を眺めて感じ入っていたものだった。中には右京之介が覗いていることを知ってか知らずか、小袖を脱いで真っ白い肌をさらす女もいた。

竜子は丁度いま小袖を着たところだなと右京之介は衣擦れを耳にしながら想像する。竜子の胸は小ぶりだが月の明かりに照らすと瑞々しく輝くことだろう。そう思うと色あでやかな打掛をまとうより若武者姿の方が竜子には似合っているようだった。

「竜子」

と頃合いを見計らって呼びかけた。少し間があって襖が開かれた。竜子は立ってい

る。やはり足の指先を使って襖を開けたものなのだろう。油断のならない雰囲気を漂わせて右京之介の指先に挟まれた盃を見つめている。

「なんじゃ」

ややあって竜子はようやく応えた。右京之介は笑いを浮かべて上体を女に向けた。

「おぬしはなかなか麗しいな」

「……」

「控え目だが搗きたての餅のように柔らかく、熱を帯びた乳房をもっている。裸にした際、色々と探索させてもらった」

「無礼者！」

いきなり細長いものが飛んできた。それが右京之介のこめかみを刺した。

「ツッッ」

盃が落ちた。右京之介の身体が続いて桟からずり落ちて畳に横向きに倒れた。盃の横に笄が転がっている。竜子が投げたものだろう。それが当たったところで殺傷力はないが、それにしてもこんなものをいつ持ち込んだのだろうと不思議に思った。

「左太郎だな」

笄を手にして上体を起こし、竜子を斜め下から見上げた。竜子はまだ突っ立ったままでいる。

「左太郎がおぬしに与えたのか。それとも盗んだのか」

「案外じゃな」

冷笑を頬に浮かべて言い放った。

「何がだ」

「わらわの手裏剣をかわせぬとは案外修行が足りんな」

「修行か。そういえば足りないな。いや、剣の修行などほとんどしたことがない」

「一刀流中西道場にいたのではないのか」

「いたが、ちょっと偉そうなやつらをからかっていただけだ。ま、餓鬼の頃には、近くの山で義経の真似事をしていたことがあるがな」

「では、あの夜はなにゆえ……」

自分の撃ち込みをああも簡単にはずした上、気絶させることができたのじゃ、と竜子は言おうとして口を閉ざした。こんな酒呑みにやられたのは何かの間違いだと思い込もうとしたのである。

「少し尋ねたいことがある」

右京之介は盃を竜子に向けて差し出してきた。下世話なやつと思ったが、知らない内に竜子は正体不明の侍の傍らに座っていた。それから男の手にした盃に注がれた酒を呑んでいた。男は無表情に竜子を見つめている。

「植村の屋敷から逃れたのは輿入れの相手が気に入らなかったからか」
「それだけではない。屋敷暮らしに我慢がならなかったのじゃ」
「相手は仙崎藩の国家老の倅だといっていたな」
侍は酒を先に呑み、次に盃を竜子に向けてきた。二杯目は最初より腹にしみた。
「そうじゃ」
「輿入れはいつだ」
「来年の三月と聞いておる」
「半年後か。それは忙しいな」
三杯目は胸を温かくした。酒は呑んだことはあるし、自分では結構たしなむつもりでいたが、男が盃に注いで差し出す酒には妙薬でも仕込まれているような甘美な香りがあった。しかし妙薬などではない証拠に、男も同じ酒を呑んでいるのに少しも乱れた様子はなかった。
「しかし妙だな。若年寄の姪御で三千石の姫君の嫁ぎ先が一万三千石のしかも国家老の息子というのはちょっと解せぬ。この嫁入り話は誰が持ってきたのだ」
「父上じゃ」
「政直殿か。お父上が直々にこの嫁入り話を持ってきたのか」
「他に誰がおる？」

竜子は上気した頬を向けた。右京之介は視線をはずした。
「色々いるだろう。用人であるとか、本家筋とかな。本家の留守居役などは他藩の内部事情には詳しいはずだ。おぬしは知らんだろうが、三千石の大身が娘の嫁ぎ先を探すという方がおかしいのだ。それに政直殿の下にはもうひとり弟がいたはずだ。名前は忘れたが」
「叔父の名は忠政殿といわれる。おぬし、どうして高取藩のことにそれほど詳しいのじゃ、たかだが二万五千五石の小藩ではないか」
「おいおい、藩主は若年寄だぜ、侍であれば誰でも知っている」
「いや、誰でも存じておるわけではない。駿河守家長様のことは存じていても父、政直は分家の身。誰でも知っているとは思えん。有り体に申してみよ」
「有り体に申せというのか。まるで目付に拷問にかけられているみたいであるな。まあ、よい。有り体にいえば、おれは仙崎藩の国家老というやつは、若年寄の姪を、大金を積んで息子の嫁にしようとしていると睨んでいる。結納という大金でな」
「わらわに大金を積むと申すか。なんのために」
「それは若年寄に取り入るためだ」
「取り入ってどうなるというのか。それも小藩の国家老風情が、伯父上に取り入ってどうしようというのか」

「さあな、大名家の考えることはおれには分からん。それにお家騒動には興味はない」

竜子はとぼける右京之介を今度は正面に向き直って見据えた。

「それにおぬしは一体何者じゃ。若様などと申しおる者もいたが、それはどういう意味じゃ。その口の利き方から察するにとても由緒ある家格の出とは思えん。まるで無頼の徒じゃ。おぬしは誰じゃ。なぜ、わらわをかようなところに押し込めておくのじゃ。拐かして二千両を脅しとるためか」

右京之介の口元に苦笑が浮いた。竜子の問いにはすぐには応えず、冷や酒を呑んでいる。

「まあ、それもひとつの手だ。最初、ここの妓楼の主人に二千両でおぬしを売ると申し入れたら、とんでもないと頭を振った。しかし、竜子の素顔を拝顔してあまりの美形ぶりにのけぞっておったから、おいおい返事があるはずだ。たとえ話がまとまらなくてもまだ手がある。つまり、いずれおぬしを襲ってくる賊がいるはずだ。そいつらを追い払う代わりにおぬしから二千両を頂く。悪くない話だ」

銚子の中が空だと知ると、窓から顔を出して見世の前に出ている者に向かって「おい、酒だ、徳利で頼む」と注文した。

「き、貴様の正体は女衒だったのか。浪人とは申せ武士であろう。見損なった」

竜子は盃を投げつけた。だが、今度は近距離にもかかわらず、盃は侍の肩越しに飛んでいった。侍は襟首を掻いている。

「仕方ない、教えてやる。実はおれは助太刀屋だ」

「助太刀屋じゃと。ふざけたことを申すな。おぬしは人殺しであろう！」

「おれは殺しと誘拐はやらない主義だ」

「しているではないか。わらわを誘拐したではないか」

「人聞きの悪いことをいうな。襲撃してきたものを助けてやった上に、裸にして介抱してやったのだ」

わらわを、わらわを、と二度繰り返して竜子が声を震わせたとき、廊下から「奥山様はこちらですか」とおとなう若い男の声がした。おう、と右京之介が応えると、羽織を着た少し垂れ目の青白い色の若者が膝をついていた。

「伊藤、どうかしたか」

「一時（二時間）ほど前より大門のあたりをうろんな浪人が三人うろついていましたので、注意をしておりましたところ、若林殿が門を出るのを見計らって、姿が見えなくなりました」

若者の言葉遣いは武家のものだが、格好は商家の若旦那風だった。

「左太郎の後をつけていったのか」

「どうもそのようです」

「左太郎は辻駕籠に乗ったか」
「いえ、歩いて堤の方に向かわれました」
「すると、船賃も持っておらぬようだな。では途中から馬道にいったに違いない」
右京之介は立ち上がって帯を締め直した。
「馬を用意するように妓夫にいってくれ」
右京之介は竜子を見た。白い歯が薄暗い部屋で澄んだ水に並んだ貝のように輝いた。竜子の胸が鋭利な刃で刺された気がした。
「そういうことでちょいと出てくる。風呂に入って一杯やっておれ」
廊下に出た右京之介は振り返ってもう一度竜子を見た。
「それから、今は二千両の値札を胸につけておるのだ。傷をつけちゃならないぞ」
足音をたてて廊下を走っていく若様浪人の後ろ姿はあっという間に消えて、次の瞬間には窓の下の道に現れた。いつのまにか刀を差していて、手には徳利を下げている。その長身の後ろ姿は、見世からともされる提灯の明かりの下を獣のように縫ってすぐに遠ざかっていった。竜子は丸い月を見上げて窓の前に立ち尽くした。あの男はどこか遠く、たとえばあの月から粗忽にもすべり落ちてきたやつに違いないと思っていた。

四

若林左太郎が大門口を出たのは五ツ半（午後九時）頃のことである。大方の張見世の花魁はもうそれぞれ各人にあつらえられた座敷に客を引き入れていたが、仲之町にはまだ客の姿が溢れていてあちこちの路地からふらふらと酔客が這い出てくる。
左太郎は大門を出ると、客待ちをしている辻駕籠には目もくれずに五十間道から衣紋坂を上り、日本堤通りを浅草川方面に向かってゆっくりと歩いた。大きな丸い月の光が堤に射し込んで、やってくる町人の顔がはっきりと見えるほどである。神田明神の祭りで騒いだ勢いのまま、たいした銭ももたずに吉原めざして数名の職人風の若者が足をもつれさせてやってくる。そいつらをやり過ごして三町（約三百三十メートル）ほどいくと砂利場があり、馬道と呼ばれる路地が出てくる。
左太郎は川までいかずにその馬道を南に曲がって懐手をして歩いた。増上寺近くにある藩邸までは相当距離があり、酔った上に近頃下腹が緩んできた左太郎には半時（一時間）近くも歩くのは難儀だったが、なにせ猪牙舟の代金がない。左太郎にも武士の面目があるので右京之介から拝借するわけにもいかず、山谷堀にいく手前を折れて田圃の混じる浅草田町一丁目界隈を酒臭い息を吐きながら考えを巡らしていたのである。
町屋を過ぎてまっすぐに行くと、金龍山浅草寺の横手に出る。そこまでは左右に寺

が建ち並んでいて、土壁の向こうの寺からは一切の灯が洩れてこない。普段であれば漆黒の闇となり、仏様と同居している坊主でさえ怖気をふるいそうな案配である。今夜は明るい月光が道を照らしていたが、それでも通行する者はいない。

その静けさが、左太郎に味方した。酒を呑んではいても五感が生きている。後ろから足音を忍ばせてつけてくる者がいると感じた瞬間、左太郎はいきなり走り出した。悟られたと思った追っ手があわてて追走してきた。砂利を踏む足音で人数を推し量った左太郎は、刀を抜くやいなや今走ってきた道を逆走しだした。あわてたのは追っ手の方である。その者たちが黒覆面をしているのを月光の下で見定めてから、左太郎は掛け声も出さずに二人の男の腹をないだ。血しぶきを上げて転がった仲間を見て、残ったひとりは頭上に構えていた抜き身を下げて「待て」と吠えた。

これまでの左太郎であったならば、中西派一刀流の師範代としての名目もあり、たとえ相手が無頼漢であろうと、無益な殺生などすることはなかったのだが、右京之介の言動を目の当たりにしている内に、大分感化されてきた。なまじの手加減は己の生命の危機にはねかえってくると考えるようになったのである。それに来年春には国許に戻る手はずになっている。十九歳で祝言を挙げて以来三年間、孤閨を守っている三津の元に、元気なマラを携えて戻るという義務と煮えたぎる欲望がある。

待て、と吠えて刀を下げた相手に対して、左太郎は構えをといた。するとそれを待っていたかのように、黒覆面の侍は下段から切っ先を左太郎の喉元狙って突き上げてきた。

その機会を左太郎は捕らえた。構えをといたのは、「木偶坊の構え」という右京之介が命名した相手を油断させる構えの内のひとつなのである。これも右京之介の無茶苦茶な狼藉ぶりを見ている内にようやくモノにした技であった。

下段から突き上げてきた相手の切っ先を軽くかわしざま、刀身を返して峰で腹を打った。相手はそれで屈み込んだが、さらにその後頭部を打ち据えた。するとコンと小太鼓を叩いたような音が闇に響いて相手は前のめりに落ちた。一応周囲を窺い、もう襲ってくる者がいないことを確かめて刀を鞘に納めた。そのとき刀が真ん中からぽっきりと折れていることに気付いた。

――なんちゅう、なまくらじゃ。

そう舌打ちをしたが、考えてみれば一年前に古道具屋で一両二分で買った安刀なのだ。右京之介に加勢して数々の手柄を立てた刀は刀身がささくれ立ち、何度か研ぎに出したが、研ぎ師から、もうだめだす、といわれて突き返されたため、新たに購入したものだったが、やはり武士の命に匹敵する物は値切るべきではないなと内心忸怩たる思いで暗い道に転がった三人を見下ろした。

どうせ食いはぐれた浪人だろうと、そのまま打ち捨ててやろうかと思ったが、覆面だ

けでも剝いで尊顔を拝んでやろうという気になって、まず腹から血を流しているするめのように痩せた浪人の覆面を剝ぎ取った。顎の長い馬面が出てきた。まだ死にきれずに、うーうーと唸っている。

「儂は若林と申す者だ。おぬし、なぜ儂を狙ったのだ」

浪人は息もたえだえという状態で首を振っている。どうも、違うといっているようだった。

「儂を狙ったのではないのか。では追い剝ぎか」

助けてくれ、と呻いたのは二間ほど離れたところで腹を押さえている浪人である。左太郎は今度はその浪人の覆面を剝ぎ取った。頬骨の突き出た餓えた男の顔が現れた。

「誰に頼まれた？」

浪人は必死で何かを言おうとしているが、声が掠れて言葉にならない。

「誰だ。申せば介抱してやるぞ」

「き、きうち……」

浪人は悲痛な声でそれだけを絞り出した。

「木内？　木内なんだ。木内とは何者じゃ」

がふっ、と咽から固まった痰を吐き出した浪人は、それきり頭を垂れた。

左太郎は最後に打ち据えた三人目の浪人を仰向けにさせて覆面を剝ぎ取った。中年の

無精髭を生やした平凡な顔が満足そうに気絶している。左太郎はその浪人の刀の下げ緒をはずして手首を後ろ手に縛った。それからちょっと考えた末に、袴を持ち上げ、褌をずらして男根を剝き出した。冷え冷えとした夜風が亀頭を撫でた。左太郎は白河夜船に浸っている浪人の顔をめがけて放尿をした。うーうっと浪人は呻き声を出して頭を左右に振ったが起きる気配はない。

こいつをどうしたものか、と思案していると暗い闇の中から駆けてくる馬の蹄の音が響いてきた。おう、左太郎、無事であったか、と思い掛けない声が高いところから聞こえた。

「右京之介か。どうしてここにきたのじゃ？」

しこたま呑んで酔って寝込んだはずの右京之介は、馬上から夜の中でも潑剌とした表情を向けてきた。

「伊藤が知らせてくれたのだ。妙なやつがおぬしの後をつけていったようだとな」

ゼーゼーと荒い息を吐いて追いついてきたのは吉村弥次郎や佐々木勘助の仲間の伊藤幸三郎という若者である。元亀山藩の藩士だが、いずれも次男、三男坊で、いずれどこかに格好の養子先を見つけて婿入りするか、やっかい叔父となって生涯を兄から与えられた小遣い銭で生きるしか道のなかった者たちだ。昨年はみすぼらしい姿をしていたが、今は右京之介の舎弟分として三度の飯を食っているせいか顔色もよくなった。それ

に今夜はどこかの大店の若旦那風の格好でいる。
「うむ、この様子だとこいつらは返り討ちにあったようだな」
下馬した右京之介はそういって血を流して倒れている浪人ふたりを見下ろした。
「そうだ。面倒なので斬った。ところでなぜこいつがおぬしに知らせたのだ？　伊藤はいったいどこに潜んでおったのじゃ」
「なに、修治の計らいで伊藤に竜子を見張らせておいたのだ。商家の若旦那風にしてな」
馬が白い鼻息を吹いて顎を上下に振っている。その馬の鼻面を右京之介は指先で撫でた。すると不思議なことに馬は急におとなしくなって右京之介の顔に長い顎をすり寄せてきた。藩邸では「野犬も逃げ出す若林」などと同輩から囁かれている左太郎としては、動物にまで好かれる右京之介の魅力に嫉妬さえ覚えることがあった。
「若旦那か。どうも垢抜けんが、まあ、よい。だが何故修治がそのような算段をたてたのだ」
「それは色々ある。先程ちょっと説明したが竜子を吉原に囲い込んでおく必要もあるし、どうもまだおれをつけ狙っているやつがいるらしいし、用心しておるのだ。しかし、おぬしを襲うとは思わなかったな。どういうつもりだろう」
右京之介の安閑とした様子は月明かりの下でも充分に分かる。

「あれで説明したつもりか。おぬしはただ、若年寄、植村駿河守家長の姪が屋敷から逃げ出し、その竜子を逃がそうとした元のお女中とその婿養子を引っ捕まえたといっただけではないか。儂には何のことだかさっぱり分からん」
「その分からんところをほぐすために竜子を吉原に押し込めているのだ。先程聞いた限りでは、竜子は明年三月、仙崎藩という小藩の国家老の息子のところへ嫁ぐことになっているらしい」
「仙崎藩の国家老の息子じゃと？　その国家老は一体何を企んでおるんじゃ」
「播磨の本多領一万三千石を藩主から自分の息子に遺贈させようとしているのだ」
「なんじゃと。つまり藩主を殺害して、息子を藩主につかせようというのか」
「そのヘンがわからないし、どうなろうとおれの知ったことではない。要は竜子姫の助太刀をしてやろうということだ」
「銭になりそうか」
「少なく見積もっても二千両」
「に、に、二千両！」
「ゲーッ！」
と喚いたのは伊藤幸三郎である。夜目にも鮮やかにそり返った前歯を剝き出して震えている。年間一両二分の小遣いで兄にやっかいをかけていた三男坊にしてみれば驚くの

も無理はない。二千両あれば千五百年も生きながらえることができるのである。

「それはともかくこいつらは何者だ？　仙崎藩とも植村駿河守の高取藩とも関係はあるまい。くたばる前に儂の名をいってみたが反応はなかった。儂の懐を狙う阿呆はおらんしな。ただ、こっちのやつが、木内、とか最後に口にしたがその名に心当たりはあるか」

「ないなあ。おれとおぬしを間違えたにせよ、おれを殺したがっているやつはそこら中にいるからなあ」

「気楽そうにいうな。おぬしの身を守る拙者や修治、その他もろもろの者どもの気遣いは半端ではないんじゃぞ」

ふんふん、と右京之介は鼻先で嗤って、いつのまにか片手に提げていた四合徳利の蓋を歯を使って抜いた。お、と左太郎が驚いていると、おい、と右京之介は伊藤に声をかけた。伊藤はまだゼーゼーといっていたが、準備万端心得た様子で懐からぐい呑みを取り出した。右京之介はそれを受け取るとトクトクと酒を注いだ。酒が咽を通る水音が可憐に響いた。

「お、おぬし、酒徳利を持参しておったのか」

「たまたま用意してあったのだ」

「儂にもくれ」

左太郎は徳利を奪ってその口から酒を呑んだ。五臓六腑に酒が染み渡った。

「うまい。死んでもいいくらいにうまい」

「人を斬った後の酒は格別だろう」

右京之介はそういって白い歯を見せた。非情で不気味な笑みが夜に浮いた。

「だが、このままではただ働きになるな。なんとかこやつらの黒幕を突きとめて左太郎の小遣いを稼ぎ出してやろう」

「かたじけない」

左太郎は素直に頭を下げた。悪巧みにかけては右京之介は天下一品なのである。なにせ大垣藩の前藩主で老中を務めたこともある戸田采女正氏教を脅して大垣藩の金庫から十数万両をせしめたと噂があるほどの男なのだ。本人は二万両程度だと謙遜するが、どちらにしろ扶持米を札差に預けて、年に六十五両で暮らしを算段している若林家の当主としては爪の垢でも煎じて呑みたいほどである。

「左太郎、こいつを峰打ちにしたのか」

下げ緒を結ばれて転がされている浪人を見下ろして右京之介はそういった。

「ひとりくらいは生かしておこうと思ってな」

「では、刀が折れたな」

「折れた。安い刀は駄目だ。それにこの刀の背には焼きが入っておらん」

おい、伊藤、と右京之介は呼んだ。
「こっちのふたりはもう死んでいる。そこの破れ寺に放り込んでおけ」
「わたしがですか」
「早くしろ」
しぶしぶ伊藤は屍となった浪人の腕を引っ張った。
「のろのろしていると次は首が飛ぶぞ」
左太郎が怒鳴ると伊藤は泡を喰った様子で浪人を寺まで引きずっていった。朽ち果てた門が半開きになっている。境内は暗く、微かに月明かりが雲間から白っぽい霧のような光を投げかけてくる。枯れた八重葎が地面を覆い、所々に傾いた石塔や倒れた卒塔婆が崩れ落ちているのが垣間見える。伊藤の背中が夜目にも震えている。
「真っ暗で何も見えません」
伊藤は情けない声を出した。再び左太郎が吠えた。
「安心せえ、じき幽霊が灯籠を持って現れる」
「けっ」
荒れ寺は無住のようで庫裡も闇の中に溶け込んでいる。右京之介は浪人どもの腰から鞘を抜き、浪人どもが握っていた抜き身の刀を納めた。それを左太郎に差し出してきた。

「おい、追い剝ぎをやるのか」
「戦利品だ。昔は戦場では誰でもやったことだ。この三本の刀と新しい指物一刀と引き替えればそれなりのものが手に入る」
「なーるほど」
左太郎は折れた刀を鞘ごと棄てて三本の刀を手にした。右京之介といると、その行為が当然の報酬のように思えてくるから妙だ。
「伊藤、この浪人を背負ってくれ」
右京之介は酒をぐびりとやって気絶している浪人の腹に片足を置いた。
ふたりの死体を寺の中にようやく運び終えた伊藤は、ゼーゼーからハァハァに変わった声で「へえーっ？」と嘆いた。
「ど、どこまで運ぶんですか」
「大川だ。浅草寺の横手にいけば猪牙舟があるだろう。それからこいつを六万坪の物置に運んでおいてくれ。分かるな六万坪だ」
「知っています。しかし、この暗さではどこにあるのか見つけるのが困難です」
「文句の多いやつだな」
そういって右京之介は一歩足を前に出した。後ろに下がった伊藤は小石を踏んで仰向けにひっくり返った。若者の恐れる気持ちが左太郎にはよく分かった。

「馬に乗せてはどうだ」
「馬はおれが使う。ちょいといくところがある。あ、それからこれは今夜の稽古代だ。収めてくれ」
小判が五枚出てきた。左太郎の心が一気に湧き上がった。
「伊藤、早くせい」
右京之介に代わってそう強い言葉でいい放った。立ち上がった伊藤はへっぴり腰で気絶している浪人の両腕をとった。担ごうとして、伊藤は間延びした顔を上げて左太郎を見た。
「あの、なにか臭いますが」
「さっき儂がそやつにションベンを引っかけたのじゃ。ところが、そやつは気絶したまま目を覚まさなかった。なんならおぬしもやったらどうじゃ」
わあっと伊藤は喚いて浪人を落とした。左太郎が珍しく軽口を叩いたのは、久しぶりに小判が懐に収まったせいであった。

五

あの侍がいない内にここを逃げ出そう。
竜子の決断は早かった。そのときを狙っていたわけではないが、何だか得体のしれない密偵やらどこぞの藩士やら見張り役などが次々に現れて、何事かよからぬ企みをしているのを聞く内に、これから自分の身の上に災厄が起こりかねないと、不吉な予感がだんだん大きく轟くようになっていた。しかも、二千両などという大金を父上から身代金として強請り取ろうとしているなどは、正気の沙汰とは思えない。何が助太刀屋だと若様と呼ばれた侍を呪った。
一番の悪党はあの者ではないのか。あいつさえいなければ、私もお芳も屋敷を逃げ出すことができたのだ。
屋敷に戻ろう。逃げ出した理由は父上にはっきり申しあげればいいことだ。
できればお芳の長屋を探し当てて、当初の計画通りかくまってもらうのが一番良策なのだが、肝腎のお芳の家がどこにあるのか分からない。竪川にかかる二ツ目之橋を渡った本所のどこかだと聞いただけで、はっきりした場所は教えてもらっていなかった。そのお芳があの若様という大酒呑みの男にどうやら捕まったらしく、多分家にいるにしても見張りをつけられているのに違いない。もしかしたら私同様どこぞに監禁されているのかもしれない。そうであればとんでもないことに巻き込んでしまったことになる。
しかし、今はここでじっとしているときではない。ここにいれば安全だと侍はいったが、何者に対して安全なのか不明瞭ではないか。確かに、屋敷では私のことを見張っていた気配はあったが、それも嫁ぐことが決まってから侍長屋に見慣れぬ浪人のような

者たちが出入りするようになったのだから、むしろ外部から侵入する賊を警戒していたのかもしれない。そのために父上が雇った護衛の者たちだと考えれば、納得はいく。

その護衛役に雇われていた者が、お芳を私と間違えて追いかけたのは、まさにお芳が計画した通りだったのだ。

「姫様が屋敷を逃げ出すことを怪しむ者がいないとも限りません。何者かが見張っている様子なのは、ここへきましてすぐに気付いたことです。私がおつとめしていたときには見かけなかった侍たちが数名目にとまりました。ですから、門番には言い含めた上で、ここを出るときは私が先に走ります。見張りの者は姫様が女中の扮装をして逃げたのだと思うかも知れません。その場合は私を追うはずです。私はおとりになります。ご心配には及びません。主人が守ってくれます。たとえ婿でも剣術の腕は確かです。姫様は黒装束に姿を固めてあとについてください。はぐれることがあったときは、ひとまず二ツ目之橋の手前にある刃物直し屋で落ち合うことにしましょう。六蔵という老人がひとりで住んでいます。父の代から懇意にしています。家の戸は閉ざしていますが、裏の部屋では燈芯皿に灯をともすようにいいつけてあります。私の長屋は二ツ目之橋を渡った相生町ですが、お旗本の屋敷の敷地を借りている上、夜では探し出すことはむずかしゅうございます」

一度にお芳はそう伝えたわけではなく、座敷に顔を見せる都度、周囲を窺って何度となく説明してくれたものだ。随分用心するのじゃなといって竜子は笑みを洩らしたが、お芳の顔は真剣そのものだった。

「姫様が屋敷を逃げ出すことはそう簡単なことではないのですよ。簡単にことが運ぶのであれば、お昼に芝居見物と称して駕籠でお出かけになって、そのまま逐電してしまえばいいのです。でもそのときは大騒ぎになって町の者ばかりか大目付様の耳にも届いてしまいます。何事もお家の秘密にするのが大名家の心得です。お遊びではないのです。くれぐれも心得違いあそばしますな」

〈お芳の心配したことは、事実となった。だが、思いもよらなかったのは、お芳を守っていた亭主が、屋敷から追ってきた護衛の者と斬り合いになり、しかも深手を負わせてしまったことだった。場合によっては死んでしまったかもしれない。その最中に屋台の蕎麦屋が横からしゃしゃり出てきたために余計にやっかいなことになってしまった。あの騒ぎさえなければ、お芳にいわれた通り、もしもの場合を考えて黒装束に身をまとった私は、夜の中に紛れて落ち合う家まで逃げおおせることができたのじゃ。そうすれば、若様といわれる怪しげな侍に私が討たれることもなかったのじゃ。

あれは不覚だった。相手を甘く見ていた。まさか背後から襲った私の打ち込みをかわされるとは思っても見なかった。あの者が剣術修行などしているはずのないことは、あの呑んだくれぶりを見ていれば分かる。吉原に居続けて、遊女相手に鼻の下を長くして

いるようなやつにやられたのは油断したからじゃ。

しかも、あのような下品な侍に胸を触れられるとは、私はもうまともな大名家には嫁にはいけぬ。じゃが、それも考えようじゃ。どこぞの国家老の倅のものになるより、怪しい侍とはいえ、いつでも涼風に吹かれているような、あの妙な侍に初めての肌をさらした方があっさりとあきらめもつく。

じゃが、どうしてあやつは私の胸に手を差し入れることができたのじゃ。その寸前まであやつの顔は目の前にあったはずじゃ。それがふと気が途切れた隙にあやつは私の後ろに回り込んでいて、袖の中をかいくぐってあの指を私の乳首に泳がせてきた。あんな芸当が撃剣家にできるものだろうか。あれはしもじもの下卑た者どもの見せ物芸に相違ない。

さあ、あやつがいない内にここを出るのじゃ。屋敷を逃げ出す計画が失敗した以上、一端屋敷に戻って殊勝に暮らす方が植村家にとっても安全じゃ。どこぞの国家老の息子との婚姻などイヤだと言い張れば、また私が逃げ出すことを恐れて父上も承諾せざるを得ないであろう〉

袴が見あたらなかったため、竜子は着流しの着物を着て、黒い頭巾に羽織をはおり帯に脇差しを差した。腰には二寸（約六センチ）の小柄を挟み込んだ。男に扮装しさえすれば、大門を出ることはむずかしいことではない。地獄にいる遊女のような暮らしを垣間見ることになったのは、つらい思いではあったが、町娘でも知ることのないもうひとつの世間を見たことは、今後の竜子の生き方にも変化をもたらすような気さえしていた。

部屋を出て廊下を歩いていると、いつも部屋にくる遣り手といわれる女が古着を抱きかかえて下から上がってきた。竜子を見て立ち止まったが何も言わずにいた。一階の土間には客らしい商家の主の姿があって細い格子の中にいる遊女を透かし見ながら、見世の妓主と何事か交渉している。竜子は若様といわれる侍が好んで履いていた雪駄を捜した。顔を知っている喜助が、頭巾を被っている竜子をめざとく見咎めて、どこかへおいでになるのですか、と探りを入れるように聞いてきた。竜子が侍の扮装をすることはこの者は知っている。それで、少し廓を歩いてくると小声でいった。喜助は雪駄を捜して竜子の前にいったん置いたが、ちょっと首を傾げてから高歯の下駄を揃えて置いた。こちらの方が見栄えがいいですよ、と喜助は囁いた。竜子は女としては上背のある方だったが、男と較べるとやはり丈が届かない。黙っていると、喜助はお気をつけてと低い声でいった。

「松葉屋」を出ることには問題はなかった。用心が必要なのは大門を出るときだと聞かされていた。料理屋などに勤める女が楼外に出るときは会所から「女切手」をもらうことになっているという。これを持って外に出て、用事をすませて戻ってくるとこの女切

手を会所に返すしきたりだという。

しかし、竜子は女ではない。今は侍の扮装をして楼外に出るのである。この廓内で働いている女のようにふるまうことの方が余程むずかしかった。遊女の中には武家娘もいるだろうが、料理屋などで働いている女はみな町か地方出身の田舎娘なのだ。竜子は脇差しを差し、ゆっくりと仲之町を歩いた。菅笠を被った田舎侍や職人などが三味線の流れ出てくる楼を覗いたり、足をとめて下卑た笑いを浮かべて覗き込んでいる。不潔な男どもめと呟いて竜子は男どもに肩がぶつからないように歩いた。

大門が見えた。にわかに竜子の胸が高ぶった。二人の侍がよろけながら大門をくぐって出ていく。右側の面番所には町方の同心とその手下らしい者が座っていて、大門を入ってくる者にも、出ていく者にも声をかけることはない。ただ、目つきだけはやたらに険しい。奉行所の役人とはそういうものなのだろう。

左側の会所にいる町人が廓から帰っていく侍に如才(じょさい)なく挨拶をしている。ここは市中の番屋と同じで名主や地主などが番頭を出しているという。「女切手」を出すのもその者たちで、ここでは楼から逃げ出そうとする遊女たちを捉(とら)えるのも彼らの仕事なのだと竜子はすでに楼の遊女から聞いている。風呂場では女たちは何につけあけすけなので、黙っている竜子にも廓の様子が分かってきていた。

〈堂々としていればいいのじゃ〉

二人の足取りのあやしい田舎侍が大門を出た後で、職人が会所の者に何事か文句をいって出ていくのを見て、竜子は胸を張った。高下駄のおかげで、他の男たちと較べても竜子の背丈は見劣りはしない。竜子は職人の後について大門を出た。会所の者は何もいわずに通した。うまくいったようだった。喜助の配慮が功を奏したようだと竜子は高鳴っていた胸をひとまず撫で下ろした。

外には駕籠屋が待っていた。ここから屋敷までどれくらいの距離があるのか見当がつかなかったが、屋敷まで戻れば駕籠代くらいなんとかなるだろうと思って、竜子は声をかけてきた駕籠かきに近づいた。竜子は黙って頷き、今にも壊れそうな町駕籠に手をかけた。

「御武家様、ちょっと」

そう後ろから声がかけられた。振り向いた瞬間、腕をとられ後ろに絞り上げられた。屈強そうなふたりの男と痩せた番頭風の男が竜子を取り巻いた。

「いけねーな」

「『男の介』とはね。さあ、向こうで頭巾を取ってもらおうか」

力強いふたりの男に引き立てられて竜子は大門を再びくぐらされた。会所の中にはもうひとり書き物役らしい町人がいた。他にも外から駆け込んできた者がいた。「このやろう」と怒鳴られて土間に叩きつけられた竜子は、すぐに頭巾を剝ぎ取られた。もうひ

とりの力強い男が竜子の両腕を後ろ手に縛り上げた。男の怒鳴り声を聞いた数名の酔客が会所を覗き込んできて「いい女じゃないか」「かわいそうに四郎兵衛会所に捕まったかい」と口々にいっている。向かい側の番所からのっそりと役人がひとり現れ「こいつはどこの女なんだ」と訊いた。「さあ、それをこれから吐かせるんで」と会所に連れ込んだ男がいった。

「しかし、遊女には見えんな」と同心が覗き込んでいう。

「どれ灯をもっと寄せろ。うーむ。絶世の美女だ。噂に聞く三浦屋の高尾太夫が蘇ったようじゃな。これほどの傾城ならば榊原政岑ならずとも六千両を積んで落籍したくもなるわい」

同心は長い鼻を寄せてきて竜子の髪から襟首を嗅いだ。竜子はその間、腰に挟んでおいた二寸（約六センチ）の小柄を抜いて、気付かれぬように荒縄にあてた。

「どれ拙者に折檻をさせてもらえんかな」

にゅっと黄ばんだ前歯を剝き出して同心は背後にいる会所の者を見渡した。

「旦那、この女の詮議はうちらの仕事ですぜ。旦那はどうぞお引き取りなさってくだせー」

「さようか。しかし、密偵ということもありうる。そうなれば火盗改めの同心が出張ってくることになる。やつらの詮議はきついぞ。その前に儂らが下調べをせねばならんな」

同心は下卑た声で笑った。吉原は町奉行の管理下に置かれていて、派遣される役人は隠密廻与力だった。下役の同心が二人詰めている。通常身分を隠している隠密方には余禄はない。だが、ここでは上げ膳据え膳の待遇で、会席料理の費用は吉原が提供している。悪事に身を染めた連中が多く潜む吉原では彼らの権力は絶大だった。牢からシャバに転げ出した連中が最初に求めるのは女だと相場は決まっている。勿論、男の褌の中の事情など竜子は知る由もない。

「おい、おまえはどこの廓の女だ」

顔にあばたのある同心はそういいながら、竜子の顎に片手を伸ばしてきた。それからその手を下にずらして胸に触れようとした。

手首を縛り付けていた荒縄を、小柄でようやく切り取ることができたのはそのときだった。竜子は立ち上がりざま、同心の顎を下から突き刺した。ゲッと喚いて同心は顔を両手で覆った。竜子は前を塞いでいる会所の男たちの間をかいくぐって外に走り出ようとした。

その瞬間、足下を掬われた。前のめりに倒れた竜子の背中に重い身体が預けられた。髪を摑まれて地面に何度も顔を打ちつけられると気が遠くなった。首から腕にかけて縄を打たれたのも気付かなかった。かろうじて薄目が開いたのは、地面を引きずられてい

るときだった。男たちが口々に何事か喚いていたが、声が頭の中で反響を起こし、まるで太鼓の音のように響き渡った。

「なんという無礼なやつじゃ。構わぬ、裸にして簀巻きにせい！　そこらにくくりつけてさらし者にするのだ！」

顎に手拭いをあてた同心はすさまじい形相で叫び声をあげた。その手拭いがみるみる血に染まっていく。同心についてきた小者のひとりが「小高様、いかがいたしましたか」と口をひょっとこのように伸ばして間の抜けたことをいっている。いらだった同心はさらに、「簀巻きじゃあ！　裸にしてさらせー！」と喚いた。もうひとりの小者が会所の番頭たちに「よし、押さえつけておけ」といいざま竜子の着ていた着流しを乱暴に剝ぎ取った。

真っ白い肩が現れると、一瞬、男たちの間に静寂が走った。地べたに顔を押しつけられたまま、必死で男たちの腕から逃れようともがいたが、すさまじいまでの怪力に抑えられた竜子は身じろぎができず、まるで自分が草履に踏みつけられた虫けらのように思えた。竜子にできることは歯を食いしばり屈辱に耐えることでしかなかった。

「何をしておる！　早く裸にせえー！　水をぶっかけろ！」

同心の怒鳴り声が轟くと、男たちの腕がいくつも伸びてきて竜子の着物を剝ぎ取りだした。

「わかさま……」

竜子の口から思いがけない言葉が吐き出された。その侍から逃れるつもりで廓を出たのに、今はその侍が白馬に跨った覆面の剣士のように思えた。

背中の肌に水がかけられた。身体が縮まった。こんな生き恥をかくのなら、この場で死んでしまいたいと竜子は思った。それから今起こっていることは全て幻なのだと念じた。

しかし、幻ではなかった。いくつもの男たちの手が竜子の半裸になった肌を蹂躙していた。荒々しい指の動きがまるでヤスリのように痛い。舌を噛み切るしかない、と思い詰めた竜子は自らの歯を舌に立てた。

「お待ち下さい」

そういって会所に飛び込んできた者がいた。男たちの手の動きが止まった。

「松葉屋の者です。そのお方は遊女ではございません。うちのお客さんです。どうぞお許し下さい」

「松葉屋だあ？　ああ、おめーは松葉屋の喜助だな」

会所の者が喜助の顔を知っていたようだ。竜子の身体を押さえつけていた腕の力が弱まった。竜子はまだ水浸しで震えている身体をそろそろと起こした。

「へえ、さようでございます。そのお方は男の格好はしていますが、決して楼内から逃

げ出そうとしたわけではないんで。お客で上がったお方ですので、帰ろうとしていただけなんで」

「客だと。『男の介』の客なんてあるもんか」

「ですから、『男の介』ではないんで。お客さんなんです。大門をくぐるときもその扮装でお入りになったんですよ。覚えておられませんか」

「知らねーな。おりゃ、今日はずっとここにいたがこんなやつは見かけなかったぜ」

「おらもだ。たとえ頭巾を被っていようが、腰つきを見ればすぐに女だとわかるわい」

「女形かもしれねえしな」

会所の男たちの笑い声が響いた。会所には毎日四人が交代で詰めているので、案外大門をくぐって入っている客のことは見覚えているものである。

「このお客様がこられたのは四日ほど前なんです」

「四日前だと。女がなぜ四日も泊まっておるのじゃ。女が女を買ったと申すのか」

「いえ、そういうことじゃなくてですね、うちのお得意様のお連れ様なんで」

「お連れ様。つまり何か、この吉原の妓楼を出合茶屋代わりに使っていたというわけか」

「そんな風流なやつがおるもんかよ」

男たちの気は喜助に取られ出していた。竜子はさらされている肌をなんとしても隠したかった。たとえ背中とはいえ、これほど多くの男どもの目にさらされた以上、自害する他なかった。

「何をぐじゃぐじゃやっておるのだ。早く着物を剝いで簀巻きにせい！」

「お役人様、この方はうちのお客さんですから、それればかりはお許しください」

「許せだと、ふざけるな、この女は儂の顎を斬ったのだぞ。客も何も関係ないわい」

竜子の着物の襟は裏返しに剝ぎ取られて腰のあたりに止まっている。

「よし、儂が斬り捨ててやる」

同心が腰に差していた刀を抜いた。小高様、いくらなんでも、それればかりは、と小者が止めようとしたが、同心は小者を払いのけて叫んだ。

「同心の顎を傷つけたのじゃ。それにこやつは隠密じゃ、どこぞの藩が送り込んだ隠密じゃ。そうじゃ、隠密じゃ。成敗してくれる、女、覚悟せい」

同心は刀を上段に振り上げた。地面から顔を上げた竜子の目に、同心の大きな鼻腔から湯気が噴き出されるのが見えた。振り下ろされると同時に身体を反転させた。刀が地面を打った。かろうじて避けることができたが、とっさに着物で胸を押さえたため抵抗できたのはそこまでだった。

「こしゃくな奴め！」

同心は再び上段に構えた剣を打ち下ろした。最早これまでと竜子は観念した。その竜

子の耳に「コチン」という金具がぶつかり合うくぐもった音が聞こえてきた。そっと目を開くと、同心の振り下ろした刀は別の刀の柄を打ちつけたまま静止している。

「これはまずいことをしてくれたなあ」

そういったのは月の光をたたえた切れ長の目をもった侍である。仰天すると同時に白馬に乗った侍の幻影が頭の中から飛び出して、すぐ傍らで佇んでいる若様の中に溶け込んでいった。

「先程から見ておったのだが、いくら隠密廻の同心とはいえ詮議もなしに、女を斬り殺してはいかんなあ。喜助が何度もいっておったろう、この人は拙者の客だとな。おぬし、クビになるぞ」

クビ？　それはどういう意味だと小高源九郎は首を傾げた。聞いたことのない言葉だった。

「それに拙者のこの脇差しに刀疵をつけたとあっては手打ちをまぬがれんな」

侍はそういいながら脇差しを持った方の腕を同心につきつけ、もう片方の手で竜子の腕を取り、立ち上がらせた。竜子が濡れた着物を着るのを喜助はそっと手伝った。

「この脇差しがどうしたというのじゃ」

同心が侍の差し出した脇差しを首を丸めて見入る間に喜助は竜子を会所の隅に導いた。目端の利く男だった。

「柄だ」

「柄がどうした」

「家紋をよく見ろ」

行灯の下に脇差しを持っていった侍は、同心の顔に向けてその柄のあたりを突き出した。なんじゃ、といって見つめた同心は、不意に「ゲッ！」と叫んでその場にへなへなと崩れ落ちた。開いた口から一瞬の内にぶっとい涎が垂れ始めている。

旦那どうなさったんで、といって肩に手をかけた小者も、侍が突き出している脇差しの柄に目をあてると、ワッと叫んで尻餅をついた。どうした、といって覗き込んだもうひとりの小者も絶句したまま凍りついた目で立ち竦んだ。

「小高とか小者がおぬしを呼んでいたが、小高何と申すのじゃ」

そう侍が訊いたが三人とも脳を抜かれたように腑抜けになっている。入り口に突っ立っていた会所の番頭が「このお方は小高源九郎様で」といった。するといきなり小高は「許してくだされー」と喚いて両手を泥のようになった地面について頭を下げた。その肩が見るも無惨に震えている。

「駄目」

侍はそれだけいって会所の隅で血の気を失って佇んでいた女の背中に手をあてた。その侍が腰に差している脇差しの柄にそっと目をとめた会所の書き役が「あ」といったき

り雷に打たれたように棒立ちになった。

侍と女と喜助が会所の前に立ちはだかっていた男どもを掻き分けて仲之町を歩き去っていくと、会所にいた男たちがまだ瞬きを忘れてギヤマンをはめ込まれたように立ち竦んでいる書き役の肩を叩いた。

「いったいどうしたんだ。柄がどうとかいっていたが、みんなどうなっちまったんだ」

ひとりの大店の旦那風の男が訊いた。書き役はとぎれとぎれに応えるのがやっとだったが、その口にしたことの意味はみんなにはどうにか届いた。

「葵の御紋」

そう書き役が口にしたのだと理解した者たちは会所の番頭同様、膝がところてんのようになってその場に崩れ落ちた。

六

秋の日差しが眩しい。竜子を松葉屋に残して、右京之介はひとり、のんびりと大川沿いに駒形町を抜けて御厩河岸から渡し船に乗った。陽光に弾かれた波頭が水の星のようにきらめいている。波の上では小春を思わせる柔らかい風が吹いていく。

東岸に渡ると、旗本屋敷の続く静かな通りを南に向かった。御竹蔵の裏通りには竹を運び込む者たちの声が青く澄み渡った空に向かって響き渡ってくる。南割下水のところで足をとめた右京之介は、しばしの間、静まり返った旗本屋敷の前に佇んで、竹を割る威勢のいい職人の声とどこからか流れてくる琴の音に耳をそばだてていた。

二ツ目之橋の手前の相生町五丁目の番屋の前には、岡っ引きの六三郎の手下が所在なげに蹲って、手にした枝で地面に丸い輪を描いていた。俯いていても下っ引きの目玉が眼窩から飛び出しているのが分かる。

「おい、源助」

右京之介が呼びかけると源助は跳び上がった。ドングリ眼と小鼻が一度に開いた。わざわざご苦労だったな、というと、腰を折ってどういたしやしてと愛想笑いを浮かべた。顔の造作はごついが結構、目端の利く男なのだ。

「館野久兵衛の家はもう見つけてあります。そこの鈴木次助という二百石取りのお旗本の庭に長屋が二棟建っておりやして、その内の一軒に住んでいます。隣は空き屋になっているようです。ただ、ここらでは館野久兵衛といっても誰も知らなくて、その父御にあたる人なんでしょうか、館野忠五郎という人が借りていることになっているらしいんですが」

「館野久兵衛は忠五郎の婿養子だ」

へえ、そうなんで、と呟いた源助はどこか腑に落ちない様子でいる。

「どうかしたか？」

「へえ、ついでなんで奥山様から家を探せといわれて色々と探ってみたんですが、どうもその館野久兵衛という御家人はあまりいい噂を聞きませんで」

「ほう、どんな噂だ」

「どうやら賭場に出入りしていて借金があるとか、そのためタチのよくねえ浪人どもとつるんでいるとか、ま、そういった噂です。その浪人の中には両腕のないものもいたそうで……あ、ここが鈴木次助の屋敷です」

片番所付きの長屋門の構えをもった屋敷である。若様はおとないを入れることなく、勝手にくぐりの脇門を開けて中に入った。いいんですかと源助が腰を引き気味にして訊くと、後でギィと門が閉じる錆び付いた音がした。

振り返った若様がにやりとした。

「徳利門番だ」

いわれて源助が門を見るとそこに徳利が吊り下がっている。どうやら戸を開くと釣瓶式徳利は上げられることになっているようで、放っておくと徳利の重みで再び門は閉じられるものらしい。そういえば片番所はあるが、番人はいない。門番を雇うだけの給金がないからで、その代わりに徳利を下げたのだと知って源助は旗本の内情を見た気がしてざまーみろと思った。二百石といえば実収入は八十石もある。玄米を搗いて二割方減っても六十五石くらいになる。何もしないで幕府から屋敷を与えられた上に七十両もの

金をとる旗本に町民はだれだって腹を立てている。しかも拝領屋敷に長屋を建てて御家人を住まわせて家賃まで稼いでいる。大工も魚河岸で働いている魚屋も、年間わずか四両の金を稼ぐために朝早くから汗水たらして働いているのに、旗本というだけで無駄飯食いが許される世の中は間違っていると源助は思っているのである。

若様は勝手知った家といった感じで臆することなく進んでいく。屋敷の中は人気がなく物音すらしない。手入れの悪い庭を横切るとしもたや風の長屋が茂みの奥に二軒見えてきた。手前の家の前に佇み、ここだな、と若様がいうので、どうもそのようで、と源助は応えた。玄関から先は暗いが確かに人のいる気配がする。

「誰かおるか」

暗い家の中に向かって若様は声をかけた。それまで微かに聞こえていた人声がやみ、畳を踏む足音がして玄関に武士が現れた。目が暗さに慣れないので顔まで判別がつかずにいると、「これは奥山様」と声が出た。源助の目が落ちついてくると以前にも見たことのある若い侍がかしこまって頭を下げている。

「丁度、『小川屋』にお伺いしようとしていたところです。よろしければお上がり下さりますか。お芳もおりますゆえ」

そうか、といって若様は次の間を通って座敷に上がっていった。源助は玄関に座ってそこから見える荒れ果てた庭を眺めた。

座敷に座っている着流しの浪人を見たとき、そこに淡い月光を浴びた降三世明王がいるような気がした。降三世明王とは東方を護り、三世界の三毒を降伏させる明王であるとお芳は聞いている。その表情は恐ろしい憤怒の相であるはずなのに、目の前にいるまだ若い武士からは憤りは感じられない。それにまだ昼だというのに、若い浪人に投げかけられた明かりが月の光のようにたゆたうのも不思議なことだった。

なんだか妙な陶酔感に包まれて茶菓子を盆に置いたまま、少しの間お芳は佇んでいた。何をしていると新しく養子に迎えた吉村弥次郎にいわれて、あわてて居ずまいをただし、「粗茶でございます」と浪人の前に差し出したが、弥次郎の言葉が遠くから聞こえてくるほど、何かに憑かれたようになって座っていた。久兵衛の連れてきた客の前では同席することなど決してなかったことだ。

「奥山様にいわれた通り、持病の疼痛のため隠居した館野久兵衛に代わって御家人株を受け、四十俵三人扶持の幕臣になりました。普請組組頭様へのご挨拶もすみました。それはつつがなく運びましたが、案の定、お芳の様子がおかしい。いきなり吉村という男が傷だらけの夫と現れたのでは、驚かぬ方がおかしい。それは分かりますが、どうも尋常ではない。それで探っておりましたところ、昨日になってようやく事実が判明いたしました。お芳は前の夫、久兵衛を亀戸村にかくまっていたのです。そればかりではございません。そこにはとっくに死んだはずだと思われたお芳の実父、館野忠五郎が女と一緒にいたのです」

そう話をする弥次郎の言葉をお芳はただぼんやりと聞いていた。ここまで露見したら自分の力では最早どうすることもできない。ただ心配なのは竜子のことだった。そして、全く矛盾しているが、竜子を監禁していると思われる目の前の武士こそ、竜子を救ってくれる唯ひとりの味方ではないかという思いが、唐突に突き上げてきたのである。

奥山といわれている浪人が何者だかお芳には分からない。ただ、久兵衛の仲間でないことは確かであるし、植村家の下屋敷に近頃、用心棒の名目で住みだした浪人どもともつながりはないようだ。あの夜、自分を追ってきたのは屋敷にいた夜番の用心棒であったし、夫久兵衛に傷を負わせて取り押さえた上に、手筈通り逃げるはずだった竜子をどこぞに連れ去ったのも、偶然、その場に居合わせた奥山という武士だった。突然現れて、お芳が思い描いていた筋書きを滅茶苦茶にしていったのはこの武士なのだ。それでも頼みに思えてしまうのはなぜなのだろう。

夫、館野久兵衛が婿養子の分際で勝手に御家人株を売り払ったと知ったときはさすがに頭に血が上ったが、新たに現れた吉村弥次郎と名乗るまだ二十歳そこそこの若い武士が、養子番代の名目で館野家を継ぐと聞いて、むしろお芳は安心した。これで父、忠五

郎とも、父がどこからか連れてきた浪人の久兵衛とも縁が切れると思ったからである。父は浪人の久兵衛に御家人株を六十五両で売り、自分は隠居して五ツ目の渡しに近い亀戸村のしもた屋に元兄嫁だったはつ女と住みだしたのである。

（父や久兵衛のことなどもうどうでもいい。竜子姫さえ生きておれば私の命などなくなってもよい。でも……）

思い返せば、竜子のあの夜の行動にも腑に落ちないものがある。竜子はなぜあのとき黒装束のまま夜陰に紛れて逃げずに、この武士に斬りかかったのか。竜子さえ六歳のところに逃げおおせていれば、いまごろは小梅村の屋敷で身を潜めておられたはずなのに。明年三月まで待てば新たな巡り合わせを期待できたはずだった。

「分かった」

それまで黙って吉村弥次郎の言葉を聞いていた浪人は、静かにそういってお芳を見つめてきた。鋭い目だった。だが黒い瞳の底にひだまりのような温かいものが潜んでいるのを感じて、思わずお芳の身体がほてった。ずっと昔、まだ娘だった頃に感じたことのある陽炎のような恥じらいが胸にたちこめてきているようだった。

「何故、久兵衛をかくまったのだ」

静かに糾弾してきた。

「ひどい傷を負っておりましたから」

「それはそうだ、植村家の用心棒を斬り殺してしまったのだからな。報いを受けて当然だ」

「……はい」

「おまえの親父殿は、息子が死ぬとその後、嫁に養子をとらせず、娘のおまえに婿養子として久兵衛をとらせたということか」

「そういうことになります」

「つまり息子の御家人株は親父が処分したというのだな」

「そうです」

「てことは、親父殿は息子の嫁とデキていたな」

「は？」

「密通だ」

ドキッとした。この人は何者だと改めて思った。

「まあ、それはよい。親父殿は借財を整理する必要に迫られていたのだろう。それはともかくお芳は、竜子に屋敷から逃げ出したいと相談を受けたのだな」

「そうです」

お芳は固くなっている膝をさらにきつくした。

「それはいつのことだ」

「二十日ほど前に呼び出しを受けました」
「なぜ、止めなかった」
「お止めしました。ですが、姫様は田舎大名の国家老の子息に嫁ぐくらいなら、町娘にでもなって自由に暮らしたいと……」
「と、何だ」
「と、申されましたので、御決意は固いと思いまして求められるままに手引きをいたしました」
「その国家老が持参金ならぬ、結納金名目の支度金を植村家にいくら用意したか知っておるか」
「存じません。相手側は何故、姫様に御支度金など用意するのですか」
浪人からの反応がなかったので目を上げると、すずしげな目がお芳を見つめていた。質問の内容はまるで科人に対するように厳しいが、浪人の表情は慈愛に満ち溢れている。お芳は身体が風にさらわれていくような気がした。
「おれの想像では少なくとも五千両を用意したと見ている。つまり金で竜子を買ったのだ」
「何故そのようなことを」
「親父殿の植村政直が娘を売ったということだ。ま、三千石でも案外内情は厳しいのかもしれないな」

「で、ですから、何故、そのような途方もないお金を、仙崎藩のような小藩の国家老が用意してまで、竜子姫を嫁にほしいと申し出てきたのですか」
「姫の美貌が西国まで聞こえたということだろう」
「そのようなことをいって私を蔑むのですか。あなたは一体どこのどなたなのですか。姫を拉致したのはあなたなのでしょう」
「拉致したつもりはない。たまたま殺し合いに出喰わして眺めておったら、曲者に斬り込んできただけだ。だから捕らえて折檻した。それはそうと、おぬしにもうひとつ聞きたいことがある」
お芳は黙り込んだ。浪人の小麦色の肌がなまめかしいほどに艶やかなのは、女のお芳でも羨むほどだったが、それは表向きのことで、この浪人の腹の中にはどす黒い計略が渦巻いているに違いないと思っていた。
「夫の久兵衛に加勢を頼んだのは、屋敷にたむろする何者かがおぬしらの計略を知ったからだと感じたからか」
「そうではありません」
お芳は見つめてくる浪人の眼光に向かって強く押し返した。だが、胸の内では複雑な思いが右往左往していた。屋敷の者がお芳の動向を怪しんでいる様子はなかったが、姫

が逃げ出すことを手伝ったのは、姫の思いを遂げさせたいという願いがあったことと、もうひとつ、植村家の下屋敷に置いておくことの危険を感じていたからである。

「おぬしはなぜ久兵衛などという怪しい婿養子に用心棒など頼んだのだ」

「何分夜のことゆえ、だれに因縁をつけられるか分かりません。久兵衛は剣には自信のある人でしたから」

「加勢だけでなく、竜子が逃げ出すための算段をしたのも久兵衛ではないのか」

「はい」

「久兵衛は博打好きで多額の借金があることも知っていたのか」

「借金があったことは存じません」

「御家人株をおぬしの親父殿から買った金も一時博打で稼いだものだ。国を離れた浪人どもと交わって盗賊、恐喝まがいの犯罪を企んでいたのを知っているか」

「まさか、夫がそのようなことを」

お芳は悲鳴をあげた。久兵衛が得体の知れない人だという思いは初めて顔を合わせたときからあった。婿に入ると知ったのは兄の忠太が急死して数日しか経っておらず、久兵衛なる人物がどういう人かも分からないまま、父忠五郎から命じられて婿養子にとったのである。本来なら未亡人となった兄嫁のはつ女が婿をとるべきなのに、はつ女は館野家を継ぐことは頑なまでに断って、夫の野辺送りをすませるやいなや実家に戻っ

てしまった。父忠五郎と兄嫁だったはつ女の関係を知ったのも、その後のことだった。

植村家の下屋敷で竜子姫の世話をしていたお芳にとっては何もかもが驚きの連続だったのである。ただ、久兵衛との床入りは拒み続けた。初めての夜に受けた乱暴な扱いに嫌気がさしたのである。夫は男というよりケダモノのようだった。

「おぬしが久兵衛に相談をもちかけさえしなければ、竜子が拉致されることはなかったのだ。おれのことはこの吉村からどのようなやつだと聞いている？」

細面の顔に浮いたやさしげな笑みが向けられている。それでいて剣呑な目がお芳を刺してくる。お芳は自分が逃げ場のない小兎になったように感じた。

「恐ろしいお方だと」

おい、お芳、と弥次郎が口を挟んだ。口元が震えている。

「それだけか」

「姫様を救い出してくれるお方だと」

竜子が右京之介に拉致されたことを吉村弥次郎が知ったのはつい昨夜のことである。しかもお芳にかくまわれていた久兵衛を改めて痛めつけたときである。六万坪の小屋から解き放されて亀戸村に逼塞していた久兵衛が、何故、竜子姫が若様にさらわれたことを知っているのか見当がつかなかったが、それを聞いたときの弥次郎はただ混乱してしまって、冷静に筋道を考えることができないでいた。それまで弥次郎がしたことといえ

ば、若様が新しく借りた旗本屋敷で南蛮渡来の設計図をもとに回転式十連銃の開発をしていたことと、用心棒を斬り殺した御家人を右京之介に命じられるままに知っていることをはき出させようと責めただけである。そして今は右京之介が出した八十両で御家人株を買い取ってもらい、お芳の養子に納まっている。

——なんだか、今でも夢を見ているような気分だ。

と弥次郎は思うことがあった。その間、お芳の行動に不審なものを感じることがあり、一昨日からお芳のあとをそれとなくつけていたのである。亀戸村の目立たない家作に入ったお芳が、江戸から出ていったはずの元夫の久兵衛の世話をしているのを目の当たりにしたときは、腹に潜めていた短筒を取り出してふたりに向けた。平山行蔵の一番弟子であった下斗米秀之進から稽古用に与えられたものである。仰天した久兵衛は土間に顔をすりつけて命乞いをした。傷の状態はまだ相当にひどく歩くことさえ支障があったが、弥次郎は即刻その場で久兵衛を捕縛し、ふたたび六万坪の小屋に連れ込んだ。そこには伊藤幸三郎が連れ込んだという浪人が、すでに簀巻きにされて土間に転がっていたのである。

「お芳、おぬしはおれに嘘をついた。どういう嘘だかおぬしには分かるな」

諭すように浪人はいった。

お芳は返事をしかねた。竜子の逃亡を手伝ったのは、竜子の命を守るために姿を消させる他なかったのだとお芳は胸の内で呟いていた。だが、初対面のこの浪人にその思いを打ち明ける必要はなかった。それこそ危険だった。

「嘘をついたのは当然だ。お芳にとっておれは怪しい浪人にしか過ぎんからな」

その通りだとお芳は呟いた。

「お芳殿はいくつになられる」

不意に浪人は質問を変えた。お芳の頬がほんのりと紅を差したように赤らんだ。自分が娘に戻った気がした。新妻といってもいい女の横顔を盗み見た弥次郎は、さっきまでの怒りを忘れて美しい人だと改めて思った。

「にじゅう……し、になります」

「形のよい耳をしておられるな」

「……」

黙ったままお芳は首を傾げた。弥次郎も若様を見直した。一体何を言い出したのかと思った。

若様は刀を手に立ち上がると、こともなげにこういった。

「竜子の耳とそっくりだ」

第四章　遠山観音七変化

一

愛宕下にある植村政直の屋敷に忍び込むのに丸三日を要したのは、十五夜から月が雲間に隠れることがなく、夜がずっと明るかったからである。そのため修治は植村家の屋敷を挟んだ日蔭町通りにある露月町の目立たぬ宿でふた晩を過ごした。古着屋では荷物が嵩むので、旅の俳諧師の様子を取り繕ってひねもす向かいの屋敷を眺めていた。怪しまれない程度に宿の者には心付けを百文だけ渡しておいた。多すぎてもよくないのである。夕餉には燗酒を一本つけてもらった。老人の装いをして白い顎髭をつけていたが、それでも宿の年増女中が誘いをかけてくるので困った。修治は若様と違って、女をあやつるのが苦手なのである。

月が雲間に隠れるのを待って、そろそろと動き出したのは三日目の晩の五ッ（午後八時）過ぎである。宿の者には句会があるので二日ほど留守にすると夕餉をとったときに伝えたのだが、出掛けるときになって、宿の主人が短冊らしきものをうやうやしく持って二階の部屋まで上がってきて、「できましたらここに一句お願い致します」というので、小硯箱で墨を磨り、矢立を取り出して「旅人の寝てから霞む月の雁　撫仙」と書いて渡した。主人は念仏を唱えるように押し戴いて感謝していた。

植村政直の屋敷は分家とはいっても三千石の大身だけあって、日蔭町通りに面した下見板張りの塀の長さは三十間（約五十五メートル）ほどもある。弥太の住む甚兵衛長屋など四十戸の裏長屋がそのまますっぽりと入ってしまうほどの広さである。裏手にはやはり大身らしい旗本屋敷があり、その西側には遠江守、美濃守、安房守などの大名屋敷が連なる愛宕下大名小路が通っている。

厚い雲がちらちらと覗いていた月を完全に覆い隠すのを待って、素早くパッチを穿いて植木職人の出で立ちに着替えた修治は、そっと植村政直の屋敷に忍び込んだ。万が一、見つかったときは、植木屋で逃げ通すつもりでいる。いかにも盗っ人でございと白状しているような無粋な黒装束などはしない。三千石の大身ともなると侍や槍持ち、立弓、鉄砲など軍役の者でも十人ほどが長屋で寝起きしているはずだ。旗本だとさらに馬の口取りや足軽、挟箱持ち、沓箱持ち、など平時でも十五人ほどは置いておく。植村家は旗本ではないから使用人の数は勝手だが、それでも台所など女を多く使うので総勢で三十人くらいは使用人が常時働いていると見ておいた方が無難である。その使用人の数だけ、忍び込む方では用心が必要なのである。

修治は裏手に回りまず風呂敷に包んだ着物を、屋敷の東南に作られていた祠の後ろに隠した。屋敷を出るときは、再び俳諧師に戻るためである。そして、かねてから目をつけておいた仏間から二階の屋根裏に忍び込み、書院からいくつかの小部屋を抜けて、まず奥座敷天井裏の暗がりに屈み込んだ。それからそろそろと天井裏にかまされた梁の上を爪先をたてて歩いた。

部屋数は二十室を越えていたが、造り自体は格別のこともなく、上の間の隣には御次の小座敷が続き、書院、祝いの場、武芸場の他茶室も屋敷内にしつらえられていた。まだ十歳を出たばかりの跡取りは別棟に住み、そこにも十に余る部屋数があり、奥座敷の控えの間には近習らしい年若い侍が寝間をとっていた。旗本屋敷の中には奇妙奇天烈な建築物もあり、住んでいる者が迷子にならないのが不思議なくらい複雑に造作されていることもある。

日中は道具屋や呉服屋、台所には魚屋、野菜売りなど御用聞きが来たようだったが、夜になると屋敷は長屋門を固く閉ざして訪問客を拒絶していた。ひとりだけ非常門から本家からの使いらしい者が来ただけで、主座敷で書き物をしていた政直は取り次ぎには応じることはなかった。ただ、用人が二度も政直のいる座敷に来て、何事か報告していた。ようやく小耳に届いた言葉の端から、どうやら下屋敷から消えてしまった姫の消息が一向に摑めていないと伝えたようだった。噂が広まるのを恐れて家に仕える侍たちの

中で、探索に使っているのはわずか二名だけだということも用人の話ぶりで分かった。政直は姫を守って追いかけていった別邸の浪人のことはあまりよく知らないようだった。用人に新たに与えた指示も、町方や目付には絶対に気取られないようにというものだった。不思議なことに姫がいなくなったことについては狼狽している様子はなかった。

政直は四十歳半ばで小太りだが、肌の艶はよさそうで、なかなかの勤勉家に見えた。政直は夕餉をとるとすぐに寝室に入った。奥には奥方の他、いるのは女ばかりで、奥方は政直とは別の部屋で床をとった。実際の年齢は四十歳くらいだろうが、皺が深くお歯黒を塗った妻女は五十歳ほどにも老けて見える。

政直が寝入るのを確かめて修治は天井を出て屋敷の裏の物置に隠れた。縁の下にもぐり込む方が安全ではあったが、そこは異様な虫が這い出てきて、秋も深まったとはいえ最後に噛みついてくるのは雌なので痒くてたまらなくなるのである。

翌日は物置の中で干飯を齧って夜がくるのを待った。昼間、物置の戸を開けたのは清掃用の庭箒を取りに来た下男だけで、藁の積まれてある背後にいる修治には全く気付く様子もなかった。修治は暗い中で充分な睡眠をとった。寝ている昼の間、屋敷には何人かの訪問客があったようだが、修治は気にすることもなく眠り続けた。

悪事は夜、謀られるものである。

屋敷の式台に立派な駕籠がつけられたのは陽が沈みかけた六ツ（午後六時）頃のことである。修治は大胆にも物置を出て、訪問客を近くの植木の陰から見定めていた。旗本の出で立ちだが、供の者はひとりだけで、それも老人だった。奥に入っていった客の面影がそれとなく政直に似ている。弟だとしたら十歳ほど若い。修治は書院に回り、そこから仏間に入って屋根裏に這い上がった。

ややたって、奥座敷に用人に案内されて客が入ってきた。忠政様がお着きにございます、という白髪交じりの用人の口上を耳にして、やはり弟だったかと修治は思った。通常、旗本屋敷では奥には家人以外は入れないものだからである。だが忠政という名の弟のことは右京之介から聞かされていなかった。奥に仕える小姓が茶と菓子を運んでくるまでふたりは黙っていた。小姓の足音が遠のくのを待って、ふたりは茶菓子も食べずに会談に入った。

「脅迫状とはどういうことだ」

昨日はゆったりと構えていた政直だが、今夜はいらだちの声が混じっている。

「これでござる」

忠政は書状を差し出したようだ。一瞥して政直は呻き声をあげた。

「二千両……」

「さよう、二千両。だが、なぜこのような書状が拙者の屋敷に届けられたのか合点がいきませぬ」

「……」

「竜子姫はそれがしの姪ではあるが、二千両もの大金を強請るのであれば、その矛先は当然親である兄上に向けられるはず。なぜ拙者が二千両もの金子を用意しろと脅迫されたのか理解に苦しむ」

「うむ……」

「その前に何故、竜子姫が屋敷を脱走したのか、そのいきさつが拙者にはまるで分かりませぬ。脱走の理由もそうだが、世間知らずの竜子姫に簡単にできることではない。また、竜子姫がひとりで仕組めることではござらん。なんらかの計略か或いは陰謀が働いているのやもしれませぬ。兄上、そうは思われませぬか」

「陰謀？　いや、竜子が屋敷から消えたのは陰謀などではない」

「なぜそう断言できるのですか。ここにその証拠がある。猶予は五日。どのような手段を使って二千両もの大金を奪うつもりか分からんが、五日後といえば二十三日。それまでに用意せよと書かれている。わずか五日ですぞ。二千両のためなら女のひとりくらい誘拐する者はいくらでもおります」

「そちは竜子は自ら屋敷を逃げ出したのではなく、何者かが仕組んで拉致したと申すのか」

「そう考えるのが自然でござる」
「……」
「兄上どうされました。何か不審でもございますか」
「ひとつだけおぬしに申しておくことがある。ただし他言無用、これは菅沼しか知らぬことじゃ」
「用人には知らせて拙者には知らせなかったということですか。聞き捨てなりませんな。そもそも本家に三千両もの大金を用立てるためには竜子姫をしかるべきところに嫁がせて、迎える側から支度金を供出させるしかないと申されたのは兄上ではございませんか」
「そうだ。だが、婚礼が整ってから妙なことが起きている。気のせいかもしれんが、腑に落ちないことがあった」
「何でござるか、その腑に落ちないこととというのは」
「いや、おぬしに申しておきたいことがあるというのはそのことではない。別の話として聞いてくれ」
「お聞きしましょう」
沈黙があった。茶托の音がしたのは政直が咽を潤したからしい。それでも政直は口を開かずにいる。

「何でござる」
忠政が静けさに割って入った。うむ、と政直は呻いた。
「竜子は儂が逃がした」
「な、な、な、何ですと！」
悲鳴のような驚愕の声があがった。忠政はのけぞったようだったが、天井裏で聞いていた修治も耳が菅笠のように広がった。
「な、何のためにそのようなことを！　兄上、狂われたか！」
「狂った」
政直の声は平静に戻っていた。それから囁くように呟いた。
「そうおぬしに思われても仕方がない」
「何故屋敷から逃がしたのですか。説明願いたい」
忠政の荒い鼻息が修治にも聞こえるようだった。
「儂が逃がしたというのは正確ではないかもしれん。だが、竜子が屋敷から出奔するのを黙認した。逃げたがっておったのじゃ」
「竜子姫が、逃げたがっていたと。それは婚礼の相手が気に入らぬということでござるか」
「それもあるだろう。じゃが、武家の生活に辟易したのじゃろう。堅苦しいしきたりの

中で生きるより、勝手気儘に暮らしたかったのじゃ。竜子の母がそうであったようにな」

「竜子姫の母のことなどどうでもよい。どうせ兄上の庇護の元にどこぞで悠々と暮らしておるのでござろう。それより竜子姫が屋敷から逃げたがっていたと兄上はどうして知ったのですか」

「元の付き女中を竜子が屋敷に呼び寄せた。そこで屋敷を出たいので手引きをしてくれと頼んだのじゃ。播磨国になど行きたくないと申しておったそうじゃ」

「なるほど。で、そのことを兄上に知らせたのは誰です？」

「竜子のことはいつも屋敷の者が見張っておる」

「そうでしょうな。だが、その元女中という者が、裏切って竜子姫を兄上の知らないところにかくまっているということは考えられませぬか」

「それはない。先程も申したが、竜子が屋敷から逃げ出したいと相談したと知って、儂は黙認したばかりか、逃げる算段を取り計らうようにその元女中に菅沼から伝えさせたのじゃ」

「何故です。何故そのようなことをしたのです。どうしてそれがしが折角整えた婚礼を潰すようなことをしたのですか」

「それは違う。婚礼を潰すつもりなど拙者にはなかった。詳しくは申せぬが、何かが竜

子の周りで起きている。じゃが、その何かが分からぬ。ただ、不吉なものを感じるのじゃ。それで儂の命令で竜子をいったん屋敷から逃がした。明年の三月まで姿を隠すように仕組んだのだ。身代わりも用意しておく手はずだった。このことは無論竜子も知らぬことじゃ」

「身代わり？　そのような者は深川の屋敷にはおりませぬぞ。いや、そんなことより、何故、竜子姫を屋敷から逃がす必要があったのですか。そんな姑息な手段を使ってまで姿を隠す真意とは何ですか」

「不吉なものを感じたといったであろう。これ以上は儂にも説明がつかんのだ」

「支離滅裂でござる。なんたる言い草。賢明な兄上のお言葉とも思えませぬ」

「騒ぐな」

「……分かりました。竜子姫を父である兄上自ら逃がしたことはもうお尋ねしません。それで竜子姫は今どこにおられるのですか」

「それが……分からぬのじゃ」

「何ですと！　分からないとな。何たる言い草。それでは拙者のこれまでの粉骨砕身しての斡旋は水の泡ではござらぬか」

「いまだに竜子の行方が分からないと、実は菅沼から先程報告を受けた。安心しておったのだが、竜子は用意しておいた隠れ家にはいっておらんのだ。途中で消えてしまった

のじゃ。儂もどうなっているのか分からぬ」

「元女中はどうしたのですか。竜子姫を連れて一緒に屋敷から逃げたのではないのですか」

「逃げた。だが、途中で何者かに襲われて、護衛として連れていた夫は捕まって行方知れずになったそうじゃ。元女中も儂が用意した家にはおらん。向島の小梅村じゃ。実はその家に竜子を当分の間かくまう手はずになっておったのじゃ」

「要するに策士、策に溺れるということでござろう。救いようがありませぬな」

「難題はまだある。駿河守から例の金子を早くせいと矢の催促じゃ。明日にも屋敷に赴かなくてはならぬ」

「兄上か……。駿河守家長殿もいい気なものだ。あの凡庸な兄上が若年寄では満足できずに、賄賂攻勢でいずれは老中を狙おうとはあきれたものだ。しかも、すでに千八百両を苦労して工面したというのに、また三千両も供出しろと儂らに命じるとは、いかに藩主といえども気楽すぎる。全ての元凶は家長にあるというのに、こっちの苦労も知らんとは、馬鹿につける薬はないわい」

「おぬしの怒りも分かる。全てがうまくいけば忠政にも分家として一千石を与えるように駿河守殿に進言するつもりでおったのじゃ」

「駿河守は我らに三千両を用意しろと簡単にいうが、もしこのまま竜子姫が姿を消してしまえば、仙崎藩本多家お年寄からの支度金五千両は絵に描いた餅でござりますぞ」

「分かっておる。しかし、全ては駿河守殿に幕閣で権勢をふるってもらうためにすることなのじゃ。これは分家の役目なのだ。そのために三千石も頂いておる」

「兄上はそれで満足であろうが、末弟のそれがしはわずか百五十石の捨て扶持。一千石などはかない夢でござる。賄賂を贈ったところで古狸の土井大炊頭が兄上の駿河守を老中に引き立てるかどうか分からぬ。なんせ寛政の亡霊、松平伊豆守が再任されたからには、賄賂の効き目も怪しいものでござる」

「その通りだ。だが、兄上から命じられたらやらなくてはならぬ。そのために竜子を、断腸の思いで田舎者にやることにしたのだ」

「だが、その竜子姫が誘拐された上、何者とも知れぬ輩どもから二千両も要求されるとは、こちらは手も足も出せん。しかも敵は金子と引き替えに竜子姫を返すとはいってはおらん。ただ、五日後に金を用意せよ、それまでにまた連絡すると書いて寄越したのみでござる。こちらは、どのようにして二千両もの金子を用意したらよいのか。大目付に助けを求めるわけにもいかぬし、全く打つ手がござらん」

忠政の抑えた声は低く響き、引きずられるように政直の呻き声が畳に染み込んだ。修治はそれから梁の上で石のように固まって蹲ったまま、一時（二時間）以上を過ごした。

二

修治が俳諧師の着物の上に道中合羽をまとって露月町の旅籠に戻ったのは、夜の四ツ（午後十時）過ぎのことだった。北西に吹く風が、夜空にぶら下がった雲を押してときどき月を隠した。どこかの宿から控え目に鳴らす三味線の音が聞こえてくる。軒行灯のともる旅籠の戸を横に引き、低い戸口をそっとくぐって土間に入ると、暗がりからよたよたと迎えに出た主が「半時（一時間）ほど前からお客様がお待ちです」と背中を屈めていった。下女が盥を持って出てくると、ぬる湯をいれて修治の足袋を脱がせて足を洗いだした。修治は首を傾げた。この宿に滞在していることは誰にも知らせていない。完全な隠密行動なのである。

それで用心して二階に上がった。部屋から廊下に灰色の明かりが洩れている。宿は知らせてはいないが、修治が植村政直の屋敷を探るだろうことは若様も読んでいるはずだ。さては元亀山藩の若侍三羽烏にここを突きとめさせたか、と思いながら障子を開けると、意外にもそこには着流し姿の若い侍が窓の桟にもたれかかって酒を呑んでいた。あまりにくつろいだ様子でいるのでどこかで会った者かと思ったが、どうにも顔に見覚えはない。若侍は修治に向かってにやりとしたが、挨拶をする気もないようで、そのまま酒を呑み続けている。

「どちら様で」

「拙者か、拙者は遠山家の当主だ」

そういって左手に持っていた短冊を投げ出した。それは修治が宿の主人に出掛けに渡したものだった。

「といっても、先月当主になったばかりの新米でな、通之進という名の方が馴染みがある」

「遠山様とおっしゃるので」

「金四郎だ。遠山家では代々当主は金四郎の通称を名乗ることになっているそうだ」

「私に何か御用でございますか」

この夜更けにしかも他人の部屋で酒を呑むとはふとどきな若者だと修治は思っている。金四郎と名乗る若者はまだ十七、八歳だろうが、妙に世間ずれしている所がある。

「分け前をもらいにきた」

こいつ何を言っているのだと修治は腹を立てた。

「ご冗談をいってはいけません。俳諧師に分け前を求めるのは筋違いでございます」

そういったが若侍は修治の言葉を無視して畳に落とした短冊を拾い上げた。

「『旅人の寝てから霞む月の雁』か。撫仙といわれるのか」

「さようでございます」

「『旅人の寝てから霞む野梅かな』と芭蕉翁が詠んだ句がある。これは盗作だな」

ぎょっとした。

「背筋が寒くなったか。ではもう一句。『旅寝よし宿は師走の夕月夜』。さあ、分け前をもらおうか」

修治は片膝をついて両肩をそっと緩めた。小賢しいが、油断がならない若造だった。

「似たような俳句はたくさんございます。そのたびに分け前を払っていたのでは俳諧師はやっていけません」

「俳諧師にではない。盗っ人に要求しているのだ」

修治は道中合羽の後ろに腕を回して煙管と煙草入れに指をかけた。すると若侍の後ろの壁にたてかけてあった刀がするすると伸びてきて、刀の鐺が修治の右肩を押さえた。

若侍の動きは緩慢だったが、鐺だけが蛇の鎌首のように俊敏に伸びてきた。

「俳諧師が煙管に小柄を仕込んではいかんぞ。指刀の中に粒金がぎっしり並んでいるのなら話は別だ」

白い歯が行灯の明かりに浮き上がった。

「分からんか。遠山の家は植村の屋敷と隣り合わせになっておるのだ」

あっ！　と修治は呻いた。愛宕下大名小路に遠山家の上屋敷が確かにあった。すると、この若侍は……。

「そう驚いた顔をするな。今おまえが頭に浮かべたのは遠山美濃守の屋敷の方だ。当主は友寿。美濃国苗木藩一万石だ。ちっぽけでも大名だ。だが近所ではあるがうちとは関係がない」

――なんだこの小僧は。他人の頭の中を読み取ることができるのか。

「おれの親父殿は幕臣だ。遠山景晋といってな、まだ現役で頑張っておる。先年は長崎まで出向いて、荒れ狂っていたオロシアの船の船長をわざわざなだめてきたそうだ。おれは当主とはいってもまだ親父殿にやっかいをかけている。いわば居候だ。小遣いくらいは自分の裁量で稼ぎ出さなくてはならん。そこに都合よく盗っ人が出てきたわけだ。どうだ、いいカモだとは思わんか」

思うわけがない。

「おれは暇でな、秋深しとはいっても日柄のよいときは屋敷の屋根に寝転がって松平の屋敷や鉄砲調練場の方を眺めておる。そこで妙な動きをする植木職人を見つけたのだ。おまえだ」

若侍は突き刺すような目尻で修治を睨んだ。それから畳の盆に置いた銚子を振った。

「おい、酒だ」

いきなり叫んだ。修治は腰が抜けるほど驚いた。それから思い直した。こいつは無礼なやつだが、こけおどしではなく妙に胆力が座っている。どこか若様の若い頃を彷彿と

させるような颯爽とした感じもある。

十二、三歳の小女があわてて酒を運んできた。銚子ではなく四合徳利を持っている。

「火を落としてしまったで、冷やしかねえだが」

痩せた小女は怯えているようで、やっと小声でいった。

「冷やで充分。夜分遅くまでご苦労だな。この俳諧師がいま心付けを下さる。主人にはいわんでいいからもらっておけ」

金四郎と名乗った若侍の緩んだ目玉が修治を見ている。修治は巾着を取り出して中から小粒の銀を取り出した。胸を引いていた小女の両腕を取って、桃色に染まった掌に粒銀を落とした。合わせて十匁だから二朱と二百文ほどになる。住み込みの小女にとってはふた月分の給金にあたる。

「遠慮するな。俳諧師は儲かるのだ。取っておけ」

目をいっぱいに見開いている小女に若侍はそういって徳利を取った。小女はびっくりした顔のまま頭を下げると、逃げるように部屋を出ていった。修治は部屋の隅に片づけてあった湯呑みを手にして、今度は若侍から徳利を奪って酒を注いだ。

「植木職人は枝を一日中チョッキンチョッキンとやって働いているものだ。そこに竹梯子を担いで表に回ったり台所を覗いたりしているやつがいればイヤでも目につく。おまけに握り飯を物置に持ち込んで昼寝するとは、盗っ人にしてはいい度胸をしていやがる

と感心していたのだ」

「さようでございますか」

「そうさ。盗っ人というやつは暗くなるまで蔵や縁の下に隠れていて、家人が寝静まるのを待って鼠のように動き回るのが常道だ。しかも、おまえは何日間か潜んでいたくせに何も盗んではおらん」

「よくご存じで」

修治は冷や酒を呑んで若侍を睨み上げた。若侍は徳利を取ると中の酒を銚子に注いだ。それから銚子を手に取り、中の酒を盃についでから口に運んでようやくニヤリとした。

「夜も見張っておったからな。隣の屋敷は高取藩植村家長の下屋敷でな、いつの頃からか弟政直の屋敷となっておる。三千石とはいえ格別どうということのない屋敷だ。蔵に千両箱が積んであるとも思えん。ということはだ、おまえはもっとでかい獲物を狙っているということになる。獲物が何かは知らんが、手に入れた暁には、その分け前を寄越せといっておるのだ」

冷や酒を呑みながら修治は考えた。ここで揉め事を起こすのは面倒だ。といって遠山金四郎と名乗る若侍のいうがまま分け前を出すのは業腹だ。そもそも二千両を脅し取ると若様はいっていたが、その手段が全く修治には見当がつかない上に、植村政直がそれ

だけの大金を秘蔵しているとは思えない。旗本はどこの家でも窮している。大名家につながる家であろうと財務状況はそう変わらないはずだ。

「何を考えておる」

目を上げると、思い掛けなく近いところに若侍の顔があった。頬骨が張っている上に目つきが鋭いので顔全体が刃のように尖っている。

「まあ、いい。おれを殺そうとしても無駄だぞ。ほれ、おれは相当に悪だ」

若侍はひょいと二の腕をまくった。女の白肌らしい彫り物が見えた。

「背中には観音様が彫ってある。見るか」

「いや、結構でございます。遠山様が悪人だということは充分に分かりました」

「では、狙いは何だ。政直の何を探っておるのだ？」

「それはまだはっきりしないので」

「白状したな。やはり俳諧師のふりをして何か探っておったな」

「探っておりました」

修治は腹をくくった。正体がばれたら居直るしかない。それにこの若侍はもう修治を手の内に入れたつもりで威張っているが、実は修治のことなど何にも知らないのだ。ここで消えてしまえば「小川屋」の居場所も探れるはずがない。

「はっきりしないとはどういうことだ」

「何を探っているのか、実はまだよく分からないのです。それを見つけるために植村の屋敷にもぐっておりました」

ふん、と呟いて若侍は壁に背中をもたせた。

「ただの鼠ではないと思っておったが、おまえは誰かに命令されて潜んでいたというわけか」

修治は黙っていた。小賢しいが、実際に頭の回転もよさそうな若造だった。

「ではおまえに指図した者に会わせろ」

「会ってどうなさるんで」

「分け前をもらう」

「脅しなさるつもりですか」

「そうだ」

「それはおやめになった方がいいですよ」

「何故だ」

修治はここぞとばかり腹の底に気合いをいれた。低い声を響かせた。

「あの方はこわい方だ。若いお武家様が手玉にとれるお方ではございません」

「こわいと申すか。どうこわいのだ」

「この世の方では、ないのです」

若侍はジロリを修治を見つめた。そのまま黙り込んで目の奥を覗き込んでくる。修治も負けずに見返していた。

「面白い」

若侍は銚子の口から直接酒を呑んだ。細い喉仏が震えた。

「おれは幽霊というやつに一度出会いたいと思っていたのだ。一両日中にそいつに会わせろ。正体を暴いてやる」

「分かりました。取り計らいましょう。でも何も分からないまま脅したら却って命取りになりますぜ、ようがすね」

いいだろう、と呟いて若侍は刀を取り、ゆらりと立ち上がった。意外に背丈があった。

「いい忘れたが、おれの親父殿は目付でな。大名とて一目置いておる。油断するなと盗っ人の頭に伝えておけ」

「お伝えしておきます。ところでこのままあっしがとぼけてしまったら、一体どうなさるおつもりですか」

「どうせ、名前をきいたところで本名を名乗るわけもない。居所だって出鱈目をいうことくらい承知だ」

「ではこれきりということになりますよ」

「そうはいかんな。なんせ拙者の目玉は人の面を記憶するのが得意なのだ。江戸にいる限り逃れるわけにはいかんぞ。では明日にでも連絡してこい」

障子が閉められると廊下を踏む足音が遠ざかるのを待って、修治は素早く着物を脱いで職人用のパッチを穿いた。足音が階段を降りていくのを確かめると、そっと窓から夜を窺った。薄い雲に淡く閉ざされた人影が道に浮いている。何をしでかすのか、見届けようと跡をつけるつもりでいたが、ふと胸騒ぎめいたものを覚えた。

修治は窓から身体を引き、畳に座って徳利から湯呑みに酒を注いだ。それを呑みかけてふと手をとめると、今度は若侍が呑み残した銚子に入った酒をぐびりと呑んだ。行灯の火を消し、畳に横になると、さて、と声に出して呟きながら腕をさすった。どうやら部屋の中に晩秋の夜風が差し込んできたようだ。

三

左京のやつ、腹を空かせているだろうな、早いとこ魚を炙って飯にぶっかけて喰わしてやろう。それから、珍しくくめさんが持たせてくれた徳利の酒をぬる燗にして呑もうじゃネーか。

弥太は右手に徳利を下げ、腹の中に飯と魚の切り身を持って霧雨の降る夜の中を走った。蕎麦の屋台を親方のところに返しにいったのが四ツ（午後十時）過ぎだったからも

う四ツ半（午後十一時）にはなっているはずだ。魚の切り身も「小川屋」からもらった残り物で、一応、拾った捨て犬の餌にするのでと台所にいた板前の見習いにはいったが、実は半分は自分が喰うつもりでいる。今夜の稼ぎはわずか百六十文でそのうち屋台の借り賃や仕込み代などで百十五文が飛び、弥太の懐に入るのはわずか四十五文ばかりだったから、残飯とはいえ弥太にとっては貴重な晩飯なのである。ただ捨て犬に「左京」と名付けたことは「小川屋」の者には内緒にしていた。

弥太の住む南森下町の甚兵衛長屋から遠回りになるが、仙台堀にかかる海辺橋を渡って、仙台堀沿いに大川の方に迂回し、万年町を通って相生橋を渡り、さらに長屋の並ぶ永堀町あたりを南にいった。霧雨が秋雨になり、顔がしっとりと濡れるので肌寒かったが、それでも長屋とは反対方面にいったのは、そのあたりを見張っておくように若様から命じられたからである。

小走りに暗い夜道を急ぎながら弥太はひとりごちた。

植村の姫様が住んでいた屋敷をさぐっておれといわれたからこうして昼と夜にきて見回っているが、何も起こる様子はねーじゃねーか。だいたい姫君がいなくなったからといって武家が表立って騒ぎを起こすわけがねえ。連中はあわてふためいているはずだが、表向きは何事もなかったように取り繕っている。別邸にしては大層な門構えがあり、門番をおいているので内情は旗本なんぞより豊かそうだが、それでも姫君が逃げ出

したというからには、どうせ金がらみの内紛が起こったからのことだろう。そう修治さんがいっていたから間違いない。まあ、オレを斬ろうとした三角顎の御家人が、家を追い出されて浪人暮らしに戻り、今頃はどこかのしもた屋に潜んで痛んだ身体を休めているのは気味がいいが、その御家人の代わりに、婿養子としてちゃっかり女と御家人株を一時に手にいれた吉村弥次郎は一番いい思いをしたことになる。元小藩の部屋住みの若造が幕府の御家人様だぞ。おまけに熟れた女体付きだ、クソッ、たまらないじゃないの。ウォーン。

それにくらぶればいつだって律儀に誠実一路に生きているおらっちには春は全然やってこない。いくら元掏摸だといっても、若様に尽くして足かけ八年。ま、途中に四年半ほど若様が行方をくらましていたからお世話したとは言い難いが、その間も夜鳴き蕎麦の屋台を引いてずっと若様の帰りを待っていたんだ、そこのところを汲んでもう少しおらっちにも情を与えてくれてもよさそうなもんじゃねーか。女房とはいわねーが、たとえば夜鳴き蕎麦の屋台の代わりに、蕎麦屋の一軒でも持たせてくれるとか、ま、ここまでは何度も文句をいったことなんだが、そこに若い手伝いの小女のひとりでもつけてくれるとか、まあ、そんなにいい女でなくてもいいから、男のことなんかまるで分からない山出しのウブな女だったらうまく騙せるだろうし、うん、あの「小川屋」に新しく住み込んだハナという下女あたりならうってつけなんだが、どうだろう、なんとかなら

ねえもんだろうか。

「ならぬ！」

いきなり怒声が暗い中から響いてきて、弥太は腰を抜かした。戸を閉める音が夜の底の方で鳴った。そこは丁度植村政直の別邸の門の前で、小雨の降る中に湿っぽいものが屈み込んでいる。子連れの女だと分かったのは、そばにいるか細い坊やが「母上」と声をあげたからだった。

手拭いを頬かむりした弥太がのっそりと出てきたので、その子供は、あ、と驚いた。近くにともる明かりはなく、ふたりとも灰色っぽい顔を向けている。どうやら女はどこかを痛めたようで動けないでいる。

「ご新造さんはこの屋敷の人ですかい」

弥太は腰を屈めて女の様子を窺った。女は声を殺して、「夫が、お勤めしじぁはずなのじぁんどん」といったが弥太が聞き取れたのは、夫とお勤めという語句だけだった。それでちょっとの間言葉を失ったが、どうやら門番から追い出されたようだと察した。それで、「門番は取り次いでくれなかったわけですかい」と訊いたが、女は返事をするかわりに、泣き出した子供を叱った。

そうか、若様が屋敷を見張れといったのは、こういった事態が起こることを見越していたからなのかと弥太は思った。お女中を追いかけていた髭面の浪人とかかわりのある人に違いないと次に考えた。

「ご亭主は何といいなさるんで」

と訊くと、女は腰を地面に落としたまま、じっと弥太を透かし見た。

「おはんはどなたですか」

女の丸みを帯びた顔が弥太の上に張り付いた。

「あっしは通りがかりの者だ。だが、ここの屋敷に働いていた用心棒から先日の夜、殺されそうになったんでね、ちょいと恨みがあるってわけだ」

「用心棒？　そやいけんいうお仕こっじぁなぁか？」

「どうも、弱ったな。ご新造さんのいっている言葉がよくわからねえんで。それでこの屋敷の門番も怪しんだんじゃねーんですか。しかも御武家のご新造が子供を連れて訪ねる時刻でもないですからね」

そういうと、女は子供を胸に抱きかかえたまま起き上がろうとした。弥太は思わず女の腕と肩をとった。着物の下に柔らかい肉付きがあった。弥太の心臓がいっぺんに高鳴った。

「すみません。お世話かけもした。もう大丈夫ですから」

女は子供を杖代わりにして立ち上がると屋敷の前から離れようとした。だがすぐに蹴躓いてよろけた。

「あぶねえ」
弥太は女の背中を抱きかかえた。とっさに出た仕種だが、武家のご新造さんにしっかり触れたのは初めてのことで、下帯の中で鯰が暴れた。
「門番の野郎にやられたんなら、訴え出ることもできるんですぜ」
いえ、と呟いた女は息を整えると、「市助しっかいしなさい」と子供に言い聞かせた。
「失礼だが、行く当てはあるんですかい」
そう尋ねると急に女は俯いた。暗がりの中で涙をこらえているように思えた。
「お恥ずかしか話じゃんどん、行く当てなどあいもはん。一時（二時間）ほど前に四谷の大門に着きもした。主人が植村様に仕官が叶ったと手紙で知らせてきたで薩摩からひと月半かけてきたのござんで」
「そうですかい。薩摩から、江戸まで子連れできたんですかい。大変な旅でしたね」
そういってごまかしたが、勃起は怒髪天を衝く、くらいに張り切っている。女の話などまともに聞いていられる状態ではなかった。
「よかなこてお屋敷を探し当てたのじゃんどん、重岡などちゅう者はここになおらんといわれて取り次いでんらえません。見も知らん方にお尋ねすうのは申し訳んのじゃんどん、江戸になまこて不案内でどっか宿をご紹介いただけうと助かうのじゃんどん」
宿を探しているのは勃起状態の弥太でも理解できた。

「宿ですかい？　あの宿代はいくらおありなさるんで？」
そう訊いたが女は首を横に振っただけだった。
「あっしが盗ろうというんじゃないんですよ。だが、木賃宿というわけにもいかないし、江戸にも自炊する宿はあることはあるんだが」
そう呟いたとき、ふと女の口にした重岡という名前が閃いた。
「ご亭主は重岡様とおっしゃいましたか」
「はい、重岡官三郎と申しもんで」
「じゃあ、楓さんといわれるのは……」
「はい、楓はおいござんで」
女の声には戸惑いと驚きが混じっている。あの髭面の浪人の女房だったのか、と弥太は溜息をついた。確かに、弥太に向かって刃を振り上げては来たが、思い出してみると、こわかったのは顔つきだけで、あの浪人には仲裁に出た弥太を斬りつける気はなかったようだった。邪魔だてするなという感じの表情だった。
しかし、弱った、と弥太は項垂れていた。まさかご主人は顎の尖った御家人に斬り殺されたとは言えなかった。そういう当惑には無関係に下帯の中の陰茎はそそり立ったままだった。思いっきり情けない倅だと弥太は項垂れた。

四

若林左太郎が信濃飯田藩の勘定方八十五石木内範兵衛の四男左馬之助を呼び出して、十軒店新道にある文具問屋「槌屋」の表口に連れ込んだのは、満月の夜から三日たった十八日の夕刻のことである。下っ引きの源助と茂七に縄を打たせて、まだ客のいる表口に左馬之助を放り出したのだから町人はびっくりした。騒ぐ客に向かって源助が十手を取り出し、御用の者だ、静かにしていておくんさい、とドスの利いた声で低く言うと、客はそろそろと店から這い出て店内のざわめきは収まった。本来なら源助のような下っ引きに十手が持てるはずもなく、縄の縛り方も知らないのだが、右京之介の計らいで股引の六三郎から彼らにも十手が渡されたのである。多分、まがい物なのだろうが、そのあたりのことは右京之介の裁量にまかせておけばよいだろうと、左太郎は大目に見ている。

「主人はいるか。若林左太郎じゃ」

そう大声で言い放つと最初に奥から飛び出してきたのは六十歳間近のしぼんだ顔をした老人である。

「お武家様。店先で怒鳴られては困ります。どうぞ、お鎮まり下さい」

「お前は誰じゃ」

「番頭の嘉吉でございます」

「では、廓の使いっ走りだな」

「いえ、それは喜助」

番頭は腰を屈めて油断のない目つきで左太郎を見上げた。そこへ奥から惣兵衛が現れた。

「これは若林様、先日は失礼をいたしました。あのままでは申し訳が立ちませんので、お屋敷にご挨拶にお伺いしようと娘にも申しておりましたところです。ところで、このお方はどなたでございますか」

「覚えておらんか。『槌屋』の入り婿になろうとした木内左馬之助という者じゃよ」

ああ、と惣兵衛は板場から土間に足袋を穿いたまま降りてきて、源助に縛られている弱そうな武士の手を取った。左馬之助はうらなり瓢箪のような顔から涙を流している。

「木内様、大丈夫でございますか。木内様」と惣兵衛は左馬之助の腕を取っておがむように声をかけた。

「一体これはどういうことでございますか。なぜこのような無体をなさいます」

「この者が雇った刺客に襲撃されたのじゃ。黒幕は槌屋だと申しておる。そう、満月の晩であったな。遠くで神田明神の祭囃子が聞こえておった」

惣兵衛はぶるぶると頬を震わせた。醜いが実直そうな性格が窺い知れた。

「し、刺客などと私どもがそのような者を若林様にし向けるわけがございません」

「ところがこいつは槌屋の指図で儂に刺客を差し向けたと白状したのじゃ。だが、儂の方が腕が勝っておってな。三人の刺客の内、ふたりはすでにお陀仏になって無縁仏になっておる。先日は申さなかったが儂は勘定方ではあるが腕は確かでな、一刀流中西道場で師範代をしておる。何か困ったことがあったら引き受けるぞ。金次第では刺客もよろしい」

主の惣兵衛や番頭はじめ、店先にいた十名近いものは度肝を抜かれたように口を開いて髭面の侍を見上げていた。とにかく相撲取りにも勝るような体格なのである。

「し、刺客と申されますが、私どもは文具問屋でございます。木内様が何を申されたか存じませんが、とんだ濡れ衣でございます」

「それはそうだ。町人が武士を殺そうと企むわけがない。なに、企んだのはこの木内左馬之助だ。おぬしの娘に縁談を断られたのが余程悔しかったのだろう。それでもなんとか入り婿になりたいと悶々としているところへ、儂が現れたというわけじゃ、わかるか」

「いえ、ぜんぜん分かりません」

「つまり、この店の小僧が儂を奥山右京之介と間違えて、番頭に伝えたということじゃ」

板場にいた番頭が尻下がりに奥に消えていこうとするのを目の隅にとめた左太郎は、すかさず小柄を投げた。番頭の頭に当たった小柄が床に落ちると、番頭もあとを追うようにがっくりと頭を落として這いつくばった。

「何をなされます」

「どうも、主が首魁でなければあの番頭がこいつをたきつけたようだな」

「いったいどういうことでございますか。私には何のことだかさっぱりわかりません」

すると縄で縛られていた木内左馬之助が突然大声で叫んだ。

「嘘だ、こいつのいっていることはみんな出鱈目だ。拙者はお秋さんを拐かそうとなどしていないぞ。刺客など雇っておらん」

「そうきたか。往生際の悪い奴だな。おい、茂七、そやつを運び込め」

へい、といって小者が大八車に乗せた浪人をかかえて店の土間に放り出した。浪人の顔は海水を浴びて焼けただれたようになっており、着物も袴もあちこちが破れて裸同然になっている。相当痛めつけられたらしく顔から胸にかけて丸太で叩かれた跡が生々しく残っている。

「おい、おまえを雇ったのは誰だ」

左太郎が尋ねるとようやく片目だけ開いた浪人は向かい合わせに土間に転がされてい

る左馬之助を見つめた。
「この男だ」
「儂を斬るように頼まれたのだな」
「そうだ」
「いくらで頼まれた」
「ひとり三両」
「儂の命がたった九両か。安い」
左太郎は浪人の頭を蹴り飛ばした。気絶した浪人の顔を草鞋の下で転がしながら「安い殺し屋は腕が悪いのじゃ」と呟いて「さて、儂を殺せば槌屋の婿養子に入れるとおまえをそそのかしたのは誰だ」と今度は左馬之助の顔に鞘を立てた。
刀の鐺で前歯をぐりぐりやられた左馬之助は「ぷっ」と唾を吐いた。同時に泥も一緒に出た。
「その番頭だ。そいつがお秋さんが惚れている奥山右京之介という浪人を殺してしまえば、この店の入り婿になれると拙者をそそのかしたのだ」
板場にのびている番頭に向けて左馬之助は顎を振った。
「主。そういうことだ。さて、儂を殺害しようとしたからには『槌屋』から縄付きがでるのは覚悟することだな。おい、六三郎はまだか」

「へえ、ここに参っております。お話は伺いました。浪人の方は町方が捕縛致しやすので」
岡っ引きの股引の六三郎がいつのまにか入り口に控えていて、さっそく茂七が縄を掛けている浪人を押さえ込んだ。左太郎はまだ度肝を抜かれている惣兵衛に向かって手をはたいた。
「さて、奥でこの始末をどうつけるか相談しようか。なんせ、殺されそうになったのじゃからな」
そういったとき、店の奥が急に華やいだ。そこにあざやかな桜色地に紅い花を描いた絹の振り袖を着た、灯籠鬢の似合う娘が現れた。
「お父様、ご相談する前に、わたしを狼藉者から救ってくれたお武家様のお住いを、このお方から、ちゃんと聞き出して頂戴」
そう気丈にいって、娘は細面の美しい表情を父に向けた。
左太郎はこの娘の婿養子になるためだったら、邪魔な恋敵を抹殺したいと思い詰めた木内左馬之助の気持ちが分かるような気がした。

五

吉原居続けも十日目となった二十日の五ツ半（午前九時）に右京之介は松葉屋のある

京町二丁目から一つ北の角町に行く途中の路地にある銭湯にいった。湯屋は五ツ（午前八時）から開いているが、市場で働く者たちが、ひと仕事終えた朝飯の前にさっと入っていくので、その連中が帰ったあとを見計らっていくと中はすいている。案の定、客はふたりだけでそれも右京之介が石榴口（ざくろぐち）をくぐって薄暗い浴槽に入る頃にはひとりだけになった。朝から湯は相当熱くしてある。中には小窓があるが空気を入れるだけのもので、光は入ってこない。うとうとできるほど湯はぬるくないので右京之介は早々に湯舟を出て洗い場でざっと水をかけた。脱衣場で濡れた身体を拭いているとひょいと修治が顔を出した。唇が上下斜めに細かく動いているのは、言いたいことがあるからだろう。

「先日の夜はひと騒ぎあったそうで」

そばに来て小声でいった。番台に親爺がいるが、寝ぼけた顔をさらしている。

「さすが耳が早いな」

「なに、ここに来る前に松葉屋に寄って聞いたんです。喜助はまだ信じられない顔をしていましたよ」

「これか」

右京之介は脇差しを見せた。

「悪いお方ですねえ。みんなあれは葵の御紋だ、徳川様のお忍びだと騒いでいますぜ」

「鍛冶屋に造らせたまがいものだ。焼きなど入っていないナマクラだ。この葵の紋は特注だ」

「知っていますよ。太吉（たきち）爺さんにやらせたんでしょ。役人に知られたら打ち首だと今でも怯えていますよ」

「四日間もどこに沈んでおったのだ。待ちくたびれたぞ」

「月夜にもぐり込むのは難儀します。丸三日間は傾いた宿屋でくすぶっておりました」

「何か摑んだようだな」

「昨夜、竜子姫のお父上の屋敷で思わぬ話を聞きました」

「よし、後でゆっくり聞こう。二階にいる」

休み処に上がろうとする右京之介を修治が呼び止めた。

「ところで竜子姫は若様の目をどうやって盗むことができたんですか」

「おれが出掛けた後に逃げたのだ。左太郎が酒を呑みにきたのだが、帰りに浪人どもに襲われてな。伊藤幸三郎が知らせにきた」

修治は目を瞠（みは）った。

「そりゃまたどういうわけで？」

「おれと間違えられたのだ。まあ、その内のひとりは捕らえて六万坪の小屋に転がしてある。いずれわけは知れるだろう」

修治はそっと肩を竦めて白い歯を覗かせた。

「面白いですねえ。若様の周りには、わけのわからねえのが次から次へ登場してきますね」

「面白いというのは修治だけだ。おれだって命はおしい。この江戸で、もそっと生きていたい」

不意に真面目になって右京之介は呟いた。一瞬だが瞳は遠くの光景を映し出したように見えた。

「わかりやした。ところで竜子様はもうここから出られたんですか」

「いや、まだおる。先夜は四郎兵衛番所のやつらに相当やられたからな。懲りておるのだろう。しかし、こうなったからには、ここに潜んでいるのも限界かもしれん」

「隠れ家だったら若様が先日奪い取った、神田相生町の旗本屋敷なんかいいんじゃねえんですか」

「奪い取ったのではない。内緒で買ってくれと泣きついてきたのは向こうの方だ」

修治が職人風のパッチを脱いで風呂に入っていくと、右京之介は番台の親爺に二合徳利を二本用意するように言いつけて二階の広間に上がった。先程洗い場にいた客のひとりがまだ残っていて、格子窓から女風呂を覗いている。右京之介が入っていくと、さすがに恥ずかしかったのか、下腹部を押さえてそそくさと出ていった。ここの銭湯には朝から若い遊女が入りにくるので、町の銭湯より余程色気がある。

丸い顔の小女が酒を運んできた。何か肴をもってきてくれというと、大根とこんにゃくくらいしかないという。このわたはないのかと訊くと小女はヘンな顔をした。ありものでいいといって右京之介は長細い棒銀の内から二匁分ちぎって小女に渡した。小女は低い鼻に人さし指をあてて鼻を啜ってからお辞儀をした。右京之介は二合徳利からぐい呑みに酒を注ぎ込んで、まず一杯呑んだ。まるでみりんのようにねっとりとしたひどい味だったが、ここで伏見の酒を期待するほうが無理というものだと納得させてもうひと口呑んだ。格子窓を通して朝の秋風が入り込んでくる。ほてった胸にすずしい風が気持ちよかった。こういう朝を、平成という時代に生きていたというおれは楽しんだことがあったのだろうか、とふと思った。そういった記憶は全く湧き出てこなかった。今とは想像できない生活を送っていたのだろうと考えると不思議だった。ときおりその時代らしい奇妙な光景を空の彼方に見ることがあるが、生きていた自分の姿を垣間見ることは全くなかった。

修治が上がってきた。やってますね、といって前に座った。右京之介は徳利を掲げて修治に差し出した。では一杯だけといってぐい呑みに口をつけた。

「昭和という時代はどんな景色が広がっていたのだ」

右京之介は修治を見ていた。修治の胸が怪しく騒いだ。若様は平成という時代に居たはずだがほとんどそれらしい記憶がないようで、それは何か事件に出喰わしたか、幼い

時に病で亡くなったことを暗示させる。修治の記憶には昭和の光景がまだ残っている。泥棒かよくて密偵のような仕事をしていたのだろう。若様を知って八年になるが昭和の時代に広がっていた光景のことを訊かれたのは初めてのことだった。

「あっしが知っている時代は忙しいときでした。なんだかしらねえが、浅草寺よりどでかいものが天に向かってそそり立っていましてね。大きな物置小屋みたいな物が音をたてて道を走るんです。しまいには地下を走り出したりして、様子がどんどん変わっていきました。若様がいたのはあっしよりずっと後のことですから、あっしなんかには思いもつかない大変な世界になっていたと思いますよ」

「というと、人間が鳥のように空を飛んでいたのかもしれんな」

「ありえますね」

ふたりはそこで少しの間黙って窓から外を見ていた。鱗雲（うろこぐも）が晴れた空に浮いている。今日は魚が釣れそうだと右京之介はひとりごちた。

「それで面白い話があったか」

「へえ、昨夜、弥太の野郎が御新造を『小川屋』に連れ込んできました」

「弥太が女を？　なんだそれは？」

「それもコブつきです。女はレイのお女中を追ってきた髭面の浪人の女房です」

「ほう、それは奇遇だな。どこで拾ったんだ」

右京之介はぐい呑みを丸盆に置いた。そこへ小女がこんにゃくと煮大根を皿に入れて運んできた。釣り銭を出したのでとっておけというと小女はとたんに汗を掻いた。心付けだ、とっておけというと小女は泣き出しそうな顔つきになってお辞儀をすると逃げるように階下に降りていった。

「くめにもあんな時がありました」

小女の去った方を向いて修治はそう呟いた。

「妹も修治のいた昭和という時代を知っているのか」

「いえ、あいつは何も知りません。江戸のことしか知りません」

「兄と妹なのにおかしなことがあるものだな。それで弥太は浪人の新造をどこで拾ったのだ」

「植村政直の別邸の前ですよ。竜子姫のいた屋敷です。若様が弥太に見張っておけと命じたじゃありませんか」

「そうだったかな」

「そうなんです。そこで昨夜、門番から追い出された親子を見つけたそうで、弥太がそれとなく聞いたところ重岡の女房の楓だと分かったようで。夫から植村政直のところに仕官が叶ったと手紙をもらって、それでひと月半かけて薩摩からやってきたそうなんです」

「薩摩か。随分遠くから来たもんだな」
「ひどい訛りでしてね。あっしもここへ来る前にちょっと会って話しましたが、何をいっているのかまるで分からねえんで」
「そうか。それで弥太は『小川屋』に昨夜連れてきたというわけか」
「へえ、それも大木戸が閉まった後のようで。だがやつはその重岡官三郎が館野久兵衛という御家人に斬り殺されたとはどうしても言い出せないそうで、あっしに伝えてやってくれというんです」
修治は額に皺を寄せた。人情話には弱い修治の素顔が覗いた。
「薩摩を追い出された浪人がこの江戸でやっと仕官の口を見つけたと、大喜びで国許に知らせたというわけか。わざわざ薩摩から来たということは、地元では余程肩身の狭い思いをして暮らしていたのだろう」
「そうでしょう。これからのことを思うとお気の毒ですね。でも、ご新造さんはなかなかの美形ですからね、まあ、江戸で後添えを探しているやつは多いですから、なんとかならねえわけでもありますまい」
そうか、美形か、と右京之介は呟いた。ええ、江戸ではちょっと見かけない目鼻立ちのくっきりとしたご新造さんでした、と修治も小声で応じた。右京之介の咽を酒が通った。

「それでは弥太も張り切るわけだな。しかし薩摩男も運の悪いやつだった。弥太と出会ったのも何かの縁だろう。弥太にも春がくればよいがな」
そう感傷的に喋る若様を修治は不思議な思いで見つめていた。若様にとって弥太は気晴らしの相手なのだろうとしか思っていなかった。
「弥太に会ったら、やつの知っているおかしな連中をこの数日の内に、できるだけ集めるように伝えておいてくれ」
「おかしな連中でございますか」
「ああ、蛇をつかうやつとか、ろくろっ首とか、壁をつたい歩きするやつとか、まあそういったおかしな大道芸人の連中だ」
「伝えておきます。今頃は『小川屋』で薩摩女の子供の相手をしながら左京と遊んでいる頃でしょうから」
若様は眉を上げた。
「左京？　誰のことだ」
「小犬です。あの浪人に襲われた夜に拾った小犬ですよ。雨の中で震えていたそうです」
「左京と名付けるとはな、いやがらせか」
「いえ、右京と名をつけるにはもったいないといっておりやした」

若様は含み笑いをした。

「それで、修治の話を聞こうか。植村政直の屋敷の様子はどうであった」

「へえ、それが妙なことに……」

修治は昨夜天井裏に潜んで見聞きしたことを詳細に右京之介に説明した。政直の兄である若年寄の植村駿河守家長が、幕閣の中枢に入り込むための賄賂として必要な三千両を弟に工面するよう要求していること、その金を造るため、政直の弟の忠政が竜子姫の婚礼を整えて支度金を得る算段をしたらしいこと、その弟の忠政はわずか百五十石を捨て扶持同然に与えられていることなどを説明したあとで、

「その末弟の忠政がいうには、竜子姫の身代金として二千両を五日後に用意しろと書かれた脅迫状を受け取ったようなんです」

と修治は言い出した。それから注意深く右京之介を見つめてから小声で呟いた。

「あの脅迫状を忠政に送ったのは若様ですよね」

修治は珍しく三白眼になって下から右京之介を見据えた。事前に自分に知らせることなくそのような突飛な行動に出たとは心外である、とその目はいっている。

「いや、おれではない」

右京之介は修治の厳しい目つきを受け流して、ぐい呑みに口をつけた。それで二合徳利のひとつが空になった。

「そもそも政直にもうひとり弟がいることなど知らなかった。脅迫状など届けようがない」

「すると誰が二千両もの金を脅迫したんですかね」

「当然、その話を持ってきた末弟だ」

「忠政ですかい？」

さすがに修治は唖然とした。

「しかし、竜子姫の婚礼を整えた上、五千両もの嫁入り支度金を相手に用意させたのはこの忠政なんですよ」

「武家社会では弟ほど信用できないものはない。恐らく駿河守同様、出世を企んでいるやつに籠絡されて、使いっ走りに堕落したのだろうよ」

「まさか、そんなことが……」

昨夜の忠政のあわてぶりを知っている修治にはにわかに頷きかねた。しかし、若様のいっていることは大雑把のようだが核心を衝いている。

「確かに盗賊一味は存在する。この連中はどさくさに紛れて上前をはねようと企んだ悪党一味だ。だが、それより前に、何故竜子が屋敷を逃げ出し、その上、おれに誘拐されたと知ったのか、そこに悪党一味をあやつるとんでもない化け物が潜んでいるな」

若様の言葉に修治は相槌を打っていた。

「化け物ですか。やはり屋敷の中に脅迫一味の者がいるということですか」
「そう考えるのが普通だろう。どうもこれは単なる身代金ほしさの狂言誘拐ではなさそうだな。いつのまにかこっちも都合よく利用されている」
「ややこしい話になってきましたね」
そういったが修治の頬には不敵な笑みが浮き出したのが自分でも分かった。どうやら右京之介が本格的にこの一連の事件に興味を持ったようだと嗅ぎつけたのである。これまでの若様はどこか暇つぶしで遊んでいるように見かけられることがあった。竜子姫を吉原に閉じ込めたのも深い思慮があってのことだとは思えなかったのだ。
「そうだ、大事なことを言い忘れていやした。政直は弟に向かって、わざと娘を屋敷から逃がしたのだと言っていましたんで」
右京之介は徳利を手にしてぐい呑みに酒を注ぎかけたが、その途中で腕が止まった。視線は宙をさまよっている。
「故意に娘を逃したといったのだな」
「へえ」
「どうした。修治らしくないな。よく思い出してみろ。娘が屋敷から逃げ出すのを見逃すからには何か理由をいったはずだ」
今度は修治が視線を宙にそらす番だった。それが、と呟いたが続く言葉がなめらかに出てこない。修治自身、自分の反応に戸惑った。
「確か政直は竜子姫の祝言が決まる頃から、何か妙な出来事が相次いだと申していました」
ほう、といって若様が膝を進めてきたが、修治はまだ何か大事なことを言い逃していることに気付いていた。しかし、頭の中の混乱はまだ続いている。そのわけが分からない。
「弟が、忠政が、それは何だと問い質したのですが、政直ははっきりとは申しませんでした。ただ、気がかりなことがあると」
「うむ。すると、その気になることがある故、娘を屋敷から逃したというわけか」
「へえ、そういういい方をしていました」
修治は膝を打った。何故その疑問が最初に口をついて出てこなかったのか己のうかつさを思い知った。だが、その悔しい思いが、塞がれていた記憶の膜を突き破った。
「それどころか政直は逃げる姫のために、屋敷に身代わりまで用意したといっていました」
「身代わり？　それは妙だな。一体何のための身代わりだ。命の的か」
「命を狙われる危険があるので、その身代わりを立てるということですかい」
修治は自分の記憶が途絶えた理由がようやく分かった気がした。天井裏でその計略を

耳にしたとき、大名家の裏でうごめく暗闘を垣間見たような不気味な思いがいっときに押し寄せてきたのだった。幕閣に執政職を摑むために必要な賄金、三千両を弟に工面するように命じた兄。そのために姫をどこぞに嫁がせて相手から支度金を得ようと算段する分家、その仲介役の百五十石取りの末弟、さらに誘拐犯の上前をはねて二千両を掠め取ろうとする得体の知れぬ一味の者の存在、屋敷に潜んでいるであろう賊の手引き役、さらに、それらを見越したように姫の元付き女中に潜伏すべき場所をあらかじめ用意した父、政直の思い。

「実はあまりのことに頭が混乱してすっかり忘れてしまっていたのですが、政直は用人の菅沼という者を通じて、竜子姫が逃亡したあとの潜伏先までお芳に指示していたそうです」

「それはどこだ？」

「小梅村だそうです」

そうか、と頷いて若様は両腕を組んだ。無念そうな表情が浮いている。

「すみません。わかったのはそこまでです。なんだか、話がますますこんがらがってしまったようで。最初は屋敷勤めのお女中が逃げ出したくらいに思っていたんですが」

「修治、時間が許す限りでよいのだが、吉村弥次郎のところへいって様子を見てくれぬか」

頭を掻いている修治に頓着（とんちゃく）なく若様はそんなことを言い出した。吉村弥次郎は若様の差し金でお芳の養子になった果報者だ。元の婿の久兵衛は御家人株を放棄する代わりに八十両の見舞金をもらって、半死の状態で江戸を追放されたはずだ。最初は冗談だと思っていた修治も、若様から八十両を受け取って久兵衛に手渡したときは、幕府の御家人や旗本といわれて威張っている連中とその組織のいい加減さにあきれたものだった。

つまり御家人株を買う金さえ都合をつければ棒手振（ぼてふ）りの町人でも二本差しになれるということなのだ。それにその株というものでさえ、書き付けになっているわけではなく、単なる約束事で成り立っていることになる。

吉村はもう小普請組組頭のところに裃（かみしも）を着て、相応のみやげを持って挨拶に出向いたはずだから、晴れて四十俵三人扶持の御家人になっているはずだ。

「吉村弥次郎のことはともかく、お芳のことが気になる。館野久兵衛から御家人株を手に入れるときに修治も感じただろうが、どうも死んだ兄とは母親が違うようだしな。植村家に勤めた事情などもわかるようなら調べてほしい」

へえ、と頷いた修治は、お芳のことにまで気を巡らせていたとは、若様の頭の中はどうなっているのだろうと不思議に思った。修治にとってお芳は単に竜子姫の元の女中にしか過ぎないのである。

「それと植村政直の弟のところにきた脅迫状には、五日後の二十三日までに二千両を用

意しておけとあったんだな」

「へえ。一体姫が誘拐されたことをどう嗅ぎつけたのかわからねえんですが、政直の弟が若様のいうように脅迫状の運び屋にされたんなら、とんでもない悪巧みをするやつらで。だって自分たちの手は汚さずに、ちゃっかり若様の上前をはねようという算段でしょ」

うんと頷いた若様はいつのまにか二本目の徳利をもう逆さにしている。

「五日後という日にちは、敵にとってはそれほど意味あるものではないだろう」

「と、いわれますと？」

「それくらい日にちを与えた方が身代金目当てだと思われるからさ。二千両など本来はどうでもいいということさ。もっとも最初に絵を描いたやつと実行犯の思惑は違うかもしれないがな」

あのう、と修治は両手を股の間に挟んで背中を丸めた。昭和と平成の頭脳構造には随分差があるようだと思った。

「若様の考えていることが、あっしには何のことか全然分からないんで」

「そうあわてるな。だが、小判で二千両を用意しとけというわりには、どうもやることに穴が多すぎる。凄みがないんだなあ」

「凄みですか……へえ」

「まあよい、敵のその脅迫に躍ったことにして、こっちはその悪党どもが指定した二十三日より一日早く、二十二日までに金を植村に用意させよう」

「えっ？　するともう二日しかありませんが、そんな大金を用意できますかね。それに、首尾良く手に入れたとしても二千両を運んで逃げるのは容易ではありませんよ」

ニヤリとした若様は、返事をする代わりに二階まで老人の手を引いて上がってきた小女にむかって、酒を頼む、といって空になった徳利を持ち上げた。老人は廓の者ではなく、昨夜から居続けた商家の隠居のようで、ふたりの方を向いて腰を屈めて頭を下げた。その拍子に前のめりになり額を畳に当てた。

「いて」

老人は呻いてそのまま小女の手を巻き込むようにして膝をついた。小女が叫び声をあげたのは老人の手が胸の中に入ってきたからのようだ。若様は手を打って笑った。それから緩んだ目を修治に向けた。

「千両箱を運ぶわけではない」

「すると、どうするんですか」

「植村政直に二千両の借用書を書かせる」

若様は平然と普通の声でいっている。修治は後ろの老人を振り向いてちょっと眉をひそめた。すると若様は盆に乗っていた箸を取って指先で挟むと、老人に向かってひょい

と飛ばした。箸は老人のこめかみに緩く当たり、老人はコケッとよがり声をあげて畳に伸びた。

「借用書ですか？　それをどうするんです？」

「東叡山寛永寺に届けさせる」

「それで？」

「それだけだ。政直は寛永寺から二千両を拝借したことになり、毎月元金利子込みで百両。それを二年間返済し続ける」

「二千四百両になりますが」

「三百六十両は寺への寄進だ。植村政直は二千両を寺から借りたことになるが、実際は一銭も手にできない。その金はおれがもらう。それを寺に貸し付ける。だが書面上だけのことだ。二千両はいずれどこぞの大名が借りにきたときに初めて現物となって動き出す」

「でも寛永寺の方では若様の企みなどご存じないでしょう。借用書と引き替えに植村家に二千両を貸し出してしまうんじゃないんですか」

小女が徳利を丸盆に置いた。若様は銀をちぎって渡した。なぜだか小女は頬を紅くして若様の傍らに座り込んだ。まだ十二、三歳の子供である。妙な子だなと思って見ていると若様はその耳元で何事か囁いた。小女は嬉しそうに頷いて立ち上がった。おぼろげに気がついた老人が寝ぼけた様子で何か言いつけたが、小女は振り向かずに一階に降りていった。

「寛永寺には今日にでもおれが出向く。そこで、植村家から借用書が届くがそれはおれが貸し付けたもので、寛永寺は金を出す必要はないといっておく。寺は植村家から毎月届けられる百両のうち十五両を線香代として受け取っておくように伝えておくから大丈夫だ」

「そんな簡単にいくものですか」

また若様はにやりとした。今朝からこのぶっそうなニヤリ顔を何度見たことかと修治は嘆息した。

「それがいくんだな。なんせおれは東叡山寛永寺にとっては金主でもあるからな」

あ、と修治は唸った。唸ったわけはふたつある。かつて大垣藩から脅し取った数万両とも噂される金は寛永寺に預け、その金を元手にして寺は大名に年利八分で貸し付けているのである。それと恐喝屋じみたことを平然と口にする若様を前にして、その若き日を彷彿とさせる若侍の顔を思い出したせいもある。

「若様、もうひとつ言い忘れていたことがあります」

「なんだ？　どうも今朝の修治はどこかぼんやりしているな」

そういわれて、さっきから頭の中がとっちらかったようになっているのは、あの金四

郎とかいう若侍から脅かされたことが原因なのだとようやく気付いた。
「実はドジを踏みました」
「踏んだか。珍しいな。情婦を孕ませたか」
「そんなんじゃありません」
修治は向こうでひっくり返っている老人を見てから声を潜めた。
「植村政直の屋敷に忍び込んでいる所を、隣の屋敷の者に見られていたようなんです」
口にぐい呑みを持っていった若様は手をとめて首を傾げた。眉の端を吊り上げて不思議そうに修治を見直した。だが、何もいわなかった。
「その若侍というのが暇なやつで屋敷の屋根で昼寝しているときにあっしの姿を見たようなんです。植木屋のくせに妙な動きをしていると観察していたようで、昼間、物置に隠れる所も見られました」
「植村政直の隣家とはだれの屋敷だ」
「遠山景晋の屋敷だそうで」
「遠山か。目付だな」
「若侍はそういっていました。名のある目付ですか」
「遣り手だな。当番目付といわれる上席のひとりだ。先年、オロシア船の艦長のレザーノフが長崎で暴れたとき、向こうの連中では手に余るというので江戸からわざわざ遠山

が出向いてレザーノフと応接したのだ。うまく丸め込んでオロシアに帰した。いずれ長崎奉行になるだろう」
「この若侍はその目付の嫡男で金四郎というまだ十六、七の小生意気なやつでして、露月町の宿屋にあっしが戻ってくると勝手に部屋に入って酒を呑んでいました。背中に観音様を彫っているとかでどう見ても幕府お目付の嫡男には見えません。放蕩息子ですよ」
「観音様を背負った旗本か、面白いのが出てきたな」
「この若侍があっしに何か悪巧みをしているのだろう、何でもいいから、分け前を寄越せと脅してきましてね。親父は大身の旗本でさえこわがる目付だし、こいつは小遣い銭を出せというし、どうにも始末の悪い奴に因縁をつけられました」
さすがに若様の若い頃にそっくりだとは言えなかった。
「その上こいつは御本尊に会わせろと言い出しましてね。どうにもぶっそうでいけません。いっそのこと左太郎さんにお願いして喧嘩騒ぎの揉め事を仕立てて死んでもらいましょうか」
自分で口にしたことだったが、さすがに修治は言い過ぎだと気付いた。若様に箸を投げつけられた老人はふがふがいって俯せになったままでいる。若様は興味深そうな目つきをして浅草寺の甍の方に顔を向けている。すずしい風が若様にあたって鬢のほつれを

なびかせた。いつ見ても爽やかそうだと思っていると「引き込んでしまえ」と呟く声が洩れた。

「えっ？　何を引き込むんで？」

「若侍だ。金四郎とかいったな。そいつも仲間に引き込んじまえ。そうなりゃ、親父殿にも告げ口ができなくなる」

「しかし、あの若造を引き込んで一体何をやらせるんですか」

修治の問いに若様は欠伸混じりにあっさりと応えた。

「隣の植村の屋敷におれが書く脅迫状を持って行かせりゃいいだろう。ナニ、間違ってうちの屋敷に届けられたといって用人に手渡せばいいことだ。早い方がいい。うん、丁度好いやつが舞い込んできたものだ」

なるほどと修治は思った。若様にかかればどんな悪党でも、飛んで火に入る夏の虫となるわけだと感心していた。

「それからな、おれは満月の夜、あ、丁度左太郎がおれの影武者となって浪人どもに襲われた夜のことだが、あのあとおれは馬で常盤橋から鍛冶橋、浜町あたりを見物して回ったのだ」

修治は黙って頷いた。大名家はごめんだという思いがあった。ことに大名小路は鬼門である。

「なんせあのあたりは静かだが、馬では蹄の音が響いてあちこちの大名辻番から番人が出てきて見物のつもりが反対にこちらが尋問された。なぜ、あんなところにいったか分かるか」

「何のためにいったんですかい」

「高取藩植村家二万五千石の上屋敷や駿河沼津藩水野家の上屋敷、中屋敷の警備がどうなっているのか外から見に行ったのだ。水野忠成、四十七歳、三年前に寺社奉行から若年寄に昇進した野心家だ。田沼意次を尊敬していて賄賂を推奨している。怪しいとは思わんか」

「どこがです？」

「老中になるためには賄賂が必要だ。だが文化三年（一八〇六）に再任された寛政の遺老、清廉潔白、謹言実直、頑固一徹の松平伊豆守信明が立ちはだかっている間はせっかくの蓄財が生きてこない。ではどうするか。賄賂の相手を牧野備前守に絞った」

「筆頭老中ですね」

「だが、牧野も松平信明には頭が上がらん。それで仕掛けたのが信明暗殺だ」

「若様、ご、ご冗談を」

修治はさすがに声を潜めて笑った。

「老中暗殺などそのような大それたことを企むはずがありませんよ」

若様は上目遣いに修治を睨み上げてから、にっと笑った。白く輝いた歯が不気味だった。

「分からんぞ。大名という連中はだな、権力を掌中に入れるためだったら、町の者どもが考えにも及ばない恐ろしい計略を練るものだ。修治、そこでだ……」

「おっと、それから先はなしにして下さい。旗本屋敷と違って大名の上屋敷となると尋常な警固ではありません。盗っ人のあっしにできることじゃありません。そっちの探索は忍び専門の方を使って下さい」

「そうか、謙虚だの。では、昔の馴染みに頼むとするか。先頃、理不尽な理由で御用屋敷を放逐されたと聞いているからな」

すると、あの方以外にはありえないな、と端正な顔立ちに匂うような女らしさを身に潜めていた女人を修治は思い浮かべた。その愛しい人の夫である御庭番を斬ったのは若様だった。

若様は伸びをしながら手を打った。すると階下で待ちかまえていたのか、銭湯の小女が飛ぶようにやってきて俯せになった若様の腰を嬉しそうに揉みだした。脅迫状はいつ書くんですか、という言葉を呑み込んで、修治は小女の泥鰌のようによく上下する指先を眺めていた。

六

金四郎が植村政直の屋敷の門前に立ったのは申の刻（午後四時）を半時（一時間）ばかり過ぎた頃である。最前まで富士山に連なる山々の頂きにかかっていた夕陽が、今はその背後に沈んで、山稜は黒い影を引いて青澄んだ空に連なっている。立派な屋根を持った門番所付きの長屋門の前に佇み、隣家の遠山家の者だと怒鳴ると何かを喰っていたらしい門番があわてて飛び出してきた。門番に遠山金四郎だと名乗るとすぐに中に案内された。石畳を十間（約十八メートル）ほど踏んで奥に進むと、若党がすでに式台付玄関に片手をついて迎えに出ていた。

「この書状が今しがたうちに届けられたが、宛名が植村政直様となっておる。間違って届けられたものであろうから持って参った」

そういって金四郎は封書を差し出した。では、ごめんといって去ろうとすると、しばしお待ちを、と若党がいう。いや、それがしはただ書状を届けたまでござるからこれにて失礼致すといったが、若党はそういうわけには参りません、わざわざお手間を取らせましたからには、お礼を申しあげませねばそれがしが叱られますと青ざめた顔色でいう。

仕方なく金四郎は式台に上がって若党のあとについて書院に入った。いま、茶菓子な

どをお持ちします故、しばしお待ち下さい、と若党は堅苦しいことをいって廊下の奥に向かった。

十畳ほどの部屋には床の間があり山水画が掛かっている。水音がするのは池の鯉がはねる音でその池の中央には築石が注連縄で縛られて鎮座している。十数部屋ある表屋敷は庭の池を囲むように建てられている。屋根の上から眺めている金四郎には四十間（約七十二メートル）四方の屋敷の間取りが頭の中に染み込んでいる。

「この屋敷なら盗賊の手引きもできる」と金四郎は屋根の上でうそぶいていることもある。自分が用人であれば、侍長屋のひと部屋を賭博場にして、所場代を稼ぐんだがと卑しいことを考えたりもする。

だが、今日は少し落ちつかない。池の鯉がはねる音を耳にしながら、今日起こったことをおさらいするつもりになっている。

朝は普段と変わりなく起き抜けに木刀を振るい、庭掃除をした。朝餉をとった後は同じ愛宕下にある直心影流の長沼道場に出向き、旗本の師弟らと一緒に一時（二時間）ほど汗を流した。長沼道場は高槻藩永井家の剣術師範をしていた国郷の養子となった長沼小正兵衛綱郷から続いている。道場には常に四、五十人の者が竹刀稽古をしているが、皆それほど身を入れているようには見えない。次男、三男坊がほとんどなので、もっぱらどこそこの家は三百石取りでひとり娘だ、などと養子にもぐり込めそうな旗本先

の話ばかりしている。養子に入るくらいなら町道場の師範代でもやった方がましだと常日頃思っている金四郎には連中の軟弱思考が許せない。だから、実家に戻されて以降、放蕩生活には見切りをつけて、剣術には相当身を入れている。八相などの法定だけでなく、龍尾、面影、松風、早船、さらに近頃では鉄破、曲尺といった初代長沼流の形を手の内に入れた金四郎は、年上の連中から相稽古するにもうとんじられているほど腕が上達した。

戻って沐浴した後は半時（一時間）ほど眠り、次に三輪某という代々陽明学を講義している学者のところへ赴き、論語、中庸といった基本的な儒書の素読稽古をした。これは実父景晋の言いつけであり、明年からは測量の実測法と天文方高橋作左衛門の直弟子から天文学を学ぶ段取りがなされている。四年前の文化二年（一八〇五）に実父景晋は若年寄に遣わされて西蝦夷に赴いたのだが、現地では随分ひどい目にあったらしく、江戸に戻ってからは天文学や地形図を開いて色々と勉強をしだしたのである。そんな実父を金四郎は「要するに方向音痴なのであるな」などと蔑んだ目で見ていたのだが、まさか自分が夜空に浮いている月と日本国との距離を測る勉強をすることになるとは思ってもみなかった。

この日、実父景晋は宿直であった。それで几帳面な実父は未の刻（午後二時）になると登城の準備をし出した。目付の服装は質素なもので生麻の裃に帷子は真麻、それ

に黒紋付きを着る。幕臣は質素を旨とし、そのお手本たるべき御目付は重陽の日でも金箔押しの陣羽織のごとく立派な緋羅沙などは着ずに、袱紗小袖を着た。

それでも千石ともなるとそれなりの供を揃えて登城しなくては格好がつかない。まず若党が三人先に立ち、馬に乗った景晋が続きその馬を口取りが引いている。横には草履取りと景晋を挟んで長屋にたむろしている侍といわれる用無しどもがもっともらしく帯刀して警護する。その侍の中に金四郎もいて、侍は年間三両二分一人扶持の給金を与えられているが、金四郎の場合は居候待遇ということで無給である。景晋の後には槍持ちが二人に、挟箱持ちが二人続く。戦などおこりようのない平穏無事な時代であるから、そんな仰々しい行列を組んで登城する必要などないと金四郎は思う。だれでもそう思っているのだが、そうでもして職を与えてやらないと、市中には無宿人や浪人ばかりが増えてしまい、かえってぶっそうになるのである。幕府としては旗本にもなるべく無駄遣いをさせて貯蓄する余裕がないようにし向けている。馬鹿なことを考える暇を与えず、せっせと仕事をさせる政策である。

中間どもは八ツ半（午後三時）には主人を迎える用意を整えて玄関に現れる景晋を待っていた。景晋が現れると金四郎も一応かしこまって頭を下げた。馬に乗った景晋が長屋門を出るのを、門番と屋敷に残る若党のひとりは緊張して送り出した。そのあとはぽくぽくと馬の蹄の音を聞きながら日蔭町通りを行き、芝口橋を渡って城に向かった。

実父景晋は当番目付という上席のひとりなので、大手門の下馬札前で馬を降りて徒歩で入城するとき、布衣以上ということで、供揃いの中から侍ふたりと草履取り、それに挟箱持ちひとりをつき従えることが許されている。もっとも布衣といっても三千石の無役の寄合もいれば、役高百五十俵の国代官でも布衣待遇になってえばっているのもいる。

ただし二百石取りのお目見えでも布衣以下の者は、侍ひとりと草履取りのみを従えて入城するしかない。残された供の者はそこいら辺で主人が下城するまで待機しているのである。おびただしい数の中間や小者があたりにひっくり返っているのを目にとめるたび、なんという無駄遣いだ、と金四郎は慨嘆するのである。彼らに港を整備させたり山から土を運んで沼地を埋め立てさせて給金を支払えば、それこそ幕府の蔵が潤うことになるのだと金四郎は考えるのである。もっとも芝居小屋に出入りしたり、深川だけでなく、根岸や下谷あたりまで出張って遊びほうけていた昨年までは、そんなことは少しも頭に浮かんでは来なかった。全ては実父から金四郎の名を頂いたふた月前から変化したことなのである。いってみれば旗本見習いの札をおでこに貼りつけられたばかりなのである。

金四郎は実父景晋に従って、もうひとりの侍、栗本繁次郎とふたりの中間と共に大手門から砂利を敷き詰めた広場を横切って石段を上り、三の門を通った。それから銅門

を抜けて二の丸に入った。

昼の勤めのときは実父は三の門から中の門、後書院門を通って御玄関に入り、式台を帯刀のまま上がって徒目付や組頭が出迎えるのを待っている。そして片手で徒目付が差し出す書類を受け取り、表坊主を従えて御目付部屋まで無言で進むのである。

だが今日は宿直なので御玄関には向かわず、二の丸をまず巡回して中の口から城に上がった。そこで草履取りがひと働きをし、挟箱持ちは中味を出して坊主に預けると仕事から解放されるのである。当然金四郎も大手門でたむろしていた他の中間と共に屋敷に帰った。

中間の中には身持ちが悪くて、あちこちの旗本屋敷を放り出された渡り中間もいるので、そいつらから新しく開帳された旗本屋敷の賭場の情報などを聞き出した者が暗くなるのを待たずに姿を消してしまうこともある。あいつなどは危ないな、と金四郎はひとりふたりの顔を思い浮かべながら光の眩しい夕方の町を西に向かった。実父の仕事を思うと憂鬱になるのはそんなときだ。自分にはあのような形に嵌った業務は向いていないと思うからだ。

実父は御目付部屋に入ると当番と交代して本番席につく。酉の刻（午後六時）になると徒目付から「外乗橋外、泊り鵜も相見えません」と報告が入ることになっている。町人には何のことだか分からないが、要するに「異常なし」という意味なのである。亥の

刻（午後十時）になると御錠口の杉戸が閉められ、それは卯の刻（午前六時）まで開かれることはない。その間、お目付役は御用所で眠っているのかと思っていたのだが、それは金四郎の勘違いだったようで、目付は夜っぴいて書類と格闘しているという。

目付は若年寄の支配下にあるのでまずその耳目となって旗本、御家人を監察するのが表向きの仕事である。だがときには若年寄を飛び越えて、将軍の意向を受けた側用人から大名家の動向を探る命を帯びることもあると聞いている。だから老中とて大目付だけでなく、十名いる目付にも頭が上がらないのが実情なのである。目付の職を任命される者は謹厳実直を旨とし、欠員が出たときは、残りの九名が候補者を選定しているというほどなのである。

だから政務に直接携わることはなくとも隠された権力は絶大で、監察用部屋から回ってくる伺書、建議書を、老中やときには将軍に申し立てることもある。殿中の巡回から諸役の勤務状態、評定所裁判の陪席から御台所見回りの役目まで負わされている。十名の目付は昼番、当直の連続で非番の日は皆無だ。その支配下に徒目付、小人目付の他に、徒押、黒鍬頭、表火之番、中間頭などがいるが、それでも毎日目の回るほどの忙しさなのである。

文化六年（一八〇九）九月二十日の西空には富士が血だらけの夕陽を背負って、紫の雄大な影を突き出している。その痛い輝きに目を射竦められた金四郎は、改めておれに

は目付なんていう仕事はとてもつとまりそうにないと考えていた。ましてや御勝手係などを任された日には自裁するだろうなと思う。勘定所の出納など、幕府の乏しい財政をどう切り回したらよいかと苦しむだけで楽しいことなど何もなさそうなのだ。

それはそうと、と金四郎は芝口一丁目の町屋に差し掛かったとき声に出して呟いた。

「今夜は、あの盗っ人からなにがしかの連絡があるはずだ」

それで今日は日本橋から芝居小屋のある堺町方面には行かずに、まっすぐに屋敷に向かったのである。昨夜は俳諧師が宿から出るのを屋敷で巣くっている中間ふたりに見張らせ、ひとりにあとをつけさせたのだが、夜陰に紛れてまんまとまかれてしまった。

もし連絡がない場合は江戸中くまなく歩き回って探し出す他ないなと思っている。あの男には一応脅しておいたが、実は「これきり」にされたら困るのは金四郎の方なのだ。知行一千石を拝領している父は吝く、旗本榊原忠寛の娘である母は、世の中に銭が存在することすら知らないような世間知らずで、めったに外出することもない。父には家族以外に援助すべき一族が控えていることもあるだろうが、息子に渡す金など無用と心得ているようで金四郎の小遣い銭は先細るばかりなのである。

実のところ、金四郎は景晋の跡継ぎになると決まっているわけではない。正式に家督を相続するのは景善という現在金四郎の養父となっている人で、金四郎はこの養父のことは実はよく知らないまま育てられたのだ。この人は父、景晋が養子になった元御腰物

奉行であった景好という人の実子であるという。景好に子供が生まれないということで、父は跡継ぎとして養子に迎えられたのだが、その後、突然、景好に子供が生まれたのである。若い腰元に手をつけて発憤したとか、側女が浮気をして儲けた子を景好がそれと知らずに自分の子だと思い込んだとか色々と通説はあるが、どちらにしろ、すでに遠山家の家督を継いでいた父、景晋にしてみれば養父の景好に実子ができたとあっては遠慮ができるし、居心地のいいものではなかったはずだ。

そのせいだろう、金四郎は寛政五年（一七九三）に生まれているのだが、父は幕府には届けず、養父の実子である景善を養子に迎えたのだ。金四郎の誕生が役所に届けが出されたのは、景善が正式に遠山家の跡継ぎとして認められたひと月後のことで、その間、金四郎はこの世に存在しない子として乳母から乳を飲まされていたのである。この養父景善にも跡継ぎが生まれたが六年前にその子は早世してしまった。それで金四郎が何の血縁関係もない景善の養子として幕府に届けられたのだ。つまり家系の上では実父の景晋は祖父ということになっている。てんでやっていられねー、というのが金四郎の本音であった。

実は金四郎にはもともと幕閣に入り、役付となって権勢を誇りたいといった出世欲など毛頭なかった。遠山家は徳川家が将軍になった頃は五百石から始まったと聞いている。それが千石の知行取りになったのは実父景晋やその養父らの努力もあって加増され

たのだろうが、金四郎にとってはその千石を懐にいれてのんびりと暮らせればこの世は極楽だろうという思いでいるのに過ぎない。養父の景善が亡くなればやがて跡継ぎとして家督を相続することになるのだろう。そうなれば実父のように目付となって若年寄にこき使われる日々をあくせくと過ごすことになってしまうだろうが、今の金四郎はなんとかお役御免の不埒な旗本として、泰然自若ののんびり人生を過ごしたいというのが本望なのである。早い話、自他共に認める怠け者で折り紙つきの極楽蜻蛉なのである。

廊下で咳払いがした。入ってきたのは鬢の一部が白くなった五十歳半ばの小柄な武士である。菅沼という植村家の用人である。金四郎はこの用人が百二十石取りであることも、意外に酒には目がない男であることも知っているが、今は遠山家の嫡男としての挨拶をする必要があった。

それで、金四郎とは初対面の用人が堅苦しい挨拶をするのをかしこまったふりで聞き流し、自分の姓名を名乗った。

「それではお目付役、遠山景晋殿のご嫡男でござったか」

「は、ま、そういうことになります」

家督相続するには間に養父景善がいるが、まあよかろうと勝手に判断して金四郎は挨拶した。わざわざ書状をお届け頂きご足労をおかけしたと用人はいってから、「これはいつ御貴殿の屋敷に届けられたものでござるか」と訊いてきた。

「それはわずか四半時（三十分）前のことでござる」

後程、こちらに書状が届けられるのでご在宅して待っていて頂きたい、ということづてを事前に露月町の宿屋の主が知らせてきた。ほどなくして昨夜の俳諧師が「植村政直」宛の書状をもってきた。

「率爾ながらお伺い致しますが、どのような風体の者がこれを届けてきたのでござるか」

菅沼は窪んだ眼窩に細い目をひそめている。頬骨は尖り気味で唇は薄い。それに首を竦めて人を見る癖があるので、何かやましいことでも企んでいるのではないかと人に思わせるところがある。

「さあて、それがしが受け取ったのは屋敷の家士からでござるから、どのような者が届けにきたのか承知してはござらん。ですが、背の曲がった老人であったと家士は申しておりました」

宿屋の主の様子を思い浮かべてそういうと、菅沼はうーむと唸って腕を組んだ。畳に落とした視線に障子を通して入ってきた夕方の光が当たり、震えたように見えた。

無論、金四郎はとぼけていた。老人が用事をいいつけられて屋敷を訪ねてきたのは丁度金四郎が景晋の供をして戻ってきた七ツ半（午後五時）のことで、それから半時（一時間）ほどして先日の俳諧師が現れて、金四郎を屋敷前の神寶小路に呼び出し、この書

状を植村家に届けるようにといったのだった。なんで拙者が届けねばならんのだと訊くと、それで我らの仲間になったことになる、分け前も手に入るといわれたので、いったん屋敷に戻り、袴を穿くと書状を携えて隣の植村家におとないをいれたのである。塀を接した隣家ではあるが、植村家の門は反対側の小路に面している。

用人が唸っていると先程の若党が茶と菓子をもって書院に入ってきた。咽が乾いていたので相手からすすめられる前に茶を飲んだ。ほどよい温もりで上等な茶葉を使っている。菓子も甘小豆を練ったものを薄皮で包んだ上品なものだった。若党が出ていったあとも用人は畳を見つめているだけなので、ではこれにて拙者は失礼致しますといって金四郎は片膝を上げた。すると用人は驚いたように顔を上げて金四郎を見上げた。細い目がカッと見開いている。

「おぬしは、この書状がどのようなものかご存知か。い、いや、中に書かれてあることを読まれたのではあるまいな」

「妙なことをいわれる。糊で閉じてあるものが事前に開かれたのであれば、ひと目でお分かりになるはずではないか」

実際に金四郎は中に何が書かれているのか俳諧師から聞かされていないし、読んでもいない。興味はあったが、そんなことをすればすぐに露見する。

「い、いや、ご無礼なことを申した。おぬしを怪しんでいるわけではない。ただ……」

金四郎は口ごもる用人を注意深く見つめ直した。一味のひとりが植木職人のふりをして植村の屋敷を探索していたのには理由があるはずなのだが、それが盗賊の類なのか、大名家にありがちなお家騒動が要因になっているのかいまだ見当がつかない。植村家にはこれといった騒動が勃発しているようには窺えないのだ。

「ご用人殿。どうかされましたか。何か不審なことでもおありですか」

「いや、そういうことではない。ただ、遠山景晋殿は目付という職分がら、世事に通じておられるのではないかとふと思ったまでで」

この狼狽ぶりは、どういうことだろうと金四郎は訝しんだ。それで探りを入れてみる気になった。

「先程の封書は密書のようなものなのではないのですか」

そう訊くと用人は大仰に上体をそらして金四郎を見つめ直した。ど、どうしてさようなことを訊かれるのじゃ、という声が明らかに震えている。

「なに、封書に書かれた宛名の書体はひどい金釘流であったが、裏面に示された『竜』という文字は流れるような女文字でござった。それでちと妙だと思ったまでです。では、ごめん」

今度は膝を伸ばして立ち上がった。袴がずり落ちそうになったのは、その裾をしっかりと握って引っ張っている用人がいたからである。

「しばし、待たれい」
イボ蛙のように腰を引いて目玉を剝き出している。金四郎はいささかギョッとした。
「隣家のよしみで遠山殿に内密にお願いしたいことがござる」
「内密に？　どのようなことでございますか」
「ですから、内密にすると約束して頂ければお話しいたす」
金四郎は袴の裾を引いたが用人は指を離さない。それで足首を軽く捻転させると用人はたわいなく前のめりになって顎を畳についた。金四郎は片膝をついて用人を上から窺い見た。
「それは目付の父への内密な用向きということですか」
顎をさすりながら顔を上げた用人は、無念そうに頷いた。
「他言せぬと約束して頂けるか」
「約束はできかねる。お家騒動のとばっちりを受けるのは父にとっては迷惑だ。まず、私がお話をお伺いしましょう」
そういうと用人はしばらく俯いていたが、やがて意を決したようで歯を食いしばって金四郎を睨み上げた。歯茎に力が入りすぎたせいか鼻水が垂れている。
「まず、これをお読み頂きたい」
そういって差し出した書状には、

『二十三日。亥の刻。深川富吉町福島橋」
とだけ書かれてあった。金四郎はいまにも嗚咽しそうになっている用人をぼんやりと眺めた。
「なんですか、これは」
「深川の西のはずれに福島橋という小さな橋がかかっているそうじゃ。江戸湾から入った最初の堀にかけられている橋じゃ、近くでは埋め立てをしておる。そこはいずれ大島町と呼ばれることになっておる」
用人は今にも舌を噛み砕きそうな様子で重々しく口を開いたが、金四郎にはやはり何のことだか要領を得ない。
「この福島橋がどうかされましたか」
「二十三日の亥の刻（午後十時）にそこへ金子二千両を持ってこいという脅迫状じゃ」
「……！」
あまりのことに金四郎は息を呑んだ。植木職人に化けた俳諧師の姿やその背後に潜む黒い影が大きく目の前に被さってきた。
「何故、なにゆえ、このような脅迫を受けねばならないのですか」
「姫が何者かに誘拐されたのじゃ」
「姫？　姫とはどちらの姫君のことですか」

「竜子姫じゃ。殿の三女にあたられる姫じゃ。十日前に屋敷から姿を消された。そのへンの経緯は省くが、ともあれ竜子姫は何者かに拐かされ、今はその一味に囚われておる」

あいつらは誘拐犯だったのか、と金四郎は俳諧師の顔を思い浮かべた。つい四半時（三十分）前に書状を手渡されたときは想像すらしていなかった事だった。

「では先程、それがしがこちらにお届けしたのはこの脅迫状だったのですか」

「いや、そうではない。それは昼過ぎに届けられたものじゃ。といってもこちらに直接きたものではなく、殿の弟君にあたる植村忠政殿の屋敷に届けられたものじゃがな。実は二日前に、竜子姫の身代金として二千両を用意しておけと何者らからの脅し状が届けられておったのじゃ」

そういいながら用人は腕を伸ばして金四郎の手から脅迫状を奪い取った。

「おぬしが最前届けてくれたのは、二千両の借用書を書いてくれという竜子姫からの書状でな。どうせ誰かに脅かされて書かされたものじゃろうから、脅迫状には変わりはない」

無念そうに用人はいったが、聞かされた金四郎の方では頭の中で花火が打ち上げられたように混乱した。再び腰を下ろして腕を組んだ。整理するのに時間がかかった。

「脅迫状とこちらの姫君からの手紙にはどちらも二千両を用意するように書かれてあったということですか」

「そうじゃ。これがおぬしの屋敷に間違って届けられたものじゃ」

用人が懐から出した書状は確かに金四郎が俳諧師から受け取ったもので、裏面に「竜」のひと文字が記されている。

「よろしいか」

金四郎は封書から書状を取り出して用人に向けた。

「よいが他言無用じゃ。あ、お父上にはそのことでもご相談することになるやもしれんが」

頷いた金四郎は四つ折りにされている書状を開いた。

「『お父上へ用件のみ申しあげます。明後日、辰の刻（午前八時）、東叡山寛永寺において下さりますよう。その際、二千両の借用書をご持参せしこと。隠元上人にお預け下さいますよう。借用書は竜の身代金とお含みおき下さい。なお返済は毎月百両二箇年。竜はただ今安全な所にかくまわれております。ご心配なきよう。委細は後日』」

口の中で呟いて読んだ金四郎は顔を上げて鴨居を眺めた。考えをまとめようとしたのだが、なにかが交錯している気がして的が絞れない。用人を見るとこちらは澱んだ墨汁のような目に灰色の点が浮いている。

「どうやらとんだ災難に遭われたようですな」

そういうと用人は息も絶え絶えといった様子で頷いた。

「何が何だか分かり申さん。姫が拐かしに遭い、当家は二千両の身代金を要求されておる。それもふた組の誘拐一味から脅迫されておる。一体これはどういうことなのじゃ。どちらかが悪戯して植村家を脅そうとしているということか。何故、植村家なのじゃ。それより何より姫がどこにおるのか分からず参っておるのじゃ」

「姫が囚われておる場所は、私が今日こちらに届けた書状に書いてある通りでしょう。姫は恐らくその一味の監視下にあるのでしょう」

「それはどこじゃ」

槍のような尖ったものが用人の目玉から飛び出してきて金四郎を睨んだ。

「誤解されては困ります。拙者が知るわけがないでしょう。この一味とは何の関係もないんだから」

そうだろうか、と金四郎は疑問を持った。

「そうであろうが、明後日二千両の借用書を書いて寛永寺に届けろだの、二十三日までに小判で二千両を用意しろだの、なぜ突然このような事態が当方にもたらされたのか、皆目見当がつかないのでござる。そこでこれはそれがしだけの一存でござるが、なんとか遠山殿のご助力を仰げないものかと思案したのでござる」

「父上の助けですか。そうはいっても父は旗本の揉め事を監察するのが役目ですから、大名家の騒動に首を突っ込むのはどうかと……」

「大名家といっても殿は分家でござる。それに目付の方の中には、大目付様のご指示で小さい事なら大名家の内紛を収めることもいとわない向きもおられるとお聞きしておる。ここは是非お父上にご相談くださらぬか」

金四郎は考えるふりをした。考えたところで用人が求めているのは脅迫状を送りつけた一味を目付の探索力をつかって捕縛してもらえないかということなのだ。それも、「是非、ご内密に……」と厚かましいことを頼んでいるのだ。

「まずは、明後日の二十二日に二千両の借用書を書いて寛永寺までご持参なさるわけですな」

「致し方ありますまい。この文字は確かに姫が書いたものでござるからの」

「その際、父はどうすればいいのですか」

「寺社方のことはいかにお目付といえども探索はできますまい。この二千両に関しては借用書ということでもあるので、姫さえ無事に戻られれば、その後おいおいに寛永寺とは交渉の場を持てばよろしい。ただ、なんせ書状を読んだのがつい最前のこと故、これもそれがしの一存で決めたことじゃ。それに二千両の借用書といっても咎人が御用になれば破り捨ててもよいはずだからな」

なんだか用人が急に胸をそらして喋ったように金四郎には感じられた。どうやらこの

用人は二千両の借用書に関してはすっとぼける気でいるらしい。

「するとまずは、福島橋に二千両を持ってこいと脅迫してきた連中を引っ捕らえろということですか」

「そ。町奉行所の与力に打ち明けるわけには参らんでな」

「これは火盗改めの役目でしょう。父から火盗改めの長官にお伝えするように申しておきます」

「い、いや、それではことが大きくなる。火盗改めが出張るとなると内密にはできまい。なんせ、事の始まりは竜子姫が屋敷から出ていっただけのことじゃからな」

「えっ？　なんと申された？」

「とにかくお父上にはなるべくことを大きくしないようにお頼みしたい。その上で誘拐一味をこらしめて頂きたいとお願いしたいのじゃ」

何だか分からないがそれは少し都合がよすぎはしないかと金四郎が不満に思っていると、後ろを向いてなにやら懐を探っていた用人は、こちらに向き直ると袱紗に小判を包んでうやうやしく差し出してきた。

「これはまことに些少ながらお手前に受け取って頂きたく……」

用人は尖った顔につくり笑いを浮かべた。するとキツツキのような奇妙な顔が出来上がった。居心地が悪くなった金四郎はそれをしおに席を立った。門を出て、角を曲がったところで袱紗の中味を確かめると、わずかに五両が入っていたばかりである。とたんに金四郎は機嫌が悪くなった。このまま父をわずらわせることなくネコババを決め込んでしまうのが一番安全だ、と思うのは当然のことであった。

七

「なるほど、なかなかよい面構えをしておるな。遠山景晋殿のご嫡男だけのことはある」

奥山右京之介と名乗った浪人は、自ら盃に酒を注いで呑んだ。それから、傍らにいる美しい花魁に呑み干した杯を差し出した。絹の綿入れの小袖の上に小袖仕立ての厚い打掛を羽織った花魁は、浪人をきつい眼差しで睨むと細い顎を横に振った。

すると浪人は山百合を連想させる美しい女の胸を、さりげなく下からすくうように撫で上げた。女の白い頬に行灯の明かりが柔らかくあたり、頬はみるみる内に血の色に染まった。小袖の襟首から覗いた首筋にも紅をまぶしたような艶のある赤味が浮いた。金四郎はいま初めて「傾城」という言葉の意味が理解できた気がした。この花魁だったら城を賭けてもよいと思った。

「金四郎殿はいくつになられる？」

「十七歳だ」

「ほう、若く見えますな」
「わ……」
「そういえば拙者も『危険な十七歳』といわれていた時代があった」
浪人は夜に目を向けた。浅黒い細面の横顔に、果てしない夜の行き着く先を見つめる哀惜のような色が浮いた。着ている紫の沙羅の着物は気障なようだが、この男には不思議に似合っていて、まるで高貴な方が浪人姿に身を変えてお忍びで廓遊びをしている優雅ささえ感じさせる。
しかし、と男に覚えず見惚れていた金四郎は腹の底に向かって吠え立てた。身なりはよくても所詮は浪人である。しかも女を拐かして強請る一味の頭領かもしれない男である。一千石の旗本の家督を相続しようというれっきとした幕臣が、こんなやつに舐められてたまるか、という気概で応えたのだが、なんだか小馬鹿にされているような気がしてきた。
「ここは初めてか？」
潤んだ目で夜を見つめていた浪人は、金四郎を正面から捕らえてあっさりと訊いてきた。眉間に苦み走った男臭さが宿っているが、金四郎を見る浪人の目は笑っていた。心の臓を鷲摑みにされた気がして金四郎は返答に窮した。
実は吉原の大門をくぐったのも初めてなら、妓楼の座敷に上がって花魁を前にするのも初めてである。これまで金四郎が遊んだのは不忍池を前にした池之端仲町の女郎や深川一色町の転び芸者のいる処で、懐に一分銀でもあればひと晩大いに呑んで遊べる岡場所ばかりだ。格子造りの見世の中に遊女が並ぶ光景さえ眩く見えるのである。
「そうであれば、後ほど座敷持ちの女を呼んでやろう。ともあれ今日はよい話を持ってきてくれた。そこまで聞けるとは期待していなかった」
浪人は金四郎の前に座っている若い女に酌をするように促した。女が鉄銚子を手にした。隣を見ると、夕方は俳諧師に化けていた修治という者は腹掛けにパッチを穿き、印半纏を着た職人姿になってこれも女から酌を受けてぐい呑みで酒を呑んでいる。金四郎は面倒だとばかりに銚子を女の手から奪って盃に酒を立て続けに四杯注いで呑んだ。上等な味だった。これまで呑んだどこの酒より舌をなめらかにくすぐって咽を通り過ぎた。
「さて、金四郎殿が聞き込んできた三日後の福島橋での取引にはどう対処したらよいかな。修治、どう思う」
ぐい呑みを置いた職人姿の盗っ人は、視線を落とした。
「そうすねえ。まず、植村の者にそれだけのゲンナマを都合つけられるかですね」
「ゲンナマか。おぬしはどう思う」
浪人は花魁に顔を向けたが、女は急に冷淡になった様子で目をそむけた。その横顔が

たとえようもなく端正だった。柔らかい鼻梁の線から口元にかけてのなまめいた陰が、女の寂しさを含んでいる。金四郎には女が金で身を売る花魁には見えなかった。髪も島田髷に結っているのではなく、梳いて流しているので野生の女のように思えるのである。

「金の都合がついたとしても、その金をどうやって屋敷から運んでくるかですね。それを一味の連中がどんな手段で奪うつもりでいるのか」

修治という男は慎重に言葉を選んでそういった。部屋には美しい花魁とまだ新造らしい遊女がいるが、ふたりには全くおかまいなしに二千両強奪計画を練っていることになる。金四郎は実父景晋の気難しい表情を思い浮かべて、やはりここは五両でとぼけるべきだったのではないか、と後悔し始めていた。

「それに何より、連中がどんなやつらなのか、単なる盗賊の一味なのか、それが分からなくてはこっちも計画の立てようがないですね」

遊女だって耳もあれば口もある。ここでの密談の内容を、いつ外に漏らすか分からない。それに吉原は隠密廻の与力と同心が管轄している。遊郭は盗っ人どもの隠れ宿にはもってこいで、そいつらを狙って火付け盗賊改めの者も姿を変えて探索していると聞いている。

――やはり、来るべきではなかった。分け前を寄越せなどと調子に乗ったのがまずかった。このことがばれたら腹を切るだけではすまんぞ。

金四郎は冷えた酒をそっと咽に流した。まだ火鉢は入っていないのに、背中がじっとりと汗ばんでくるのが感じられた。

修治に連れられて、ここに来た金四郎がまず浪人に伝えたのは、植村家が何者かに姫の身代金として二千両、二十三日の夜、福島橋袂まで運んでこいと脅迫されているということと、別の一味からどうやら二千両の借用書を書いて明日の五ツ（午前八時）時、寛永寺に預けるようにいわれているという二点のみである。

だが、ふたりの話を窺う限りは、どうやらこの奥山という浪人を頭領とする一味は、三日後の夜に、二千両を福島橋袂まで持ってこいと植村政直を脅迫した者たちではなさそうだった。

残る一味は金四郎が届けた書状を書いた者たちで、そこには、「二千両の借用書を寛永寺までご持参下さい」と書かれてあった。書状の裏に示された「竜」という文字は確かに植村家の姫の書体であると用人が証明していた。娘が実の父を恐喝するような真似をするはずがない。用人が推察するように当然、誘拐犯に脅かされて書かされたものだ。すると恐喝団はふた組いることになり、金四郎は知らずにその内のひと組が書いた脅迫状を植村家に届けてしまったことになる。

「そうだな。敵がわからぬのでは作戦の立てようがない。さて、どうするか」

「まず、どこから手をつけますか」

事態が緊迫しているというのにふたりはまるで雑談でもしている調子で話している。修治は愉快そうに奥山という浪人と金四郎を見比べた。金四郎の背中の汗が冷えてきている。おれはとんだ間抜けを演じさせられてしまったのだ、と胸を掻きむしりたい思いで心は絶叫している。

「まず、植村家の姫を誘拐し、身代金を要求している恐喝一味がいるということを、目付に伝えることだ」

浪人の視線が金四郎に向けられている。金四郎の思いなど無関心な冷徹な目だった。とりあえず絶叫を抑えて、この場からなんとか逃れなくてはと防御の思いが先に立った。金四郎は虚勢を張った。

「それはできぬ」

「できるさ。悪党どもが深川の料理茶屋の離れでそんな計略を練っていたと届ければいいだけだ。しかも、届ける相手は同じ屋敷内にいる」

「できぬ。できるわけがない。目付は旗本の探索が仕事だ。盗っ人の探索はしない」

「何をウブなことを申しておる。目付は盗賊の探索もすれば隠密として他国に忍び込むこともする。隠し目付の役目を負っているからこそ、たった十人で徒目付五十人、小人目付百人をかかえておるのだ」

「どうであろうと父上にそのような届けは出せぬ」

「では火盗改めに訴えるとしよう」

浪人は歯ぎしりした金四郎を軽くかわして、修治という怪しげな者に向き直った。

「だが松平越中が老中を罷免されてからタガが緩んでしまったというからな、火盗改めの役人も袖の下を要求するのが仕事になった」

遊女からの酌を拒んで修治がいった。

「袖の下ならまだいいんですが、盗賊を捕らえたついでに連中が貯め込んだお宝の半分は経費と称して分捕ってしまう始末で。長谷川平蔵が急病で亡くなったあとはいじきたねえのばかりが出てきて、長官は毎年のように変わっていました」

「噂では森山源五郎という三百石取りの鉄砲組頭などは、随分貯め込んだというな」

「へい、長谷川平蔵を毒殺して自分が加役についたという者もおります」

「空威張りばかりしていたそうだな。今は誰が長官だ」

「大林弥左衛門様が継続されて任命されておりましたが、どうやらお身体がすぐれないようで。ぼちぼち退任の話も出ていると聞いています。十月にはどうやら先手筒頭の渡辺喜右衛門様が継続なさるようで」

「二千三百石の鉄砲下手か。幕閣も人材不足だな」

「ですから現在の火盗改めの与力や同心どもは、先が見えずにやけっぱちになっている

そうです。今の内に内職で金を貯め込んでおけということです」

「そうか、やけっぱちか。元の鉄砲組に戻っても鉄砲を磨かされるばかりだからな。余禄など入ってこない。しかし、それはそれでこっちにとってはいいことだ。長官が病で臥せっているこのときこそ、大名家を恐喝する一味を引っ捕らえて手柄にすべきだと注進すれば、連中も発憤するだろう」

「でも大名家は大目付の管轄ですぜ」

「構うものか。大名だの旗本だのという垣根をぶち壊して暴れるのが火盗改めの本領だからな」

話を聞きながら、金四郎は驚いていた。去年、火付け盗賊改めの同心が根岸の岡場所に潜んでいた盗賊ども四人を打ち捕ったとき、現場からそう遠くないところで酒を呑んでいた金四郎はすぐに駆けつけて捕り物の現場を見たのだが、それはすさまじいものだった。盗賊のひとりはまっぷたつに額を割られて脳がはみ出しており、あとの三人は腕やら足を切られて血だらけになってのたうち回っていた。そいつらをさらに打ち据えて小者に縄をかけさせていた火付け盗賊改めの苛烈な捕縛を目の当たりにして、喧嘩馴れしていた金四郎も酔いが吹っ飛んだ思いだったのである。

「火盗改めが出ると聞けば、耳ざとい小人目付も知ることになるだろう。それにだ、福島橋に金を持ってこいという限りは、向こうは相当な人数の浪人や無宿者を用意して計

略を練っているに違いない。少なくとも三十数名の仲間がいるとみていい。それに引き替えこちらはたった……」

そう言いかけたとき、見世の男に案内されてまだ若い武士がふたり、ちょっとおどおどとした様子で襖の前に立った。

「おう、丁度よいところへきた。まあ、入れ」

浪人はそう上機嫌でいってふたりを手招きした。

「喜助、酒はまだいい。話がついたら手を叩く。他の女もそのときまで待機させてくれ」

「おい、女はいいから酒くらいは呑ませてくれ」

そう言ってふたりの若侍の間からぬっと顔を覗かせたのは髭面のどこかむさい武士である。浪人ではなくどこか北国あたりの小藩の江戸詰の者らしい。薄手の羽織を着て、木綿の袴をつけているところに貧しさが窺える。

男は勝手に酒を注文すると窓の桟に背を向けている浪人の隣にどっかと座った。熊のようにでかい男である。酒が運ばれてくるのを待つのももどかしいようで、隣にいた修治と呼ばれた男の膳から鉄銚子を奪って、そのまま口をつけてトクトクと呑んでいる。

「この男は若林左太郎といってな、ひとり武者といわれている。江戸随一の一刀流中西道場では師範代をしている。酔うと強いぞ」

うん、そうじゃ、酔うと強い、とひとり武者はいって呑んでいる。中西道場といえば弟子の数は二千人を超えると聞いている。その大道場の師範代と聞いて、金四郎はむさい男を見直す気になった。

「今日は儂も懐がぬくいのじゃ。ほれ、おぬしと間違えて儂を襲った浪人を叱かせたら、木内左馬之助という痩せ侍が『槌屋』の入り婿を狙っていたのが分かってな。そいつをそそのかしたのが番頭で、なんとそいつはとんだ悪党のスケベ爺で、左馬之助に『槌屋』の娘が恋こがれていた奥山右京之介を暗殺させ、その後で自分が『槌屋』の娘をものにして、店ごと手に入れようと狙っておったのじゃ。んで、儂は番頭をとっちめてな、番所に突き出しても一文の得にもならんから、やつが貯め込んだ百四十七両を殺しの代償として分捕ったというわけじゃ。ほれ、右京之介、これはおぬしの身代わりで得た金じゃ。七両ある。とっておいてくれ。今日儂は国許に百三十両という大金を送った。百三十両じゃぞ。二年分の給金じゃ。妻の三津が喜びおる。そうそう、『槌屋』の娘のお秋というのは江戸一番の町娘じゃ、あれほどの女なら歌麿だって描きたがるぞ」

よく喋る男である。だが、その間に二合銚子を三本も空にした早業にはもっと驚いた。

「おまえたちも、はやく入れ」

髭面にそういわれてふたりの若い武士が緊張した面持ちで入ってきて、部屋の隅に座った。ふたりも金四郎と同じように廓には慣れていないと見えて落ち着きがない。反対に金四郎はふたりが座ると妙に余裕が生じた気がする。

「そのふたりは佐々木勘助と伊藤幸三郎という。人を斬るのにはまだ慣れていない。だから戦力外だ」

そう頭領らしい浪人がいった。

人を斬るのに慣れている侍など、この太平のご時世にいるはずがない。こいつは少しおかしいのではないかと金四郎は思って見ていた。それにしてはこの浪人からすがすがしい風が吹き込んできているように感じられるのもおかしいことだと思っていた。それになにより、傍らに冷然と座っている女が美しすぎる。

「つまり、戦力となるのは金四郎、おぬしを入れてこの三人だけだ」

えっ？　と思う間もなく浪人は新たに部屋に入ってきた三人に向かって「こいつは遠山金四郎といって背中に観音様を背負った放蕩息子だ。親父殿は遠山景晋殿といわれてお目付だ。多少、悪いことをしても遠山殿が助けてくれる。一同、存分に刀を振り回してもよいぞ」とあっけらかんと打ち明けてしまっていた。

「じゃあ、金四郎さん、そういうことで、明朝にでもさっそく親父殿に身代金強奪の一味がいると教えてやれ。親父殿は大いに発憤して手柄をたてるぞ。さあ、もういいぞ、酒だ」

浪人は手を叩いた。すると廊下で待機していた女たちが数名、いきなりなだれ込んできた。

「ちょっと待て、こんな乱暴な話があるか。おれは知らんぞ。親父様をこんな滅茶苦茶な話に巻き込むわけにはいかん」

金四郎は両腕を上げて怒鳴った。その口に盃がはめ込まれた。む、と思った内にもう酒が注ぎ込まれている。なにをするか、と呻く間もなく、女が両足を広げて金四郎の下腹部に乗ってきた。白粉の臭いがひどくて金四郎は覚えず噎せた。根岸の安女郎でもこんなひどい白粉は使わない。

おい、浪人、と酒に噎せながら浪人の姿を捜すと、丁度、謎の美女を連れて廊下を出ていくところだった。

「こんなことが許されてたまるか、それにだ、もうひとつの方はどうするのだ。借用書のことだ。えーい、女、着物に手を掛けるな、こんなところで脱がすな」

「借用書の件はだな」

不意に声がするので横を向くと、浪人の青色に張った目がそこにあった。金四郎はびっくりした。

「おぬしに任せる」

そういうとふっと浪人の顔が遠ざかった。

「ふざけるな。おれは知らんぞ。おれは抜ける。もうごめんだ」

怒鳴ったつもりだったが、声が大量に注ぎ込まれた酒に溺れて出てこない。気付くと着物が脱がされて金四郎だけが上半身を裸にされている。

「おい、金四郎とやら、おぬしの観音様はまだ色が入っとらんぞ。それではまるで幽霊じゃ。儂が金をやる。これで観音様を完成させろ」

髭面が偉そうにそう吠えて一両小判を放ってきた。たわけおれにだって五両の金があると金四郎は怒鳴り返したつもりだったが、すでに目眩がし始めていた。金四郎が沈没するのに、四半時（三十分）もかからなかった。

第五章　破滅、破廉恥、波瀾万丈

一

座敷の行灯に照らし出されたのは黒の忍び装束に脚絆と草鞋だった。竜子は右京之介を見上げて佇んでいた。

「この黒装束はおぬしがおれを襲ったときのものだ。裂けたところは縫い合わせてある。これに着替えてここを出るのもよし、小袖に羽織を着て女として大門を出るのもよし、どちらの姿で廓から出ても文句をつける者はいない。駕籠は表に用意してある。どうする」

竜子は右京之介を睨み上げた。瞳を囲む白い部分が冷たく銀色に輝いた。

「どうするとは、どういうことじゃ」

「どちらの扮装で出ていくかと聞いておるのだ」

「これからか」

「これからだ」

竜子は少しの間黙って自分をないがしろにした浪人を見つめていた。この男の本意がどこにあるのかいまだに竜子には摑めなかった。

「明日、父上に二千両の借用書を書かせるのではなかったのか」

浪人は黙って頷いた。

「わらわを今ここから逃してしまっては、せっかくの計略も台無しになるではないか」

はは、と浪人は乾いた声で笑った。廊下を伝わって先程の侍たちの騒ぎ声が聞こえてくる。この座敷との間に四部屋あったはずだから相当大きな声だ。といっても騒ぎ声の主は髭面の大男で先夜、竜子に剣の手ほどきをしてくれた侍だろう。あんなふうに騒いではいるが相当な撃剣家だった。この者たちは侮れないと竜子はあのとき知った。

「儂らのことは心配しなくともよい。竜子は屋敷に戻ることだ」

「おぬしらのことなど心配してなぞいない。じゃが今夜はここにいる」

「なぜだ」

「なぜそなたはわらわを逃がしたがる？」

思い掛けない反論にあって気が滅入ったのか、今度は浪人が口を閉ざした。

「これ以上、ここにいるのは危険だからだ」

ようやく重い口を開いた。

「しらじらしいことを言うでない。このような遊郭にわらわを連れてきたのは、わらわ

をここの楼主に売るためであろう」

「それも一興だと思ったが、買い手がつかぬ。それにおぬしにはここは似合わん」

竜子は若侍に連れられて羅生門河岸と言われるところで客を取る女の生の姿を見た。けばけばしい着物を着て、両足で男の股の間の物をくわえる女の餓鬼のようなおぞましい実態を目の当たりにした。屋敷にいるときは想像だにしなかった女の生き様だった。そうまでして生きようとする女の性とは何なのだろうと虚しく思った。もし自分がここに放り込まれれば、命を賭して逃げ出すが、それができなければ自害して果てるだろう。辛抱することなどできるものではない。

「男に媚びを売って銭を得るのがここの女だ。みな借金に縛られている。身請けされることなど夢のまた夢だ。その夢がきっといつか叶えられると希求しつつ、瘡毒に冒されやがて腐った身体を穴の中に放り込まれるのだ。おぬしに似合うことではない」

浪人のいっていることは、いちいち竜子の胸を刺した。染みいってくる言葉もあった。それが当たっているだけに癪にさわった。

「ここで暮らすのは無理じゃ。ひとりではどうにもできぬ」

「ほう、素直になったな」

「わらわが甘かったのじゃ。屋敷を逃げ出しさえすれば町の娘たちのように自由に芝居を見物し、堅苦しいしきたりからも逃れて存分に楽しく過ごすことができると思っておった。ましてや、どこぞの田舎の藩の国家老の倅の嫁になるなど、考えただけでおぞましい。そう思ったから、逃げたのじゃ。じゃが、ここで色々と見聞きする内に、多くの人に迷惑をかけたことに気付いた」

竜子はいつのまにか項垂れていた。自分は屋敷の池に棲息する緋鯉だったのだ、それ以外は生きている糧を見出せないし、大川に投げ出されればすぐに飢え死にしてしまう。それが哀しかった。

「屋敷に戻れ」

「いやじゃ」

竜子は浪人を睨みつけた。澄んだ瞳から放たれる黒い輝きをまともに受けた右京之介は少したじろいた。女の琴線に触れた思いがしたのである。

「親父殿を安心させてやれ」

「娘を田舎の国家老に売るような父は困らせてやればいい。そなたこそ、せっかくの儲け話を棒に振るぞ。なぜ、わらわを父の許に帰したがる？」

浪人はこめかみに爪をたてた。困っているようでもあった。

「いや、なに、おれにはあんたの親爺殿がそれほど悪い奴には思えなくなったのだよ。だからもう勘弁してやろうと思っている」

浪人は窓に顔を向けて三分の一ほど欠けた月を眺めた。青白い明かりが浪人の鼻梁

をくっきりと際立たせた。頬の陰に夜風があたり浪人の濡れた瞼に波がたった。この人こそ、悪い人ではない、と竜子は思った。胸に切ない思いが込み上げてきた。

「それにな、銭は他からもらう。竜子は屋敷から逃げ出したつもりになっているが、どうやら元々おぬしは屋敷から放逐されることになっていたようだ」

「それはどういうことじゃ」

竜子の詰問を浪人は柔らかい瞳で受けた。

「それは今、色々と調べている。植村の本家が老中へ賄賂を差し出すために、おぬしの親爺殿と叔父の忠政殿が骨を折っているのは存じておるな」

「播磨の仙崎藩国家老から、相当の結納金をわらわの嫁入りと引き替えにもらうことになっているのは知っている」

「誰が教えた」

「梅野じゃ。お芳のあとに入った女中だ」

「そいつがおぬしを見張っていたやつだな。どうだ、最近入った女中で姿を消した者がいるだろう」

竜子は首を傾げた。梅野に連れられて竜子とさほど歳の変わらぬ娘が、行儀見習いで屋敷に勤めることになったと挨拶にきたことがあった。武家勤めは初めてには見えなかったが、広い屋敷に戸惑っていた様子だったから、愛宕の屋敷で働く中間の娘だったかもしれない。

「そういわれてみれば、八月の初めに行儀見習いで勤め出したおなごがおったが、いつのまにか見えなくなった」

「おれの勘ではどうやら殺されてしまったようだな。ひどいことをするやつらだ」

「それは誰のことをいっているのじゃ。父上か」

「いや、親父殿に恨みを抱く奴らさ。その他に身の回りで何かぶっそうな事件が起こらなかったか」

「ぶっそうな事件……いや、存ぜぬ」

「そうか、ならばよい」

「よくない。どういうことなのか説明してみい」

浪人は考え深げに頷いた。だが何もいわずに窓格子の欄干に座って、「竜子は……」と呟いた。なんじゃ、と訊いたが浪人は口を固く結んで呻き声のようなものを鼻から吐いている。もう一度、なんじゃと問い質すと、浪人はそっと頭を上げた。月明かりを背景にした浪人の顔は黒く塗りつぶされていたが、青色に輝いた瞳は強く竜子を捕らえていた。

「ここにきて座れ」

静かな声だった。竜子は引き込まれるように浪人の隣に座った。深い秋風が髪を分け

入って首筋に触れてきた。寒気がした。
「おぬしは母御の顔を覚えておるか」
「母の顔など知らん。幼いときに離されてしまったからな。母は深川の屋敷でわらわを産んだが、育ててくれたのは乳母じゃ。母は、弟が産まれると屋敷を出された。弟は愛宕の屋敷で育てられ、わらわだけがずっと深川に住んだのじゃ」
「では、いま、どこでどうしているかも知らんのか」
「知らん」
「可哀相な女だな」
肩に手が当てられた。竜子は何故かされるがままになっていた。
「会いたいか」
「会いたい。じゃが、それは叶わぬことじゃ。母は側女じゃからな。武家のしきたりじゃ」
「実はな」
といって浪人は小袖の中に指を入れてきた。以前は不意をつかれたが、今度は拒むこともできた。だがそうしなかった。浪人にそうされると何故だかホッとした。
「今、人を遣って色々と調べておる。竜子の母御のことも、誰がなぜおぬしを屋敷から消そうとしたか、その理由もいずれ分かる」

「人を遣っているとは、隠密のことか」
「まあ、そのような人だ。奥に入る必要もあるので女の隠密に調べさせている」
「女？　女忍（おんなしのび）か。おぬし、一体何者じゃ」
竜子は上体を横に向けて浪人の顔を間近で見つめた。
「その女の隠密とおぬしとはどういう関係にある」
「母御のことを知りたいかと聞いておるのだ。隠密のことは知らんでよい」
「母のことなど知りとうない。女の隠密とは江戸一番の町娘のことか」
竜子は欄干から立ち上がっていた。小袖の中の柔肌に逃げられた右京之介の指は、仕方なく小鼻を掻いている。
「よし、分かった。今晩はここにおれ。だが、ここももう安全な処（ところ）ではないぞ。敵は竜子の居場所を知ってしまったからな。だから、明日は移れ」
浪人は立ち上がって竜子を見下ろした。
「屋敷には帰らぬ」
「承知した。竜子には用意させた屋敷がある」
そういって襖に手を掛けた浪人はふと振り返って、それはそうと、と呟いた。まるで子供をあやすようなひどくやさしげな表情をした。
「お芳のことだが、竜子のことを自分のことのように心配している。何故だか分かる

か」

「お芳はわらわにとっては姉のような存在じゃからな」

すると浪人の白い歯が行灯に浮いた。黙って笑ったのだ。

「姉のような、ではない。お芳は竜子の実の姉なのだ。妹を護るために、植村の別邸で女中勤めをしていたのだ」

「ま、まさか、そのような……」

「実の姉だ。母アイは館野忠五郎という御家人の内儀だった。だが忠五郎の不埒な振舞いが許せなくて実家に戻ったのだ。婚姻したときすでに家には女がいたのだ。忠太を産んだ女だ。だが不縁になって実家に戻ったときにはアイはすでに忠五郎の子を懐妊していた。それが竜子の姉、お芳だ」

「お芳……お芳がわらわの姉……それで母はいかがしたのじゃ」

うん、と呟いた浪人の横顔に殺意のようなものが横切るのを竜子は見た。不意に目の前の侍が抜き身を下げて暗闇に向かって溶け込んでいったように思えた。

「お芳を産んだあとアイは三千石の植村家の下働きに入った。働きが認められ女中奉公となり、政直の奥方に可愛がられて奥女中に上がった。その奥女中をしているときに政直の目に留まって竜子と、そして、弟の正四郎を産んだのだ。余程の美人であったのであろうな。お芳は実家で育てられたようだがそれ以上詳しいことは分からん」

「ま、まさか……お芳が……わらわの……」

「竜子を屋敷から逃がす手引きに協力したのも、妹の命を護るためだ。いい姉だの」

あやすように浪人は囁いて、襖の奥に歩き去っていった。その足音がすっかり聞こえなくなると、浪人の仲間の男たちの喚声もいつのまにか聞こえなくなっていた。ただ、廊の下の通りを下卑た笑い声をたてて通り過ぎる酔客の騒音が、窓の外から風に乗ってなだれ込んできた。識らずに竜子の頬を冷たい涙が伝わって、形のよい顎に落ちた。

二

右京之介が大門の外に出ると、丁度五ツ（午後八時）を知らせる時の鐘が聞こえてきた。五十間道にはすでに左太郎を始め、佐々木勘助と伊藤幸三郎が来ていて、右京之介を待っていた。修治は一足先に神田相生町にある旗本屋敷にいって、弥太が集合をかけた怪しげな大道芸人らを指図しているはずである。

「四百石取りの旗本屋敷にまさか『駿河楼』ができているとは、水野家の用人ならずともたまげることじゃろう。親友の儂でさえ知らなかったことじゃからな。そもそも屋敷の主を別棟に追いやり、間借人が本棟を乗っ取るということが許されるのか。あれは幕府のものじゃろうが」

酒臭い息を冷え始めた夜に吐き出した左太郎はいった。はは、と右京之介は乾いた笑

い声を転がせた。

「お役御免になって逐電しようとしていたところを助けたのだから当然だろう。それに『小川屋』もぶっそうな連中が探りを入れるようになったからな、どこか殺風景でどこにいくにも便利な旗本屋敷を探しておったのだ。先祖伝来の札差へ借金も返済できた上、奉公人も丸抱えしてもらったから向こうでは大喜びだ」

「新屋敷通りに片番所つきの門構えに海鼠塀で囲われた七百坪の屋敷か。そこに家来として佐々木ら若侍三人が住み込んだわけだな。四百石の旗本にいったいいくら払った？」

「内緒だ」

水野家の江戸家老水野平兵衛が指定した時刻までまだ一時（二時間）あるので、用人が到着する頃には万事準備できているはずである。武家屋敷の客間をわずか二日で料理茶屋の座敷に改造するには大変な手間がかかっただろうし、元からいる奉公人も怪しんだだろうが、新しい主がどこぞの藩の分家で風流な人物だから屋敷にも料理茶屋を造ったのだ、と伊藤幸三郎が説明したらみなは納得した。給金さえちゃんと払ってもらえれば、主が仙人でもいいのである。

「金四郎は眠っているか」

「ああ、半時（一時間）ともたなかった。存外だらしのないやつじゃ。朝目覚めたらおったまげることじゃろう。なんせ、若年寄水野出羽守忠成の家老の後見人に祭り上げられておるんじゃからなあ」

「そう安心するのはまだ早い。まずはおぬしらの助けが必要だ」

右京之介は歩き出しながら、ふたりの若者に目を向けた。普段から煤を塗ったような顔をしている佐々木勘助はさっきからしきりに腕を回している。砲術を習うにはまず砲台を固める必要があって、それには多少馬鹿でも佐々木のような腕力が必要なのである。

「おい、伊藤、おぬしはさっきから震えておるようだが、大丈夫か」

「武者震いです。それより、もし水野の駕籠が本物の『駿河楼』があるという柳橋に向かってしまったら最初の計画はどうなるのですか」

「はは、向かうわけがないじゃろう。その前に供の者どもを斬り捨ててしまうのだからな。駕籠に乗っている水野すら気付かない速攻でやるのじゃ」

伊藤幸三郎は見るも無惨にがたがたと震え出した。その肩を左太郎は力強く叩いた。

「安心せえ、和泉橋のあたりは辻斬りの名所でな、五ッ半（午後九時）を過ぎると誰も通らん。航海術で鍛えた腕を存分に使うとよいぞ」

伊藤幸三郎の目の前を幅十尺（三メートル）もあるような巨木がしなった。駕籠の回

りにいた四人の供の内、ふたりが倒れるのを雲間から半分だけ顔を覗かせた月が照らした。同時に鞭に似た細い影が、風のように男たちの間をすり抜けた。ただそれだけのことなのに、残ったふたりの供侍は二本の棒のごとくその場に立ち尽くした。太刀の柄にさえ手をかけていなかった。さらに伊藤が驚いたのは、暗闇に潜んでいた四人の駕籠かきがいつのまにか入れ替わっていたことである。彼らは何もなかったように和泉橋を渡っていった。全てが無言の内に行われた。

橋を渡り出して振り返ると、棒立ちになっていた人の影がふたつ、風に押されて倒れた。鞘が地面に当たるその音だけが伊藤の耳に届いた。横を向くと、暗い中なのに佐々木勘助の顔が土色になっているのが分かった。おい、何があったんだ、と声をかけようとして伊藤は言葉を失った。剛胆で鳴らす佐々木が、歯音をたてながら大粒の涙を流していた。

三

駿河沼津藩三万石、水野家家老の水野平兵衛はすでに六十歳を越えた老人である。目には老人特有の灰色の膜が覆っていて、額の皺や口元の皺も刻まれたように深くなっている。老人斑はいたるところに浮かび上がっており、いつ仏壇に納まってもよいような醜悪な人相である。

その家老は差し出された書面を前にして分厚い唇をぶるぶると震わせている。

「その唇を以前に見たことがありますな。えーと、あれは鱈ですな、あの鱈の腹をかっさばいたやつ、そうタラコだ。御貴殿は飯のお菜に不自由しないでよろしい」

「だ、だまらっしゃい！」

癇癪を起こした家老は灰色の目玉の中でギャマンが回転したほどの怒りを表した。

「何故拙者がかような借用証書に署名せねばならぬのじゃ。そもそも拙者が三千両を寛永寺から拝借したとはどういうことじゃ」

対峙する右京之介は朗らかに言い放った。

「簡単に説明しましょう。大和国高取藩の分家で植村政直という人がいて、明日、寛永寺まで二千両の借用書を届けることになっている。ただし、二千両は借り受けることができない。娘の竜子姫が何者かに拉致されたからです。二千両は身代金です」

「だから何じゃ。植村という者など知らんし、その者の娘が拉致されようと拙者には関係がない」

「冷たいなあ」

「貴様は何をいっておるのじゃ。拙者をこんな夜更けにかような処へ呼び出しおって、さては備前守様の側用人というのも嘘っぱちだな」

「ばれましたか」

「女将はどうした。何故このような者をここに入れた」
水野平兵衛は襖に向かって怒鳴った。現れたのは化け物のような凄い婆である。平兵衛は腰を抜かしたようだった。婆の窪んだ頬からキノコが生えていて中央に火がついて燃えている。
「なんじゃ、お前は」
「婆です」
「婆ぁはわかっとる。『駿河楼』の女将はどうした。他の奉公人はどこだ」
「いねえ。ここは『駿河楼』なんかじゃねえからな。ぶつくさいってねーで、早くそこにおめえの名前を書け」そういって婆は唇を細めると、平兵衛に向かって透明な光を吹いた。つつっと鼻を押さえた平兵衛の鼻の先に針が一本刺さっている。
「痺れるめえに書け」そういって婆は襖の向こうに去った。
「向井、小笠原、こやつを討て。向井、構わぬ討て」
平兵衛は首を捩って背後を見た。だがそこにいるはずだった供の者が違う武士に変わっている。なんだ、お前たちは、向井はどうした、と平兵衛が叫ぶと左太郎が襖を開けて現れた。
「ここに上がる前に供の顔を確かめなかったのか。あいつらはとっくに辻斬りにやられておるわ。次はおぬしの番というわけだ。あ、それからここにおるのはみんな我らの一味だ。その数、百六十人。どうじゃ、沼津藩の徒士と馬廻りにもひけはとらんじゃろう」

「お、おぬしたちは一体何者なのじゃ。拙者に何の恨みがあるのじゃ」
右京之介は我が意を得たりとばかり頷いている。
「おれは助太刀を生業としておる奥山という者だ。他の者は手下だと思ってもらおう」
平兵衛は鼻の頭に刺さった針をようやく抜くと、タラコ唇を大仰に震わせて、何故じゃ、とようやく呟いた。
「水野忠成にあらぬ罪をきせられて困っている者がおる。その助太刀だ」
大口を開いて何かをいおうとした平兵衛だが、怒りと恐怖のあまり言葉にならない。そこで右京之介が助け船を出した。
「いま幕閣に若年寄が四人おる。その中でもっとも老中に近いのが植村駿河守家長だ。おぬしの藩主の忠成はこの家長が邪魔で仕方ない。だから毒殺を試みて子飼いの料理人を台所にいれたが、毒味役が死んでその計略は頓挫した」
「あわわ、ど、毒……など……など……」
「おれの密偵が調べたことだ。たとえ事実でなくとも噂がたてば賄賂を嫌う松平信明のことだ、容赦なく罷免する」
「な、なにをいわれる、殿がそのようなことを……」

平兵衛は息も絶え絶えになって手を振り上げた。その指先がおこりでも起こしたように大きく震えている。

「そこで植村家長が賄賂を老中土井大炊頭に贈りつけていることを嗅ぎつけた水野忠成は、その賄賂の金を下野守の屋敷に運ぶ現場を押さえるべく、大目付に働きかけた。そこまでにすでに千両という金が動いている」

それにだ、と呟いて右京之介は白い毛が生えている平兵衛の醜い耳に口を寄せた。

「家長の末弟の忠政を籠絡して、賄賂を運ぶ日時を探り出そうとしたことも存じておる」

横を向いた家老の目玉が殿様蛙のようにギロリと剝き出した。右京之介は身体を戻した。

「家長も権力欲の強い男だが忠成はそれ以上だ。なんせ賄賂で得た蓄財がある。だが、災難なのは家長の弟の政直だ。そしてもっと哀れなのが姫だ。だからおぬしが三千両を寛永寺から借用したことにしたのだ。勿論、その金は可哀相な植村政直にやる」

必死で頭を振った平兵衛はようやく声を出すことができた。

「何故、何故、拙者が借りたことになるのじゃ、それに何故三千両なのじゃ」

「家老のおぬしも忠成の名前を利用して賄賂を取っているからだ。それから加算した千両はおれの助太刀料だ」

平兵衛は喘ぎながら涎をたらたらと垂らしている。

「高い、高すぎる、もう少し、なんとかならんか」

「おい、自分の命を値切るのか。仕方ない、もう少し上げてやろう。おーい、お富さーん」

はーいと快い返事が響いたが、目の前に現れた女を目の当たりにして、平兵衛の前歯がはずれたようである。ふがふがといっているのは、女の口に一片の紙が挟まれていたことと、女の首が大蛇のようにくねくねとしていたからである。

「ろくろっ首のお富といってな、上方での興業では相当鳴らした女だ。さあ、お富の口から証文を取ってさっさと署名するんだな。こんなこともあろうかと、今度は忠成の名前も六文銭の家紋もこちらで先に入れておいたぜ」

借用証文を見た水野家家老は今度は怒りで顔が風呂の焚き口のように燃えて紅くなった。

「ご、ご、ご……五千両……」

「不服らしいな。おい、弥太、釜八先生のご用意はできているか」

「へい、さっきから腕まくりして出番を待っていやした」

弥太が壺をかかえている釜八と一緒に奥の間から入ってきた。そのどんぐり眼がばかに生き生きとしている。やはり薩摩からきた未亡人の世話をしているせいだろうと右京

之介は思った。

「では釜八、頼んだぜ」

ひょっとこのような顔をした釜八は、かかえていた大壺の蓋を開けると、短い筒の笛を口にくわえて吹き出した。ややたって器の破片をつなぎ合わせた陶器のようなものが見え始めた。釜八が笛を吹き続けると、陶器の中から金色の目玉が現れた。平兵衛が身を引いた間にそれは人の拳ほどの蛇の頭になった。その口から火花のような舌が出入りしている。

「南蛮渡来の毒蛇だ。噛まれると手を三度叩く前に成仏できるというありがたい蛇様だ。どうじゃ」

平兵衛は必死で頭を振った。

「では次は一足飛びに八千両になるが、よいか」

平兵衛は逃げようとして畳に手をついたが、掌がすべって鼻の頭を打った。その俯せになった態勢からしきりに「書く、蛇をどけろ、書く」と呻いている。弥太が平兵衛の太った身体を抱き起こした。

平兵衛の手に筆を握らせたのは、後から進み出てきた佐々木だった。ようやくひと仕事した満足感がその汗ばんだ口元に表れている。

五千両の借用書証文に署名し終えた水野平兵衛は少しの間、荒い息をついて肩を上下

させていた。やがて、鼻の頭を撫でると、痺れなどないぞ、と呟いた。起き上がるときはまだ気が動転していたせいか烈しくよろめいた。すかさず伊藤幸三郎が手を添えた。

「ご老人。屋敷まで送って進ぜる。明日はご老人自ら寛永寺に出向いて、この証文を僧正に差し出してもらわなくてはならないですからな」

水野平兵衛は下げた首を回すと、憎々しげに右京之介を睨み上げた。

「若造、こんなことが許されると思うのか。おまえのやっていることは博打打ちと同じ恐喝だ」

呟きに怨念がこもっている。右京之介はあっさりと受け流した。

「博打打ちではないが、助太刀業は表の技で、実は恐喝屋なのですよ」

秋の夜風がすずしく右京之介のこめかみに当たってくる。平兵衛は畳に唾を吐いた。

「覚えておれ」

そう言い捨てて玄関に向かおうとする平兵衛の前に右京之介は立ち塞がった。

「覚えておりますよ。そうだ、忘れないようにご老人の髷を剃り落としてしまいましょう。寛永寺の大僧正も感服しますよ」

喚き声をあげて抵抗する水野家家老をここぞとばかり取り押さえたのは、若林左太郎である。いつの間に用意したのか、弥太の手には剃刀が握られている。

四

船頭の源蔵は大川を南に下ってゆっくりと猪牙舟を漕いでいった。船縁で笠を被って釣り竿を傍らに置き、二合徳利から酒をぐい呑みに注いで優雅に呑んでいるのは、若様と呼ばれている船宿「小川屋」の上客である。もうひとり北西に向かって煙管を使って煙草を吸っているのは日本橋の南界隈を縄張りにしている股引の六三郎という岡っ引きである。中江という同心から手札をもらっているちゃんとした親分さんなので源蔵でも顔くらいは見知っている。その六三郎がハハと笑い声をたてた。どうかしたかと若様が聞いている。

「ご覧なさい。松平の中間が昼間から女を口説いていますぜ」

葦の生い茂った浅い川の向こうに越前福井藩松平家の広大な中屋敷がある。海鼠塀で囲まれていてそこは越前から運ばれてきた産物の蔵屋敷にもなっている。中間は下働きの女中を塀の外に引っ張り出して、しきりに着物の裾に手を差し込もうとしている。波の揺れと葦の茎のせいで細かい動きは見えないが、女も拒みつつその実、男を誘っているようである。

「ハハ、何も知らねえでバカが突っ立ってこっちを見てやがる。ほれ、船番所の役人ですよ」

まだ昼の四ツ半（午前十一時）にもなっていないが、すでに日は高く波頭を照らす光がぱらぱらと金色をはね返してくる。だが、風は存外に冷たく、右京之介の首筋が短刀の抜き身を当てられたようにゾクリとすることがある。着物の上には修治からもらった鉛入りの褞袍を着ている。少し重いが半袖の上に腰のあたりで裾を切って短くしてあるので、防備にもなる上、動きやすい。

「おい源蔵とっつぁん、おめえが見たという野郎は確かに人足寄場に入ったんだな」

そう六三郎親分に問い質されて、へえ、と源蔵はあいまいに答えた。若様には一度伝えただけで理解してもらえたのだが、親分はどうやら疑い深い性格のようだ。

それは七日前の神田明神の祭礼のあった晩のことである。深川から芸者をふたり乗せて両国橋に沿って大川を渡って柳橋まで送った帰り、鉢巻きをした例のサンピンが、酒の入った三人の浪人を連れて料理茶屋に入っていくところを見たのである。例のサンピンというのは、十日ほど前に源蔵に若様のことを尋ねた無宿人のような赤ら顔の三十がらみの男のことである。若様といわれている侍は今晩は出掛けるのかと聞かれて、五十文を見せられた源蔵は、なにげなくそうだと答えてしまったのだが、そのすぐあとで弓矢を射られて危うく命を落とすところだったのである。若様と間違えられたようだとすぐに気付いたが、それで腹の虫が収まるわけではない。その後、なんとはなしにその若造を探していた源蔵は、その晩、料理茶屋から浪人どもと一緒に出てくる男を辛抱強く

待っていた。

どうやってあとをつけようか、舟はどうしたものかと迷っていると丁度うまい具合に浪人のひとりがあそこに舟がいるといって他のふたりを誘って乗り込んできた。浪人どもは呑み直すらしく、永代橋の手前の佐賀町の船着き場で降りていったが、サンピンの方はそのまま上機嫌で石川島の人足寄場まで行った。その後、源蔵は佃島に客を乗せていくときは、それとなくサンピンの居場所を探っていたのである。連中が十数人ほど集まって何事か密談をしているのを突きとめたのは昨夜のことである。

「そいつらが集まっていたというのは寄場のどこだ」

「へえ、タドン小屋で」

「どこだ、そこは」

六三郎は手拭いで頭を覆った上に笠を被っている源蔵を下から窺い見た。

「石川島の南側にあたるところで、そこでタドンをこねる作業をしてますだ。西隣は蛎殻を作っているところで、すぐ寄場の南端にあたる隣は女置き場になってますだ。寄場には女もいて洗濯や縫い物をしてくれますだ。でも、女はみんな元締めや番所役人がとってしまいますだ」

「詳しいな。人足寄場にいたことがあるのか」

そう訊かれて源蔵は返事に窮した。最初に寄場にいれられたのは寛政三年（一七九一）の夏で、まだ寄場が作られて二年目のことだった。当時は寄場作りを建議した長谷川平蔵が監督をしていた。船頭相手の小さな賭場で地元のやくざに流れ者の客が文句をつけて騒ぎになったのだが、源蔵は賭場を覗いただけで博打は打っていない。源蔵の嫌疑はすぐに晴れて、寄場にはわずか四十日しかいなかったのだが、ここで暮らせば無宿者もなんとか腕に技術をつけて外に出ても暮らしていけると思えるほど居心地はよかった。

ところが四年前に再び寄場に送られたときは様変わりしていた。源蔵は舟に乗せた客同士が船着き場につくなり刃物を出して喧嘩をしだしたので止めに入っただけなのだが、その際客の手にしていた匕首で相手を傷つけた。牢に入れられてから寄場送りになって竹笠作りをしていたのだが、隣の小屋には寄場元締めと寄場下役が三十人ほどいて、源蔵はわけもなく木刀で叩かれた。以前は無罪の者や引き取り手のない者が寄場に入れられていたものだが、その頃には博打打ちや強盗といった輩が多く収容されていて、苛酷な油絞り作業に嫌気がさして逃亡する者があいついだ。どうせいずれは打ち首だとふてくされていた者は、捕まると案の定死罪になった。逃亡した者の中には監視する元締めや役人とつるんで商人らと悪事を企む者もいた。

昨夜源蔵がタドン小屋で聞いた密談も、下役や悪質な元の逃亡者が、寄場人足を抱き込んで、仕事に手を貸すよう説得をしていたのである。

「どんな相談をしていたんだ」
「詳しくはわからねえんで。ただ、二十三日の晩、五ッ（午後八時）頃に熊井町の正源寺に集まれと。そこで指図をするような話でした」
「それで」と訊いたのは若様である。いつのまにか徳利の酒を呑み干してつまらなそうに糸を垂れている。
「その若造や浪人たちもそこで寝起きしているのか」
「いえ、連中はあそこにおりやす」
そういって源蔵は石川島の寄場と接した佃島を指さした。
「あのでっぱった所は漁師町でして、あの北の端は明地で小屋がふたつばかり建ってます。まず、二十人くらいの浪人やら無宿人が出入りしていやす。干潮のときはタドン小屋からは砂洲の上を歩いて小屋まで行けますだ」
「よし、ちょっと行って覗いてみよう。舟をつけろ」
そんな無茶なと思ったが、どう考えても浪人どもより若様の方が恐ろしいので、とにかくいわれた通り、源蔵は生い茂る葦の間をそろそろと小屋めざして漕いでいった。
河岸に接するところまで来ると、葦の群に遮られて舟は少しも進めなくなった。六三郎に、待っておれといって、釣り竿を肩に担いで、若様は浅瀬を渡って島の北端に建った小屋のひとつにたどりついた。それで中をそっと探るのかと思ったら、いきなり、オ

ーィと声をあげたので源蔵はびっくりした。六三郎もくわえていた煙管を思わず落としたほどだった。
声を聞きつけた者たちが小屋の中からすぐに飛び出してきた。みんなで十二人いる。浪人も五人いて、頬に斬られ傷のある者とか腕の無い者とか色々いる。その内のひとりが刀の柄に手を置いた。若様は落ちついた様子で釣り竿の先を浪人に向けて振り回した。それからにこにことしながら葦の間を通り抜けて小舟に戻ってきた。
「六三郎、やつらは明日の晩、金を奪う気だぞ。奪った千両箱はいったんあそこに運び込んで、大坂までの蔵米船に乗せる算段だ」
「そんな無茶なことを本気でやるつもりなんですかね。役人だって黙っちゃいませんぜ」
「町役人に知らせるのは六三郎の仕事だ。これからすぐにかかれ。おれは火盗改めに通達する。それから目付も動く。いや、もう動いているはずだ」
六三郎は深く唸った。
「これは大変な捕り物になりましたね。怪我人だけじゃすみそうにありませんぜ」
なに、といった若様は笠をとって釣り竿を引き艫に頭を預けた。源蔵が釣り針はどうしたのだろうと思って何気なく明地の方に目をやると、ひとりの浪人が蜘蛛の糸にでもかかったように岸辺でのたうち回っている。

「怪我人が出るのは、やつらの方だ。明晩といわず、今晩にでもこっちは船からどんどん砲弾を撃ち込んでやる。居候の吉村弥次郎が十連発の銃を作ってな、それから佐々木勘助は大砲を持ってくることになっている。どちらも試作品だ」

「てことは、もし失敗したら撃ち手の方にも怪我人が出るんじゃないんですか」

「その辺はもう手を打ってある。生きのびた浪人と館野久兵衛というやくざ崩れの元御家人とその内儀の親父を砲撃手にする。なに、どうせ死ぬ身だから丁度好い」

六三郎はあきれて声も出ない。やっぱりこわい人だと源蔵は思った。すると若様はむっくりと起き上がり、鱗雲の浮きだした秋空に向かって嘆息した。

「思い出した。あそこにいるのは、あの晩居酒屋にきた女だ。あいつ盗賊どもの手引きをしていやがったのか。つまりおれのことを仲間に伝えたのもあのアバズレだ。その仲間が松葉屋の楼主から二千両のことを聞き込んだとすれば……」

口の中でぶつぶつと呟いていた若様は頭を抱えて船底に倒れ込んだ。小さな猪牙舟が大きく傾いだ。

「ということはおれがやつらに、恐喝の手引きを教えてしまったということになるではないか」

悶絶する若様を眺めるのも一興だと源蔵は思って見ていた。

五

六三郎と別れた後で右京之介は源蔵に櫓を漕がせて小網町にある「小川屋」に行って柳橋から清吉を呼んで、今朝、魚河岸から上がったばかりの鮃を煮付けにしたものと数の子を肴に清吉の酌で昼酒を呑んだ。

修治が挨拶に来たがすぐに板場に戻った。昨夜は陰で旗本屋敷の奉公人の指揮をとったはずだが、おくびにも出さなかった。影に徹する男なのである。それに大仕事をしても一切の報酬を要求しない。右京之介が江戸に来たばかりのまだ二十二歳の頃に南森下町の甚兵衛長屋で知り合って以来の仲間である。修治と出会わなかったら江戸での暮らしは随分味けないものになっただろう、と感慨にふけりながらぬる燗にした伏見の酒を口に含んだ。

「ずっとお見限りだったのね。今夜は柳橋に来て下さい。他の席は断って待ってますから」と清吉は珍しくしおらしいことをいった。

「今夜は石川島で花火が上がるぞ。おまえを贔屓にしている水野忠成に伝えてやれ。ぶっとんで喜ぶぞ」

そういって右京之介はにやにやとした。この話は二時（四時間）もしない内に水野の耳に届くだろう。そして水野家家老の水野平兵衛は丸められた頭を撫でながら花火を見

て悔しがることだろう。そう思うとにやけた笑いが止まらないのである。平兵衛はまさか寛永寺へ差し出した借用証文を破り捨てるわけにもいかず、また色々と弱小藩をいじめて賄賂を差し出させて蓄財に励むことだろう。それが若年寄を殿様に持つ家老の仕事なのだ。

「槌屋」の惣兵衛に呼ばれている時刻がきたので右京之介は席を立った。清吉に見送られて表に出ると弥太が小犬と遊んでいた。「犬と遊んでいていいのか」と訊くと「へい、もう元相撲取りを四人揃えていやすから大丈夫です。大砲くらい簡単に船に運び込めますよ」と上機嫌で答えた。

「船の手配は済んだのか」

「そっちの方は若様の口利きで若侍三人組が万事手筈を整えています。若干費用はかかったようですが」

手揉みをせんばかりの腰の低さで言った。妙にそわそわしている。さては銭を要求しているのだな、と思って財布を取り出そうとすると、船宿の裏手から三十がらみのキリリとした顔立ちの武家の妻が現れた。傍らに子供がへばりついている。

「市助さん、ご不浄はいかがでしたか、江戸の厠はきれいでござんしょ。楓奥様、いつまでも気を落とされてはいけません、ご主人は見つかります、このお方がきっと探してくれますよ」

などと弥太はいっている。こいつは馬鹿か、と右京之介は思った。

「おぬしが楓さんか。ご主人はもう死んだ」

楓の顔から血の気がみるみる引いていった。若様、いくらなんでも、いきなりそんなことというなんてひどすぎますよ、と弥太は偉そうにいっている。「馬鹿者」と右京之介は弥太を叱った。それから今にも涙を流しそうになっている女に向かっていった。

「ご主人は確かに植村家に職を得たが仕官したわけではない。姫の用心棒として臨時に雇われていたようだ。ある晩、賊を追ったが斬り合いになり、賊に打ち倒された。通りかかったのがそこにいる弥太だ。あなたには気の毒で本当のことはいえなかったようだ。わたしは斬られる前のご主人とどうやら会っていたようだ」

右京之介は財布から五両取りだして懐紙に包んだ。

「斬られたあと、ご主人は楓という名前を出したそうだ。弥太、おまえからお渡ししろ」

右京之介が差し出した懐紙を、弥太はすぐには受け取らずにぐずぐずいっていた。

「亡くなったご主人の財布に入っていたものだそうだ。斬られて死んだのは気の毒だが、それは天命というものだ。墓に参るときは弥太が案内する。だが明日まで待ってくれ」

行きかけた右京之介は着流しの着物の裾にじゃれついてくる小犬に気付いて、そうだ

といった。

「江戸におる間はわたしの屋敷におるとよい。奉公人は余っているのだが、なんせ住む者がおらん。少年、この犬と一緒にくればよい」

市助少年は目を輝かせた。母は息子の肩に手を置いたまま何もいえずにいる。その隣に立っている鯰顔の男も、少年を真似て目を輝かせて右京之介を見上げている。右京之介はとたんに気持ちが悪くなった。

「弥太、おまえは来んでよい」

「槌屋」で歓待を受けたが右京之介は酒だけ呑んで肴は辞退した。話はお秋のことで、どうしましょうと惣兵衛から訊かれたが右京之介にはどう答えていいのか分からない。娘のお秋は左太郎がいうように江戸小町といってもいいくらい肌のきめが細かく、細い目から覗く瞳が怜悧で、自分の意見もはっきりとしたものをもっている。

お秋は生まれて初めて男に酌をしたといって恥ずかしがっていたが、その表情には歓びも溢れている。なかなか活発な娘だなというのが右京之介の感想だった。一年ほど武家奉公をさせたらどうか、商家の妻になるのがどんなに楽しいことかわかるであろうと無責任なことをいって右京之介は「槌屋」を辞してきた。

神田相生町の新屋敷通りに手に入れた旗本屋敷に向かうつもりで神田川にかかる筋違御門を渡ると、下谷御成通りを反対側からやってきた女鳥刺しが、そのあたりに多い町代地をきょろきょろ眺めながら近づいてきた。丸い鳥追い笠を目深に被り、麻の上衣を羽織った小汚いなりで、足には脚絆をつけ草鞋を履いている。

女の鳥刺しは格別珍しいことではないが、ひとりで仕事をすることはまずない。鳥刺しは将軍の鷹の餌を探すのが仕事だが、その権利を盾にどんな大身の旗本屋敷でも堂々と入っていくので、どこでも探索方ではないかと腫れ物に触るような丁重な扱いをしてお帰りを願っている。当然、鳥刺しにも賄賂政治が行き届くようになる。

女鳥刺しはふらふら歩いているようで、その足の先は右京之介に向かっている。晩には大事な仕事をかかえているので、得体の知れない探索を受けるのはよろしくないと思って隅に寄ったのだが、女鳥刺しは土で汚れた顔を右京之介に向けて身体を擦り寄せてきた。

なんだ、この女は、と思ったとき、女鳥刺しは唇を動かさずに低く呟いた。

「二千両恐喝の黒幕が知れました」

「多美殿か！」

土にまみれた顔の下には美しい素顔が隠されている。耳からはほのかな花の香りが漂ってくる。花の名前は分からなかったが、その芳しい香りが鼻を通ると、右京之介の心は急に砕けた。女の囁きが右京之介の身体を縛り付けた。

「植村政直の妻女、幾が全て企んだものです」
「自分の夫から二千両を強請り取ろうとしたのか。何故じゃ」
「憶測でものはいえません。幾は老女に竜子姫君を誘拐することを命じ、老女は痩せ浪人どもをまとめている頭領と連絡を取り、誘拐を手引きしたものです。若様が竜子姫を助けなければ、竜子姫は浪人どもに囚われていたことでしょう」
右京之介は低く唸った。植村家と分家の間に行き違いが生じているのは承知していたが、まさか政直の奥方が夫を貶めるような企みをもっているとは思いもよらなかったのである。
「その浪人どもを牛耳っている者というのは誰だ」
「餓えた浪人が自然に蝟集するところは、江戸でもそれほど多くはありません。みな、同じ者を頼るものです。まだ顔を見せていませんが、老女の口から片岡という名が吐かれました」
「片岡。片岡万右衛門か」
「ご記憶にありますか」
「大和郡山藩十六万石、柳沢信光の兄、信復のところに巣くっていた浪人だ。相当な人物であるが、幕府転覆を企み、自分が皇帝になろうとしている野心家だ」
牛車に石材を積んだ男が橋を渡ってやってきたのでふたりはいったん離れた。次に通

りかかった坊主がどこかの小径に入るのを待って多美は再び顔を寄せてきた。瞳が潤んだようにきらきらと秋の日差しを弾き返している。もう二十代の半ばになっているはずだったが、着物に隠された肉体は柔らかく、男の筋肉を吸い込む弾力を秘めていた。
「それからもうひとつあります」
「なんじゃ」
「驚かれてはなりません。幾は夫の側女だったアイ様を殺しています。竜子姫の実母です」
「な、なんと。いつのことだ」
「二ヶ月前のことです。これも片岡が浪人どもにやらせたことです。今回の二千両はその殺人の報酬ととってよいのではないでしょうか」
「む……生きておったのか、竜子の母は」
「はい。お世継ぎの正四郎様をお産みなされたあとは、しばらく実家に戻っておいでだったようです。その後は政直殿が幾の機嫌をそこねてはかえってアイ様が可哀相だと思われて、元麻布のしもた屋に下女と老爺の三人で住まわせたそうです。このことは、元奥勤めをしていた者から聞きました」
「だが、幾という女は今になって何故、そのようなむごいことを」
「アイ様が生きていると幾が知ったのが、竜子様の婚礼が整った頃だそうです」

「だが、何故。それほどまでに……。政直の情愛を一身に受けたアイが憎かったということか。女の嫉妬は老婆になっても衰えぬものなのか」

「……」

「なんと哀れな。おれは大名家のお家騒動や女同士の争いには加わるつもりは毛頭ないが、しかし、今度ばかりは幾という女が許せん。自分の虚栄心を満足させるためなら、三千石を取り潰しても構わぬということなのか、植村家に奉公する者どもを路頭に迷わせても構わぬということなのか」

「……」

「許せん。ここは勝手に成敗いたす。多美殿は一切構うな。おれがやる」

「ご無理なさいますな。なんにしましても右京之介様のお命に代わるものはございませんゆえ」

そう呟くと、鳥刺しの姿がふっと掻き消えた。顔を上げるともう筋違橋を渡っている。細身の姿をだぶついた上衣で隠した多美の後ろ姿は、しとやかできれいだった。右京之介は、竜子が待っている旗本屋敷になどいかずに、お祭りが始まるまで、そこいらの蕎麦屋で一杯引っかけていようかと思って立ち尽くした。植村政直の屋敷の奥にひとりで乗り込もうとする高ぶった気持ちを、少し鎮める必要があった。

六

新シ橋を渡り、神田川沿いに西に向かって歩きながら、金四郎は懐手をしながら考えていた。

人生が変わった。この三日間で全てが変わった。ボロボロになった。

元々は自分が植木職人に化けた妙な男にちょっかいを掛けたのが間違いだった。そいつが三千石植村政直の屋敷に探りを入れている探索方の者ではないかと疑ったのも、勘違いに拍車をかけた。植木職人が俳諧師の出で立ちをして宿屋に戻ってくれば、幕閣の、それも大目付配下の密偵ではないかと疑うのは、目付の後継者としてみれば、当然のことだった。

それを試すつもりで、分け前を寄越せと脅したのがいけなかった。やつは密偵などではなく、本物の悪党一味の者だったのだ。「策士、策に溺れる」とはこのことで、脅したつもりが、反対にやつらに手を貸すことになっていたのだ。なんたる早とちり。お調子者。愚か者。そして早漏。おれはやはり馬鹿な放蕩息子と蔑まれておればよかったのだ。小アジのくせに、なまじ小賢しいところを見せたために鯨に呑み込まれてしまったではないか。

「ほなら、ねえさん、あとでよろしうお願いしますぅ」と島田髷の芸者が京言葉で赤い

羽織を着て置屋から戸を開けて出てきた。あの芸者も北国生まれの田舎者だとお里が客に知られたら赤っ恥をかくに違いない。揚代を値切られた上に無骨な男どもにいいようにいたぶられて人生を破滅させることだろう。

いや、そうではない、と金四郎は川の堤から下帯をはずして小便をしている男の尻を後ろから蹴飛ばしざま、自分の考えを否定した。

あの若様といわれている男だったら、それを承知の上で女の乳房を「うい奴じゃ」とでも猫撫で声で囁いて触りまくるに違いない。そういう不埒な男なのだ。しかし、なぜ高級な花魁ともあろう女が、あんな軽薄な浪人にいとも簡単に胸をさすらせたりするのだろうか。やはり花魁といえども、金さえ持っていればどんな客にでも媚びを売るものだろうか。しかし、あの飛び抜けて美形の花魁は、あの浪人に媚びを売っているように見えなかった。あれは何故だろう。どこかに極意があるのだろうか。

「このサンピンめ、なにしやがるんだ」

と啖呵を切って背後から襲いかかってきたのは、小便をしていた遊び人である。金四郎は男の腕を摑んで捻り、急所を思い切り蹴り上げた。近頃は武士に向かって平気で喧嘩をふっかけてくる輩がいる、けしからんことだ、と思った金四郎は、急所を両手で挟んで舌を覗かせている男を背後から抱き上げて、男の尾てい骨を自分の膝に打ちつけた。それで遊び人は、ゲッと呻いて目を回したが、それでも許せない金四郎は、そいつ

の襟首を摑んで川の堤に引っ張っていき、小便をしたとおぼしいあたりに放り投げた。

再び、何故、花魁はあの不埒な浪人のされるがままになっていたのだろう、と考えながら御徒町に入ろうとした。すると和泉橋を渡ってきた俳諧師と偶然出喰わした。今日は商人の出で立ちをしている。

「おや、遠山様、これは奇遇ですな。どちらへおいでで」

腰を低くしてしおらしいことをいう。

「奇遇でも何でもない。呼び出しをかけたのはそちであろう。報償金をくれるという書状を受け取ったからやってきたのだ」

「さようですか。遠山様は大変なお働きでしたから相当な分け前がもらえるはずですよ」

「十両くらいもらえるか」

「何かをお考えだったようですが」

金四郎の問いには答えず、修治は観察眼の鋭いところをみせた。さすがに泥棒は油断がならないと唸った。

「あの日、植木職人を見かけさえしなければ、拙者はこれまで通り安穏に暮らしておったのにと反省しておったのだ」

「そうでしょうとも。でも小遣いには事欠いたことでしょうね。それにめったに経験で

きないことを体験された」

金四郎はまた考えた。恐ろしい体験であり、いまだに何が起こったのかよく分からない所があった。俳諧師に会った翌日、さっそく書状を隣家の植村政直の屋敷に届けるようにいわれた。隣の住民だから書状を届けても怪しまれないと俳諧師はいったのだが、それが寛永寺に二千両の借用証文を書いてほしいという政直の娘、竜子姫からの依頼状だと知って驚いた。それどころか、応対した菅沼という用人は、別口からも身代金要求の脅迫状が届いており、一切合切目付のお父上に頼んで大目付には悟られぬよう、内密にことを解決してもらえないかと極めて調子のよいことを頼んできたのだ。

それを一味の首魁である浪人に伝えたら大喜びで、さっそく吉原での宴会になったのだ。驚いたのは翌朝のことで、まだ薄暗い内に遠山家から若党がやってきて、植村家から寛永寺まで用人の供をしてくれと植村政直様からのご依頼でございますと伝えてきた。あわてて若党が持参した裃に着替えようと裸になると、若党がギャッと喚いて腰を抜かした。そういえば背中が痒い。なんだと思って妓楼の若い者に鏡を持ってこさせて背中を映してみると、背中一面に女の生首が描かれている。女の口には抜き身の短刀がくわえられ、口の脇から首まで真っ赤な鮮血がしたたっている。

やられた、と思って急いで絵の具で描かれた生首を消そうとしたが、これがなかなか消えない。彫ったわけではないのだからと若党にも手伝わせて消そうと焦ったが、つ

いにあきらめて植村家の屋敷まで駕籠をとばした。

何故、他家の用人の供をしなくてはならないのだとぶつぶつ不平を呟きながら、植村家の用人が乗る駕籠の横について上野の東叡山寛永寺までいった。

人気のない三橋の左の橋を渡って広場を行くと、仁王門前の長屋から旗本の奉公人らしいのが数名ぱらぱらと出てきた。みなで重そうに茣蓙を担いでいるので何事かと驚いていると、植村家の駕籠が下ろされ、ゆっくりと菅沼用人が出てきた。

「許されよ、これも奥山右京之介殿の御下知でござる」と念仏みたいなことを唱えると、奉公人たちは茣蓙に包まれたものを用人と入れ替わりに駕籠に放り込んだ。その茣蓙を取り除かれた老人を見て金四郎は眼を剝いた。頭巾を被っているが、以前に二度見かけたその人物こそ水野忠成の用人、水野平兵衛ではないか。しかも目を開いてはいるが明らかに変調をきたしてぜえぜえと掠れ声を出している。

「では約束しましたぜ。寛永寺様への返済が滞るっていうと、水野家だけでなく、他の大名家にも迷惑がかかりますからね。あ、それからいい忘れましたが、水野家が植村様に送り込んでいた密偵どもは、若様がまとめて六万坪に閉じこめてあるそうですぜ」

そういってどこからか現れた鯰顔の町人は、水野平兵衛が被っていた頭巾を取った。現れたのは剃り跡も青い坊主頭である。髷がなくては客に応接することはできないはずである。そこで鯰男はじめどこかの奉公人たちは一行を見送った。金四郎は政直の用人

や供の者たちと一緒に中堂に入り、そこで大僧正に平兵衛が証文らしきものを差し出すのをかしこまって見ていた。

「こちらにおいでなのはお目付、遠山景晋様のご嫡男の遠山金四郎様でございます。見届け人としてご同行願いました」

菅沼が眉ひとつ動かさずにしゃあしゃあと述べた。水野平兵衛はあんぐりと口を開いて金四郎を見返した。びっくりしていたのは金四郎も同じである。「やられた。これでおれも悪党どもと一蓮托生だ」。そこで人生の針路が変わったのをはっきりと思い知らされたのである。

修治と並んで歩きながら、神田相生町の火消し用水の溜池にさしかかると、すぐ横で辻駕籠が止まった。おう、といって顔を出したのは若林左太郎と呼ばれていたむさい武士である。田舎藩士らしいがこいつも相当な悪者である。どこかの商家の娘に惚れた武士が雇った浪人をぶった斬ったとか、その娘に横恋慕した黒幕の番頭が貯めていた百四十七両を懲らしめの意味でせしめてやったとか自慢していた男である。刺客のひとりは生かしておいたといっていたが、どうしたものか分かったものではない。

「そうだ」

思い当たることがあって金四郎は思わず左の掌を拳で打った。あの船だ。どでかい、まるで島のようにどでかい亀のような軍艦の舳先で、背後から若侍に剣で突かれながら

回転式の十連発銃を踏ん張って撃っていた三人の浪人の内のひとりがそうなのだろう。いったいあのような銃をどこから持ってきたのか。この国で造ったものでないのは確かで、十連発が次から次へ発射されるなど、想像すらできないことだ。結局あの浪人たちは大働きのあと、一番年嵩の者は消耗しつくしてぽっくりと逝ってしまい、あとのふたりは敵からの反撃を受けて戦死してしまったが、あの若様一味の盾にされて殺されたも同然なのだ。

「そうだ。若様といえば、あの男は何者なのだ。一体どこの若様なのだ」

「これじゃ」

といって駕籠から降りた若林左太郎が差し出したのはひと振りの短刀である。よく見るとその柄には金をまぶした葵の紋が彫られている。

「こ、これは、まさか、お上の……」

「いや、儂のものだ。右京之介から預かったものだ。昨夜は随分派手にやったからな、大目付配下の探索の者や目付の下役や密偵、それに火盗改めの役人から町役人、町火消しまで入り乱れて石川島は大変な騒ぎであったからな。面倒が起きた場合はこの葵の紋を役人どもに見せてやれといわれておったのじゃ。いや、おかげで大いに役に立ったわい。役人からひとりの死人も出なかったし、石川島に巣くっていた悪人どもは砲弾を喰らってケツを焼かれ、みな海に飛び込みおった。そこを一網打尽じゃ。おぬしの親父殿

も大手柄をあげたそうで万々歳じゃ」

金四郎が先程、神田相生町の旗本屋敷に向かいながら最初に考え事をしていたのは、昨夜、石川島の寄場の向かいにあった小屋が一気に砲弾の嵐に見舞われたことだった。そこが幕府転覆を企む悪党一味の隠れ家だということは、昨日の早朝、寛永寺からとって返してお城に実父を迎えにいった折りに、「緊急の事態でござる」と浪人に命じられるまま伝えておいたことだ。実父がその後、どのような処置をとったのかは知らないが、徒目付や小人目付を至急配備して探索にあたったことは、どこの目付の配下の者より早く現場付近に到着していたことで分かる。怪我人が出なかったのも、隠れ家には大砲の弾が撃ち込まれると事前に通達していたからである。

「そうだ、そもそもあの大砲はどこから持ってきたのだ。相撲取りがなんであそこにいたのだ。それより、あのどでかい亀の形をした軍艦はどこから運んできたのだ。オロシアから買い受けたのか、ならば密貿易ではないか」

金四郎は眉間に縦皺を寄せてまくし立てた。すると髭面の太った若林左太郎は短刀を胸にしまうと、「おぬしにはまだ知らぬことがあったほうがいい」と存外真面目な顔で言って片門番付きの長屋門の屋敷に入っていった。敷石を踏んで玄関に行くと、最初に出てきたのは砲台を指図していた佐々木勘助という侍で、若様がお待ちだぞといって奥に案内した。座敷には若様とよばれる浪人と伊藤幸三郎ともうひとり同じ年格好の若侍

がいて、帳面を前に何事か説明をしている。

「やあ、色々とご苦労であった。随分楽しんだことであろう」

障子を開け放しにしているので朝の秋の日差しが座敷に差し込んでくる。風も舞い込んできて若様の明るい顔がさらに爽やかに息をしているようだ。金四郎はこの浪人がおなごに好かれる理由が分かった気がした。陰鬱な顔をしている旗本や勤番侍ばかりの世の中で、この浪人のすがすがしい姿は緑の葉を枝にたくさんつけた一本の樹木なのだ。

左太郎と修治とそれにいつのまにやってきたのか、昨日の朝見かけた鯰顔の町人も部屋の隅で両手を股の間に差し込んで何やら嬉しそうにみんなを見回している。

男たちが揃ったのを見計らったように三人の女たちが盆に茶を載せて座敷に入ってきた。みなそれぞれ育ち方は違うようだが、揃って美形である。なぜ、この男の周囲には美人ばかり集まるのだろうと金四郎はそこでまた考えた。中央に座った浪人はなにやら愉快そうに男たちを見回した。

「存知おる者もいるであろうが、一応紹介しておこう。この人は重岡楓さんという。薩摩の人で元人妻。今日からこの屋敷に勤めてもらうことになった」

彫りの深い顔立ちの女はそっと頭を下げた。おい、弥太、あまりこの方のそばに寄るんじゃないぞ、せっかくの美人が鯰臭くなると左太郎がいった。弥太という町人は不満

顔だったが他の者は声をたてて笑った。事情がよく呑み込めていない金四郎も合わせて笑い声をたてた。

「こちらは館野芳さんといわれる。竜子姫の付き女中をしていた方だ」

年増(としま)だがこの女も美人だった。ただこれまでも耳にしていた植村政直の娘という者こそ一番最初にこの場に出てきて、みなに礼をいうべきではないのかと金四郎は考えた。

「それからこっちのおしゃまな女は十軒店新道の文具問屋『槌屋』のひとり娘のお秋という」

若様と呼ばれる浪人が紹介すると、町娘はひとり娘らしい我儘(わがまま)ぶりで、「この座敷は男臭くてイヤ」と言い放った。それからもう一度前に座った男たちを一瞥(いちべつ)すると、おまえたちなど歯牙(しが)にも掛けないといったそぶりで顎をツンと上に振った。

「それでよい」

若様がそういうとお秋は可愛らしい口元から舌をぺろりと出した。

「お秋はこれから屋敷奉公に出ることになった。ただいま特訓中だ。明年三月には西国のさる藩の国家老の倅に嫁ぐことになっている」

「おいおい、そんなことは儂は聞いとらんぞ。いつからそんな話になったんだ」

「なに、実際のところはどうなるか分からん。当分の間はまあ、ある姫の身代わりというか、影武者というか、そんなところだ。あとのお楽しみというわけだ。ではみな、下

がってよいぞ」

若様の合図で三人は立ち上がった。最後に出ていく町娘がふいに振り返った。「お姫様って呼ばれるのって素敵じゃない？」と言って笑いかけた。男たちはボーッとして女が居間に消えていくのを眺めている。いなくなったのを確かめると若様は後ろの襖を開いた。そこに千両箱がひとつ置かれている。伊藤という若侍が引き出すと若様は蓋を開いた。小判が半分ほど箱を埋めている。金四郎の咽が鳴った。

「今回は色々と経費がかかったが、わずか数日間の突発的な助太刀業としては上々の首尾であった」

助太刀業？　初めて聞かされた金四郎は疑問に思うよりむしろ腹が立った。一体誰を助太刀したというのだ。

「ではまず、分け前を支払う」

それを聞いて金四郎は腹を立てるのをいったん止めることにした。

「若林には二百両。伊藤には十両、佐々木勘助には三十両。これでよいか」

ふたりの若侍はありがたく小判を押し戴いた。浪人はもうひとりの年格好が同じ若侍の方を向いて白い歯を覗かせた。

「吉村弥次郎、おぬしには十連発銃の開発で苦労をかけた。そこでだ、新たに御家人株をおぬしにやろう。お芳という年上の女房つきだ。養子ではなく、今度はおまえが主人

だ。どうする、不足なら断ってもいいんだぞ」

「身に余る光栄でございます」

丁重に頭を下げた。十連発の鉄砲はこの者が造ったのかと金四郎は驚きと敬意の目をもって吉村を見ていた。遠山と呼ばれたので、なんだ、と呟いて浪人に顔を向けた。

「面白い経験であったろうが、忙しい思いをさせた。おぬしには絵ではない本物の女の生首を彫らせてやる。明日から少々痛い思いをするぞ」

浪人は薄笑いを浮かべていたが、なんだそんな報酬などいらんわいと金四郎はまだ腹を立てていた。

「百両だ」

目の前に置かれたのは四つの切り餅である。嬉しさで仰天した金四郎は覚えず失禁しそうになった。腹を立てるのは当分収めておこうと思った。

「それから弥太。おまえが声をかけた芸人たちにはもう報酬は払っておいた」

「聞いておりやす。過分な日当をもらったとみんな大喜びでございました」

左太郎が笑ったのは弥太の口調が随分改まったものだったからのようだ。

「弥太には朗報をやろう。左京だ。この屋敷に置いておくことにした」

見ると庭先に子供に抱かれた小犬がいる。何事かときょろきょろしている。

「左京も長屋暮らしでは可哀相だ。ここにおればみなが大事にしてくれる」

「へえ」

弥太の鯰顔が泥鰌のようにしぼんだ。意気消沈している。

「がっかりするな。左京を見に毎日ここにくればよいではないか。楓さんも市助も楽しみに待っているそうだ」

左太郎が弥太を振り返ってそういった。ホントに来てもいいんですか、と急に鯰顔にふくらんだ弥太がギョロ目を輝かせた。

「よいさ。だが、思い違いをするなよ。楓さんは武士の妻だった人だ。そこのところを忘れるなよ」

弥太は頷くと、縁側に出て「左京」と呼んだ。子供の腕から飛び出した小犬が弥太の方に飛び付いてきた。弥太は小犬を抱きしめるとつっかけを履いてどこかに出ていく様子をみせた。おい、弥太、忘れ物だ、と言って浪人が差し出したのは鍵である。弥太はぼんやりと浪人の指先に挟まれた無骨な鍵を眺めた。

「引っ越しだ。深川堀川町に元木橋というのがかかっている。その前に古い蕎麦屋がある。お前の店だ」

へえーとふやけた声を出して弥太は虚ろな顔で棒立ちになった。座敷にいる者も初めて知ったとみえて、みな口を閉ざして弥太と浪人を見比べている。

「随分、待たせたな」

修治が浪人から鍵を受け取って庭にいる弥太に手渡した。鍵をじっと見つめていた鯰顔に白濁した水が溢れ出てきた。鯰の涙は濁っているのか、とふざけてみたのは金四郎だけで、他の者は静かに微笑んで弥太を見つめている。事情が分からない金四郎だったが、静けさが深まるに連れて何だか胸が熱くなり始めた。ここにいる仲間は、金四郎が放蕩していた頃につるんでいた仲間とは全然違う、強い絆で結ばれた、気持ちが通い合った仲間たちなのだと考えていた。

静かな足音がすると、若武者がひとり忽然と現れた。その顔立ちを目の当たりにして金四郎の肝が痺れた。袴をつけた少年のような人はまぎれもなく女で、空の果てを凝視しているような奥深い瞳の輝きは、深淵な森に佇む神子の神秘的な美しさを思わせた。

「簡単ですが、一応図面通り紐を張りました。ご覧頂けますか」

「見よう」

そういって浪人は立ち上がった。初めて知ったのだが背筋の伸びた姿勢のいい男だった。左太郎が、おれも見ようといって後に続いた。金四郎も従ったのは、女剣士の神気にもっと触れてみたいと思ったからだ。

そこはおよそ二十坪ほどの敷地の四隅に細い杭が差し込まれていて、白い紐が長方形の形を作っている。正面の神棚と見えるところに、もう一本線が引いてある。剣術の道

場の用地であることはひと目で分かった。

「道場は土間に筵敷きか」

「いえ、おなごの稽古場ですので足が汚れるのはかないませぬ。資金も潤沢にあります故、板の上に畳を敷きます」

「それは立派な道場になるな。ここで稽古をする旗本の子女もそうだが、竜子に小太刀を教えにきて下さる建部帰雲師範も満足されることじゃろう」

女剣士は嬉しさを押し隠すように自分の胸に向かってそっと息を吹きかけた。そのとき、このひとは！　と金四郎は胸の中で叫んだ。武家娘のような島田髷を結わずに、まっすぐに伸ばした髪を頭の後ろでまとめて結んでいる姿は、あの晩に見た吉原の花魁とそっくりではないか。いや、花魁その人だ。なぜ、あの人が女剣士としてここにいるのか。浪人がこの人を身請けしたというのか。

「剣術道場を始めるのか。おなごだけの稽古場となると外からも覗きにくるやつがおるかもしれんな」

左太郎が訊いている。

「そのために片番所があります。そこには屈強な者を見張りに立てます」

「しかし父御はどう思うかな。竜子姫が剣術道場の主となると黙ってはおれんだろ」

女剣士は薄い唇を静かに横に引いて微笑した。竜子姫、と聞いた金四郎は雷光に撃た

れたように立ち尽くした。

「これでは当分嫁にはいけんぞ、どうする」

無骨な男は妙に馴れ馴れしく軽口を叩いた。姫は澄ました表情でいる。毅然（きぜん）とした立ち姿は見る者を圧倒させた。

「どうもいたしません。竜子は嫁にはいきませぬ」

「ほう、それはどういうわけじゃ」

竜子は髭面の太った男から身をそむけて俯いた。足下に時期を間違えたか、そそっかしい福寿草（ふくじゅそう）が一輪、咲いていた。

〈肌を見せた人にしか嫁ぎません〉

小さな黄色の花弁が祈りを聞き届けたというように冷たい秋の風に揺れた。

右京之介は少し離れたところで紅葉をした庭の樹木を見上げている。高いところから舞い降りてきた蜻蛉（とんぼ）が肩にとまり羽音をたてた。それが何かを囁いたように見えた。

右京之介は懐から手を出して顎の先を掻いた。女が何を呟いたのか金四郎には聞こえなかったが、不埒な浪人者がなぜか照れているように金四郎には見えた。それに和合するように女の項（うなじ）に血の気が差した。

人生ボロボロ、の、ボロ、と金四郎は考えていた。

双葉文庫

た-24-10

右京之介助太刀始末
うきょうのすけすけだちしまつ
お江戸の姫君
えど　ひめぎみ

2015年12月13日　第1刷発行

【著者】
高橋三千綱
たかはしみちつな
©Michitsuna Takahashi 2015
【発行者】
稲垣潔
【発行所】
株式会社双葉社
〒162-8540 東京都新宿区東五軒町3番28号
［電話］03-5261-4818(営業)　03-5261-4833(編集)
www.futabasha.co.jp
(双葉社の書籍・コミックが買えます)
【印刷所】
株式会社亨有堂印刷所
【製本所】
株式会社ダイワビーツー

【表紙・扉絵】南伸坊
【フォーマット・デザイン】日下潤一
【フォーマットデジタル印字】飯塚隆士

落丁・乱丁の場合は送料双葉社負担でお取り替えいたします。
「製作部」宛にお送りください。
ただし、古書店で購入したものについてはお取り替えできません。
［電話］03-5261-4822(製作部)

定価はカバーに表示してあります。
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製・転載は
著作権法上での例外を除き禁じられています。
本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、
たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-575-66755-4 C0193
Printed in Japan

主な参考文献

「三田村鳶魚・江戸ばなし　全十巻」(青蛙房)
「江戸吉原図絵」(花咲一男編・三樹書房)
「お江戸吉原ものしり帖」(北村鮭彦・新潮社)
「江戸時代風俗図誌　第2巻　見世物風俗図誌」(小野武雄・展望社)
「時代風俗考証事典」(林美一・河出書房新社)
「近世物語文学2　御家騒動実記」(雄山閣)
「深川文化史の研究上・下」(高田衛／吉原健一郎編・江東区)
「小石川御家人物語」(氏家幹人・朝日新聞社)
「近畿藩史大事典」「東海藩史大事典」(ともに雄山閣)
「『厭代勝覧』の日本橋」(小澤弘・小林忠・小学館)
「江戸役人役職大事典」(新人物往来社)
「江戸幕府役職集成」(笹間良彦・雄山閣)
「古事類苑　全五十一巻」(吉川弘文館)

この作品は双葉文庫のために書き下ろされました。